山岳

第十二年號

山岳

第十年第二號

大正四年十二月發行

目次

（大正四年十二月廿七日發行）

表紙……茨木猪之吉氏案
卷頭畫……五龍岳よりの眺望……三枝守博氏撮影

挿圖

○立山別山カールを距てゝ別山と劔岳を望む……三枝守博氏撮影……一六頁
○赤石山麓の森林…赤石澤上流…小澁川赤石登山口……小澁温泉　八木是峰氏撮影……四〇
○コモ……辻村伊助氏撮影……四八
○ウンテル、スルツバッハ、タール……同……上……五六
○セガイティニ美術館……同……上……六四
○オーベルピンツガウの汽車の窓より……同……上……七二
○クーグロッケ（ウエーゼン）……同……上……八〇
○ウエーゼンよりグレルニシュを望む……同……上……八八
○ウアーレンゼーの落ち口……同……上……九六

本欄

阿寒岳と阿寒湖　大平晟……一頁

劍ケ岳登山記　冠松次郎……一六
赤石を横斷して　可知治夫……三四
スウィス日記　農學士　辻村伊助……四八

雜錄

○自然觀察の二方面を論じて山岳觀に及ぶ（古家實三）○富岳は臺灣の南湖太山よりも高し（高頭義明）○北越山岳の記事「山見立大角力」に就いて（高頭義明）○乾德山（大村忠一）○鹽見岳登山記（河野齡藏）○ガイドの事ども（百瀨愼太郎）○山岳の効用（山本德三郎）○机上談山（ツルモドキ生）
各地の山岳會彙報（二）
○京都組合銀行徒弟講習所山岳幻燈講演記事○山梨山岳會講演會○慶應義塾山岳會の登山隊○京都一中山岳會團體旅行概報○八高山岳會の創立○附中山岳會

雜報

○雪白き高山の一角○鳥海登山○燒岳の噴火に就きて○名物の嘉門治を訪ふ

會報

○高山深谷第七輯發行○會員に圖書分與○名古屋に於ける有志晩餐會○第十三回有志晩餐會記事○會員通信○本誌發行の遲れたる云ひわけ○新入會者○退會者

附錄

黑部川奥の山旅（前編）　木暮理太郎……附錄一頁
登山地圖　第一輯　劍岳（附葉一枚）

赤　兀
白　兀
大　窓
大窓ノ頭
小黒部谷
小　窓
小窓ノ頭
三　窓
三窓ノ頭
劔　岳
長次郎谷
劔　澤
鷲ヶ御前
（西五稜）
別山乘越
別　山
眞砂澤
眞砂岳
内藏助平
富士折立

五龍岳よりの眺望　（三枝守博氏撮影）

阿寒岳と阿寒湖

大平晟

一、十勝高原

十州島北方山岳の代表者として、其名も著るしき阿寒岳を探るべく、八月十二日（明治四十二年）午前六時三十分旭川發の汽車に搭じ、間もなく美瑛（ビエイ）驛に着す、左方「ヌタプカムウシュベ」及「オプタテシケ」の峯頭、白雲の冠戴けるは最と床し。

線路は空知（ソラチ）川に沿ひ、富良野（フラノ）、金山（カナヤマ）、落合（オチアヒ）等の數驛を經、石狩、十勝の國境なればとて其名を得たる狩勝（カリカチ）驛を過ぐれば、程なく隧道に入り、暗黑世界を徐行すること四分間、再び光明界に出づれば、茫々際涯なき一大緩斜の高原は、我等の脚下に展開せん、時に十二時を過ぐる十數分とす、其雄大高爽の光景は、優に信州輕井澤を凌駕し、實に大陸的高原の感あらしむ、特に彼れの避暑的別莊地として俗化紛々たるに對し、此れの人跡稀に斧斤殆ど入らざる原始的大自然の淸境たるに至りては、本邦中他に殆ど其比なからんか、落合驛より狩勝、新内（ニウンナイ）を經て新得（シントク）驛に至る一帶の地は、本島の脊梁山脈を横斷する山間線にして、此國境は本道全線中の最高點を占め、海拔一千七百餘呎とす、此山間風雪往々丈餘に及ぶを以て、防雪覆蓋の長きに亙れるもの數個所あり、且つ線路は山側を辿りて大蛇曲大廻轉をなし、乘客をして殆ど方位に迷はしめ、視界の倏忽變轉するに驚かしむ、溪間には綠林の蓊鬱たるもの無きにあらざれども、原野は一般に大なる林樹なく、見渡す限り、スゝキ、ワラビの間、オミナヘシ、フヂバカマ、ハンゴンサウ、ギバウシ、キキャウ、シラネニンジン等の之を綴れるは、滿

目錦繡を敷き詰めたるが如く、新得附近オミナヘシの夥しきは、黄金世界も斯くやと想はしむ、予本島に入りてより當地方に於て、始てキキャウを見る。

新得驛にて、名物豆羊羹、「ピリカ饅頭」を試む、「ピリカ饅頭」、此の奇しき名の賣子の口によりて繰り返さるゝに、予が好奇心は囚はれぬ、後にて人に質せば、「ピリカ」とは、「アイヌ」語佳美の意にして、和夷混淆の新語、流石は新開地に於ける競爭手段の巧妙なるに喫驚せしむ、而も其饅頭は、旭川の製造にかゝり、遙々當驛まで出張せるものなり。

帶廣驛（オビヒロ）にて「蕎麥の鳥シッポク」と云ふを試む、これまで諸驛の多くが麥粉混りの蕎麥なるに比すれば、味美にして料理亦佳なり。

午後八時四十一分大樂毛（オタノシケ）驛に下車す、時既に夜に入り、霧甚だ深く、且つ當驛には旅舍の無しといふに當惑し、警官の案内に依り、茶屋宍戸儀助方に投宿す。

大樂毛は、土語「オタノシケプ」にして、同名の川の海に注ぐ所にあり、土人の發音「ウタノスケ」と聞ゆる可笑。釧路驛まで約六哩とす。

茶屋の主人は福島縣人にして、年齒三十五許、晩食後爐邊に於ける其熊物語を聽く、曰く、數年前一頭の巨熊あり、當驛附近に於ける牧場の馬を掠め、自己の棲家たる山腹の穴に運び、其形跡を暗ますさん爲にや、入口に夥しく樹枝を翳せるを數日後に發見し、多數の人々之を狩り殺せりと。又主人嘗て巨熊に襲はれ、奮戰苦鬪、彼に大打擊を加へしも、己亦重傷の爲に、一時氣絶せしが漸く蘇生し、後友人の協力に依り、復讐的奇襲を以て、其熊を打取りたりとて、其傷痕を示せるを視れば、背部及頸部より下顎にかけて、大裂傷痕跡の今尚著しく存するあり、當時頬は全く裂け、下顎は下方に垂れたりと云ふ、其記念の皮なりと云ふを見れば、約六疊敷の廣さあり。

予曩きに樽前岳の探檢を終り、錦多峯（ニシタップ）驛より旭川に向ふの車中、中富良野の校長吉野時次郎氏あり、

氏曰く、本年一月四日の眞晝中、一頭の巨熊旭川市街を横行し、市人恐怖皆戸を閉ぢて屏息せしが、遂に獵夫の獲る所となれり、想ふに精神病的の熊なりしが如しと。

予内地の諸山を跋渉し、熊に逢ふこと數々なりしが、彼等は常に人を避けぬ、而も其態度は、躁遽狂奔する鹿、青鹿などには似ず、實に泰然悠然たるものなりき、北海道の熊は、巨大獰猛、人畜を害すること屢々なりとは、曾て聞き居りしに、今や本島に於て、愈々人跡稀少の深山に分け入るべき我身に取りては、如上の談話は、既に興味の閾を超え、頗る警戒の念に打たれぬ。

或人曰く、熊は火藥燃燒の臭を恐るゝこと甚しと、是れ屢々獵夫の襲擊を經驗せる故にや、又曰く、彼等の多くは、突如人に出逢ひ、身を避くるの餘裕なきに際し、自衛の爲め、人を攻擊するものなり、故に深山に於ては、彼の行者連の如く、常に鈴を鳴らすは、彼等獸類に逃避の餘裕を與ふる効あるものなりと。

二、釧路原野

十三日曇天、昨日來本島東岸の名物たる霧の見舞にあづかりしが、一去一來、爲に山間の風光は却て一段の趣なきにはあらざりしも、今日は濃霧四塞、猛熊の横行も斯の如き日にやと想へば、餘り心地も宜しからず、午前七時三十分大樂毛を出發し、牧場を貫き、茫々たる釧路原野に向ふ、地概ね沮洳、葦能く茂り、トリカブト、トモエサウ、キンミヅヒキ、キケマン、タウバナ、ミヤマタツナミサウ等を見、殊にヨブスマサウ、ハンゴンサウは一丈五尺以上のものあり、ハンゴンサウは、葉七裂せるを以て、土人は之をナヽツバと稱し、茹でゝ食用に供し、乾して牛馬の飼料となすと云ふ。

本路は殆ど阿寒湖方面に通ずる專門的道路にして、沿道稀には、農作地の開拓、或は牧場なきにあらざるも、數里にして僅に三々五々の据立式農家を見るのみ、其寂寞想ふべし、十一時茶屋を兼ねたる

農家に入り、喫飯す、豌豆、馬鈴薯を入れたる汁に、胡瓜の鹽漬を出す、代價の五錢なりといふに、十錢の茶代を添ふれば、頗る固辭す、其淳朴愛すべきなり、馬鈴薯の甚だ佳味なるは、種類風土の然らしむるにや、途上頗る蚊、藪蚊、盤蠅の襲來に苦みぬ。

午後二時三十分舌辛（シタカラ）に着し、驛馬を借るべく交渉中、大雨沛然として至りければ、行程を變更し、驛遞都地（ツヂ）常次郎方に投宿す、大樂毛より約四里半とす。

舌辛は阿寒川の支流舌辛川の沿岸に位し、阿寒沿道第一の部落にして、新築小學校あり、吳服店、雜貨店、理髮店等、其形式當地方の珍とするに足る。

偶道廳技手掛場定吉氏（金澤人）同宿し、予が前途に利便を得しこと尠からず、氏の談話により、阿寒の上流「ルペシュペ」の鈴木善藏なるもの、阿寒附近の地理に詳しきこと、舌辛炭山は目下採掘中止せること、池田驛より分岐せる網走線（ノヘシリ）は、目下半ば線路敷設せることなれば、探檢見學の事情を具陳し、驛長の證明を得ば、無賃乘車するを得ること、色丹島にては、紅鱒其產卵期に、小溪流を溯り、互に押合ひ、相重りて其尾を上にす、故に土人は容易に尾を執て之を陸上に投じ得ること、同島には鴨甚だ夥しく、其卵を採收せば須臾にして數十百個を得べきこと、當地方には「アイヌ」部落散點し、彼等は物品賣買の爲め、始終舌辛に來ること、「アイヌ」語の研究には、「バチラー」著蝦英和辭典の捷徑なること、道廳第五部拓殖係に就き事情を陳ずれば、本道拓殖要錄の無代下附を得べきこと、地方土人は、殆ど雨具を使用せざる慣習とて、雨天には概ね屋外作業を休むは、頗る朝鮮人に似たること等を聽き得たり。

宿舍の膳に「ヤマベ」といふもの上りしが、內地の「ヤマメ」とは稍々異なるを認む。

當地標柱に「距釧路七里二十四町」とあり。

十四日快晴なり、午前八時驛馬に乘り、舌辛を發す、約一時間にして、阿寒川の支流舌辛川を涉り、

程なく近く阿寒川の右に沿ひて溯る、左方遙に雌阿寒の山頂雲に鎖さるゝを見る、幾度か濶葉樹林を穿ち、草野を貫き徹別（テシベツ）の川を渉り、十時四十分飽別（アクベツ）（土人「アキベツ」と稱す）に着す、舌辛より六里、此乘馬賃六十六錢とす。林樹はナラ、ヤマハンノキ、アカタモ、ナヽカマド、イタヤカヘデ、ヤマモミヂ、カツラ等を主とし、草野にはオミナヘシ、ハンゴンサウ、シラネニンジン、ミヤマタウバナ、ツリフネサウ、キツリフネ、キケマン、トリカブト、カセンサウ、ハギ、エゾハンショウヅル等、開花爛熳數町に亘り、宛然錦の野に似たり、此地のギバウシは高さ往々四五尺に達し、花色甚だ濃し。

十一時三十分徒歩飽別を出發し、零時十分飽別川を渉る、幅約五間、水深約一尺あり、崖側に貝殼化石を見る、貝の形頗る大なり。

飽別よりは、漸次エゾマツ、トヽマツの針葉樹を交へ、樹下マヒヅルサウ、ツバメオモトを見る、屢々山草採集の「アイヌ」人に逢ふ、予が飽別河岸に於て、化石視察の際、行手の方より、威風堂々肥馬に跨りし勇士の來れるあり、近づくを視れば、何ぞ圖らん、妙齡なる「アイヌ」婦人ならぬとは、彼の美髯と見えしは、口の左右に青色の入墨せるにてありき、彼は體格優良なる美人なりき、而も其鉢卷に手をかけ、「コンチャ」（今日はの意）と會釋せるには、一驚を喫し、思はず其しほらしき後姿を見送りき。

午後二時十五分「ルペシュペ」に着し、鈴木善藏氏方に投宿す、「ルペシュペ」は海拔約七百尺、鈴木氏の前丘近く針葉樹林あり、蓊鬱たる深綠の間雲の如く、霞の如きサルヲガセの夥しく懸れる樣、古色掬すべく、其大自然の風光、既に俗界の物ならず。

主人年方に壯、善く談ず、予が日本山岳會員として、特に阿寒岳を探るべく來れるを歡待し、次日に於ける優良なる案内者を周旋し、且つ予を饗應すべく、自ら直ちに屋後の阿寒川に馳せて綸を垂れ、少時にして數十の「ヤマベ」を獲て歸り、之を膾とし、天麩羅とし、鹽燒とし、卵燒など添へられし、

夫妻の好意謝するに餘あり、氏垂綸に出づるの際、予が觀覽に供せる圖書の中に、雜誌冒險世界のありしは珍らし。

三、雌阿寒岳

十五日快晴、此日は予が雌阿寒岳を探るの日なり、案内者三上淺吉と共に「ルペシュペ」を出發せしは午前六時とす、路は近く阿寒川に沿ひ、溪谷益々迫り、水は河床の巨岩に激し、境愈々幽なり。「ルペシュペ」より一里强にして、本道と別れ、左折「ワクカクンネナイ」の山徑に入る、即ち雌阿寒道とす。

本道との岐點に標柱あり、「一一歩園牧場入口（距牧場事務所二里十二町）」と註す。

「ワクカクンネナイ」を溯ること十町許にして、幅三間許の溪流に接す、清冷掬すべく、鱒多く上ると云ふ、此間幅七八間の溪流を徒渉せしが、硫氣ありて酸味甚しかりき、途中フキユキノシタ、エゾゴゼンタチバナ、マヒヅルサウ、エゾカウモリ、ミヅバセヲ等あり、フキは莖徑三寸以上のものを見る。

八時二十分荒廢せる小屋塲に達す、此邊は既にエゾマツ、トドマツ、アカエゾマツ（土人シンコと稱す）等殆ど純針葉樹の密林とす。

十時十分標高約三千尺にしてハヒマツを見、眼界始めて開け、右方に雄阿寒の秀峯を仰ぐ、赤土の山側を迂ること十分時にして、硫黄精煉所に達す、「ワクカクンネナイ」入口より約三里とす、本所は硫黄の年產額一百萬斤に上り、跡狹登（アトサヌプリ）と匹敵する程なりしが、近來硫黄の價格低落し、收支相償はざる爲め、昨年來事業を中止せることゝて、屋舍は破壞に委し、唯だ「元山事務所員丹羽波靜」と書せる木札の、事務所入口に留守番せるのみ、屋内にはインキ壺空しく机上に眠り、暖爐、土瓶、鐵瓶、鍋

等、彼方此方に割據せるを見る、屋外所々に精煉せる硫黄塊の幾十百となく、堆積せるあり、塊は圓壔形をなし、徑約一尺、長二尺餘重量約十二貫ありと云ふ。

事務所前温泉流る。

荷物を事務所に置き、十一時出發、同四十分雌阿寒岳外輪山を超え、火口丘を經、十二時現在の噴火口底に達す、標高約四千二百尺とす。

火口底の西隅に於て、噴煙せる小孔數十あり、硫氣强く眼を刺激し、呼吸甚だ困難なり、附近噴出せる硫黄堆積して、一面に灰黄色を呈し、其熱焦せる所は、赭褐色となる、熱氣往々草鞋を透し、蹠裏殆ど堪へ難し。

本山の最高點たる海拔約五千三百尺の西南壁上に立たんか、脚下暗綠色なせる湯池あり、殆ど正圓にして、水面直徑約四十間、四周に爆發龜裂あり、頗る凄愴を極む。此綠池を距る南方二十間許にして、徑四五間の火孔あり噴烟最も盛にして、轟々の音は人語を奪ふ。

大火口底は、中間に障壁を存す、外壁の上端は、劍戟天を刺し、中障の西北口底には、無數の小孔ありて、所々烟を吐き、十數町を降れる溪谷亦所々噴烟を見る。

南方近く阿寒富士に對す、頗る端正なる圓錐山頂を呈し、三角點あり、標高本山と伯仲せるが如く見ゆるも、實際稍々低しと云ふ。

眸子東北に轉せんか、澄徹鏡の如き、阿寒湖は、脚下に展開し、湖を隔てゝ秀麗なる富士式雄阿寒岳は、堂々天に朝し、此の火口の凄絶愴絶喧然囂然たるに對し、彼れの幽邃穩健なるあり、顧盼の間、地獄極樂の大觀を縱にす、造化の變轉亦極まれりと謂ふべし、本山は現今本島に於ける最盛の活火山とす。

頂上視界に入りし主なる植物にはエゾォンタデ、イハギキャウ、イハブクロ、イハシモツケ、コメ

ッガザクラ、ガンカウラン、イソツヽジ、ウラシマツヽジ等にして、流石は本山が其元祖の名を博せるメアカンフスマは、火口の内外を問はず、甚だ夥しく蔓衍し、メアカンキンバイ之に次ぎ、コマクサ及ァキノキリンサウは、甚だ稀少なり、ガンカウランは其果實割合に大に、且つ頗る能く熟し、屢我等の口に上りぬ、導者曰く、此熟果は熊の甚だ嗜む所なりと。

頂上跋渉の際、一羽の鷲の優然天空を横ぎるあり、二頭の狐、數頭の兎、及び蝦夷雷鳥は、狂ふが如く奔逃し、偃松の下に匿れぬ、唯だ此鷲の猛威にも感せず、噴烟を縫ひつヽ飛翔せるは、岩燕及白蝶とす。

午後二時二十五分硫黄精煉事務所に歸り喫飯す、事務所より十町許に小溪流あり、飲料に供すと云ふ。

導者　談によれば、山腹針葉樹下、夏秋の間、松茸を生ずること頗る多きも、其品質、内地のそれと稍々異なれりと云ふ。

阿寒湖畔に降るべく、午後二時五十分雌阿寒硫黄精煉所趾を出發し、十分時にして温泉溪流と別れ、左に進む、辛うじて人跡を認むるのみ、三時三十分赤褐色を呈せる溪流を横ぎる、陰森たる針葉樹林の下ミツバワウレン、スギラン、エゾマンネンスギ、エゾヒカゲノカヅラを見る。

肩以下の熊笹の裡を穿つこと多時、嶮坂を上下する數回、四時四十五分牧場柵内に入る、例によりて、蚊、虻の襲撃に接す。

五時二十分阿寒湖畔に出で、岸に沿ひて右に迴り、ミヅバセヲ、エンコウサウの花叢を踏むこと數數六時一歩園牧場兼伐材事務所に着し、宿泊を請ふ、主任前田政八氏出で應接し、快諾さる。

園は前田正名氏三年前よりの經營に屬し、阿寒湖の南西北畔より其山腹に亙り、五千町歩の拂下を受け、牛馬の大牧場を設け、木材を伐採し、阿寒川に依りて流下し、釧路港に出すと云ふ。木材は主

として蝦夷松、椴松にして、大古以來の大森林は、四周の山腹より湖畔に亙り、視界の及ぶ所、唯欝々然、蒼々然たるのみ。

事務所は建築頗る宏大、浴舍には附近より温泉を引けり、一浴終日の汗を拂へば、晩餐の膳は出でぬ、席に列するもの、主任前田政八氏の外、事業視察兼避暑として數日前より來遊せる前田正名氏の令息正次氏、及偶々來訪せる附近の山縣山林事務所長阿部平吉氏、其他數名あり、膳上の珍味は、阿寒湖の特產「カバチエッブ」にして、其鹽燒、天麩羅甚だ佳味なり、該魚は鱒の一種にして、細鱗鱸に似、長さ概ね一尺内外にして、二尺に達するものは甚だ稀なりと云ふ、肉色は鮮かなる淡紅を呈するを以て、桃花魚の雅名あり、脂肪は普通の鱒よりも輕し、「カバチエッブ」とは「アイヌ」名にして、土人は略して「チエッブ」又は「チエッポ」と呼ぶもの多し。

「カバチエッブ」は和井内氏によりて、十和田湖に移殖せられ、和井内鱒の名あり、中禪寺湖亦近來之が養殖を圖りしは、予が親しく睹し所なり。

湖中又特殊の蝦あり、甚だ美味なり。

予が山岳經歷談に、一座頗る興に入り、阿部氏の如きは、予が雄阿寒攀登を終らば、必ず其事務所に來宿せんことを求めらる、會食の山話、後日の便宜を得しこと尠からざりしは、意外の幸なりき。

四、阿寒湖上の舟遊

阿寒湖面は、海拔一千八百尺、略ぼ三角形をなす、日本名勝地誌に、周回四里二十町とあるは過小にして、松浦氏登攀記に、二十餘里とあるは、誇大の嫌あり、北海道旅行案内には、六里二十二町あとり、前田氏に據れば約八里と稱せり、(大日本地名辭書には十里と註す)湖中四島あり、東方湖尻に近き「オンネモシリ」最大にして周回半里餘、島上濶葉樹繁茂す。

十六日快晴、此日は前田氏の好意によりて、終日湖上の優遊を縱にすること丶せり、午前八時舟を僦ひ、一歩園事務所前より發し、九時對岸の「シリコマペツ」に上陸す、舟は一巨木を刳りしもの、即ち獨木舟にして長さ四間許あり。

「シリコマペツ」附近にて、本湖の特產「タマモ」(珠藻)を採集す、該藻は鮮綠なる細き莖葉密生して球狀をなし、其大さ略ぼ栗毬の如し、タマモとは、宮部博士の命名せる所なりと云ふ。

附近遠淺にして、葦能く茂り、魚蝦群り游び、田螺の大なるもの甚だ多きを見る。

「シリコマペツ」には、一歩園事務所の支所あり、前田氏の添書を携帶せること丶て、種々の案內を得、晝飯を饗せらる、「チエッポ」及田螺の甘煮あり、「チエッポ」の鹽漬卵をも試食せしが、其粒狀割合に大にして、內地の鱒の筋子に似たり。

十一時三十分、湖尻落口方面に遊ぶべく、「シリコマペツ」より引返す、逆風頗る强かりしが、舟子は巧に帆を操り、舟行矢の如く、激浪屢々衣袂を浸し、魚躍りて舷を掠む。

東南隅なる湖尻に近くに從ひ、水色益々藍を加へ、岸は熔岩磊々突兀、針葉濶葉の密林之を飾りて、境愈々幽邃なり、殊にオホナラ、カツラ、ヤマモミヂ、イタヤカヘデ、ミヤマナラカマド、ヤマザクラ等の樹下、ツヽジ、シヤクナゲの侍するありて、今や遲咲の花の尙存せるに、梢は旣に紅葉の錦織り始めたれば、百花爛熳の春光、錦繡綾羅の秋色を想はしむ。

「オンネモシリ」(大島の意)を過ぐれば、左右の兩岸漸く相迫り、岸高く、水深く、波靜に、魚躍る、峽壁屛風の如く、曲折すること七八町、此間兩岸相距る百間乃至四十間、遂に湖尻に至りて、幅約五間となり、猛然瀉下の綿を吐き、雪を散らす、落口には閘門を設け、急湍所々樋を作り、以て湖中より來れる木材の流下に便す。

松浦氏紀行に曰く、「岸勢、犬牙差互、巨木掩日、瀑布懸焉、橫亙大凡五十尋、高三百尋、狀如白龍

下垂、或化珠玉、或起雲烟、千態萬狀、彷彿於那智、而幾倍於華嚴」

此紀行を根據とせる、北海道鐵道案内、日本名勝地誌、旅行案内等には「阿寒瀑布は阿寒湖の西岸にあり、高さ三百間、幅五十間、本道第一の大瀑布にして、其壯觀那智に比すと云ふ」など記せるあるは、蓋し此の急湍にして、誇大の形容詞、遂に虛名を傳ふるの類か、而して西岸には落口なければ、こは東岸南隅の誤なり。

歸途舟を棄て、「ポッケー」の温泉地を探る、地は湖の南岸に位し、一歩園事務所の北東七八町に在り、徑十間許の凹窪地内、温泉熱泉の涌出孔數個ありて、各個赭赤、暗褐、暗綠、白灰、灰黃等の異色を呈す、又徑四五尺の孔内には、灰白熱泥滾々沸々、時々噴騰すること丈餘、其噴騰時刻の間隔、早きあり遲きありて一定せず、其概況立山地獄谷に類するも、而も其珍其奇名狀すべからず、附近所々硫汽孔あり、湖中亦所々温泉の涌出するありて、水泡發散す、試みに手を入るれば、著しく温度を感じぬ。

本湖は火山作用によりて成り、其湖尻及急湍瀉下の狀頗る中禪寺湖に似たるも、其峽壁の曲折嵯峨たる、其密林の蓊蔚たる、幽邃森嚴の點に至りては、彼は到底此れの比にあらざるなり。

「ポッケー」温泉地附近に、「アイヌ」部落あり、例の掘立式家屋十數を見る、彼等が生活狀態を見學すべく、其首領即小部落酋長の家を訪ふ、屋前に遊べる小兒等の我等を見て、怪めるが如く憚るが如く、活動を中止して相遠かりしは氣の毒なりき、家屋は方三間許、葦を編みて壁に代へ、屋上萱くに木羽を以てせるは、他の多くが茅萱なるに比し、一段の差あるを見る、屋内の區劃は、甚だ簡單にして、半ばは土間、半ばは板を張り、板張の中央に爐を設け、夫妻あり、爐を隔てゝ相對し、妻は「オヒョー」の皮を裂き、夫は此皮を以て細繩を綯へ居りしが、予等に對し、挨拶頗る慇懃を極む、蓋し近來内地人の進入接觸により、概ね言語相通ずるに至りしも、婦人は勉めて應答を避くるものゝ如し、「オヒョー」の皮は、所謂「アッシ」織の原料なりしも、彼等今は殆ど此の「アッシ」織なるものを用ひ

ずして、内地の木綿織を使用せり、彼等が今絢へつゝある縄の、細きは網に用ひ、太きは種々の日用に供すと云ふ、爐中に今新に炙りつゝある「カバチエップ」あり、天井には「オヒョー」の縄にて編みたる、幾十連の炙り乾したる「カバチエップ」を見る、彼等の食糧は、概ね魚肉三、穀菜一の割合にして、冬季は鳥獸の肉加はると云ふ。

室の一隅に、丸櫃、椀等の陳列せらるゝを見る、而も古色靄然たる蒔繪の漆器にして、櫃には巴の紋あり、是れ熊祭に使用する、祖先傳來の什器なりと云ふ。

夕刻一歩園事務所に歸着す、附近には牧場及び伐木に從事せる内地人數百の居住として、速成的家屋十數戸相並び、前田氏は隱然湖王の觀あり。

事務所には建築工事あり、地形の石場穿には、櫓を立て、「アイヌ」の男女も多く交りしが、内地囃子歌の、彼等の口によりて唱へらるゝも面白く、殊に「アイヌ」女子の打揃ひて、下着に赤き金巾の筒袖と腰卷とを露はに着け、指環を欲め、銀杏返しの髪に、護謨櫛、リボンなど、飾れるは珍らし。

此の「アイヌ」人中に「トシカッ」といふものあり、現今戸籍上には、下河原猪之吉と改名す、活潑怜悧の質なれば、此の建築工事場に於ける「アイヌ」人夫廻しの任を負ひぬ、猪之吉の父、友次郎なるもの、年既に八十以上なるも、自らは其年齢を知らず、矍鑠たる好漢、獵に山谷を跋渉し、附近の地理に精通せること丶て、前田氏の周旋否特命により、翌日予を雄阿寒岳に案内すべく、猪之吉と共に來り、予が豫察的質問に應答して歸宅しぬ。

猪之吉は對話既に十分なるも、友次郎は半通の有樣なりき。

五、雄阿寒岳

北海道地質報文「ヲァカン」岳の部に「或人の說に此山は決して頂上まで登ることを得ず」とあり、

此一節、如何に予が山岳感を刺激せしぞ、刺激はやがて好奇心を喚起し、一擧本山頂上を踏破すべく、前田正次氏より、記念にとて贈られし「マキリ」(蝦人の短刀)をば、昨日「アイヌ」人より貰受けたる「オヒョー」の皮もて、腰に結びて夷習に擬し、「アイヌ」人友次郎を案内とし。

十七日午前六時四十分一歩園事務所を辭し、湖岸に沿ひて東行し、七時三十分湖尻落口の閘門を横ぎれば、これより全く路形なく、直に雄阿寒の山脚にかゝり、頗る急峻なり、濶葉針葉の混淆樹林を穿つ、「ピュー」、「ピュー」、鋭き長き聲は、幾度か耳に入りぬ、友次郎曰く「チツカチップ」と云ふ鳥なりと。

大古以來斧斤未曾て入らずてふ、密林の中、エゾマツ、トドマツの、老い僵れて縱横に重るもの甚だ多く、徑三四尺に餘り、長さ十數間に亘り、蘚苔幹を包み、形骸全く存するも、内部既に能く腐朽し、之を渡れば往々脛を沒し、甚だしきは全身爲に食まるゝことあり、樹下を潜れば岩罅亦屢々脚を嚙む、是れ磊々たる火山岩の罅隙、亦蘚苔に綴られ、落葉に蔽はるればなり、樹下ツルウメモドキ、ツルツゲ、クシロチドリ、ヒメミヤマウヅラ、ミヤマカタバミ、エゾゴゼンタチバナ、ツバメオモト、ヲタカラカウ、トリカブト、ハギ等を見る、友次郎はエンレイサウの果實を採り、「タンナ、コレ、ウマイ」と告ぐ、「タンナ」とは、旦那の意。蝦語純濁音なければなり、予其名を問へば、「フレップ」と答ふ。

九時四十分、林樹漸く其高さと、密度とを減ずる所に到れば、白樺、熊笹漸く相交はり、往々著しき風穴を見る。

十時四十分標高約三千三百尺にして、偃松に接し、十一時三十分稍々平なる副峯の頂上に到る、友次郎は之を「ポンヒネシリ」と言へり、夷語小雄岳の義なり、標高約四千五百尺とす、顧みれば、阿寒湖面は清澄瑠璃の如く、四周の青山影を醮して、幽麗愛すべし。腰を偃松の毛氈に卸して喫飯す。

此間植物の主なるものは、ペニバナダイモンジサウ、アキノキリンサウ、オヤマリンダウ、イラクサ、コイチエウラン、シラネニンジン、シロバナシャクナゲ、コケモモ等とす。

「ポンヒンネシリ」以上は、殆ど悉く偃松にして、其密殖旺盛なる他に多く其比を見ず、身長にも餘れる偃松の裡を游泳すれば、水筒、双眼鏡及小鞄など、引掛ること夥しく、下は草鞋の時々枝に惱まさるゝに、上は菅笠屢梢に奪はれ、攀登の困難言はん方なし、友次郎は「オヒョー」の皮にて作れる靴形の草鞋を穿ち、同品製の脚半を着け、耳の銀環を保護すべく、手拭もて頰冠をなし、勇往邁進する樣、齡八旬を超え、尙且此の如きかと驚嘆せしむ、彼は顧みて屢々予を勞はりぬ、彼は親切にも予が笠を預りて、自ら背負ひしが、拘留の煩にや堪へざりけん、遂に笠を前方數尺に投げては、歩を移し、取りては復投ぐ、苦戰奮鬪、辛うじて頂上に達せしは午後一時なりき、予は此時精力殆ど盡きぬ、天界を吟味すべく、予が眸子の運轉せるは、仰臥休養數十分の後なりとす、「此山は決して頂上まで登ることを得ず」との或人の說も、茲に至りて幾分首肯せざるを得ず。

本山は標高約五千尺、實に秀絕なる圓錐形を呈し、頂上に舊火口あり、長徑三町餘、東西に狹し、深百間餘、障壁ありて口底を二分し、底は殆ど水なきが如きも、北壁の下部、僅に溫泉を涌出せるありと云ふ、口底及五個の尖峯、口壁を飾れる樣、頗る「マクカリ」岳に似たり、而して北方口壁最低しとす。

偃松は普く絕巓より火口內にも及び、口底の探檢容易ならざるが如し、頂上偃松の間、アカエゾマツ、イソツヽジ、ガンカウラン、コケモヽ、リンネサウ等を見しも、植物の品種は、餘りに豐富ならず。

山麓東北に「ペンケトー」(上沼)、「パンケトー」(下沼)の二沼あり、水相通じ、流れて阿寒湖に注ぐ、二沼通じて周回約四里、又東南に排水路なき「パラコロシュナイ」あり、以上の諸沼は、阿寒湖

と共に、略ぼ圓環をなして本山を擁し、風光の幽奇を添ふること大なり。

一時四十分頂上を辭し、偃松の難を輕減すべく、方向を稍や左に取り、空澤を辿りて直降し、幾度か復朽木岩罅の難所を經、山麓に出づれば、阿寒湖より流下せる角材の積置場あり、附近の小屋より烟の立ち昇れるは、人夫の宿ればなり。

五時三十分山縣阿寒山林部事務所に着す、所長阿部平吉氏は、待受けしことゝて、懇に歡迎せらる、友次郎には、豫約の案内料一圓に酒代二十錢を添ふれば、彼れは喜色面に溢れ、幾度か押戴きて歸りぬ、其淳朴愛すべきなり、彼は約一里を距る「ポッケー」の部落に歸りしなり、彼は下山の途、「オヒョー」の樹を見ては、屢々「マキリ」を以て、其皮を削り採りぬ、而も彼は行步綽々として餘裕あるなり。

案内に從ひ、早速當所の溫泉に投ずれば、疲勞頓に去りて、爽快限りなし、浴を終れば、阿部氏夫妻が此山莊に於ける心盡しの酒肴は運ばれぬ、茲にも亦名物「カバチエップ」の料理豐富なり、馬鈴薯の特に美味なるを賞揚すれば、翌朝に於ける膳上盛り皿の、火山式圓錐形なせるも壯快なり、煎餅の甚だ大形なるに驚けば、南部の名物なりとは珍らし、其直徑の一尺許りあるは、不動尊の名所、成田のそれに似たり。

當所は山縣勇三郎氏の事業に屬し、十一年前より着手せりと云ふ、曾て佐藤信淵の弟子傳長坊なるもの、阿寒湖畔の開拓に着手せることありとは、阿部氏の語れる所なり。

十八日阿部氏の周旋により、所謂驛馬なるものを得しも、馬子なしと言ふ、されど道は單純の一線にして、而も馬の熟路なりと聞き、意を强うして之に打乘り、午前八時三十分山縣事務所を出發す、此馬甚だ柔順なりしも、騎者の技倆を看破せしにや、優々然として屢々道草を食める悶かし。

午後二時飽別に着し、馬をば此處の驛遞に託し、單身徒步廣原を辿る、途中ハナイカリ、キミカゲ

サウ、タンポ〻、カキラン、サハギキャウ等の夥しきを見る。

七時舌辛に着し、加義旅館に投宿す、此夜逍遙して螢を見る。

十九日細雨濛々たり。石炭運搬のトロ車ありと聞き、午前八時搭乘、十時二十分大樂毛に着し、午後二時五十一分旭川行の汽車に乘り、八時十分帶廣に下車し、北海館に投宿す。

帶廣は、十勝原野に於ける巨擘の都會とて、戸數約一千、街路井然幅廣し、北海館は頗る宏大清潔、朝食前牛乳にバタ着麵包を添へたるは、心地よし、舍主の寄附せる十勝石を見るに、白斑ある黑曜石にして、直徑七八寸以上のものありと云ふ。

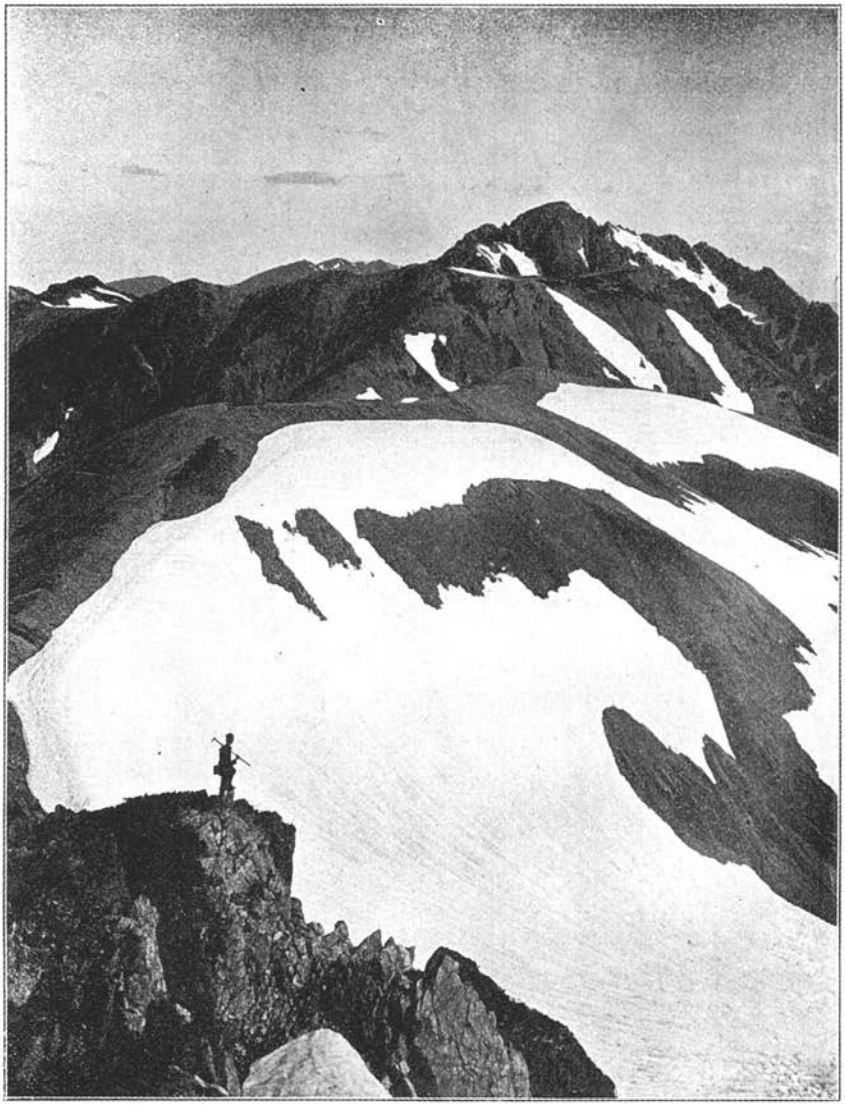
二十日雨、午前六時四十分帶廣發車、雨中に於ける、十勝、石狩の高原、風光又特殊の趣あり、午後三時三十二分旭川に着し、二條通六丁目笹岡旅館に投宿す。

劍ヶ岳登山記（長次郎澤を溯り平藏谷を降る）

冠　松　次　郎

室堂まで

去年、白峯水成岩の、大濤の樣な山脈のうねりに驚嘆した私は、今年は雪の多い越中の立山、その中でもこの二三年、私の心をそゝつてゐた劍ヶ岳へ、是非登つて見たいものと思ひ、東京を出發したのは七月十八日。（大正四年）夜行としては珍らしく涼しい夜であつた。好い心地でうたゝねをして、小諸の先まではうと〳〵と何事もはつきり覺えずにしまつた。汽車が屋代に着く頃、漸く目が覺めて、



三枝守博氏撮影

立山別山カールを距てゝ別山と劒岳を望む

驚いて四方を見廻したが、山國の朝のけはいは、久しく平原に閉ぢ込められてゐた私の心を、何となくすが〻しく解放した。あゝ信州へ來たなと思つた、この一年の間夢寐にも忘れられなかつた山の王國、瀛車は今その中を縱横に走つてゐる。午前四時二十分に、瀛車が篠の井に着くと、上野で一緒に乘車した白馬行の連中が、二十人程ぞや〳〵とプラットホームへ吐き出された。

遠い、そして高い山々のスカイラインを見入つてゐた私は、ふと遙か西の山々の間に、夫の山脈の一部を見出した。それは鹿島槍祖父岳に續く附近であらう、水の如く穉せた朝空を脊にして、ぎざ〳〵とした山稜を連ね淡碧に透徹つた山の肌に、夥しくへばり付いてゐる大殘雪が、水晶の樣に光つてゐる。その山々の冷たい色彩を見つめてゐると、ゾッとする程身體が引締る樣だ。長野を過ぎる頃から、飯繩山、黑姫山の青々として悠揚の姿が、頂上迄も鮮かに見える、そしてその後に連亘してゐる、ぎざ〳〵とした戸隱山の暗綠色を美くしいと思つた。妙高山は雲に隱れて見えず。午前八時十五分、直江津で米原行の瀛車に乘換へる。左手から差し迫まつてくる山裾の一路を、日本海を眺めながら走つて行く、屏風の樣な山々で風が食ひ止められるので、車内の空氣が實に蒸し暑い。

表日本の海岸に比べて、何と云ふ荒寥たる景色だらう。海岸線の單調なのに、見すぼらしく集つてゐる海人の家は、漁家と云ふよりも山ヶ家と云ふ方がふさはしい、そして海に漂ふ船までも、何となく物悲しく見える。糸魚川手前から、擴茨した大蓮華群山の、雪の夥いのが眼を驚かせた。

低い屋根のごた〳〵した、糸魚川の町を見ても、私の心は一向に賑はない、漠漫たる日本海を眺め、而もこの自然に虐げられた山村水街の、大雪降る冬の寂しい生活を思ふと、マウンテン、グリュームを思はずには居られない。越中へ出ると餘程明るい感じがする、瀛車の進むにつれて平原が追々擴がつて、黑部常願寺の川筋には、その洲の芦間を、小さな白帆が幾つも、長閑に往來して居る、早月川には水が少ない。

立山連峯が見え出した。瀧倉に連なる大きな山脈の右上に、無双の巨刄を並べ立てゝゐる劍ヶ岳と、奥大日に續く山々の後から、茶褐色にほうけ切つた立山本岳の荒くれた山の肌を見上げると、山の氣分に滿ち〳〵て、瀛車の中でもじつとしては居られない。

午後零時半、富山市に着し、富山市から上瀧（カンダキ）までは一里ぞと心にとめたものもない。驛前の茶亭で中食をしたゝめ、午後一時、車で上瀧に向つたが、市を離れると一面の青田で、日影とてもなく、加ふるに殆ど無風の爲に炎熱が甚しい。一里行くか行かないのに、車夫はもう道路の惡いのと暑さの強いので行けなくなつた。已むを得ず荷物を曳かせて、せつせと歩き出した。夏の日中にはめづらしい程雲の見えない日で、行く手に聳えてゐる立山連峯と、其左に連らなる五色ヶ原の三峯及藥師の大岳が、夕暮まで實に鮮かに見えた。上瀧で人夫に荷を負はせて、追々と山路に入る。

常願寺川の長橋が半ば流され、荒れ果てた河原に櫓の樣に取り殘されて、其下に假橋が、みすぼらしく架かつてゐる。岩峰寺で平藏の父が迎ひに出て來てくれたので、荷物を托して山の話をしながら、ぶら〳〵と夕日を負ふて山深く入つて行く。森では日暮蟬がせはしく鳴き出して、右下の常願寺川のせゝらぎが錚々と耳朶を打ちて、其川筋を渡つて來る山風が肌に浸みると、もう日中の暑さなぞは全く忘れてしまつて、服の襟をかき合せる程凉しくなつた。山村の暮煙がたなびく頃、平藏の宅へ着いて、親切な家人に迎えられて旅裝を解いた。

翌朝未明平藏に起されて、表の流れに顏を洗に出ると、立山神社の高い房々とした杉の大林が曉天に直立して、その上にはまだ二三點の曉星がふるえてゐる。食事を了ると國藏が挨拶に來て、軈て三人連れ立つて午前六時に出發した。樂な道を一里餘で藤橋を渡ると、一路漸く深山の色調を帶び、椽、桂、山毛欅、樺、楓、ナゝカマド等が鬱蒼として、處々に大きな白樺が標木のやうに寂しく立つてゐる。是れから暫くの間とりつぎに登つて行く急坂續きが、稍々痛快に感ぜられる。實際東京から瀛車

に倦み、平地に疲れて身體がたるんでる處を、あくせくとこゝの急坂を登つては、深林の下に谿流を眺め、碧空を仰いでは一憩みする心地は惡くはなかつた。

ブナ坂を登りきると、七八人で茶屋の小舍掛の最中だ、話しを聞くと昨日初めて登つて來たのださうだ。まだ十時頃だけれども中食を使つて、一息入れて出發する。今日も風がないから實に蒸し暑い、梯子の樣なカリヤス坂を登ると、道が漸く樂になり樹木が著しく低くなつて、もう阿彌陀ヶ原が程近いなと思はせた、弘法の茶屋へ出た時分には、水のないものでへこたれてゐる時分なので、あたふたとそれを鱈腹呑んで、そして弘法樣の石像に目禮した、まだ茶屋が出來ないのでじり〳〵と照す炎天の下だけれども、氷の樣な此處の水を飲むと全く活返る樣だ、今迄飲んだ清水は、山路には不似合な程生温いのに、不平だつた咽喉が、こゝへ來て漸く滿足した樣だ。

廣漠とした阿彌陀ヶ原には、見渡す限り甘草が美くしく咲きほこつてゐる、疎になつてゐる熊笹や偃松や、黑部杉の倭林等の隈どりが如何にも美くしい。然しこの原は何となく單調な原だ、唯だ眼を放つ時、前方の雪の谿谷を抱いて、連らなつてゐる群峯の雄姿が逼つて來る爲に、如何にも壯大な山懷の高原と云ふ感じがするが。

阿彌陀ヶ原の盡くるあたりで見た劍ヶ岳は、實に豪宕なそして整齊した姿だつた。その御幣の樣な山塊が、筍でも林立した如くに、稜々として、それに觸れる萬物を悉く千々に碎いて、谷底へ突き落さずには止まない樣で、兎ても人間の取り付けさうな山には見えない。今でも山裾の人々に、劍へ登つたと云ふても本氣に受けないと云ふが、無理のない話しだ。追分へ來るともう直ぐ傍の溫泉道の方に、大きな雪が溢れる樣に殘つてゐる、一の谷、大林や、姥石、鏡石なぞある、七面倒臭い小山や小谷を越えると、漸く雪と草とで一面の高原へ出て、栗ヶ岳、天狗原山なぞ云ふなだらかな淨土の前山の後に迫ると、その緩傾斜にしなだれてゐる殘雪が實に夥しい。

今しも前方の立山本岳が、夕日を浴びて赤く輝いて、その雪谿の桃色がキンカ糖の様に鮮かに見える顧みると富山平原の方から奔騰して來る夕雲が、蓬茫として大日瀧倉の方へ延び上つては擴がつて行く、それがやがて月光を遮る程大きくなると、周圍の山々が一時に曇つて、雪田から吹き下ろす山風が、じつとしてゐられない程肌寒い。

未だ時期が早いので室堂がから開きだ。登山者は富山の青年が一人丈で、あとは神官や堂守や人足で、雜貨を販賣する者も未だ登つて來ない。思ひ設けぬ雪解の水を並々と沸かした、鐵砲風呂へ入つたが、今日一日の疲れをぬくのには充分であつた。

室堂より平藏澤の下迄（七月二十一日）

室堂の夜は存外温かだつた。けれども、煙たいのと蚤の多いのには少なからず閉口した。飯の出來る間を見て、後ろの原へ散歩に出る。雪解の水の冷さに碌々漱ぐことも出來ず、一口啜み下ろすとその冷やかさが腹腸へまでも浸み透る。一面に雪と草とに封じ込められた高原に立つて、遠く前方を眺めると仲々壯大な感じがする。この高地の向ふががつくりと下つてゐる爲に、直前には眼界を遮る何物もない、水の樣な大空には、まだ曉星が明滅して、富山平原から日本海方面に連らなる雲海は漫々として涯りがない、奥大日に續く峯々や、淨土につゞく山々は、うつとりとしてまだ夜の靜けさを保ち、四方の雪溪の下行く谿水のみ何處からも、ざわ〳〵と山の活動を引受けてゐる。

軈て雄山續きの頂上が、少しばかり朝日に兀けると、高空に澄み渡る鳥の羽根の樣な薄雲が樺色に光り、空の色がだん〳〵碧を增して、山骨が漸く嚴かに、雪谿の白光が明瞭になつて來た。もう氣の早い雲が騷ぎ出して、その大濤が盛んに奥大日瀧倉に向つて蔽ひ冠さつて行くので、劍方面の空が何となく心配になつた。今日行くべき別山の雪溪を見上げると、隨分長大に且峻急に見えて、仲々樂に登

れさうもない。

午前六時二十分。富山の登山客が黑い日月の蒔繪のある小さな笈を負ひ、神官に導かれて雄山に向ふのと、室堂の入口で別れ、堂守に見送られて室堂を出た。

高原の微風に衣をゆられて、いそ〳〵と行く足取は早い。室堂續きの丘を下りると一面の沮洳地で、到る處に殘雪がのさばつて、まだ靜寂な冬の眞中の樣に見える、それでも雪の消えた處には水づいた土まじりの枯草の間から、山草の芽生がによき〳〵と寸靑を抽んでてゐる。稱名川の上流に當る窪地の雪の上を別山の裾に付いて迂回して行くと、午前七時少し過に別山第三の大雪溪の許へ出た。その傾斜の緩かな雪坂を、眞一文字に可なり登つて振り返ると、昨日登つて來た阿彌陀ヶ原が坦々として連なり、直ぐ鼻先の峯々谷々には驚く程べた一面の大雪だ。今年は二十年來の大雪だと云はれたが、この立山へ始終往復してゐる平藏も、その雪の多いのに感心してゐた。遙か下の谷向ふの小山に圍まれて、御厨ヶ池がさゝやかに見える、その手前の茶にほうけた地獄谷の小丘の左の端から一抹の噴煙が長閑に登つて行く、氣のせいだか先刻から少くづゝ硫黃の臭いが鼻をついて來る樣だつた。

約三分の二程登ると、雪溪が稍々右折して傾斜が著しく急になつて、一歩一歩注意せずには登れなくなつた。あまり急な雪溪に慣れない私は時々足を辷らしては、周章てゝ鳶口で身體を支える、カンジキは今日は用ひない積りなので荷物の中から未だ出さずにある。追々と眼界が擴がつて、奥大日の絕巔が直ぐ谷向ふで高く聳え、下の方富山の平原が稍々明瞭になつて、芦峰寺方面から富山灣に到る常願寺の川筋が白く隱顯して、その盡きる邊りに白堊の集まつて見えるのが富山市の一部ださうだ。日本海は一面に霞がかゝつて、水平線のみ遙かに碧黑くにじんで見える。昨日から行けども〳〵、より高いので癪に觸つてゐた鍬崎山が遙か眼下に延び下つて、其上に藥師ヶ岳がすばらしい雪を飾つて、西南の空に嘯ふいてゐるのを見ると嬉しさが込み上げて來る。峻急な雪溪を避けて、偃松と山草の疎

らな山側を登ると、なだらかな石原の上へ出で、無造作にそれを上つて行くと、直きに劍澤の乘越の頭に出た、午前八時四十分。

黑部の谷を隔てゝ聯立してゐる、後立山の連峯に視線が止まると、もう休んでゐる餘裕かなくなつて、突立つたまゝ暫くの間、我と相對する自然の聖壇に默禱した。一樣のコバルトブリューに透き徹つた大岳が、山裾に寄せては返す雲の波を破つて、右にも左にも族々と東の空に跳梁してゐる。其の中にも突兀として著しく傾いた峯頭を擡げてゐる白馬山と、其右に可なりの鋭鋒を露はして是れと拮抗すべき大岳の鑓ヶ岳は、隨分高く立派に見える、不歸のぎざ〳〵した山稜の右に唐松岳が尖つて、その右に連らなる怪偉な五龍岳との間に、大黑岳が小さな存在を示してゐる、黑部別山に視線が行き詰つて、劍ヶ岳の方を振り向くと、相憎未だ其頂點附近を往來してゐる意地惡の雲が晴れないので、八合邊から上は全く見えないが、東に連亘してゐるその山稜の高低の激しいのを見つめてゐると眼がぐら〳〵する程に刺激が强い、

草の上へ腰を下してまだ早いけれども晝食を半ば使つて、午前九時雪の上を劍澤に向つて降る。別山の尾根から弓なりに彎曲して、劍ヶ岳に續いてゐる山稜の內側が、大きいたるみになつて丁度椀の底の樣な形をしてゐる。斜面を降るに隨つて傾斜が緩くなつて來て、解け殘つてゐる雪の間の草原が濕々して、雪解の水が清水の樣に縱橫に流れ廻つてゐる。夥しい白山一華が眞盛りで、ミヤマキンバイ、コイワカヾミ、ミヤマクワガタ、アオノツガサクラが一面に咲き亂れ、其の中を白根葵の芽生がすく〳〵と無數に抽んで、僅にこの廓寥たる劍澤の原頭を彩つてゐる。

雪溪の緩斜を選んで、右に左に暫時降つて行くと、二丈程の雪の堤の上へ出た、兎ても降れないから左へ避けて迂回して其下へ出る。かう云ふ雪堤の下は多くは瀧になつてゐるさうだ。劍澤の雪溪は其厚さ幾丈あるか分らないが、其の下を溪水が深淵となり、飛瀑を落し、奔流を形ち造つて、轟々と

落ち込んで行くのを思ふと、如何にも凄壯な感じがする。

澤の行末は見渡す限り千古の白雪に封じ込められて、この澤に落合ふ谷々も又その白雪を以て埋め盡されてゐる。もう眞晝近い強い日射しが、じり〳〵と照り付けて仲々暑いので、ドロップを口に入れて雪を嚙りながら降つて行くと、足許の雪の上に赤蜻蛉が幾つも〳〵も死んでゐる、この小さな動物は日盛の暑さに尾根の方から谷の上へ水を取りに降りて來て、飛び廻つてゐる内に夕暮になると、急に寒くなるので飛べなくなり、雪の上をうろついてゐるのを深夜の高寒で凍死して終ふのだ。行手のなだらかに延び擴がつてゐる雪溪の彎曲部が、强烈なる日光に焙られると、ぎら〳〵としてまばゆい程光りを反射する、其上を昇騰する水蒸氣の、青身を帶びてゐるのがすばらしい勢で谷の上方へ叢がつて行く。當面に鹿嶋の槍が二三度雪で光つた碧瑠璃の額を出した。

尾根から一時間半足らずも降つた頃、雪溪の緩かに成つてゐる彼方に、白茶色の巨岩が唯だ一つ雪の中に櫓の樣に突き出で、その後ろから可なりの雪溪が出合つてゐる。それが平藏澤だと云ふ。その左側の巨岩の傍にある小丘へ登ると、木や草に蔽はれてゐる可なりの平地がある。劍澤に好露營地のなさゝうなので、氣懸りになつてゐた私は、この便利さうな、そして劍ヶ岳の樣な荒くれた山の裾には、珍らしい程穩かな平地があるのに安心してしまつた。

劍ヶ岳の枝尾根を脊にして、周圍には一杯に樹木が茂り、平になつてゐる處は一面の草と紅花の木苺の藪になつてゐる。北も西も劍の懸崖で風を避けて、雪谿を隔てゝ黑部山續きの山に對し、東方黑部谷の手前の低い尾根の上から、鹿島槍の右に連らなる山のツルが天際を限つて、漠々とした雲の波が、その後からも前からも、しきりに遊動してゐる。

荷を卸して夜營の仕度をする、未だ午前十一時前だ、昨日あたりから時計が狂つて、正確に時間を計ることが出來ないが、機械が止つてゐる譯ではないから、手加減をして使用することにしてゐる。

今日は行程も頗る短いし、且安樂だつたから少しも疲勞してゐない、然し明日の登山があるから、ここでゆつくり鋭氣を養ふことにして、邪魔な木を伐り放したり、羊齒や薊や白根葵などをへし折つて下へ敷き、油紙で天幕を作り、一人は雪溪の向ふの涯へ水を採りに、一人は枯木をあさつて焚火を始めた。

敷き重ねた草の上に油紙を敷き、仰向きになつて蒼空を見つめてゐると、何時の間にかうと〳〵と寢入つてしまつた、やがて目を覺ますと日は未だ高い。もう湯が盛んに沸いてゐるので、茶を思ふさま呑んで、菓子を撮みながら平藏と色々の話しをしてゐると、後ろの藪で山鶯がしきりに囀つてゐる、谷の上で叫ぶ郭公の聲が耳についてうるさい位ゐだ。露營地の向ふの尾根にだんだらに殘つて居る雪の間から、瀧が懸つてゐるのが雪溪を破つて轟々として、其音が谷中に響き渡る。深谷がまだ雪に秘められて居るのに、つい鼻先の雜木に交つて、山櫻が淡桃色に咲き亂れてゐる。平藏がその一枝を折つて來たのを見ると、同じ一枝で上の方はもう實が成つてゐるのに、下の方では今が花盛りだ、日向に出てゐる方の花は先へどん〳〵實に成るのに、日影の蕾が漸く咲き始めるのださうだ、同じ木でこんなあわたゞしい變化のあることは、平原では餘り經驗しないことだ。冬ともつかず、春ともつかず、夏ともつかぬ幽邃な劍澤の谿谷で、こんな暢氣な生活をしてゐるのも、山水巡禮の特權だと思つた。

夕暮になると、西方劍澤の乘越の右に當る、三角點のある峯の後ろあたりから、すい〳〵と靄が昇り出して、斜に劍の頂上の方へ流れて行く、それが丁度無限の糸を手繰る樣に、後からも〳〵出て仲々切れさうもない、日がこの雲靄の後ろに隱れて、夕風が西の方から吹き下ろして來ると、溪谷の空氣が非常に緊張して、もう焚火の傍に縮こまらずにはゐられない樣になつた。

劍ヶ岳登山（七月二十二日）

昨夜は暖かだつた爲に、ぐつすりと心地よく寢ることが出來た。二度目に目を醒した時に時計を見るともう四時半を指してゐる、未だそんなになる筈がない、仰ぐと空には無數の星が爛々たる光を放つて、別山の尾根から劍ヶ岳の頂上に當る方向に、天の河が蕭々として横はつてゐる。なんでもこの時計は一晝夜に二時間餘も進むらしい、星の具合を見るとまだ漸く二時半位にしかならない樣だ。今日は骨が折れることだらうから、早く出發することにして、焚火へ枯木をどん〳〵くべて飯の仕度に掛る。位置の好いのに風が少ないせいか、夜營地にては左程の寒さを感じないが、水を汲みに行つた國藏が鍋を提げたなり、青い顏で身振ひをして歸つて來た、『旦那、雪の向ふは寒くて〳〵、とてもぐづ〳〵しては居られません』と云ふたのを思ふと、雪溪の寒さは中々激甚の樣だ、曉星が黑部別山の上にかかる頃に、東の空が薄明るくなつて、後立山の峯續きが仄かに見える樣になつた。

夜營地をひとあたり片付けて、午前四時半頃に下流に向つて出發した。まだ邊りは薄暗く雪溪の上を歩くと雪がカン〳〵と凍り着いて、カンジキの齒の立たない處が幾らもある。兩岸が黑く立壁の樣に狹まつた山々の間ひを、白く朧にくねつて行く大雪溪が、まだ夜の戸ばりを拂はないで、其行衛を眺めて行くと、何とも云へぬ幽寂なそして微妙の感じがする。約十分位に長次郎澤の入口に着いて、カンジキを取りに戻つた平藏を待ち合せた。

午前五時頃平藏を先登にして、長次郎澤を徐々と登り始める、氷り詰めてゐる雪溪を、カンジキでさく〳〵と音を立てゝ行くのが氣持がいゝ。拂曉だと云ふのに、この雪溪の上空から吹き落ちて來る風の暖かいこと、丁度日光に蒸し返された輕い風のやうに衣をうつのが如何にも氣味が惡い。

行くに隨つて兩岸の岩壁が追々と壯大に爲つて、右の（向つて）方の稍々劣れる絶壁の上の方から細い瀧が幾つも落下してゐる。約一時間も登ると、雪溪が三十度餘の急斜になつて、右岸に連なる豪岩な花崗岩の大岩壁の尖鋭が、幾つともなく天空を截つて競ひ立つてゐる、寶劍の刄のぼろ〳〵にこ

ぼれてゐる樣な、この劍の支脈の壯觀に目をみはつて行くと、同じ右側の雪谿に近く、難破船の舳先のやうに傾いてゐる巨大な岩壁が横はつてゐる、十數間程もある巨材を積み上げた樣な岩の皺が、平行の大斜線を曳いて、一面の岩苔を鎧つてゐる、その岩壁の黑ずんだ灰色の色彩を見てゐると、この峯に働く神斧の絕大なるを感せずにはゐられない。

雪谿の左寄にある、菱形の巨岩の突出てゐる處で一休みしてゐると、前方の尾根の後でドドーと凄ましい音響がする、それが止んだ時分に又同じ樣な音が空谷に反響した、大方雪崩か山崩だらう。少し登ると雪溪が左に折れて、傾斜が俄然峻急になる、平藏の足跡を履んで喘ぎ〳〵連々として登つて行くと、足許に大きな兎の死屍が横はつてゐる、杖でひつくり返すと腹の中が綺麗に無くなつて、押して見るとぺこ〳〵する、鷲か鷹の餌になつたものらしい。その先に今度は熊の糞の眞黑なのがごろごろと雪の上に轉つてゐた、平藏が杖の先で潰して見たが、未だ新らしいもの丶樣だと云ふ。もう隨分高くなつたので、振返ると南方が頓に開けて、我より稍々低く黑部別山の立派な岩峯が頭を擡げて、其の左後に針木岳と蓮華岳が眞黑になつて聳えてゐる、三ッ岳野口五郎岳に續く山脈の後に、大天井が仲々高く拔出で　その左に燕岳が額に一つ雪を光らして連らなつて見える、槍ヶ岳から右は相憎と間近の尾根に隱れて見えずにしまつた。

黑部別山の上を鷲が大きな輪を描いて悠々と飛び廻つてゐたが、何時の間にか谷に吸ひ込まれて見えなくなつた。行手の空を仰ぐと、別山の方から少しづ丶押し寄せて來る霧雲が朝燒で眞赤になつて、槍ヶ岳の頂上の方をちぎれ〳〵に飛んで行く、其下から岳雀が幾百羽となしに、ぴい〳〵と囀りながら木の葉の吹き散る樣に吐き出されて、目まぐるしい程尾根上を騷ぎ廻つてゐる。朝やけの雲が直ぐ消えると天氣が激變すると云はれて心配になつた。

雪溪がその上端に近くなると、もう五六十度の急斜になつて步速が益々鈍つて來る、一番不慣の私

は、うか〳〵してゐる内に何時の間にか隨分下の方に取り殘される、終ひには餘り時間がかゝるからと、平藏の體に細引をぐる〳〵卷付けて、その繩尻を持つてあくせくと登つて行つたが、少し行くと足が仲々疲れるので無性に休みたくなる、最う間もなく雪溪が盡きるだらうと思つた頃、山頂の方から俄然濃霧が卷き下つて來て、四邊が濛々として目標も何も見えなくなつた。

遮二無二雪溪を登りきつて、急激な岩にかじり付き匍匐しながら其突端に出たが、見廻すと、相憎に何處にも續いてゐない孤立の岩山だ。是れは道を違へたかと、急いで其處を降りきると薄く兀けた霧の間から今登つた雪溪の西に分れて、稍々緩かな皿の樣に開いた雪溪の舌端が一つ入り込んでゐる。彼處から尾根へ行ける筈なのにと、平藏が獨り言を云ひながら先へ立つて雪溪へ降りずに、その上に延び上つてゐる岩壁の細い襞の上をへヅリながら、どん〳〵行つてしまつた。

その跡を岩に添ふて廻つて行く内、足掛りがないので、雪と岩の間隙（ギヤツプ）へ降りやうと、巨岩に抱き付いて後向に下つて見たが、足の先がどうしても岩に引つ掛らない、頭を回らして下の樣子を見ると、この大きな一つ岩が棚の樣になつて、下が一尺餘も斜に刳れて居る、これは大變だと元の所へ登らうとしたが、身體の重みに却つて手がづる〳〵と辷つて來さうだ。そこへ丁度國藏が降りて來たので、手を引張て貰つたが、容易に上れさうもないので、國藏は傍の雪の上を辷りながら駈け降りて來て、足のぶら下がつてゐる處へ肩を出してくれた。肩車をして雪と岩の間へ落着いたときにはほつとした。

又一しきり急峻な岩續きをへヅツて行くと、非常に樂になつて、偃松に縫はれた磊々たる岩山の上へ出た、仰ぐと劍ヶ岳の絶巔が直ぐ上方に延び上つて、其左下の雪田が濃霧の中で白い原の樣になつて寂しく擴がつてゐる。頂上に續く巉岩の脈を辿つて行くと、大きな岩の間から雷鳥が一羽飛び出した、國藏が手頃の石を抛り付けると、急所へ當つたと見えて、ゴロ〳〵と岩の上に轉つて、雪溪の手前にぶる〳〵と身振ひしたなり立てなくなつた。取つて來たのを見ると親鳥で羽根が著しく白身を帶

びてゐる、雪の饒多なこの山に棲んでゐるこの鳥は、夏でも他の山のもの程變色しないらしい。

午前八時半頃、岩角に縋つて絶巓に攀ると、巾が狹いが東西に五六間も岩が平になつてゐて、東の端に石が積んでその上に標木が一本立つてゐる、霧が益々濃くなつて眺望がきかないばかりでなく、谷から騰つて來る風が非常に寒くなつて來た。暫く休んで居たが晴れさうもないから、岩の上を左後に降りて岩崖へ出た。

峨々たる岩山の後に刳られてある、この不思議な岩崖は、東の方へ向いて入口からだら〳〵に下つてゐる、可なり廣いのに、岩が上の方まで蔽ひ冠さつてゐるから、假令下が岩でゴロ〳〵してゐても、五六人位で優に夜營をすることが出來る。この附近の岩は著しく鐵氣を含んで、どの岩も〳〵もその割れ目が黑く光つてゐる、記念の爲一つ拾つてポケットへ入れた。岩の奥へ手を入れて空鑵を出したら、其の中には今迄登られた人々の名刺を紙で包んで、大事さうに納めてある、今年はもう昨日と一昨日と二組ばかり登られたさうだ。

中食を使つて約三十分程休んでゐると、霧が大分明るくなつたので、岩穴を出て頂上へ登つて見たが、天地白晝、濛々たる大霧に包まれたこの絶巓は、怒濤に洗はれてゐる太洋の孤島の樣で、その岩角に突立つてゐる我々は、無人の島にとり殘された漂泊者の樣だ。頂上の展望を諦めて、西の方へ向つて緩かな山稜を降り始める、暫くの間は至極樂で、こんなやかましい山の頂上を歩く樣な氣がしない。急に行く手の霧が薄くなると影しい雪の縞を懸けた藥師ヶ岳方面の山々から、靑々として連らなつてゐる阿彌陀ヶ原が見參に入る、淨土龍王の上に澄み渡る碧空が深淵の樣だ。右下に早月川に向ふ深谷がづり落ちて、その谷底から浮動して來る霧が、氣味惡い程もく〳〵と山頂を目がけて這ひ上つて來た、軈て又濃霧に鎖されると急に陰欝になつて、何も云はずに岩の上をせつせと降つて行く。

脚下の岩峯が俄に險惡になつて、岩石がが〳〵と無性に崩落するので、戒心してボロ〳〵の崩岩

續きの惡い尾根？を降つて行く、隨分酷い降りの樣だ、頂上から約一時間も歩いたのに、まだ平藏澤の上へ出ないのはどう云ふものだ。すると平藏が下の方の岩の突端に立ち止まつて考へてゐる、暫くすると頭をかしげながら急ぎ足で戻つて來た、又道がそれてしまつたのだ。時計を見ると一時間半程無駄をした、今降つた岩のつるは谷深く薙ぎ落ちて、兎ても下れる處ではない、多分別山へ續く尾根の右の方へ降りてしまつたらしい、詮方なしに今來た崩岩の惡い場所を戻り始めたが、岩が崩れる度に冷々する、後から來る國藏に「旦那その岩が動きますぜ」と云はれて、今自分が乘つて居る一間近くもある巨岩を、試みに足の先で押して見ると、成程ぐら〳〵と動くので、ぞつとして周章てゝ飛退いた。元來た尾根らしい處まで戻つて一休みしてゐると、幸にこの方面の霧が綺麗に消え失せると、直ぐ眼下に平藏澤がボーッと顯はれた。今居る處は別山の方から眺めて、劍の頂上の左の稍々緩かな山稜の直ぐ下の、鋸の齒の樣に尖つた岩の上であるらしい、岩の柱の間を縫つて、間もなく平藏澤の上へ出た、午前十時三十分。

私の道を失したのは濃霧の爲で、晴れてゐる時には、こんなことは全く問題にならない、然しこの山は霧の懸り易い山で、今迄登山した人々の中にも、霧に遭つた人の方が多い樣だから、その覺悟でこの山に經驗のある良案内を連れて行く必要がある。

澤の降り口に突出して居る懸崖から瞰下すと、直ぐ眼下にこの澤が四十五度近くの俯角で一直線に薙ぎ落ちて、兩岸に續く尾の上の若葉が美くしい、春風の樣な山風に脊を向けて、この無人の境に囀る小鳥の聲を聞いてゐるとうつとりとして眠たくなる。彼處が夜營地ですと平藏が指さしたが、餘り近く見えるので一寸信じられない、然しよく視ると成程直ぐ下の方に劍澤の出合が見え、右の尾根のどん底に夜營地の森が顯はれた、尙ほ注視するとその向ふの崖に消え殘つてゐる、骸骨の形をした雪までが谷の下から覗いてゐる。

今迄にこの谷を降りたのは彼の長次郎一人だけで、それもこの降り口では可なりの難澁をしたさうだ、此處に立つて雪溪の上端を高く劃つてゐる岩壁の樣子を見ると、この澤の西側に立て廻されてゐる尾根から連らなつて來る屏風の樣な一面の懸厓が、別山に續く尾根の山つゞきの下で、井戸側の樣に大きく直立に刳られて、今立つてゐる岩の檐の後迄續いてゐるらしい、それが突き出てゐるこの斷岩で縊びられて、又た(東)の方へ小さいが同じ樣に丸く深く刳り取られて、澤の東に立て連らなる尾根に連續してゐる、そしてその內側に大雪溪の舌端が突き當つて居るのが、反對に非常な急角度で劍澤に向つて落込んでゐる。

何處を降りるにも懸崖の外は取り付く所がない。先の方へ廻つて見やうと思つたが、これよりも尙足場が惡いと平藏が云ふので、止むを得ず此岩を降り口に定め、萬一に備ふる爲、用意の麻繩を出して、其一端を緊かりと自分の左の二の腕へ捲き着けて、殘りの一端を平藏に上で持たせて、繩には賴らずに足場を搜りながら徐ろに降り始めた。三四間降つた處が少しばかり自然に柵の樣になつてゐるので、其處を足溜りとして上から平藏の降りて來るのを待ち合はせ、又上で繩を引張らしては降り始める、そして幾度も途中で休み、漸く雪谿の上へ下りたが、隨分時間がかゝつた、私の降る時に、向側の絕壁をへづゝて、雪壁の上で降り口を探しながら、まごついてゐた國藏は、何處をどう降りたかカンジキを穿つて、殆ど直立に近い雪上をづり落ちる樣に駈け下りて來た、軈て平藏が降りて來たので暫く雪の上で休息する。

今降りて來た懸崖を見上げると、直立正に十數丈の高さがある、上から瞰下すと非常に近く見えるのに、降るときは一生懸命だつたから、左程氣にもしなかつたが、今になつて壁の樣にそゝり立つて居る、この壯大な斷崖を打仰ぐと、實際驚心駭魄する。

午前十一時少し過ぎに、直前の雪壁を國藏が先へ立つて踏み固めながら降りて行く、六十度以上も

ある雪坂へ足場を付けて行くのが、梯子段でも降りる樣で、その餘りに急峻なのに初めの內は躊躇したが、降つて見ると案外カンジキがよく喰ひ込むので、少しも辷らずにそこを降り切ると、少し傾斜が緩んで、其れから鳶口を斜に持つて、一歩一歩に力を入れながら、一直線に劍澤を目掛けて小きざみに降り始めた。約三十分程は傾斜が依然として激甚なので、足ががく〳〵して腿が非常にだるくなる、私はまだこんな急激な、そしてその割合に長大な雪溪を下りたことがない。然しこの澤は長次郎澤の半分に近い程短いのだから、それ丈傾斜が急な譯で、劍澤の出合の一二町上迄は可なりの急角度を保つて居る。漸く劍澤の出合迄降り切つて、巨岩の傍で休んで居ると、先へ飛んで行つた國藏は、最早夜營地から鍋を提げて水を汲む爲に雪溪を横ぎつてゐる。雪溪の降りに丁度一時間程費したが平藏等がづり降りると三十分なら行けると云つた兎に角此旅行の第一の難場をすまして、何だが急に氣の拔けた樣な心地がした。

夜營地へ戻つて中食を終り、出發しやうとしたがもう午後二時になる、是から尾根傳ひに雄山の方へ廻るのには、時間都合も惡いし霧が大分出てゐるので、展望も充分に出來ないだらう。さうかと云ふて、この安樂な露營地を捨てゝ、別山の裾の寒い處で、一夜を過すのは馬鹿々々しい、兎に角明朝一時間も早く出立すれば取り返しの付くことだから、今一夜こゝに厄介になつて、悠くり休養することにした。毀しかけた幕營を修繕して、新らしい草を澤山に積み重ね、ふく〳〵したその蓐の上に寢そべつて、暢氣な半日を送つた。

一昨日までは好く晴れてゐたこの方面の山々も、昨日から雲が騷いて、時々霧がこの谷に迷ひ込んで來る。西の方の別山の尾根續きの凹を見ると、相變らず灰色の霧が止めどなく吹き出して、後の尾根の方へ廻ぐつて行く。遠く雷鳴が聞えてゐたが、やがて谷の上へ雲が蔽ひかぶさつて夕立が來た、東の方を見ると黑部の谷を狂奔する雲の堤が非常に高く、夕日を反映してぎら〳〵と金茶色に輝いて

ゐるそれでも靜寂な夜の幔が下りると、空がすつかり晴れ渡つて、昨夜にも增して樂なそして暖かな夜營をした。

劍澤―雄山―室堂（七月二十三日）

午前四時半夜營地を出發して劍澤を登る、西の尾根から吹き下ろす曉風が、晩秋の風の樣に冷々として身に浸みる、昨日來た雪の上を約一時間も登つて雪溪を離れ、別山の裾の窪地に出て休む、顧ると劍ヶ岳は好く晴れて、其絕巓が少し朝日を受け、昨日降つた平藏澤の上部の崖と雪が好く見える。こゝから國藏を直接室堂に歸し、平藏と二人で別山の頂上の右に連る峯を目標に登つて行く。雪を避けてゴロ〳〵石の急斜面を攀ぢて、約三十分程でその頭に出た。それから緩かな尾根上を東南に搦んで、別山の頂點に着いたのが午前六時二十分。祠の前に立つてゐると直ぐ傍の凹地に霧中から天幕が見える、すると其中から八九人の人がゾロ〳〵出かけて來た、一高の登山家が四名人夫が五名程で、これから劍へ登られる處なのだ。

祠の前を左斜に降つて、眞砂の尾根上を越すと、富士の折立に續く急坂の裾に出る、あくせくとそれを登り詰めて、磊々たる岩の大柱の中へ出たが、餘り空腹になつたので、日向きのよい小さな草山に腰を下して辨當を使ふ。今朝は隨分風が强く寒いので、冬服に薄メリヤスのシャツを着ても水鼻が出る位ゐで、日向でなければ兎ても落付いてはゐられない。これから雄山迄の岩の凹凸は實に亂暴なものだ。磊々たる岩の間を縫つて、大汝の小さな祠を左に見、尾根を搦んで行くと、遙か彼方に振鈴の響が聞える、そして雄山の山頂の祠の前に、神官と四五人の登山者が跪づいてゐるのを見た時は、何となく人なつかしかつた。烈しい岩の昇降を續けて雄山の頂きに着くと、丁度祝詞（のりと）が始まる處で、二十餘名の登山者が祠の前のゴロタ石の上に畏まつてゐる、私も小さくなつて謹聽してゐた。

日本海から續々と押寄せる霧の大波が、この高岳に打つかつて、黒部の谷へしなだれて行く。それが後山立の大屏風に突き當ると、濛々として天半に迄も叢り立つて、やがて深谷に沈んで行くと、又後からも〳〵同じ様な大霧が、灰色の横幕を曳いて漠々として進んで來る。霧の晴れ間から覗くと東北白馬より後立山の連塀を起して大波線を畫き、槍、穂高を中堅として、西南藥師に連る雪の大岳が、濃碧に透つて、各々獨特の姿態を東南の空に競ひ立つてゐる。其向ふの雲海を突き拔けて、玲瓏たる富士、白峰、八ヶ岳が桔梗色に霞んで、左方に隔つて鯨の脊の様な大きな淺間が、靜に煙を吹いてゐる。眼下に御山澤、中の谷、五色ヶ原の、雪の象箱をした高原や深谷の、滴る様な翠色が、薄霧を隔てゝパノラマの様に展開して見える。

崇大な山岳の壯觀に接して、祠前に跪づいて祝詞を聞いて居ると、信心薄き私も崇敬の念に知らず知らず頭が下がる。そして私は自然美の壯嚴に打たれて、自から入る宗教を美くしいと思つた。

岩の急坂を駈下りて一の越へ出て、正午少し前に室堂に歸ると、最早大分雜沓して煤だらけだつた板敷には、新らしい蓆が敷き詰められ、登山客の荷物が其處此處に片寄せてある、裏の小舍では雜貨の販賣店が出來て、出發の時よりも大分人臭くなつた。

劍ヶ岳は長次郎谷を登降して行くのが一番安樂の樣です、多少高山登攀の經驗のある者か、良案内を連れてカンジキの大きなのを用意してさへ行けば、天候の激變に遭はない限り、決して心配する程のことは無いと思ひます。

平藏澤出合の夜營地から、長次郎澤の入口迄はほんの僅かな隔りですから、安樂で便利なこの夜營地へ露宿するのが適當の樣に思ひます。

赤石を横斷して

可知治夫

＝小澁温泉＝小澁川＝廣河原＝大聖寺平＝惡澤嶽
＝赤石嶽＝赤石澤奥＝赤石澤＝聖澤口＝田代＝

□

夏の頃となつて力いつぱい大きく晴れ渡つた郊外の遠く彼方に、むら〳〵と湧く雲の峯、其下に眩しさうに眼を細めて横はれる山の姿を見る毎に、心は堪らなく躍る、而して山岳に對する憧憬は年一年开の度を高めたが便々として憧れを實現する時期を得なかつた。开の理由の一つには健康が餘りに薄弱と云ふこともあつた。

今年の夏は何故か矢鱈に山岳熱が流行つた、流行の餘勢は遂に私をして嫌應に拘らず赤石山脈横斷を決行せしむる動機となつた。元より希ふてゐたこと、何の躊躇もなく赤石へ、南アルプスへと胸は躍動を覺えた。日本山岳會員八木是峯、祖父江重兵衛兩君と、私と同行三人は七月十日（大正四年）夕方、南信の飯田町に入つた。

□

十二日午前八時飯田を出發。私共三人の外に飯田の黑田眞治河野久治郎兩君が加はり、人夫二人を合して都合七人、顏振を見亘すと登山服の胸に山岳會の徽章を輝かした八木祖父江兩君は別として、黑田君は大きな山林の所有者で何麽險しい山にも慣れつこと云ふ豪の人、河野君は嘗て赤石の頂上ま

で登つた經驗があつて、この横斷には大いに信州男子の何やらを見せるとて鼻息は凄い、今更の如く私は無暴なことを始めたものだと危ぶんだ、名古屋附近の女性的な優しい山の端くれにすら億劫を感じてゐた私が……日本アルプス中、險峻で從來敬遠されてゐた南アルプスを横斷しやうとは實以て無暴の誹を免れない、友達の多くが何かと心配して呉れた言葉を思ひ出して妙に恐怖を催した、餘りに仰々しい女々しい感情を吐くなと云ふ人もあらうが都會生活に惱める者の初登山の心の裡は凡そ此麽ものであることを味つて貰ひたい。

飯田の町並を離れてはるか前方の重疊せる山々に眼を呉れても赤石らしい頂は更に其姿を見せずして空は淡碧に晴れながら一帶の長い雲は綿々と山腹を纏ふて見えた。

午後六時鹿鹽に着く。飯田から鹿鹽までの八里半は一日の道程としては、たつぷりであつた。途中の鎌倉峠や北條坂では可なりの疲勞を覺えさせられた。

翌十三日午前八時半鹿鹽出發。一里餘の大河原に立寄り赤岳會の前澤君、太田校長等に逢つて色々山の模樣を承つた、前澤君は既に四回までも赤石の頂上を極めた經驗があるさうな。米、味噌、鞋の用意を整へる。正午頃小雨降りしが間もなく雲晴れる。

午後六時頃小澁温泉に辿り着く、温泉宿は山中の一軒家で絶壁の迫り合ふ谷間を小澁川流れて俗塵更に到らず太古の俤の親味がある、栗の花盛りで茂つた梢に房々と咲ける風情頗る好い。海拔三千三百尺、温度七十五度。

□

案内者――下平留吉、原冬太、人夫――宮澤雲太郎、前澤政太郎、松岡重木、吉川常太郎、小椋宗吉、森西丈太郎、後藤清、併せて同勢十四人となる。『赤石にお登りなさる方があると不思議と山が荒れまして』と懷かしい名古屋辯を使ふ宿の親父の愚痴を聽き流して十四日午前六時温泉を出發。

曉の風は肌に薄ら寒さを覺えるが空は秋晴の如く碧に澄んで靜寂は犇々と胸に囁く、晴天が登山者に最も喜ばしいもの丶一つであることは門外漢の私にすら明らかに了察された。

温泉の湯場のある處より裏に廻つて草に取縋てトト……と崖を下りると小澁川の河原に出る、綠樹の薇茂つた大壑が左右に矗然と聳え連つて开の數十尺の谷底を川水が流れる、川原の幅は十數間で水はうね〳〵と蛇の樣に奔流して處々青い淵を湛えたり、岩に衝て白煙を蹴散らしたりする、私共は河原を溯つて一歩一歩吸ひ込まれる樣に山奥へと侵入したのである。

登山者が赤石を怖れる理由の重なるものは徒涉の困難であると兼て訊いて居たが、事實私共は徒涉に痛く惱まさせられた、水は大概膝の上三四寸に及ぶが水流が非常に迅速なのと山の雪が溶けてゐて皮膚のきらる丶冷たさとに稍やともすれば足場を滑らして淵に吸付けられる。見る〳〵内にヅブ〳〵と胸の邊りまで沈んで思はず「助けて……」など丶頓狂な聲を揚げるのは一度や二度でなかつた。是峯君は胸のポケットにあつた大事な書類を濡らし、剩へ流れる拍子に岩に胸を打付けたとかで悄げてゐた、徒涉回數を記憶して置く役目を仰付かつて居たがヒヤ〳〵と胸を動悸々々させてゐる内にいつしか忘れて仕舞つた。十二回までは確に覺えてゐるが夫れから先きは分らない、皆の話を朧に綜合して見て凡そ二十回位と見當を付けた。

絶壑のところ〴〵、刻まれし山膚に眼も鮮かな立派な瀧の掛かれるを見て此麼のが人里近くにあつたらばなど丶詰らぬ欲望を起した、滿目蒼だ沈默に鎖されて聲と云へば水の流れと一行が河原踏む音と時偶高空を過ぐる怪鳥の叫びのみである。

□

河原ばかり二里近く歩いたと思つた午前十一時頃、廣河原に着いた。赤石岳からと荒川嶽からとの二流の合する地點で开の名の如く廣々とした一面の磧である、大澤岳の尾根續きらしい山の割れ目に

雪渓が白く見える、磧を遠巻きにして人を嚇する樣な背景を形作つた山々が、觸るれば强い響が挑ね返りさうに緊張してゐる樣が如何にも小氣味好い、男性的の匂ひが开の黑味がゝつた肌からこぼれ出さうで暫くは恍りと立ちすくんだ。

正午、晝食を濟まし此處から磧を離れて右側の森林に分け入つて尾根を傳つた。白樺、梅が开の梢を透明な淡い光に浴びて競ひ立ち、ところ〴〵を可憐な風情の石楠花が點綴して色彩を添えてゐる。道――ホンの僅に苔を踏みならした許りの稍もすれば消えがてな細徑は上るに隨て急峻になり、喘ぐ吐息が靜寂な大氣に共鳴を起して居る。偶には鳥の叫びを聽かないでも無かつた。廣河原の磧で仰ぐ樣に見えた大澤岳の尾根續きらしい傾斜面の雪が右手に手に取る樣に近く見え出した。隱れて見えなかつた信濃側の重疊起伏する山々の頂が木立を透して眼界の裡に追々現はれ始めた。脚下の廣河原が眞白く見えた。

舟窪の邊からは稍や平地になつて五葉松、岩鏡なんかゝ生ひ茂つてゐた。フト立木の肌を二尺程削つた面に墨で大正四年七月十三日初登山、同行四人と書いてあるのを見付けた。大河原で逢た赤岳會會員の話に據ると赤石に登る者は大抵二十日頃からとのことであつたから、私共こそ本年に於ける第一番登りの光榮を擔ふものと實は聊か誇り氣でゐたところ、既に先んじた者があると知つては何だか拍子拔けの心持がした。森林帶を稍離れて赤い肌の樺が簇生して居る邊まで進むと突然淡い靄が行手に掛かつた、ト見ると瞬く內に靄は靄を生んで遠近の山々は淡色彩のベールを蔽た樣に茫漠となつた、开の美しさに私は醉つた、驚嘆して殆ど言葉の出づるを知らなかつた、一歩登れば登るに從つて映發する山岳獨特の色彩と、音なき響と、开の他樣々の現象に雷に驚きの眼を見張つて奇蹟ぢやあるまいかと怪しんだ醜き小さな「私」を哀れんで下さい、私はこの未知の世界を知る――未だ知ると云ふ言葉を使用する價値ないとすれば感觸し得たことだけでも非常な大きな事柄であると信ずるからである。

◎赤石を横斷して　可知

白樺林の中に疊三枚位の凹地に灰色に汚れて居る雪が殘つてゐるのを發見した。私共は飢ゑた咽喉を雪で濕ふして纏て削ぎ立てた斷崖を喘ぎ乍ら匍ひ登つた、登り詰めた處が大聖寺平である、時は午後五時、右手に赤石左手に惡澤等が見える。偃松ばかり誇ら顔に蔓延して處々高山植物が寂しげに咲く、开の花が何れも濃い色彩であるのに眼を止めた。

凹地があつて黑く焦げた竈の跡があるより見れば嘗て誰かゞ露營した處に違ひないと思つて私共も露營地を此處と決て荷を解きかけると計らずも飲料水に不便なことに氣付いて再び適當な塲所をとて尾根を東に尋し許り下つた。疲れた足を引摺つてとぼ〳〵と偃松を踏んで降りかけた時、フト足元に雛を數羽從へてヨチ〳〵散歩して居る鳥を見付けた。鳩を尋しく膨らました位の可愛い鳥だが更に人間を怖れる風が無い夫れは雷鳥であつた。雛を捉へると親鳥は愈々足元に逍遙ふてさも悲しさうにバタ〳〵する、哀れにも思へたが兵隊上りの常太郎は獵銃を取つて狙ひを定めて一發放つて仕舞た、白い腹を見せて親鳥は其處に無慘な死を遂げた、私共は萬歳を唱へたものゝ一脈の哀愁を唆られた。山間を二三町下つた處に綺麗な清水の泉んで居るを見付けて露營地と定めた時分はモウ六時半、落日の餘光を反映した紅の浮雲がきれ〴〵に散つて、物の蔭になつた處には夜が囁いて見えた。天幕を張たり偃松の小枝を伐り集めたり、飯の用意に一頻り騷がしかつたが纏て黑田君の手料理になつた雷鳥の黑燒に舌鼓打つて味つた。私達は天幕に人夫達は岩穴に午後十一時半就寢、氣温五十四度

□

十五日午前四時眼は開く、足元はまだ闇ながら天幕の外に出て眼を東の空にやれば惡澤岳の肩と覺しき邊が濃い紅に彩られて眞紅の太陽が今しも悠々昇天する瞬間、雲も草も一時に紅の色を浴びて無言の萬歳を稱へて居る樣に見えた。

此處で人夫一人を解雇し、殘り八人を二手に分ち私共は寫眞機と辨當を持たせて人夫三人を伴れ惡

澤を登攀して後赤石岳に向ひ、人夫五人は尙此處に殘つて一人宛て四食分の握り飯を拵へて直に赤石岳に向はしむることにした、赤石の頂上には水が無いから斯かる用意は必要であつた。私共八人は午前六時露營地を出て、繁つた假松に苦しめられて尾根に登り北方に岩を傳つて進んだ、岩が突兀として極めて亂雜なので足場は非常に惡いが大した急峻な崖もありさうでないので先づ吻と安心した。双眼は絶えず四方に動いて目新らしい大きな景に驚いて一々誇張した仰々じい報告を腦神經に送る、太陽の光線を受けて銀鼠色に光る連山の傾斜面、其處にまばゆく反射する雪溪、遠くは中央アルプスの駒あたりまで鮮かに展開する雄大な景は徒らに誇張した文句を並べたつて到底追付かない。

鳥渡見ると今私共が北進しつゝある峯續きは宛ら赤石と惡澤とを兩極とした一脈の樣であつて、一峯一峯が互に喰合つて啻に頭部のみを繼ぎ合せた格構が一條の紐に縱に波狀運動を働かした樣なもので順次傳つて行くには極めて容易である。開の甲州側は緩漫な傾斜面をなして處々雪を堪えてゐるが、信濃側は深く鋭く刳つた樣な絶壁になつてゐて怖る〳〵覗いて見ると眩暈を覺える程深い。昨日休憩した小澁川の廣河原が遙か下の方の青い森林の裡に白くホンノリ夢の樣に浮かんでゐる樣子が恰も世界が異つて見える、國境の上緣を傳て荒川岳の手前の峯の頂から東に稍や逸れて荒川の甲州側の腹に下り更に開の頂目懸けて荒つぽい谷間を登る、非常な急勾配を削ぎ立てゝ大小の岩片は飽迄も私共を擊退しなければならぬと云ふ風で猛烈に行手を阻む、苦痛が一時に込み上げて來てあはや落伍者が現はれさうに危ぶまれ、人夫共も「地獄の道だつて此處に痛くはあるまいよ」と呻つてゐる。この大難關を登り詰めて暫く行くと荒川の頂に着く、荒川と云ふ呼稱は陸地測量部五萬分の一地圖に依るものでこの地方では中嶽と云ひ、惡澤を荒川岳と呼做らしてゐる、惡澤とは日本山岳會連の命名だとかで陸地測量部では東岳と云ふ、こんな具合で一つの峯に三つも名稱があつたり、同じ名稱が二つの峯に付いてゐたりしては一般の非常な不便であるから何とか統一の方法を講じて貰ひたいと思つた。

◎赤石を横斷して　可知

信州測の懸崖絶壁は國境に隨いて北西に曲つて仕舞たので荒川から惡澤への峯續きは左右共平等な傾斜になつた、今迄後方に頂だけ見せてゐた赤石は横腹一面を露出して數條の大雪溪が日光の蔭になつて燻銀の如く錆びた色を呈してゐるのが手に取る樣に近く見える。起伏する幾つかの肉瘤を越へて遠方から眺めた時には「何うしたら彼麼崖を登れるだらう」と一行の頭に大分疑問になつてゐた絶壁も近寄ていざとなつて見れば案外に脆くて午後二時半には惡澤の頂上に辿り着いた。朝六時に出發した大聖寺平の露營地はつい眼の前に見えてゐるが夫れを八時間も費したのは一行が非常に怠けたことを勘定から引かなければならない、如何に途中が險阻であつたにしても此麼に時間を要する筈はないのだ。

一萬三百八十尺の山巓、南は赤石が阻んで居るが東北西の三方は近くに眼界を遮るものなく餘程遠くまで見渡される、遠山仙丈ヶ岳白峯……地圖と首つ引きで見つめてゐる山の名を聞いて皆忘れて仕舞たが、北へ北へと重疊連續する南アルプスの澤山の峯が恰も一樣に鉢を伏せた風情は春の海の穩かな日のウネリの樣に――武者振り付きたい程、私の胸は躍る、遙か右手に見ゆる中央アルプスは駒を主盟として連て障壁の如く嚴めしい姿を見せて居る。

私は默て仕舞た、言葉を出すには私の胸が餘りに感銘で一杯になつたからである。大きな自然の唯中に極めて微少な私の姿を見出すのが何故か腹立たしく焦々して來た、倦怠と喧噪との爲め昏迷されて、汗みどろになつた人間の群が苦役に惱めるあの世界とこの世界とは餘りに开の懸隔が甚だしいではないか。私が山に對する憧憬は美しい山岳を心ゆく許り抱擁して見るのにあつた、確に开う空想して居た、併し事實は私が抱擁するべく自然は餘りに大きかつた、內心恐怖を覺えた、而して微弱な自分を氣恥づかしく思つた。斯うした思ひは餘りに月並であつたかも知れないが、よし濃淡の差異はあつても誰人も一樣に考へることゝ見えて一行は暫く沈默して唯だ恍りと見惚れてゐた。

上赤石澤の上流
下小澁溫泉

上赤石山麓の森林
下小澁川赤石山登山口

八木是峰氏撮影

□

此頂には元、何かの神様が祭つてあつたと見えて石垣を積み上げたらしい痕には鍼力製の御幣が眞赤に錆びて散らかつてあつた、人夫の話に據ると开の神様は荒川大明神と云ふたとか。开の崩れた石垣の裡に兼て小澁から用意して持て來た登山紀念の棒杭を打込んで午後三時、頂上を去て元來た道を引返した。大聖寺平から惡澤の頂上まで八時間を要したのに再び大聖寺平まで歸て更に赤石に登らねばならぬが、いつ露營地に到着するかも計られないと云ふ不安に襲はれて一行は稍や焦り出した、午後三時と云ても太陽の光が鈍くて折々霧が行手を遮つた。

漸くにして大聖寺平に辿り着いたのが午後六時、全く咫尺を辨ぜざる濃霧が横頻吹に吹き捲くつて時折怯える樣な風の響を交へて居た、刻一刻夜の足は近付いて來る、一行の誰の顏にも不安と疲勞の色があり〳〵と漂ふて見える、「是れから赤石の上までは登るの一點たが、何うしても三時間は掛かるから喃」と案内の留吉爺は愚痴る、三時間要すとすれば露營地着は八時か九時、この時こそ本當に『日暮れて道遠し』の感を切實に嘗めさせられた。勇を鼓して大聖寺平を出たのは六時二十分、急傾斜を攀つて行く程に大雪溪の傍に出た、四十度ぐらゐの傾斜で見渡す限り稍鈍い白銀色、一種靜かな寂し味に凝と眼を止めて見て居ると何となく胸苦しい威壓を覺える。幸ひに霧は散じたが夜はとつぷりとあらゆるものを包んで足元が危險でならぬ、人夫に最も疲勞の樣子の祖父江君を托して改めて頂上から迎ひを出すことにして私共だけ一足先きに遮二無二、上へ上へと登つた、何と感ずるにも何を觀るにも私共は餘りに心の餘裕を持たなかつた、唯、上へ上へと猛進した、足元の危險な割合に非常によく捗つた、軈て頂上と覺しき處に小形な三角形の黑いものを仰いだ時には开れが三角標とも見え、先發の人夫共が拵へた天幕の樣にも見えて半信半疑であつたが遂に天幕を確定した時は一時に嬉しさが込み上げて來た。最う山腹ではなくて山稜であつた。

◎赤石を横斷して　可知　四二

頂上に着いたのは午後七時三十分、人夫が三時間は必ず掛かると云ふて距離を一時間十分で上り詰めたのは私共の精力が人一倍優つて居たのか人夫の記憶が過つて居たのが疑問ではあるがこの際の私共の判斷は自然前者に傾いた、八木君が「僕等は記錄を破つたよ」と顏いつぱいに嬉しさを湛えて叫んだ、願はくは人夫の云ふた前言は眞實であつて欲しい、若し過誤であることが判れば私共の誇が痛く傷けられる譯だ、現實曝露とでも云べき悲哀を味ふのはこの場合嫌であつた。

□

幕營したのは突兀とした山巓の東南の低地で疊一枚を堀下げた程の穴があつた、开の火で炊事をした、飲料水は無いが近くに雪はあつた、雪を藥鑵に入れて火に掛けて湯を拵へた。祖父江君は迎ひに行つた多數の人夫に擁せられて八時頃無事到着したが、同時に猛烈な腹痛が私を襲ふて天幕の裡に横はり殆ど昏々の狀態に陷つて仕舞つた。

正氣が付くと山上の夜は漸く薄らんで居た、幕外では皆が今しも御來光を拜してゐるのだ、「出て見よ、實に壯嚴だよ」と頻りに私を促がして呉れたが散々衰弱した身體では何うすることも叶はず空しく齒を喰絞つて幕内に殘つた、皆が朝飯を濟ました頃漸くノコ〳〵匐ひ出て岩に捉まり乍ら始めて富士の靈峯を見た、雲煙漂渺、重疊せる山岳の彼方に超然屹立する开の偉容は實に好かつた、午前六時に於ける氣温は五十二度。昨朝大聖寺平のより二度低い。私も斯うしては居れないから弱りきつた身體に葛湯と小量の粥を啖つて力を付けた、山岳病とか云ふて始めての登山者は誰でも經驗することゝ訊いて夫程氣落はしなかつた。

黑田君が留吉爺と吉川人夫を伴れて先發隊として午前七時十分出發。私共本隊は八時出發。天候は登山日和とでも云た樣に一片の雲なく晴れ亘てゐた。

山巓から西南に續いた岩片ばかりの痩せた山骨を傳ふて段々下つて行く、午前の日ざしは遠近の山

谷に夏霞を罩めて燒付ける樣な太陽の光を頭から浴びせ掛ける、夫れでも時折生凉しい風が吹き上げて來て脊の汗を乾した、偃松の地帶を越えると權木の密林が行手を塞いだ、何う分入つたものか殆ど分別の付かぬ程繁茂して梢、枝を交へて侵入者は一歩も通過させぬぞと意地惡く張つた鐵條網の如くであつたが下り坂で稍やお調子に乘じて皆の足は無二無三密林中に突進した、目、耳、鼻の區別なく襲ひかゝつて行手を阻む枝に手當り次第に切り拂ひ薙ぎ倒した、白樺も無數に簇生してゐた、登る第一日に舟窪邊では趣味ある白樺林の美に恍りしたが今斯うして小癪な振舞に及ぶと憎いと云ふ念が湧いて來る、此難行な場所はどの位であつたか全で夢我夢中に掻き分けてゐたので薩張分らないが、不意に頭上は何となく閲へた樣な重い氣持になつた代りに俄に足元が明るくなつた大きな高い樹ばかり叢生した地帶に這入つた、これが森林帶で歩くには非常に樂になつた、开の時は丁度十一時十分であつた。傘の樣に上の方で縱横に枝を交へ、太陽の光線を遮斷して居るから太古から落ちたぎりで積み重つた落葉が腐つてゐて踏心地が惡い、熊の新らしい足痕が到る處に點々して居て時々動悸つとせられた、頂上に近い岩石地帶では岩鹿の足痕許り見付けたが下向するに從て开れが無くなつた代りに熊の痕ばかりになつた。

五萬分の地圖と中村清太郎さんの赤石澤の地圖と磁石の三つを較べて進路を豫測しやうとしても何うも正確な見當が付かない、遙か木立を透して脚下に水の音が夢見る樣に響くのから察すれば確に谷川はある、开れが赤石澤であることも略ぼ見當は狂はないが併し开れが赤石澤のどの邊かは全く分らない、先發隊も尠なからず苦戰の體と見えて立木の肌に傷つけて道知るべを作つて行く筈なのが稍やもすれば支離支滅で、處々訂正のしるしがあつたりした、屢々谷間に迷ひ込んだり瀧に出會して面喰らつて退却したり頗る難行して漸く午後一時半頃、赤石澤に一つの澤が落合ふ地點に着いた。此處を留吉爺は渡合（わたりあひ）と呼んだが开の澤は何と云のか知らない、地圖でも分らない、自分等は今どの邊に居る

◎赤石を横斷して　可知

かゝ分らないで大いに惱まされた。

驚いたのはこの谷間の岩が大小に拘らず何れも稍や黑味を含んだ朱色してゐることである。凄じきまでに鳴り吼えつゝ青く渦卷いて滔々流るゝ溪流に赤き岩が點綴せる樣は更に天下の奇觀だと誇張して見たい、赤石澤、赤石岳の名は此處に發したものなることが分つた。休憩した處に通過紀念の棒杭を打込んで午後二時十分渡合を發した。而して溪を下ることになつた、材木を伐り倒して梯子の代用をしたり細引を傳つたりして巨岩を二つ三つ越へ二三回徒渉もした、流れは急であるが膝の上一二寸に及ぶ水深で徒渉は案外容易であつた。やがて二丁も下つたと云ふ頃先頭に進んでゐた黑田君や留吉爺等が當惑顏して悄然と逆戻りして來る、期せずして不安が皆の顏に漂ひ詰め寄つて話を訊くと前方には溪の全幅員が大瀑布をなして通過は到底出來ないと云ふ、二十年程昔、留吉爺等が陸地測量部の測量隊に隨いてこの溪を下つた際に幵の瀑布の左手に辛うじて通行の出來る位の穴を穿つて置いたとか、幵れが洪水か何かの爲めに見事に埋沒して仕舞つてゐるのだ、一行は大いに當惑して何うしやう斯うしやうと迷つてゐる矢先、山間を透して遙か前方に見えてゐた七面山あたりの空の一角、一抹のインキを流した樣な雲がむら〳〵と湧くのを見た、幵れが見る〳〵アミーバの樣に擴つて瞬く中に空一面を蔽ふた、滿目の風物何となく黝んで來て一陣の冷風颯と面を掃ふかと思ふと間もなく雷が轟々と鳴り出した、同時に豆粒大の雨が一齊射擊で降て來た、泣面に蜂とはこのこと、進退全く谷まつて仕舞た。谷輻は僅に二十尺足らずの狹天地、水流と絕壁との間のホンの二間四方の河原に生命を托することにして、濕つた流木を集めて焚火を起し天幕を張つた。屈强な人夫四人を選拔して絕壁を横傳ふて下流に脫けられる口を搜索に派遣した、雷雨は幸ひに午後四時頃幵の猛威を納めた。

午後七時頃歸つて來た人夫達の報告に依ると必ずしも希望ないでも無い樣に思つて胸撫で下して岩片だらけの上に、毛布に括まつて鞄を枕に横はつた。頭の直ぐ傍を吼える樣な凄まじい音して流るゝ

河水に夢は屢々破られた。氣壓計で見ると此處は海拔六千九百尺の地。

□

十七日午前六時二十分先發隊出發。同七時本隊も第三露營地を出發した。四十五足準備した鞋は缺乏する、米味噌は乏しくなる、愈々心細くなる、露營地から崖崩れを傳つて立木の蔽ひ茂つた絶壁に入つた。河流に隨つて眞一文字に東に進んだ。隨分險阻な、一足踏み違へ樣なら六七十尺の谷に眞逆樣の藝當と云ふ際どい場所に屢々出會つたが細引の準備さへあれば、大した心配は不要の樣に見えた。午前九時半、崖を下りて赤石澤に出た、三四町行くと左の山間から溪流が流れて來て、赤石澤に合流してゐる。これが北澤であつた。私共の始めの計畫は北澤を傳つて赤石澤——即ちこの合流點に出る豫定であつたが、飛んでもない大奥に迷ひ込んで餘計な心配をしたものだ。

この邊はもう岩石は赤色を見せずして普通のと變りはなく、溪流は餘程廣くなつて歩くには樂であるが徒渉は屢々あつた。併し、溪は下るに隨つて左右の絶壁から落ち込む大小の水をあはせて追々深くなるから遂に徒渉も不可能になつて度々絶壁を傳つた。夫れも出來ない處は材木を伐り倒して水の上に渡して越えた、北澤口から道程にすれば大したことはあるまいが時間にして約五時間は兎に角溪に離れずして下り得たが急に山と山とが迫り合つて巨岩累々と重なる間隙を水は青淵湛えて奔流して通り拔ける術なきに到り右側（下流に向て）の崖を攀ぢて山林に這入つた。七八尺の石楠花が咲き亂れて开の清楚な風清は疲勞した私共の情緒に尠からず喰入つた。私共の這入つた山林は大倉山林の一部で、同じ頂から分散した山稜の一つであつて同じ樣な山稜を横腹傳ひに上つたり下つたりして四つ許り越えて、槌島の西で屈折して南方に流るゝ赤石澤に再び現はれた。午後六時。河幅は非常に廣くなつてゐた、河に隨つて南に下ること約一里、聖澤と赤石澤とが合流する處で計らずも一間足らずの小さな汚ない小屋に鮠を漁としてゐる氣味惡い面構への山男二人を見た。久振りに人間に逢つたと云

◎赤石を横斷して　可知

◎赤石を横斷して　可知

ふ嬉しさに一行は俄に元氣付いた。

小屋の傍に天幕を張つて露營することに決めた。

□

十八日午前七時第四露營地を出發。前の日大倉山林を赤石澤に出離れた邊りから極めて微かな小徑があつた。开の道は聖澤口から二町下流の處で河原から山に入つて居る、河に沿ふて峠を二つ程越えた邊は最う大井川本流であつて、其處等で始めて竹笹を見付けた。相變らず河に沿ふて崖を傳ふて段々下流に進んで午後一時頃路傍の木立の裡に一軒の杣小屋を見付けた。吾を忘れてどや〳〵と轉び込んで見ると意外にも汚い小屋とは餘りに不調和な三人の女——山に珍らしい垢拔けのした女房達が居て、山中の精進な生活に散々惱まされて來た一行が妙に娑婆ッ氣を起したのも無理なかつた。白米を分けて貰つて久振りに飯らしい飯を口にした。午後三時同小屋を辭して南下するに隨て道は益々よくなつてゐた。釣橋四つ越えて大井川に離れずに河の右になつたり左になつたりして下り駿州田代の宿に疲れ切つた身體を横へたは同夜の十二時過ぎであつた。

□

人夫八名は田代の宿で悉く解傭した。初の計畫では携帶品の減少に伴れて順次人夫を二人位づゝ解傭して放還する豫定であつたが、赤石澤に入つて尠なからず行惱むや人夫等は何れも歸路の危險なるを知つて恐怖した、事實二人や三人で然かも澤の勝手の判らない者には元來た筋を歸ることは出來さうにもないので到頭最後まで全部引連れて仕舞ひた。小澁出發當時は一人平均五貫乃至六貫の荷を背負つて居たが、解散際には三貫目足らずであつた。夫れでも彼等は頻りに不平がましい傲慢な態度で命令は尠しも行はれなかつた。彼等が人夫としての經驗に乏しい事や彼等を使用するに際して私達に手拔かりや油斷があつたのや理由は色々あらうが要するに、信州側の人夫が人夫の修練を全く缺いてゐ

ると云ふ事は飯田方面から赤石に登らんとする人々の大いに注意を要することゝ思つた。私共が伴れた人夫は飯田の黒田君が充分に選擇して下さつた者共であつたが、彼等が多數を賴んでの横暴不遜な素振りは山岳に慣れ各地の人夫に屢々接觸した八木君が「此麼に生意氣な人夫には嘗て出逢つたことが無い」と斷言したのを見ても判る。

案内者は一日日當壹圓貳拾錢、普通人夫は一日壹圓、及び解散の翌日より二日分の日當と靜岡驛より名古屋を經て中央線中津川驛に到る三等瀛車賃給與。

携帶器具▲テント一張（四人用）▲寫眞機械三個▲望遠鏡二個▲安全提燈二個▲毛布五枚▲鞋四十五足（人夫は別）▲鍋二個▲飯盒一箇▲細引三條▲鐵砲一挺▲茶碗十箇▲其の他十數點。

食料品▲米四斗二升▲味噌二貫目▲牛肉の時雨▲鰯のトマトー・ソース▲牛蒡の味噌漬▲福神漬五鑵▲ハム四鑵▲煮豆一鑵▲ビスケット三鑵▲紅茶▲ウイスキー二瓶▲ブランデー一瓶▲其の他約十點

（新愛知編輯局にて）

スウィス日記（二）

辻村伊助

旅のうちに、いつのまにか、春はなかばを過ぎてしまつた。

數へるとも、もう先々月になるが、あの朝、北イタリヤのバランツァから、ラゴ、マジョレーの、靄に沈んだボロメエの島々を見かへりがちに、ミラノへ着いたのは二月七日の晝すぎで、今まで、眉にせまつたスウィス境の氷の嶺は、もうなだらかな丘に、そして、そのなが〳〵と、湖水をめぐる冬

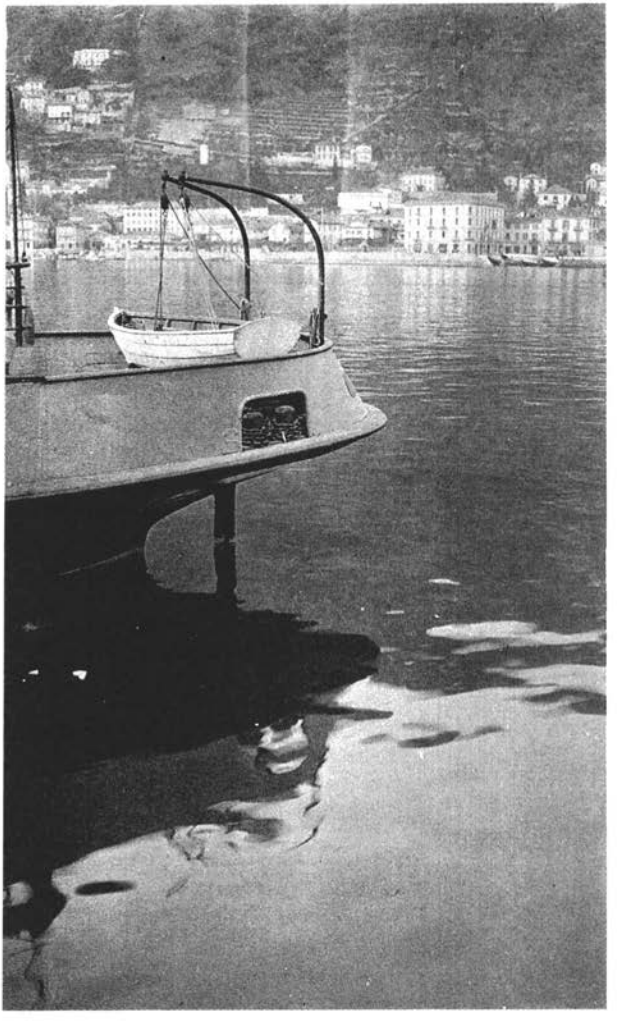
枯の丘も、次第にうしろになつて、枯草の原に重く滲じむ、灰色の空のロムバルディヤは、南歐とは思はれぬくらゐ旅人の心も重い、まださすがに冬のまなかであつた。

靴さきに、かさこそと鳴る楢の落ち葉も、もう幾年か經つてしまつたやうに心細い。ミラノに着くと、たまらなくなつて、まだあの雪の國がなつかしさに、せめて「モーダン、ペインタース」の挿し畫にある、「夕日のモンテ、ローザ」を眺めやうと思つて、停車場に近いホテル、シユミットに荷物をはふり込むと、すぐその足で、コルソ、ヴェネーツィヤの人波を押しわけながら、イル、ドゥオモ(Il Duomo.)へやつて來たが、白塔はもとより煤煙に包まれて、入日の雪は、今日は見ることができなかつた。その歸りみちに、久しぶりに寄り込んだ、テヤートロ、アラ、スカラのバルシファルも、背景の白樺と、遠山の雪が胸に泌みて、ホルンとチェルロのウニソンももの悲しい。

そのミラノから、南、ジエノーヴァ、ヴエンティミリヤと、だん〳〵山に遠ざかるのが、リヴィエラの春ではあるが、心細かつた。謝肉祭(カルネヴアル)の花祭りも、レマンの湖畔モントルーの、ナルツィセン、フェスト(Narcisen-Fest.)ほどに興をひかない。モンテカルロから、モナコ、ニスと、地中海の碧い波を見下ろして、グラン、コルニシユの街道を通つても、ルツェルンの湖畔、アクセンシュトラーセの夕暮ほど、うれしいとも感じなかつた。カンとグラースで、またカルネヴァルを見て、アンティヴ(Antives.)に行くとき、ミモサの花の梢に、遠く雪の山脈を望んだが、あれはアルプ、マリティム(Alpes Maritimes.)であつたらう。それからまた山に離れてしまつた。

マルセイユから、地中海に沿ふて、バルセローナへゆく時、ひろ〳〵と右につゞく平原の、丘また丘の西の極に、ピレネー(Pyrenees.)の雪を眺めたが、シーズンは過ぎてゐるので、近づいて見る氣にもならず、ピレネー山岳會へ宛てた紹介狀も、無駄に、握りつぶしてしまつた。

大正三年三月三日、春風を追ひ手に、トラファルガーの海を渡つて、スペインの南の端カディスか



モ　コ

辻村伊助氏撮影

ら、モロッコのタンジエ（Tangier）へゆく船の上から、北アフリカの岸につゞくアトラス（Atlas.）の連山を望んだのも、ジブラルターから、また、スペインの内地へ歸つて來たとき、グラナダの、霞に眠むるアルハムブラの城の上に、なが〳〵と横臥す雪のシェラネヴァダ（Siera Nevada.）も、アルジェリヤのオランから、サハラのオアシスへむかふ途中、風通しの惡るい汽車の窓から、すぐ近くに眺めて越えた、雪に覆はれたアトラスの山々も、またはティレノの波に浮ぶ、シチリヤの島の雨雲に、茫然とエトナ（Etna.）の裾をながめたのも、みんな、旅のなかに畫かれた、美しいミラージュに過ぎなかつた。

ヴェスーヴィヨ（Vesuvio.）は別に云ふほどの山でもない。ナポリ、ローマ、ピザ、フィレンツェと、イタリヤの春はむなしく明け暮れて、山を憶ふ旅人の心も、しばらく雪に離れてはゐたが。

そのフィレンツェのことである。

朝空はうら〻かに晴れわたつて、ゆふべの雨にしつとりと塵も靜まつた、ピヤッツァ、シニョリナから小路を出ると暢氣さうに白雲の行き〻するアルノの橋を渡つて、花園の月桂や、ミルトゥスの間をぬけて、パラッツォ、ピッティ（Palazzo Pitti.）の露臺に立つと、北に雪をかづいた遠山を、のどかに浮ぶ地平線の、霞の上にながめたが、あれはガルダに近い、國境の山々であらう。そのかたちは、もう忘れてしまつた。

ボロニヤから、ヴェネツィヤに來たけれど、物語りの多いこの水の都さへ、アルピの雪を憶ふ旅人を、ながくひきとめる力はない。春の水は、ゆるくめぐるカナールダランデの、水樓に暮らした幾日の、水の香につゝまれて、ふと眼をさます曉方も、または、アヴェマリヤの鐘の音に、靜かに暮れてゆく夕方も、今、眼を閉ぢて想へば、涙の滲じむほど、なつかしくはあるが。

かうして、大正三年の四月十四日となつた。春の話は次第に山に近づいてゆく。

私が、あの朝ゴンドラで、ピヤッェッタから、磯臭いカナールの水に浮んで、フェロヴィアリヤの停車場へ行つたのが、九時過ぎであつたから、シルミオーネ（Sirmione.）の小島のかげに白帆の眠むつた、ガルダの湖ぎしをまはつて、ヴェローナに着いたのは、てうど晝ごろであつたらう。ガルダの水はなめらかにうす霞んで、若草の牧に、崩れのこる城跡をかこむ落葉松や、その草原を、うね〳〵とのたくる小川の水に沿うた、ポプラの緑の間は、スモヽの花が仄白く咲いて、そのやわらかな、春の野を前景にして、眼の及ぶがぎりはティロール境の山々が、あると思へばうつすらと、氷の嶺が、のどかに包む霞よりは、やゝ白く浮き出してゐた。

私はそのまゝ、ミラノを素通りにして、ルッェルン、エキスプレッスに乘りかへると、このコモまで來てしまつた。

コモの湖（Lago di Como.）上

羅馬のラクス、ラリウス（Lacus Larius）はコモの湖で、イル、ラリヨ（Il Lario）とも呼ばれてをる。アルピ（Alpi）の、南をめぐる北イタリヤの湖水のうちで、殊に美しいと稱へられるこの湖は、北は一つ、南は、右ひだりに枝分れして、てうど、琴柱の形をしてゐる、そのまんなかにはさまれた岬はヴェラージオで、コモの町は、西南端で、ミラノからとっつきにあたる。

町に着いたのはまだ日の高い頃で、うそ寒い風に吹れて、白樺の若葉のそよぐ、山また山の折り重つた脚もとに、ぴかつと光るみづうみを瞰下ろした時、今まで、南歐の旅に見ることもできなかつたなつかしさを、深く感じたのである。迎ひに來てゐた自働車で、古ぼけた町をぬけて、ピヤッツァ、デル、ドゥオモへ出ると、まもなくグランド、ホテル、ブリニウスに着いた。

室がきまると、すぐ窓を明け放してみづうみに對ふ。コモの町は湖水のとっつきで、兩側の山が急

にせまつて、水は池のやうに、ちいさく入り込んだ、南の端を見るだけで、何だか鼻がつかへるやうな氣がしたが、その、冬枯の木立もまじる山の裾に、雪の象徴とおもふ白樺の幹の、まともに、雲透きの夕日をうけた美しさ、岸の落葉松には、霧を吹つかけたやうに柔く綠が崩えて、水に沿うたヴィルラには、石楠木がもう咲きかけてゐる。

北イタリヤはまだそれほど人ずれてゐないし、――もつとも、人ずれてゐるの居ないの、氣持ちがいいの惡るいのと云つても、日本人なんか餘り大きな顏は出來ない方で、南イタリヤやスペインよりは、京濱間の汽車の方が、掏兒みたいな眼つきの奴が、遙かに多いやうだが、――兎に角、南方よりは人間もよほどすれてゐないし、二百から室のあるこのホテルも、冬の間は休業で、つい二週間前に開いたばかり、御客と云ふのは、ミラノから來た英人の一家族だけだから非常に靜かだ、これは娘の病氣あげく、轉地に來てると云つてたが、御茶をヴェランダにはこばせて、庭のアベーラの枝ごしに、ちら〳〵光る湖を見下ろしたとき、テルラッツオのソーファに倚りかゝつた、すき透るほど色白ろなのがそれなんだらう。

庭には大理石の像のうしろに、カラタチの花がまつしろに咲いてゐる。私はその下を通りぬけて、庭口から湖水のふちの舟つきに沿うて、ピヤッツァ、カヴール（Piazza Cavour.）へやつて來た。

ブルナーテ（Brunate, 716 m.）とモンテ、デラ、クローチェ（Monte della Croce, 535 m.）にはさまれた、コモの町はまるで、谷底で、たゞ西につゞく、サン、ジオルジオの方へ來ると、ピヤニ、ディ、ブルナーテ、の裾が少しひらいて、ブンタ、ディ、ジェノのはづれにやゝひろく、湖水の冲がのぞまれる。公園は無論、立派なものではないが、水際に植ゑた、七葉樹（ヒッポカスタノ）の若葉が美しく、二十年ぐらゐ經つた公孫樹や、楓が珍らしい。時々しめやかに小雨が降る、ホテルに歸つて、ヴェランダのイージーチェーヤに倚りかゝつて、久しぶりで落ちついて、新聞や雜誌を讀む。かうして今日は暮れてしまつた。

夜は花曇りとでも云ひたい朧ろ月に、向ふ岸のサン、ジオルジオの燈火が、星のやうに望まれた。

翌る日、眼がさめたときは、霧がしつとりと窓にせまつて、庭の樅(アベーテ)は、梢だけが墨繪のやうに、浮き出して見える。起きても仕方がないから、また床にもぐり込んだが、それも、朝飯(アッコーネ)の頃には、しとしと小雨が降りそゝいで、いやにうすら寒いから、手紙を書いたり煙草をふかしたりして、朝のうちはつぶれてしまつた。

そのうち雨も小やみになつて、町の中を散歩するうち、空もよほど明るくなつて來る。

正午、すぐ庭につゝいた埠頭から汽船に乘ると、雨はもうあがつて、いつのまにか蒼空を見る。コモをはなれると、すぐ甲板の食堂に出て、カプリ、ロッソを飲みながら、水にせまるジェノの鼻をぐるつと廻ると、モンテ、ビスビノ (Monte Bisbino, 1323 m.) の山頂に、四條の殘雪が、きらりと船の帆柱に近く仰がれる。

船は春風の小波に、なだらかな水みちを殘して、チェルノッビョ (Cernobbio) トルノ (Torno) と、右ひだりに寄り路(ルート)して、北へ〳〵と動いてゆく。水に沿うて、または兩側の森の間には、いくつも別(ヴィ)莊があつて、湖水に臨んだテルラッツォには、覆ひ茂つたチプレッソや、チェードロの常綠樹の蔭に、眼のさめるやうな石楠木や、藤の花が盛りである。ローマで見たときも、カプリの宿の窓ぎわに咲いてた時も、藤の花は、日本で見るより遙かにいゝと思つたが、あゝ云ふ房咲きの花は、白壁か、大理石の柱にからませて、横から眺めて然るべきで、龜井戸——私はまだ行つたことはないが、寫眞で見ると——のやうに、竹や丸太棒の棚作りにしては、横から見ても仰のいても、花の美しさは完全に利用されてるとは思はれない、同じ棚からたれ下るにしても、ペルゴラにした方が、遙かにうつりがいゝと思ふ。北イタリヤ、殊に此邊では、此ごろ大分、日本式の庭園や植物に興味をもつて、ジャルディノジャポネーゼなんて、名のりをあげてるのが少くないが、矢張り日本に於ける洋式庭園と同じ

くで、頗る變てこなのに感心してしまふ。出鐍目な石つころを三つ四つ並べて、石燈籠と公孫樹があれば、日本式庭園になるところは極めて、簡便で、なる程、流行の要素は、簡便にあるとつく〴〵感心した。兎に角、名前だけは立派なもので、ベデカーの案内記にまでのせてある奴が、素人が見ても、がつかりするやうな庭ばかりだ、もつとも名前だけ立派なのは、何でも近頃流行と見えて、アルプスがいつのまにか日本に移轉をして、この頃は、四國、九州を始めとして、たしか、奈良縣にもつい此の間、出張所が設立されたさうに聞き及ぶ、そのうち、いづれどこかの有志者が寄つてたかつて、日本ヒマラヤや、ジャパニースアンデスをこしらへるに違ひない。長生きはすべきである。

西岸のアルジェニョへ來ると、はじめて湖水がひろ〴〵と見わたされる。右につき出たベラージオの岬の、水にのぞんで、白壁の家が、綠のなかにちら〳〵望まれるが、船はまだ、兩側の小村小村に寄り路をして、やうやくそこに着いたのは、三時過ぎになつてしまつた。

グランド、ホテル、ベラージオは、水に近い綺麗な宿で、室の數も二百五十からある。私の選んだ室は、てうど、岬のとっさきにつき出した二階で、花園と、碧の水の北のはづれに、スウィス境の雪の連脈が、霞の上にのぞまれる。花園はヴィルラ、セルベロニへつゞいて、それもホテルに屬してゐるが、一まはりするのに、二時間もかゝると云ふから、それは明日にのばして、御茶がすむと、町はづれの湖水のふちに、覆ひかぶさつた森の中に、しつとりと露を含んだ小路をぬけて、サン、ジオヴァンニの知人を訪ねに行つて、夕方まで遊んで來た。ヴィルラ、トロッティは閉つてゐたが、土地の人達の案内で正門をあけてもらつて、入ることが出來た。花盛りの石楠木や、薄紅に咲きはじめたアゼレヤの間には、月柱やリヴィストナが茂つて、泰山木の柔革のやうな裏葉が、綠の樺に混つてゐるのもうつりがいゝ。私達は石階の獅子像の側に腰かけて、持つて來てくれたサン、ジオヴァンニを飲んだ。

湖の空は、いつの間にかあやしく曇つて、西北の風に、椰子の廣葉が鳴りはじめると思ふと、まもなく大粒な雨が、まつしろな水路をつけて、暗い湖水を渡つて來た、が、このサン、ジョヴァンニの方へは寄らないで、レンノの冲を、雨雲は、西南へ流れて行つた。波は黑く岸にうちつけて、日はとつぷりと暮れかゝる、みんなに別れて宿に歸ると、ヴァレンナの灯火がちら〳〵光つて、湖水の波音は、高く室に響いて來た。風はなか〳〵止みさうもない。

コモの湖　下

昨宵の雨はとうに上つて、窓からは、からりと晴れ渡つたみづうみの北に、雪の山々は仰がれる。花園には七葉樹の若葉が、眼がさめるやう、紫にからんだバリサイドの藤の蔭には、石楠木が臙脂のやうに燃えて、牡丹や木蓮が咲き亂れた、コモの春は今が盛りであらう。

ベラージョの町は、岬のとつさきに建てられて、坂路の石を敷きつめた小路に沿うた白壁の家が、碧りの水と、蒼空と、それを圍む遠山の、スウィスの雪に對ひあふ。そして町のそこゝには、アベーテやチプレッッがまつくろに茂つて、會堂の鐘の音も、その木立の中から、湖上に遠く鳴り渡る。

朝のうちは庭づたひに、ヴィルラ、セルベロニの花園を歩きまはる。リヴィストナなども、露地に茂つてゐるくらゐだし、四月なかばに藤が盛りだから、東京よりは温かいには相違ないが、冬の頃は、近くの山に、今でもまつ白ろに雪が殘るくらゐ降るのだから、かう云ふ樹木はあるにしても、さう大して暖かいとは思はれない、たゞ日本のやうに空氣が濕つてないから、暑さ寒さが温度ほど、人間の身體に感じないだけだ。何ぞと云ふと、日本は氣候がいゝ、陽氣がいゝつて騒ぎたてゝ、小學校の教科書にまでやれ暖流がどうで、島國的氣候だからどうだとか、いやに世間見ずの自慢ばつかりするけれど、なる程、大陸的氣候でも、蒙古や滿州邊に比べたら、いくらかましかも知れないが、夏のじと

じとする蒸し暑さと、寒の中のびゆう〳〵吹く空つ風を考へると、所謂大陸氣候と、どれ程の差があるのか見當がつかない。島國の名物と云ふは、年中じめ〳〵濕つぽくつて、黴つ臭い疊表でも云ふんだらう、寫眞の鏡玉に黴が生えたのと、二度レウマチにかゝつたんで、國の陽氣にすつかり愛想がつきた。第一、考へてもわかる。上着は一といろで澤山な筈だのに、夏服に、冬服に、間服なんて馬鹿なものまで必要な國が、氣候のいゝ譯がありやう筈がない。この邊で夏の盛りに、や、どうも暑いですなアと云ふ意味は、日向で餘り働くと、汗が滲じみますよつて注意なので、あんまり働かない連中は、てんで汗なんか知らずに濟む。麻の一重で尻までまくつて、をまけに扇子とハンケチをちやんぽんに使つて、それでもだく〳〵汗が流れるやうな箆棒な暑中や、夜具みたいに綿の入つた着物を何枚もしよい込んで、それでもがた〳〵胴ぶるひをしながら、水つ鼻をすゝり込む寒中が島國的氣候なら、大陸的の方がよつぽどしのぎよさゝうだ。無論日本のやうなサンマー、ハウスとは設備も大分異ふし、山に近く住んでるときと、平原や海岸に、うろ〳〵してゐる時とは、ものゝ感じ方も、相違のあるのはあたり前だが、北イタリヤからスウィスへかけては、黴つ臭い風に障子の紙がたるんで、ぼとり〳〵つと、破れ三味線みたいな、變てこな音をたてる陽氣は、まづ〳〵あんまり出會さないと云ふことだ。

何も圖に乘つて駄々をこねる譯ではないが、景色だつてその通りで、日本の山に雪は少なし、氷河の如きに至つては、遺跡があるのないのなんて、なさけない事を騒がなければならない位、心細い始末だから、どこが風光絶美なんだか、今のところ、一寸說明の持ち合せがない、これも、昔の御歴々が、朝鮮、支那、遠いところで、先づ、カルフォルニヤあたりの風景を御覽遊ばし、異國、異國つてこんな景色かいつてところから、だん〳〵御まけが加はつて、いつの間にか、世界一に出世してしまつたんだらう。山の小さな國に、自慢するほど、いゝ景色のありやう筈がない。日本の景色でよかつ

たのは、溪流と天然の密林、それも何年か昔の話で、大抵の森林は、もうすつかりマッチの軸木と焚きつけに變つたから、今では林學や地理科で取りあつかふより、歴史の領分になつてしまつた。水の方は、今でもあんまり變るまいが、森がさつぱりと切りはらはれて、薄つきたない杣や炭燒きの食ひかけた、澤庵の尻尾が流れるやうになつては、いくらさら〳〵と麓をめぐつても始まらない。

昨日會つた知人も、北イタリヤの人だけに日本の景色をまつ正直に、廣告通り心得て、いろ〳〵聞くんで冷汗が流れた。行つて見たいつてしきりに云ふから、馬鹿々々しい御よしなさいつて忠告して來た、本當にやつて來て、愛想をつかされるよりは、いくらか御國のためにもなるだらう。全體日本人は、景色景色つて景色を人寄せに使ふつもりなら、木なんかあまり切らないがいゝし、それとも正直に告白するつもりなら、どこの人間にでつかしても、年中櫻が咲いて、何處からでも不二山が見えて、いつでも陽氣のいゝやうな、見え透いた虚言はつかないがいゝ。

晝少し過ぎに汽船に乘つた。對岸のメナッジオ (Menaggio.) は、山ごしにルガーノへゆく岐れ路で、そこへ通ふ電車の終點もある。私は、テルラッツォに、帚みたいに、すく〳〵と蒼空にぬけ出てゐるチプレッソの木立の奥に、ブレリヤのマドンナの塔を眺めて、東岸のヴァレンナ (Varenna) に渡つた。コモの湖水の、東南へ深く入り込んだラゴ、ディ、レッコが、ひろ〳〵と見わたされる船つきのカフェーで、次の汽船を待ち合せて、湖水の北のはづれにある、コリコの村 (Colico) まで切符を買つた。

そのうちやつて來た汽船には、御客はもう少なくつて、兩側の小村に、神妙に寄り路して行つても、甲板には相かはらずたつた二人で、その一人のイタリヤ人がデルヴィヨの村で降りてしまふと、あとは氣の毒なほどひつそりして、外輪車の水を切るのが、寂とした湖上に遠く響きわたる。が、船は音の割り合ひに速くはない。

スウィス境の雪の山は、もうマストに近く屹えて、ビオナの鼻を右に廻ると、岸は冬枯れのまゝの

ルータ・ハッパツルス・ルテンウ

影撮氏助伊村辻

雑木林で、山が近いせいか、空は次第に掻き曇つて、吐息でもつくやうに、思ひ出してはさつと吹き下ろす夕風も、白樺の香をつたへてうそ寒い。

コリコ (Colico)

湖水の北のはづれは、やゝ東に折れ曲つて、岸の淺瀬には、枯れ芦がざわ〳〵と風に亂れてゐる。コリコはその南側で、ミラノから、プレガリヤのキャヴェンナまで通ふ鐵道が、この小村にも寄つてゆくが、なまじ二すぢの軌道と、幾條の電線が、村の細路を貫いてゆくのが、かへつて御客に素通りをされさうで心細い。船つきのすぐそばに、ホテル、リジ (Hotel Risi) と看板をかけた小屋が一軒、船から下りたのも、そこに泊つたのも私一人で、宿の人達も、西の風で舞ひ込んだ、見なれない旅人に、よほど面喰つたものと見える。

通されたのは二階の角座敷、と云ふといかにも體裁はいゝが、薄つくらい無氣味な室で、探偵小説には、えてこんなのが引き合ひに出される。建てつけの惡るい窓を、やつとあけると、葡萄棚の下に雞が三羽、埃の中に膨らんで、脊戸の松薪の、山のやうなのも山家らしい侘住居、日はまだあるが、鼠に曳かれさうで心細い。

たまらなくなつて、表に飛び出してしまつた。入江の空に、雪の山はのしかゝつて、村はづれの停車場から、キャヴェンナまで乘ると、もうアルピの雪が軒にせまつて、追分けの二筋みちの、右はプレガリヤの谷に沿うて、マロヤ (Maloja) からサンモリッツ (St. Moritz)。左にとればシュプリューゲン、山越しにクールから、滑らかなラインの流れに沿うて、コンスタンツの湖のほとり、墺太利のプレゲンツへ通ふのである。

大陸の南と北を結びつけた街道の、西にはグラン、サン、ベルナール。ローンの谷からドモドソラ

へ行くシムプロン、またはルツェルンの湖畔から、アイロ丶の溪へ越すサンゴタールと、中世紀の旅人の往き來したなかで、これほど喜びと悲しみの、それも、今となればたゞなつかしい、物語りを生んだ街道は少なからう。ポーデンゼーの片邊(かたはとり)に、今も僅かに名は殘るルックブルヒ。リンダウの、朝の鐘鳴るみづうみを見わたすケメナーテに、日はうら丶かにさえ渡つて、窓を包む山毛欅の梢は、祭り日の朝よりもなほ靜かに、その綠の上に遠く畫かれた、アルプの波へ消えてゆく街道の、プレゲンツよりクールへ、かくてシュプリューゲンを越えて、末はイタリヤへと記された、戀物語を憶ひ起こす。

Swâ sich liep ze liebe zweiet,
Hôhen muot diu liebe gît,
In der beider herzen meiet
Ez mit vreuden alle zit.

と雲の湧く北を見かへりがちに、峠を越した旅人もあらう。

トューリンゲンの森を出で丶、羅馬へ急ぐ巡禮(ピルゲル)の、路の長手に行きなやんで、

Ach, schwer drückt mich der Sünden Last,
Kann länger sie nicht mehr ertragen;
Drum will ich auch nicht Ruh' noch Rast,
Und wähle gern mir Müh' und Plagen

と、空を仰いではまた

Zu dir wall ich, mein Jesus Christ,
Der du des Pilgers Hoffnung bist!

をくりかへしたのもこの街道である。モンテ、シュプルーガの麓、メッツォラの湖水のふちを、北

へみちびく坦道に白樺の落葉の、風に亂れる夕ぐれも、または芦の葉の鳴る、かうした日の暮れも、タンホイゼルの序曲のやうに、靜かに聞えては、またかすかに消えてゆく、巡禮(ピルグレーム)の歌は杳として絶えて、今、アルピの雪を仰ぐ行人の、耳にひゞくのは、ベルニナ鐵道の汽笛である。

宿に歸ると、山寺の本堂のやうに、しーんと靜まりかへつた食堂に、相客が二人、オーベル、エンガディンの御百姓で、山ごしにこれから國へ歸へると云ふ、スウィスなまりも、故郷に近づいたやうになつかしかつた、ろくに話はわからなかつたが。

西の風はなか〳〵はげしく、水ぎはの芦の葉がざわ〳〵と、もとより淺間な宿に響いて、今宵はおち〳〵眠れなかつた。

ベルニナ鐵道 (Bernina-Bahn)

何時になつても夜が明けないと思つたが、念の爲めに時計を見ると、もう八時を過ぎてゐる。窓をあけて首を出すと、脊戸の畑につゞいて、雨を含んだ落葉松が二三本、小家の蔭には、昨日の雞がやつぱり三羽ふくれかへつて、さつぱりと晴れわたつた晝過ぎでも、庭は蚯蚓、蛞蝓培養所と云つたやうなのが、今朝は雲は暗く垂れかゝつて、成る程、いつまでも夜が明けない筈である。遠山は雲にかくれて、湖水の色は、イタリヤと思はれぬくらゐ沈んでゐた。

十時に、村はづれの停車場から電車に乘る。アッダ (Adda) の流れは、雲の沈んだテリーナの谷底をのたくつて、石屋根の百姓家、低い石垣にしきられた段畑の、こゝに一村、あすこに一かたまりと、犬小屋のやうな小村にも、朝の鐘は鳴りわたる。

ポスタレシオの溪奥の、モンテ、ディスグラーツィヤ (Monte Disgrazia, 3678 m.) も、今朝は仰ぐことは出來なかつた。テリーナの谷は平らに東へつゞいて、ヴァルテリーナのベルベンノから、カス

ティオーネを過ぎて、ソンドリオで乘りかへになる。待つ間もなく出た。雲は、進むにつれて薄くなつて、國境に近いティラーノ（Tirano）で、ベルニナ、バーンの電車を待つあひだには谷の空には、ところ〴〵雲透きができて、ローンのブリークに似た、此の谷合ひの小村から、北に入り込んだポスキャーヴォ（Val Poschiavo）の溪奥には、雪の嶺さへ仰がれた。

折り〳〵、吹き下ろす風は、なか〳〵寒く、村路のこゝかしこに、野の花は咲き初めてはをるが、春は一と月も遲れてゐると思はれる。ヴァルテリーナは、なほ深く東北に走つて山の奥、アッダの水の源に、モンテ、コンフィナーレ（Monte Confinale）、ティロールのオルトラー（Ortler.）も、僅かな途のりであるが、私の乘つた電車は、その溪から枝別れして、ポスキャーヴォの谷底を、ベルニナさして向ふのである。乘客と云ふのはやつぱり私一人、次の小つぽけな國境の停車場で、稅關の檢査があつたが、窓からのぞいたばかりて、極めて簡單に濟んでしまつた。

かうして再びスウィスに入ると、電車は次第に山の間を登つてゆく、窓をあけて仰のくと、雪の傾斜は、雲の裾から逆落しに溪を壓して、頂は見えないがスカリノの氷河は、窓に近いらしい。が、溪には淺いながら春は來て、路ばたの草は綠に、菫、土筆、たんぽゝの黃にまじる白のサフランの、丘のうしろは切つたての崖が、雲の脚から谷底になだれ落ちて、今年の冬まではとても保ちさうにもない板張りの田舍家の、脊戸のポプラのいく群は、露はながら綠が萠えて、リヴィエラの春、サハラの綠島、カムバニヤ、エミリヤ、ヴェネートォと、椰子の廣葉、ミルトゥスや月桂の黑ずんだ森に、徒に明るく蔽ふ蒼空をながめた旅の終りに、雲の暗らい、この今日のスウィスの旅に急ぐのが、もの悲しくもまた、うれしくも思はれたのである。

ラゴ、ディ、ポスキアヴォは美しい湖である。サッソ、モンテルロ（Sasso Montello）の氷の裾が水に落ちて、その山稜の影を浮べた湖のふちに、谷は、木立にも、草にも、綠は次第に淡くなつて、麓

に見ることも出來なかつた白雪は、斑らに水づいた原を埋めて、イタリヤの春は、今、スウィスの冬である。進むにつれて、線はます〳〵急になつて、だん〳〵白く覆はれた谷のつき當りから、千鳥がけにいくつもトンネルをこして、高く〳〵登つてゆくと、面覆(ヴェール)のやうな霧が、落葉松の森に往き來して、今來た路はもう見えなくつてしまつた。

が、その霧は、四季の畫卷きにゑがゝれるやうに、冬と春の區劃をたてゝ、木立に包まれた崖の中段に渦(うづま)いてゐたに過ぎない。アルプ、グリュム (Alp Grüm) の停車場に着くころには、雪——恐らく五尺を超えてゐたらう——その冬ながらの積雪は、午を過ぎたばかりの、强い日光を反射して、眼も開けないくらゐであつた。ヴェドレッタ、ディ、バリュ (Vedretta di Palü) の、犬の舌のやうに垂れ下つた氷河の裾は、この寥しい村からは、手がとゞくばかりの近くまで來て、そこに、煙さへほそ〳〵と立ちのぼらなければ、殆んど見わけられなかつた雪の塊りの、木こり小屋の間を縫つて、解けて流れるカヴァリヤスコ (Cavagliasco) は、ピッツォ、ディ、ヴェロナ (Pizzo di Verona, 3462 m.) の直下、これも眞白ろに覆はれた山の裾を、今まで溯つて來たポスキャーヴォの谷へそゝぐのである。しかし、その谷には、湯氣のやうに霧が卷き上つて、水の行く手は見下ろすことが出來なかつた。

氷河(ヴェドレッタ)は、アルプ、グリュムの山村の眞西にあたる、そして、その氷の上方は、薄いアレトを形づくつて、南のピッツォ、ディ、ヴェロナから、北側のピッツォ、ディ、バリュ (Pizzo di Palü 3912 m.) まで、極めて大規模な曲線を畫がいて、背ろには、氷山みたいに思はれたピッツ、アルジェニ (Piz Argieni, 3942 m.) や、四千米突に僅かに一米突を缺く、ピッツボ (Piz Zupo) が屹えてゐる。然し此の群山の最高峯、ピッツ、ベルニナ (Piz Biernina, 4052 m.) は、仰ぐことはできなかつた。

アルプ、マソーネ (Alp Masone) からトンネルを越すと、すぐ眼の前に展げられた雪田に、かつと眼が眩んだが、これは高原ではなく、今は靜かに雪の下に眠むる、白い湖と呼ばれた、ラゴ、ビャンコ

(Lago Bianco)であつた。電車はその右側に沿うて、半分ほど廻ると、ベルニナ、オスピツィオ(Bernina Ospizio)の停車場に停つた。標高七千四百尺、線路はこゝで、始めて、ティラノからポスキアヴォを通つて、サンモリッツへぬける街道へ出會ふのであるが、ポネッティの小村に面した、東側の斜面に、春先きの今は雪崩(アヴァランシュ)が多くて、非常に危險だと云ふ話しだ。ベルニナの尼寺(オスピツィオ)は、湖水より右手の、岡のうしろにあたつて、その街道に沿うた、ラゴ、ディ、クロチェッタの水際にある。

アルプスの山上に、行き暮れた旅人が、ちらつと見えた燈火を目あてに、疲れ切つた足を無理やりに曳きづつて、かうした尼寺(ホスピス)の前までやつと辿りついて、跪くやうに雪の上につんのめるとたんに、けたゝましい犬の聲が闇の奥から響いて、今まで積雪の上に漏れて、赤く滲じんだ灯が吸ひとられたやうに消えてしまふと、やがて門口にその灯を手にした、黒衣の尼が表はれる。アヴェ、マリヤの鐘のねに、山上の日は黄昏れて、"Wie Todes Ahnung" と唱はれたやうに、黒い面覆が谷を包んで、見わたす氷の頂に、アルペングリューンの輝く時。または物の音は、溪にあふれる急流の響も絶えて、雲は靜かに、蒼空をめぐつて、花野の上にたゞよふ時。かういふ山の春秋に、誰れに聞けともなく、窓を漏れて——枝から切りとられた薔薇の花が、さらに香ばしくかをるやうに——消えては、ふたゝび見出しがたいオルガノの樂の音は、人間の創造せるあらゆるものゝなかで、最も力强く、私の胸には響くのである。

湖水を平らに覆ふ雪が小高かくなつて、いつとはなく水色にぼかされる、カムブレナの氷河(Vedretta di Cambrena)の上には、同じ名の山岳(Piz Cambrena, 3607 m.)が屹えてゐる。今朝アッダの流れについて、雲の暗い麓の路を旅したのが、山は世界が異つたやうに、すつきりと晴れ渡つて、蒼空には二條三すぢ、長閑に、卷雲が浮んでゐたばかりである。

湖水のふちを通り過ぎると、だん〳〵下り坂になつて、何處まで行つても、一面にまつ白ろな山脚

を、北へ流れるベルニナの溪へ下つてゆく。ヴァル、ミノル、また、ピッツミノル（Piz Minor, 3052 m.）の北を圍む、ヴァル、デル、ファインの溪をこすと、麓は落葉松や樅（タンネ）、唐檜（フイヒテ）の、空をしのぐ密林となつて、その枝ごしに、または梢の上に、ピッツ、アルブリス（Piz Albris, 3168 m.）や、ベルニナの裾に、ムント、ペルス（Munt Pers, 3210 m.）の山々が望まれた。

玄かし、もつと驚ろくべきはモンテベルロの曲りかどに來た時、窓のすぐ左に表はれた、モルテラッチ（Vadret da Morteratsch）の氷河である。ベルニナ群山の中心にあたるベルラヴィスタ（Bellavista）のアレトから、眞北に、四里にわたつて流れ落ちるこの氷河の空には、四千米突に近い山々が、折り重なり入り亂れて、最高峯のピッツ、ベルニナ（Piz Bernina, 4052 m.）も、やゝ右よりに仰がれる。

私は、窓から飛び出さないばかりのあわて方で、モルテラッチの小つぼけな停車場に下りたが、何んのこつた、一軒家のホテルと云ふのが、今は閉つてゝ、外に泊めてくれる家はないと注意されたんで、もう走り初めた電車を停めて貰つて、またそれに舞ひ戻つてしまつたのは、今考へても殘念でたまらない。

落葉松の密林は、下るに隨つてます〳〵深くなつて、ベルニナの流れも妙に暗く思はれたが、日はまだ高い空には、陰氣な雲が動いて、高山にたち切られた大空の半面は、いかにも北の國らしく重く濁つて、いやに寒むくなり初めた。水はいくつにも分流して、黑木に包まれた山の麓を洗つてゆく、そして、ラ、セルラ（La Sella, 3587 m.）から眞北に落ちる、ヴァドレット、ダ、ローセック（Vadret da Roseg.）の氷河の裾に、水の多いローセックが、此の本流と合するポントレシナ（Pontresina）の村を過ぎると、川は大きな三角洲（デルタ）をなして、街道は右岸を、北のサマーデン（Samaden）へむかふのであるが、線路はそれを對岸にして、フールン（Fulun, 1913 m.）の裾をぐるつと廻つて、サン、モリッツの湖水のふちに着いたのである。

サンモリネッツ (St. Moritz)

獨逸墺太利を貫く、イン河の上流は、彼のインスブルックから、間もなくスウィスの國境となつて幾百の氷河の水を合せて、六十哩に亘るエンガディンの峽谷を形づくつてをる。サマーデンの村の近くで、枝分れする二條の、左から滾り落ちるのは、今日私が沿うて旅したベルニナの溪で、その邊では、フラッツバッハ(Flazbach)と呼ばれる。右はインフルッスの本流で、今、私が着いたサンモリッツの湖、更らに西南に、一列に排列された山の湖は、カムフェルゼー、からシルヴァプラナのみづうみとなつて、最後にイタリヤの國境、モンテ、ロッソの氷河の麓に、絶世の山岳畫家、彼のジオヴァンニ、セガンティニ (Gisvanni Segantini) を葬つた、マロッヤ (Maloggia od. Maloja) のほとり、シルスの湖につゞくのである。

サンモリッツは遠い羅馬時代から、サン、ムレッツァン (San Murezzan) として知られた、オーベル、エンガディンの山村で、人口千六百と稱せられてをるが、避暑客をあてにしたホテルが多く、三百以上も寢室をもつてるのが少くないから、村と云つても中々整頓してゐる。今は春先きのことで、ウインタースポートの連中は、みんな歸つてしまつた後だから、大抵の宿は閉まつてゝ、停車場のトレーガーに聞いて見たが、泊らうと思つてゐたワルトハウスに行くことが出來なかつた。案内記をさがし出して、よささうなホテルを聞いて見たが、片つぱし御斷りで、結局、停車場の東の、すぐ湖水に面した、ホテル、ブリストルと云ふ小さな宿に入り込んだ。

湖水は村の南側で、まつ黑ろに、樅の森に覆はれた對岸の丘の上に、ピッツ、ロサッチ(Piz Rosatsch, 2995 m.)と、その氷河(ウアドレット)が仰がれる。雲は思つたより低くはないが、半ば氷に埋められた湖水の空は、いかにも雪國らしい陰氣な色で、岸に近い氷の割れ目には、波が白く立ち騒いで、西の風がなか〳〵

セガンティニ美術館　　辻村伊助氏撮影

寒むい。二階の窓から、じつとこの景色を眺めてゐたが、たまらなくなつて外套をひつかけると、すぐ表に飛び出してしまつた。

村は湖水の東にそゝぐイン川で、今、私のゐるドルフ、サンモリッツと、南にクエルレンベルクの森を脊負つた、バート、サンモリッツ (Bad St. Moritz) とに分たれてをる。ホテルの表から見ると、まつくろに濁つた湖水の對岸に、點在する家の間に、カトーリッシェ、キルッへの四角な鐘塔が望まれる。道は北側の水ぎはに沿うて行くから、向ひ風で耳が切れさうに思つたが、なか程まで來ると、もう山の蔭になつて、雪は路ばたに二尺も殘つてはゐたが、それほどに寒くはない。

バート、サンモリッツは、夏場だけで、今は宿屋も店ものこらず閉つてしーんとしてゐる。しばらく湖畔をうろ〳〵したが、よく〳〵考へて見ると、今日は晝飯を食べそこなつたんで、いまゝでは山に見とれて、それ程までに感じなかつたが、氣がつくと急に腹がへつて〳〵耐らなくなつた。ホテルに歸つては遲くなるから、カムフェルへ行く街道の、あやしげなホテルに飛び込んで、兎にかく御茶にありついた。聞いて見ると二月頃までは御客もかなりあるさうで、雪を排らふと湖水は立派なスケート場になるし、山の麓にはシー、ジャムプなどもあると云ふことだ。

腹をこしらへてから、ゆつくり雪の上を歩き廻るつもりでゐたが、往來へ出ると、何だかもう薄つくらくなつてしまつたから、豫定は明日のことにして、相變らず風の冷たい湖畔を、ホテル、プリストルへ戻つて來た。

セガンティニ、ムゼウム (Segantini Museum)

夏と冬の遊覽地として、外國人殊に英國人の間に有名なサンモリッツは、ニスの謝肉祭(カルネヴァル)を見ない者が、宴會であんまり持てないと同樣に、こゝへ來るのが、まるで流行のやうになつてゐる。從つて盛

◎スウイス　記　辻村　六六

り場には、有像無像が寄り集まつて、森の間で花火をあげたり、日が暮れると、山の上にサーチライトを點けて見たり、コンツェルトだとか舞踏だとか云つて、馬鹿な騒ぎが初まるんだけれど、何しろ今は陽氣はづれで、やつと捜し出したホテルに入つても、何しに御いでだつてやうな顔をして、初めはてんで御客あつかひにもされなかつた位だから、その靜かなことは想像以上である。寥しい森の中をさまよつて、あゝ靜かだなァと感心するのは、日本にゐて、陽氣が惡るいとこぼすのと、餘り大差はないが、賑かであるべき遊覽地に、ろくに人間も見えないで、大きな建物がひつそりと靜まりかへつて、ポンペイのフォルムが引つ越して來たやうなのは、まるで古驛の本陣でも見るやうな氣がする。が、村はそんな薄つきたないものではない。

日本でも同じくだが、何處の景色はすばらしいから、是非御いでなさいなんて、勸める人があつたら、先づ相手の身分を確めた上、もしその人が山岳會員でなかつたら、なるべくそこを避けて通るやうにすれば、かへつていゝ景色が眺められる。サンモリッツも似たやうなもので、氷河こそあるが、近所の山はやつと三千米突ぐらゐなものだから、雄大な景色は求められやう筈がない。倫敦あたりの煙突の中から、煤と一所に吐き出されて、雲の上には蒼空があるのを、始めて知つた人間には、多少珍らしいかも知れないが、こゝの湖水は、そんなに自慢するほどの景色ではない、サンモリッツでうれしいのは、セガンティニの美術館と、そこを圍む落葉松の密林だけである。

これは去年のことだが、ベルリンに遊んでゐた時分、ウンテル、デン、リンデンを通りぬけて、川向ふのナッィオナール、ガレリーに行つたことがあつた。數の多い畫の中で、殊に眼をひいた二枚の大作があつたが、一つは "Trübe Stunde" と題せられた暗い畫で、一つは有名な "Rück-kehr ins Heimatland" であつた。家財を積み込んだ荷車のうしろに、赤犬が尾をたれて、のそ〳〵ついてゆく樣子が、今も眼に殘こる、恐らくマロッヤ附近の高原の秋であらう、オレンジ色の空には、薄月が見えて、

背景は無論雪の遠山であつた。私がセガンティニの畫を見たのは、あれが最初であつて、それまで單に想像にとゞまつた輪廓に、はじめて生き〳〵した色彩が點ぜられたのはあの時であつた。畫ばかりではない、都會にせよ、又は郊外の景色にせよ、建築物や山川の形だけは、名所畫葉書や寫眞からでも、すぐ想像はつくであらうが、我々がその景色に面とむかつた時に與へられる印象の大部分は、色彩を無視した黑（ブラック）白（エンド、ホワイト）の輪廓からではない、着色のフォトグラヴュールや、石版畫に至つては、原畫の名譽を毀損せんがために、特に印刷されたものと、私には斷定せられる。況んや、色彩の（Juxtaposition）に基いたテクニックに至つては、印刷所の職工の手に畫かれたセガンティニは見られるかも知れないが、それをもつて原畫を想像してゐた無禮は、今こゝにあらためて、この山岳畫家に謝さなければならない。

その後和蘭に入つた時、ハークのメスダック美術館で、二枚の單色（モノクローム）のパステルを見たが、その一つはキャロ、ディ、ルーナ（Chiaro di luna）で一つはサンモリッツにある大作、（"Die beiden Mütter,）と同じコムポジションであつた。

セガンティニは、ティロールの山を繞らした、ラゴ、ディ、ガルダの北のはづれ、アルコ（Arco.）の村に生れたのであるが、彼れの故郷よりは雪の多い、オベル、エンガディンの山を好んで、ジュリエバッス（Julier Pass）からマロッヤにながく住んで居つた。その作品も、イタリヤには少くて、スウィスと、獨逸、墺太利に、主に保存されてをる。

今朝、起きぬけにムゼウムにゆく、うらゝかに晴れわたつた、湖水のふちの雪路を歩るくと、外套が少し邪魔になるくらゐで、向ふ岸の、バート、サンモリッツが、手に取るばかりに見渡されて、その上には昨日雲にかくてゐたラ、マルニヤ（La Margna, 3163 m.）が望まれた。教會のすぐ横の雪路を登ると、ムゼウムの前に出られる。落葉松の木立の中の、ロトゥンダも非常に感じがいゝ。

この森を貫く街道は、イン河(フルッス)に結びつけられた湖水から湖水に沿うて、サンモリッツからカムフェルを過ぎて、シルヴァプラナ、シルス、それからマロッヤの村へつゝいて行く。その峠を越せば、もう水は南にイタリヤへ流れて、ピヤノ、ディ、キャヴェンナ（Piano di Chiavenna）から、コモのみづうみにそゝぐのである。

ムゼウムのすぐ向ふ側に、トリノの彫刻家ビストルフィ（Leonardo Bistolfi）の作にかゝる、大理石の紀念碑(グローベンデンクマール)がある。二フランの入場料を拂つて入る、階下には入り口に、セガンティニのバストがあつて、五つに分れたニッシェには、レプロドゥクツィヨーンが一面に並べてある。二階の廣間に原畫がかけられて、四枚の大作とスケッチが置いてあつた。

1, Die beiden Mütter.　2, Werden.
3, Vergehen.　4, Baumwurzel.
5, Mutter und Kind.　6, Schabschur.
7, Am Kamin.　8, Auf dem Totenbette.
9, Die Hütte.　10, St. Mortz bei Nacht.
11, Gli Amanti.　12, Erdarbeiter.

彼れの有名な畫のうちで、（Rückkehr ins Heimatland, Rückkehr zur Heimat）と、（Trübe Stunde）とは、前に述べた通り伯林の美術館にあるし、（Kuh an der Tränke）はバーゼル美術館に、（Phlügen）はミュンヘンのノイエ、ピナコテーク（Neue Pinakothek）に、（Die bösen Mütter）と（Frühlings Weide）はウヰーンのベルヴェデール宮殿（Belveder-Palast）に藏せられてあつた。こゝの番をしてゐた、セガンティニの御弟子がゐる、自畫像(ゼルブストビルトニス)の寫眞を買つて、いろんな話を聞いた、ウヰーンの貴族、リヒテンシュタインの美術館（Liechtenstein Gallerie）にも大分あるさうだが、有名なエーデルワイス

(Edelweiss) とアルペンローゼ (Alpenrose) は、サンモリッツの、ドクトル、ベルンハルト (Dr. Bernhard) が持つてるさうだ。どうでよう折角遠方から來たんですが見せて呉れないでせうか、と憐れつぽく持ちかけたら、午後一時に御出でなされば、私が御つれ申しませうと云つた。占めた、まづその方は心配なしとして、晝まで大分間があるから、ゆつくりと御輿を据ゑて、いろんなことを聞いた。自分でかいた畫が、今ケョルンの博覽會に出してあるとか云つて、その天然色寫眞(オートクロオム)を見せてくれたが、矢つ張り先生みたいに、細かい筆づかひで、マロッヤの秋が畫いてある。

畫かきと音樂家は、どこの國に行つても同じなりをするものと見えて、先生も、「寂しき人々(アインザーメンシエン)」のブラウン見たいな、まあよく銀座あたりのカフェーで出會すやうな、天鵞絨の洋服を着て、髪もやつぱり畫家流に刈り込んで(?)あつた。漢學の先生に腮髯が付きもので、占者に山羊鬚が無くてはならんやうに、かう云ふ服裝をしなくつては、畫がうまさうに見えないと見える、しかし自畫像で見るセガンティニは、神武天皇のやうな顔をして、服はまるで百姓みたいだ。

一先づ宿に歸ることにして、此の岡づたひに村の方へ歩いて行く、どこのホテルも申し合せたやうに閉つて、殆んど人間を見かけない、天氣のいゝのも、私一人の爲めに晴れて呉れたやうな氣がして勿體ない。

晝飯を少し早やめにしまつて、また例の雪路を登つて、丘の上に出るとひよつくり、先刻の御弟子に出會した。先刻は失禮、名刺も、差しあげませんで、と、着かへて來たらしい上着のかくしから名札を出して呉れた、名はコルンハス (Kornhas) いくら畫かきだつて、此の天氣に天鵞絨の服では暑つかつたらう。時に、先き程うちに歸る時、一寸よつたんですが、ドクトルは今巴里に行つてゝ留守でした、どうも殘念ですがつてんで、御斷りだ、まあ仕方がないから、例の落葉松林を一緒にぶら〳〵歩きながら、またムゼウムの前まで來てしまつた。幸ひ、寫眞機もぶら下げて來たので、このまゝシ

ルスの方へ行かうとすると、先生も相手ほしさうな調子で、御迷惑でなければその邊まで御一緒につてんで、丘の上の街道を、南にむかつて歩きはじめた。

落葉松の枝ごしに、ピッツ、ロサッチの雪が見える、太い幹は路ばたの雪に埋まつて、その麓にはサンモリッツの湖が、これもまつしろに覆はれてゐる。しかし街道に雪はなく、日あたりの曲りかどには陽炎がもえて、日蔭はしつとりと、露を浴びたやうに、氣持ちよくぬれてゐる。森はだん〳〵深くなつて、眼の下に湖水の南岸が展げられるあたりから、だら〳〵路になつてカムフェルの村まで下つてゆく。イン川(フルッス)に沿うて向側に建てられたバート、サンモリッツは、クェルレンベルクの裾がちらつと見えたゝけで、流れと、それに併行した此の往還の間には、ところ〴〵縱も交じる落葉松の密林に、綠はまだ萠えないが、黑味がちな小枝小枝が、押し合ひ重なり合つて、そこを通る旅人は、南に限りなくつゞく街道に印せられて、じつと動かない森の陰影と、仰のくと頭の上に、高く〳〵雲のない蒼空に入り亂れた、板畫(エッチング)のやうな、靜かな森の梢を見るだけである。

私達が別れたのは、この森のはづれであつた。

カムフェルゼーはサンモリッツの湖水のやつと半分ぐらゐしかない。だら〳〵路を村へ下りる、ここは雪に埋められた、湖に近い小村で、往來に並んだ一かは並びの小家も、中繼ぎの宿場らしくて面白い、景色もサンモリッツより遙かに雄大で、前には帶のやうにつゞく坦道に沿うて、この湖水からシルヴァプラナとシルスのみづうみとォーベル、エンガディンの谷奥がなが〳〵と見渡されて、正面にはラ、マルニャ、對岸の黑木につゝまれた山の上には、ピッツ、モルテル (Piz Mortèl, 3412 m.) とピッツ、コルヴァッチ (Piz Corvatsch, 3458 m.) が並んでゐる。餘り立派ではないが、百ぐらゐ室のある宿屋も三四軒あるし、不便と云へば不便だが、夏になれば湖水の水づたひに、シルヴァプラナからシルスまで、日に六回小舟が往復するし、サンモリッツの停車場までは、宿屋の馬車も來るのだ

から、避暑に來るならこゝの方が餘ほどいゝと思ふ。

三十分ばかりでシルヴァプラナの村に來て、立て場の宿で御茶を命じた。郵便馬車（Swiss-Post, Diligence）が日に三回、サンモリッツの北のサマーデンから、三十五哩半の此の道を通つて、マロッヤ、バッスからキャヴェンナまで通つてゐる。その中、遠くから角笛（ホルン）が聞えて、入り亂れた蹄の響がすると、間もなく宿の前に、黃ろく塗つた郵便馬車が着いた。乘合馬車と云ふと、廢頽した古驛の寂しい中にも、何となくなつかしい感が起るとゝもに、酒と女と賭博で持ち崩した、一目見ればすぐそれとわかる卑しい顏をした若者が、自棄（やけ）くそに、干からびた馬車馬の脊なかを、ひつぱたくのが眼に映るが、スウィスのディリジャンスは、もつとも整頓した交通機關の一つであつて、逞ましい馬の四頭立て、輕る〳〵と蹄をあげて走るのが、路はよし、大雨はすくなし、石ころ交じりに草鞋の腐つた、信濃の國の片田舍とは、感じに於てもすでに格段の相違がある。グリムゼルでも、グラン、サンベルナールや、サンゴタールでも、自働車の使へない山の奧の往來には、御客ばかりでなく、小荷物も賴めるから非常に便利である。

岸づたひに、シルスの村まで來て、ぶら〳〵引きかへした。この邊も一面に眞つ白ろに、野も丘も埋められた間を、日向には埃さへ少し立つて、乾きゝつた街道が、一すぢ長く貫いてゐる。夏は湖水の色の美しさが想ひやられるが、今は厚い氷と、更らにその上は深い積雪に覆はれて、色彩はいさゝか、單調な感じが起らないでもなかつた。

歸り途にはカムフェルの村から、細道を右手に切れて、縱に包まれた小山の裾をぐるつと廻ると、湖水をつなぐイン川のふちに出た。水は中々多く、思つたより深い谷を形づくつて、すぐその向ふはクェルレンベルクの麓になつてゐる、もう此の邊へ來ると、村の人達もまるで通らないから、雪は眞冬のまゝ路を埋めて、日の光で解け初める頃には、うそ寒い夕風が來て、夜はまたかち〳〵に凍つた

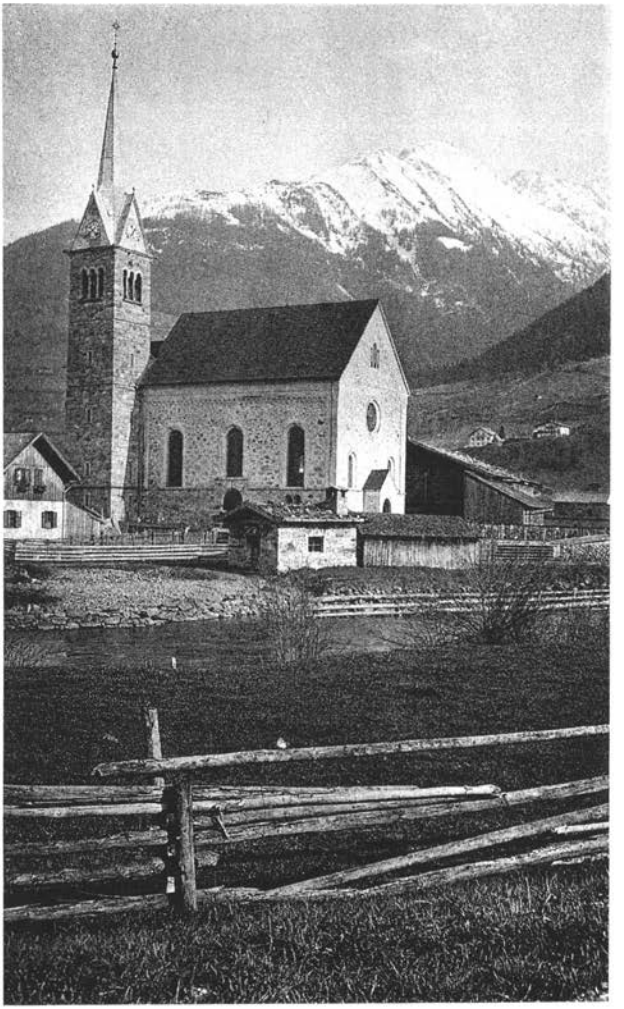
雪路に變つてしまふ。

バート、サンモリッツの、人つ氣のない村を素通りにして、サンモリッツの湖水のふちに歸つて來た。日はいつの間にか氷の山に傾いて、雪田かとも思はれをみづうみの半面には、山の影がうつてゐる。そしてそのコバルトを含んだ陰影は、見るまに廣ろく大きくひろがつて、湖水の全面にかぶさると、どこの山頂か分らないが、二つに分れた峯の影が、麓から折れ曲つて、對岸の丘にぼんやり畫き出された。しかし日の影は、もう刻々に薄くなつて、谷の空氣には淡い藍色が飽和されて來る。

この靜かな湖水のふちをあるいてゆくうちに、日はとつぷりと暮れて、ピッツ、ロサッチにあか〳〵と、アーベント、グリューンが仰がれた。

夜はなか〳〵寒むかつた、晩餐がすむと室にも戻らないで、湖水に面した食堂の出口から、ぶら〳〵散歩に出かけた、いく度も通つた水岸から、坂路を上つて、暗い森の中をムゼウムの前に出る、紀念碑（ゲデンクマール）を見るつもりでやつて來たが、落葉松の茂みに星明りはさえぎられて、はつきり見ることは出來ない。黑い木立の間に建てられたロトゥンダの下を、南へぬける街道のところ〴〵、ぼうつと螢光をはなつてゐると思つたが、近づけば森の茂みを漏れる星明りであつた。夜は黑く靜まつて、山も木立も息をつめてゐるのかと思はれる。千八百九十九年、セガンティニがシャーフベルク(Schafberg, 2733 m.)の山頂に近い小さな宿に客死して、彼れの棺は弟子達にまもられて、――その中には今日此の道をつれだつて話した、あの好青年もゐたのであるが、――雲の暗らい街道をマロッヤの里にむかつたのである、そして此の絕代の山岳畫家を葬むつたのは、畫室の窓に近い墓原で、彼れが最後に墓石の上にうつぶした、若い女を畫いた、――背景は無論遠山の雪であるが、――その會堂に葬むられたのである。

「サンモリッツの夜」はかくして更けてゆく、木の間を漏れる星の光りはいよ〳〵明かに、風は死して、雪をめぐらした森の夜は、かうして靜かに更けてゆく。



りよ窓の車汽のウガツンビルベーオ　　辻村伊助氏撮影

エンガディン

午前九時三十五分の汽車は、サンモリッツをはなれると、オーベル、エンガディンの谷を下つて、ツューリッヒにむかつた。朝空は朗かに晴れてはゐたが、大きな雲の塊りが、東の山あひから止め度なくいくつとなく溢れ出して、谷の晴れ曇りするのが、氣の變りやすい人でも見るやうな氣がする。實際、あるときは谷といふ谷、それを取りまく山といふ山が、いかにも晴れ〴〵しく陽氣にはしやいで、なるほど春はもう山奥まで近づいて來たなとうなづかれるが、ふと何かのきつかけで、急に氣嫌をそこねると、「北の國の冬」と云へば、たゞその言葉を聞いたゞけで、すぐに胸に浮ぶやうな、暗い、陰氣な、沈んだ景色に變つてしまふ、そして雪のなかに悶えながら、體をもがき、手足を慄はせて、一と足でも明るい日あたりへ出やう〳〵とあせつてゐる山毛欅の木立や、自墮落に雪崩の上に寢そべつた、白樺の幹などが、いつも何處となく暗らい影のつき纏ふ、山民の佗しい生活を想はせる。

深い狹谷(ゴージ)をつくつて、私達が今まで、樅や落葉松に包まれた蒼い急流を積雪のまだらな下に瞰下ろして旅したイン川は、サマーデン (Sunaden) の附近で東北に去つて、汽車はそれと彼のラインの上流との間を限る山脈、クラスタ、モーラ (Crasta Mora, 2937 m.) と、ピッツ、デェラ、ピラミダ (Piz della Pyramida, 2962 m.) の中間を貫ぬく隧道をぬけると、深い〳〵、谷はやはり雪の中ながら、今までとは反對に西に、流れるアルブラの溪谷となつて、その急な〳〵崖を、線路は三度圓を畫いて、ベルグリューン (Bergrün) の村へ下つてゆく。

初めは窓から頭を出してのぞかなければ見えない深い谷底の、まるで擂鉢みたいな底の方に、雪のまだらに消えた草原と、一とかたまりの村が表はれた、それを取りかこむ東の崖に、大きな弧を二度畫いて、だん〳〵近づくと、村を貫ぬくアルブラの流れのふちに、ところ〴〵綠の草にまじる、白い

花が敷物の模様のやうに眺まれたが、近づくと春のまつさきに咲き初める、サフランの群れであつた。

森の梢もいちじるしく綠が萠えて、なほアルプラの深い狹谷に沿うて下るほど、雪は淡く草は濃く、雲の往き來も靜かになつて、刻々に春の近づくのが意識される。

トゥーシス（Thusis）は、ヒンテル、ライン（Hinter Rhein）の川岸にある小さな町で、南に流れをさかのぼれば、シュプリューゲンから北イタリヤへぬけられる。汽車は川に沿うて、やゝ開いた谷の底を、兩側にはたえず雪の山脈を仰いで、北にむかふと草原にはキンバイやタンポゝが一面に咲いて、百姓家のあひだ〳〵には、林檎、すもゝなどの花盛りである、やがて西から流れるライン河（シュトローム）の本流に合した。水はさすがになめらかで、川幅はまだそれほど廣くはないが、水にはいかにも底力が籠もつてゐる、その河ぎしには、果ものゝの花が仄白ろく咲いて、國の春に見るやうな、派手な色がないだけに、落ちついた、重みのある、一と口に云へば、いかにもライン河（シュトローム）らしい、春の感じを與へてゐる。谷は徒らに深くはない、しかし春の花の梢には、やはりちら〳〵雪の山岳がたえず望まれる。

ラインに沿うて、クール（Chur）の町に着いたのが晝頃で、此間に懲りて、食堂のないこの汽車で辨當を食べさせられるのがいやだから、一時二十分の次の汽車に乘りかへるまで、ゆつくりと停車場のビュフェーで晝食を食べた。

クール（スウィスにては主にフールと發音す（Ch は Rachen-Stimmen）は、カントン、グリゾン（Kanton Grison）の首府で、羅馬の時代に於ける重要な都會であつた、當時クリヤ、レトルム（Curia Rhaetorum）と呼ばれたクールは、プレシュール（Plessur）の水の、ラインにそゝぐ三角州（デルタ、フルール）の上に建てられて、水をへだてゝ森の上に、雪の山脈が仰がれる。西獨逸、ラインガウの人々が、羅馬へ通ふのには多くはこの山奥の町を過ぎたのである。

クールからサルガンス（Sargans）まで、やゝうち開いたラインの谷について下ると、もう山は餘ほ

ど低くなつて、線路に近い山岳のうち、氷河のあるのは、グラウエの群峯（Graue Hörner）のピッツソール（Piz Sol, 2849 m.）ぐらゐなものである、しかし谷にせまる森の上には、飽きるほど雪の山は望まれる。陽氣は申し分なく、晝過ぎの日が、ほか〳〵窓にさし込んで來るのが、何んとも云へない氣持ちで、今まで山の中で張りつめた氣がゆるんだせいもあつたらうが、初めのうちは窓に倚りかゝつて、こくり〳〵やつてたが、たまらなくなつて本式に仰ぬけに寢てしまつた。

どのくらゐ寢てしまつたか知らないが、けたゝましい汽笛が鳴つて、カタン、カタンと殆んど金屬性とも思はれる反響がしたので、びつくりして眼が醒めた、今隧道へ入つたんだ、暫らくするとぱつと明るくなつたので、寢ぼけ眼で窓から見廻はすと、湖水のふちを通つてるところで、碧い水にのぞんだ對岸の切つたての絶壁には、雪の山からしぼれて落ちる無數の瀑がかゝつてゐる、山も近い、湖水は深く水の色は極めて美しい。地圖をひろげて見るとウァーレンゼー（Walensee）だ、私は「眼のさめるやうな景色」を文字通りに經驗した。

此の冬ツューリッヒに行つたとき、こゝまで來るつもりだつたのが、天氣が惡るくてやめにしてしまつたが、成るほどスウィスの湖水の中でも、殊に有名であるだけに、寢ぼけ眼でさへこれほど感心する位だから、正氣ならたまらなくなるだらうと思つて、大急ぎでペデカーをさがして見ると、湖の西のはづれにツェーゼンの停車場がある、ホテル、シュペール（Hatel Speer）は眺望がいゝと書いてあるんで、急にその氣になつて荷物をかたづけてると、間もなく停車した。

今日は日曜である、小さな田舍の停車場だが、ツューリヒあたりから散歩に來たらしい連中が大勢ゐて、丁度ホテル、シュペールのポルティエも見送りに來てゐた、荷物を賴んで置いて、停車場上の岡にあるその宿へ入る。

小さな門からだら〳〵上りに、花盛りの林檎の間を、くね〳〵折れ曲つた庭路も感じがいゝ、その

上、出むかへたおやぢの顔もすつかり氣に入つた。

ウェーゼン (Weesen)

東むきの二階に室をきめて着物をきかへるとすぐ下りて來る。食堂のヴェランダは南むきで、林檎の花の上にすばらしが山が見える。カフェーをいひつけて地圖をひろげてると、例の主人がやつて來た、山の名を聞くとグレルニッシュ (Gläarnisch.) と答へた、なる程、此の冬ルッェルンに遊んでゐた時、リギから東に遠く〳〵見えたる立派な山塊は、グラールスの谷奥に屹えるこの山岳であつたのだ。

ウェーゼンに着いた瞬間から、クラリヨンが此の春の野から、湧きだすやうに響いたが、ホテルの裏手につゞく岡の斜面にも、すぐ下の果樹の間にも、牛の群れが方々にかたまつて、體骼に應じた鈴(クーグロツク)を頸にぶら下げてるのが、遠近と音の高低が、靜かなメロディーをなして、うらゝかな空に響きわたる。

スウィスの山の晴れわたつた景色や、霧の間に思ひがけない高い空から表はれては、すぐに吸ひとられてしまふ氷河や、朝、まだ、うつすらと靄のなびいた森の梢に、紅玉(ルビー)のやうに光りのある朝紅(モルゲンロート)、又は夕ぐれごとに、もう、闇に襲はれた谷の空に、薔薇の花のやうに輝くアルペン、グリューンと、山川の景觀にともなふ樂しさは、ほとんど數へきれまい、そして今こゝに響くクラリヨンも、アルプの旅人が忘れることのできない、なつかしい樂の音である。「ウィルヘルム、テル」を繙くときはじめて記るされる言葉はクーライエンのメロディーである、反響(エコー)のやうにこれに答へる山上の牧歌は、そのヴァリアッィヨーンである。

宿を出ると、花の間を下りて、牧場みちを左に切れると、リント (Linth) の水について、ウァーレンゼーの湖畔に出た。こゝは湖水の西のはづれで、北から東へかけて取りかこむ、クールフィルシ

ェトの山脈（Die Churfirsten）は、まだまつ白な氷に覆はれて、段丘のやうになつて、急な絶壁が湖水に辷り落ちる中段には、アムデンの村の板屋根が、緑の草原に點接される。崖には大瀑小瀧がたれ下つて、みづうみの深い碧色も、瀧壺だけは緑りに泡だつてゐる。私が乘つて來た汽車路は、南岸の岩壁をつらぬいてゐるので、湖水のうち開いたのは、落ちぐちのこのウェーゼンだけである。

リントの流れの向ふ岸は、白樺や川楊の茂みのうしろから、すぐひろ〳〵とした高原になつて、一面にまつたひらな牧場の三方が、鋭い山の傾斜に接してゐる。南の端てに口を開いた、グラールスの谷のとっつきまで、ほとんど高低は見られない。雪は野の遠近に配置された、ポプラ、白樺の、枝ごしに仰がれて、この雪を繞らした花の野に、クラリョンが響くのである。

私の故郷では、波うちぎはを南にして、西から北へかけてぐるつと取り圍む山の斜面は、柑橘の茂つた段畑が、下手な理髪師に刈り込まれたやうに重なり合つて、東は町はづれからすぐ稲田になつてゐる、その刈田や段畑のあちこちに、紫雲英、菜の花などが咲き初めても、「春の野」と云ふ感じはまるで起らない、赤城、戸隠の原、或は立山の室堂の高原や、雲の平、五色ヶ原なども、それ〳〵趣の異つた景色ではあるが、マドリガル（Madrigal）を耳にした瞬間に感ずるなつかしさとは、全然趣を異にしてゐる、シモネッティに於ても同様である、ヴァンサン、ダンディに於ても同様である、またはタンホイゼルの序幕に唱はれる、牧童（ヒルト）の歌やそのシャルメルの曲も、ナポリの夕に彼の黄昏曲（モレナーダ）がふさはしいやうに、かう云ふ山國の雪に近い、春の牧に初めて、想像と合一した景色が求められるのだ。

日は次第に傾むいて、ブリュンネリ、シュトック（Brünnelistock）の頂に落ちてゆく。グラールスの谷には靄がたなびきはじめて、原一面に散らばつて響いてゐたクラリョンは、あすこに一とかたまり、こゝに一と群れと云ふやうに集まつて、ポプラの間に建てられた、小村小村の柵に近く動いてゆく、そこにはものうげな煙が、風のない空に圓柱のやうに靜かに〳〵のぼつてゆく。

宿に歸つたのはもう薄ぐらくなつた頃で、南むきのヴェランダで、晩餐をはじめた。アルペングリューンはグレルニッシュの尖つた山頂から、右に落とす、鋭い雪の斜面からほんのりと染まりかけて、南を限る山々は火のやうに輝きはじめた、その山脈とウェーゼンのもう薄すぐらくなつた草原のはづれから、靄がむく〳〵湧き上る、原はグラールスの谷よりも小高くなつて、雪の斜面との間には、深い溪でも横はつてゐるやうに思はれる。晩餐のあひだに、日はとつぷり暮れて、靜かな山の空氣が冷や〳〵と膚にせまる。二階に戻りしなにふりかへると、蒼白いグレルニッシュの氷の上に、天狼星がピカッと光つてゐた。

ウァーレンゼーの湖畔

床をはなれた時には、いかにも春らしい朝日が窓いつぱいにさしこんで、ぱーつと霞みだつた湖と、その側にぬけ出した鐘塔の右ひだりに、雪を繞らした山々が、庭の梢の眼のさめるやうな綠の上に望まれた。クラリヨンは今朝も遠く近く響いて來る。

スウィスの春は、雲雀の歌のやうな、あまりにメローディッシュな曲では表はしえない。朗かな奥にも絶えず、何とも云へない寂しさのたゞようてゐる、花は高原を覆ふても、冷たい風を吹き下ろす山の雪から離れ得ない、たとへばうれしさに躍る胸の底にも、冷やかな思ひの絶えない、——綺麗なメロディーに靜かな沈んだ伴奏をつけたやうな——此のクラリヨンを以てして、初めてアルプの春は表はせると思ふ。

すぐ原に出た。踏切りを横ぎると、アムデンからツェーリッヒにゆく街道から南へ折れて、牧場の柵に沿うた坦道を、グラールスの方へあるいてゆく。正面に聳えるグレルニッシュの頂は、三つのマッシーフな岩山に別れて、左の端に見えるのは前山のフォルデル、グレルニッシュ (Vorder Gläärnisch,

2331 m.）まんなかゝヴレネリスゲルトリ（Vreneligärtli od. Mittler Gläniseh, 2907 m.）右が最高峯の北に、グレルニッシュフィルンをへだてたルーヘン（Ruchen, 2910 m.）で、二千九百二十米突のヒンテルグレルニッシュ（Hinter Gläruisch ok. Bächstock）は、この右の端の岩角にさえぎられて居るやうに思はれる。ウェーゼンから見て、一番近く、一番立派に見えるのは、ラウティシュピッツ（Rautispitz, 2284 m.）で、その東側グラールスの谷に對した傾面は、非常に壯觀を極めてゐる。

リントの流れを渡ると、一かたまりの小村がある、百姓家の間をぬけて左に曲ると、廣ろ〳〵とした牧場で、芽ぐんだばかりのポプラの並木や、村のところ〳〵に仄白い花をつゝつてゐるスモゝの花の上に、ぽーつと霞みだつたなか空にぬけ出した、グレルニッシュの氷の山々が、昨日よりは遠く高く仰がれた。

杖を草の上に抛りだして、仰ぬけになつて花野の上に寢ころんだ。クラリョンがやはり遠く近く響いて來る、そして暖かい春の日に照らされて、ポプラやあの西から南を限る雪の裾に、ちら〳〵ゆれる陽炎が薫るのか、何んとも云へない花の香が、野を一面にたちこめてゐる、大空には、ゆつたりと羽をのした白鳥のやうに、根なし雲がたつた一つ、ふわりと浮いて、「春の牧」はセガンティニの作に見る如く、その白雲のやうに靜かである。

日が高くなるにつれて、山にはぽーつと淡い〳〵霞が一面にかぶさつて、もう冬の時分のやうに、いくら晴れ渡つた日でも、氷河や山稜（アレット）の削りとられた鋭い輪廓は、立體的には見えないで、薄い、然し鮮（フレッシュ）な色彩で、大空に畫かれた蜃氣樓（ミラージュ）のやうに思はれた。その蒼空に、時々おもひ出したやうに雲雀が鳴く。

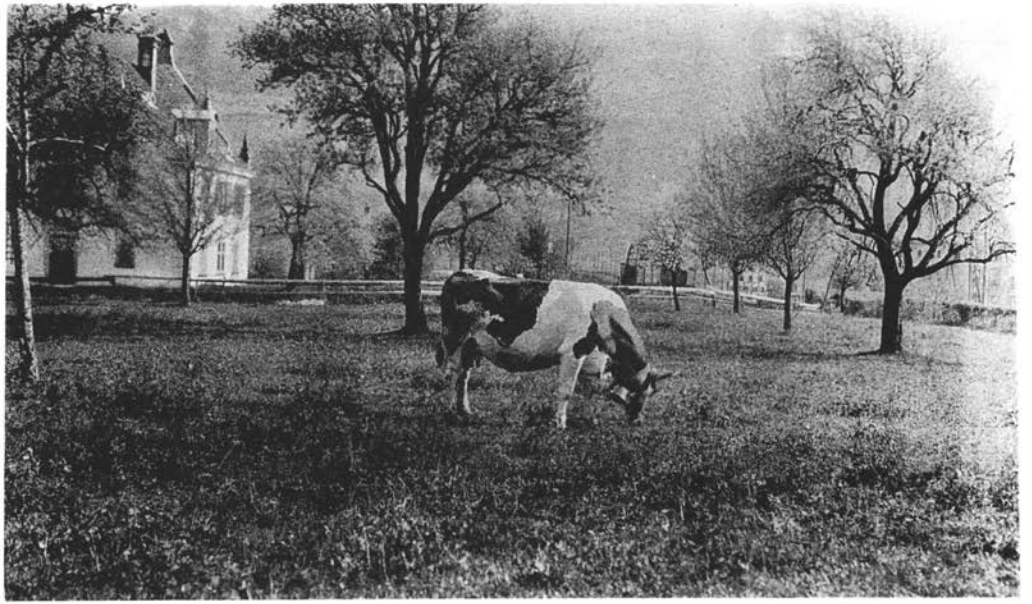
午ちかくなつて、牧場みちをぶら〳〵ホテルに歸つて來た、丘の日あたりに、空色の花がなすりつけられたのを、近づいて見ると、もうそこゝに咲き初めた勿忘草（ミオソティス）である。

グラールスの谷奥は、づつと南に深く〳〵入りこんで、グレルニッシュの麓から、二筋にわかれる谷川の、右をどこまでも溯れば、三千六百米突をこえたテョーディ（Tödi）、峠ごしにラインの上流へ出て、この冬通つたサンゴタールのアンデルマットからフルカ峠（パッス）、又は、右に折れて北へ〳〵と下つてゆけば、「ウィルヘルム、テル」のアルトドルフ（Altdorf.）から、ルツェルンの湖畔、アクセンフルーへつゞくのである。

が、私は日數のせまつた今となつては、此のグラールスの谷をのぞんで、空しく入り口から引きかへさなければならなかつた、勿論、テョーディに登山の計畫もしたのではあるが、雪の柔かくなつた春先きは危險が多いから、案内者も山の頂上までは御斷はりだと云ふので、とう〳〵斷念してしまつた。そして明日は墺太利の方へたつて、ティロールの山でも見やうと思つて、今日の午後は、その仕度がてらツューリッヒまで急行した。

ツューリッヒの再遊

汽車はリントの流れに沿うて、なだらかな山の裾に、水をたゝへた濕原のあひだを走つてゆく、ウンテル、ブーフベルク（Unter-Buchberg）の丘をこすと、二十五哩にわたるツューリッヒゼーが、西の端までなが〳〵と見わたされる、幅は、一番廣いところで、やつと二哩半しかないから、汽車の通ふ南の岸から、對岸の丘に並んだ段々の葡萄畑や、小村々々の百姓家の間に、箒を立てたやうなポプラの梢にぬけだした尖塔や、またはその村路をのろ〳〵歩く荷車などが、手にとるばかりに望まれる。風は殆んど無い。水は蒼く沈んで、しかし夏の暴風の前に見るやうな靜けさではなく、何となくのんびりして、村と云ふ村、木立と云ふ木立のはつきりとそのまゝ寫つた鏡の上を、遠く近く幾群れの鷗が、ゆつたりと羽をのし、またはあはたゞしく入り亂れて、汽車にそつて動くのが、雪國の春とは思



（ンビーエリ）ケッログーク

辻村伊助氏撮影

はれぬくらゐ温かい景色であつた。

實際スウィスの國のなかでも、ツーゲルゼーの以北では、その湖水にせよ、都會にせよ、またはこれ等のすべてのものを縱横に貫ぬく河の流れも、その住民と丶もに、山國らしい特徴は失つてしまつて、何となく南獨逸の平原が近づくのが明かに意識される。

湖水の西北のはづれ、リムマートの水の、落ち口に建てられたツューリッヒの街に着いたのが二時少し前で、通りに出ると、驚ろいた、何の御祭りだか知らないが、人波に埋められた大通りは、國旗や花で飾られて、あつちでもこつちでもブー〳〵樂隊がはやし立て丶るんで面喰らつた。銀行へ行つたが閉つてる、買物をしやうと思つても、一杯の人だかりで、表からは何の商買だか分らないくらゐだ。レヨーウェン、シュトラーセから大まはりに廻つて、やつとアルペン、クェイに出る、少々氣が利かないとは存じたが、往來の奴に問ひたゞすと、大學の紀念祭なんださうな、馬鹿〳〵しい、何も大學ぐらゐの御祭りに、銀行まで休まなくつたつてよささうなもんだ、殊によると日曜かなと思つて、外套のかくしから念のため本日の新聞を取りだして調べたが、それにはたしかに、四月二十日、月曜日としてある。郵便局で紀念畫はがきまで賣りだして、變てこな服裝をした行列なんかが畫いてあるから、クェイを退屈さうに、くわへ煙管でうろついてゐた白髮の老人をつかまへて、聞いてみると、午後の四時に學生の假裝行列が通るんだつて云つてた、大學生なんて者は、どこの國でも變人が多いと見えて、このい丶天氣に、山にも登らないで、往來をさらし者になるんだらう、氣樂なもんだ、これでなくては學問なんか出來ないんだなと感心はして見たが、扨て困つたのは旅行の準備で、ティロールの案内記が一つ買へない始末だ。

今日も、ビュルクリプラッツへ來て山の見取圖とにらめつこをする、霞が、淡いながらか丶つてゐるから、圖にあるやうに、はつきりとは見えないが、靜かな水の端てをめぐる、や丶綠に彩られた丘

の上に、アルプの雪が幕のやうに見わたされる、然しこの邊からは高い山はもう遠のいてしまつて、グラールスの谷に並んだ山脈、左の端のグレルニッシュから、南へ波をうつてや丶高いのがハウスシュトック (Hausstock, 3150 m.) とビフェルテンシュトック (Bifertenstock, 3487 m.) それから群峯の最高點、三千六百二十三米突のテューディぐらゐなものである。

プロムナードの、プラタヌスには綠が萠えて、この人出さへなかつたら、萬更らの景色でもあるまいに、何しろ騷々しくてやりきれない。そのうちに御寺の鐘が一時に鳴り出した、馬鹿〳〵しいと思ひながら停車場の方へ動いてゆくと、そのうち、もまれ〳〵て一緒に動いてゐた人波が、ばつたりと停つて一歩も前へ出ることが出來ない。遠くで喇叭が響いて、耳の端でわーつと騷ぎ出した、爪立つてそつちを見ると、行列が狹い往來を一杯にねつて來る。街の奴等は丈が低いから、少しのび上ると帽子ごしによく見える、何でも時代行列なんで、ディオゲネスが桶に入つて來るかと、思ふと、女學生の撥つかへりが、クレオパトラに化けて大勢の黑ン坊を從へて來る、獨逸面のまづいクレオパトラは人を馬鹿にしてゐるが、その奴隷になる學生は尙のこと氣が知れない。モーアの建築が馬に曳かれて來る、すぐあとから中世紀の騎士が、楯をかざして乘つて出る、衣裝や馬はさぞ疲びれたらうと感心はしたが、行列はちつとも面白ろくはなかつた。ものゝ三十分も待たされて、どうも非道い目に會つた。

扨て、四時半の急行に乘り遲れては事だと、大急ぎで町をつっきつて、停車場へかけつけると、すつかり道をとりちがへて、シールの川つぶちに出てしまつた、今日は散々な目に會はされた。汽車には見事のり遲れて、次の五時二十五分は普通列車と來てゐる、それでも湖水のふちを走るとき、遠くからは神妙に靜まりかへつて見えるツューリッヒの、高塔の浮く水の上に、あすこに一とかたまりこゝに一とむれと、ちら〳〵散つた鷗の群れは、矢張り何となくなつかしい。日はユトリベルクの上に沈

んで、向ふ岸にうね〳〵並ぶ丘の上には、ほんのりと紅みを帶びた夕雲が、折り重なつて湖水の水をのぞき込む。水はやゝ風立つたのか、小波がしびれを打つて、丘もポプラも村の白壁も、そしてそのすべての上に押し重なるあの雲の影も、一樣に融けて、たゞ一と色の淡い紅色が、湖水のまん中を西北から東へかけて、帶のやうに流れてゆく。ツィーゲルブリュッケで、すり違ひの急行を待つ間に、日はとつぷりと暮れて、やがて近づいたウェーゼンの高原は、夕闇の奥にグレルニッシュの雪が今宵も蒼く光つて、しーんとしたホテルの丘には、ポプラの風にクラリヨンが響いて來た。

墺太利へ

四月二十一日も引きつゞいて、天氣は非常にいゝ。いくら眺めても見飽きのしないウェーゼンの春景色も、ヴェランダの朝飯を最後として、今日は別れてしまはねばならない、ティロールの山もいゝには違ひないが、最高峯と云ふのが、三千八百米突のオルトラー (Orter)、規模から云つても、スウィス、フランスのアルプとは、比較にならず、高さに至つてはモンブロンの四千八百米突は別にしても、スウィスの最高峯ミシャーベルの四千五百五十四米突、スウィス、イタリヤの國境にモンテローザのドゥフール、シュピッツェが四千六百三十八米突、少し離れると石つころのかけらみたいに思はれるマッターホルンでさへ、四千五百米突を超えてゐるのに、ティロールでは一番高いのでもその標高とは大分異ひがある。

で、私の春の旅は此の夏の登山の準備として、もしそれでも氣に入るやうな山があつたら、ついでに案内者の約束をして置くつもりで、比較的高山の多い、ホーエ、タウエルン (Hohe Tanern) の麓へ旅したのである。まづ今日はエッツターレル、アルペン (Ötzthaler Alpen) のふもと、インスブルックへの急行に乘つた。

ツューリッヒ發の急行列車は、十時八分にこのウェーゼンをはなれた。線路はこの間來たウァーレンゼーの湖畔から、クールまでは同じ路で、こゝから初めて北に、墺太利へ、尙ほもラインの本流に沿うて下つてゆくのだ。ウァーレンシュタットから、もう此の湖水も、クールフィルシュトの山脈もかくれてしまつて、暫らくは狹い溪の間を走つてゆくと、やがてサルガンスの邊り、ライン河（シュトローム）の本流に出會つた。この前には晝寢をしてしまつて、つい氣がつかなかつたが、河幅はよほど廣くなつて兩岸にせまる黑木の森の裾に、打ち開いた牧場のあちこちから、クーライエンが窓にひゞく。

クールからカナールの多い山間の平野をラインに沿うて北へ下る。國境に近くなると、山が幾重にも重なつて、眞白ろな雪に覆はれてはゐるが、高さは、その樣子を見たゞけでも、餘り高くないのがすぐ知れる。墺太利の境ひにつゞくレーティコン（Rhätikon）の山脈では、シルヴレッタホルン（Silvrettahorn, 3248 m.）やフルフトホルン（Fluchthorn, 3408 m.）は餘ほど遠くなつて、線路に近いのは、二千九百六十七米突のスッェサプラナ（Scesaplana）ぐらゐなもので、地圖で見るとそれでも氷河はあるやうだが、どうせ大した山ではない。

十一時二十五分にブッフス（Buchs）に着いた。稅關の檢査もたゞ一寸聞くだけで濟んだ。ラインは尙ほ北流して、ブレゲンツの邊りにボーデンゼーにそゝぐのであるが、インスブルックへの急行は、河を東に渡つて、フェルトキルヒからイルフルッス（Ill-Fluss）の流れをさかのぼつて、東南に向ふ。インネル、ワルガウ（Inner-Walgau）と呼ばれる、イルタールは、思つたよりうち開らいて、兩側には狹い谷が口を開いてゐる、サミナタール（Saminatal）の奥には、ギザ〳〵のドライ、シュウェステルン（Drei Schwestern, 2097 m.）がちらつとのぞかれた。蒼白い流れに沿うた綠の原に、崩れ落ちた城あとがある。ブルーデンツ（Brudenz）から眞東に、なほ上流に進むと、谷はイルの支流のクロシュテルタールとなつて、窓から見える山は深くはあるが、次第々々に低く、むしろ平凡な景色になつ

てしまふ、スウィスに入るのに、此の方面から來たなら、割合に失望は感せずに濟むだらう、オーベルラントから、又はベルニナの方からやつて來ては、山の低くいのに第一に失望するのは當然である。

谷のつき當りのランゲン（Langen）から、アルルベルク（Arlberg）の大分長い隧道をこすと、水は今までと反對に、東に落ちるインの流れとなつて。山の形も麓の樣子も、よほど面白くなつて來る。

殊に東アルプスの特徴とも思はれる粗末な聖像が、雪の山の裾に打ちひらいた綠の原の、野菊やタンポヽが咲き亂れた牧場のふちに立てられたのが、あれはテューリンゲンの森ではあるが、タンホイゼルの背景を見るやうでなつかしかつた。比較的旅人の入り込まない、オスト、アルペンの長所は、山そのもゝ美しさや、又は物凄さが、私達に、かへつてなつかしい感じを與へるのではなく、自然と人間と、山と里の落ち合つた、その深い谷奥の物寥しい有りさまが、人の世を離れ得ない、未練の殘る人々に、何とも云へぬなつかしさを與へるのだ。從つて山の頂上ばかり目的にする登山者には、岩登りの危險が幾分の面白味をそへるにしても、山そのもの快味は、遙かに少ないやうに思はれる。

ランデック（Landeck）でイン河の本流に合する。河幅はあまり廣くないが、岸の牧場にあふれるばかりに滾り落ちる水は、いかにもたつた今氷河から融けて來たと思はれる、底濁りのある蒼色で、その重々しい樣子が、キンバイの咲き亂れた鮮やかな川岸の草原と、面白いコントラストを示してゐる。山は近いが、鋭い岩角はだん〳〵少なくなつて、一寸、東穗高の街道でも旅してゐるやうな氣がする。インスブルックに着いたのが午後三時半、今日の汽車は今までたつた一人で喫煙室を占領してゐた。

インスブルック（Innsbruck.）

ティロール一の都會、六萬四千の人口を有するインスブルックは、登山の中心（センター）と云ふほどではない

が、まづオーベルラントのインテルラーケン、信州ならば大町で、案内と荷造りに一日つぶして、扨て次の日は起きぬけに麓までと云つた、山懷の町である。雪は近いが、大通りから仰のくのは、やつと二千四五百米突そこ〳〵で、シャモニーから見たモンブロンの連脈や、インテルラーケンから仰いだユングフラウ三山と云ふやうな、立派な山は大分遠い。街をぐるつと取りまく雪の尾根は、東西に貫ぬくイン河（フルッス）と、南から落ちるシル（Sill）の溪を隈取りにして、仰のく空の八方は、ギザ〳〵の雪の山稜（グラート）で限られてゐる、そのいくつにも枝に分れた尾根の端は、樅（タンネ）、唐檜（フイヒテ）が鬱蒼として、街の人家や尖塔の白くひかつたのが浮き上つて見える。

中央停車場（ハウプトバーンホーフ）の廣場をへだてた、ホテル、ヴィクトリヤに泊り込む。カフェーがすむと早速街に飛び出した。

インスブルックの建てられたのは、千壹百五十一年、十五世紀の初めからティロールの首府になつたと云ふが、由緒ある都會の割り合ひには整つてゐて、あまりきたなくもない、大通りの突き當りはいづれも山の雪で、折りからの夕日をうけて眼が眩むやうだ。

場所がらで登山用具やローデンの切れ地など、並べた店が大分眼につく、エキセルツィア、ブラッツから、サッゲン、シュトラーセの電車通りをまつすぐに北へぬけると、もうぢき町はづれで、岸にあふれるばかりにざあ〳〵流れるイン河（フルッス）のすぐ向ふ側は、ミューラウの小村で、ハーフェレカール、シュピッツ（Hafelekar Spitz, 2334 m.）の直下、ホェッティングルの森の間に、ウァイエルブルク（Weierburg）の城が見える。山の雪は中腹で消えて、青葉若葉の木立の急斜には、あちこちにいくかたまりの人家の、白堊の壁や窓硝子が、雪よりも強く光つてゐる。川のふちのアレーを、ラウフシュテークの橋へ出て、ホーフガルテンに入つた、高山植物園があつたが、やつと芽が出たところで、花はまるで、咲いてない、街の中をぶらついてるうちに日がくれてしまつた。夕方はなか〳〵寒い。

翌日は起きぬけに、町の南のイゼルベルク（Isel-Berg）に登る、登ると云つたところで、たかゝ展望のきく丘に過ぎない、それも街の四方を取りまく山脈が、通りで仰のくよりも、高く大きくなるだけで、要するに大山脈からは大分縁が遠い、どう考へてもインスブルックよりは、郊外から程遠からぬ停車場の、フヨルスか東側のハルあたりの方が、山の形も溪や牧場の樣子も、遙かにいゝと思はれた。

イゼルベルクを下りて來ると、一隊の歩兵が軍歌を唱ひながら登つて來る。山と兵隊はあんまり調和しないが、二部で唱つてるのが、聞いてゐても氣持ちがいゝ、ハイドゥンを生みモツァールトを生んだ國は、兵隊さんの軍歌まで違ふと、一寸感心しながら山を下る。町の中をうろついてるうち晝になつた、十二時五十五分ミュンヘンにむかふ。

ミュンヘン

インスブルックから、ミュンヘンに行く線路は、三つあるが、私はイン河に沿うて、クーフシュタインからローゼンハイムへ出て行つた。急行で三時間しかかゝらない、景色はだん〳〵平凡になつて、停車場毎に山が低くなつて行くのは氣がひけるが、プラットフォームにビールを賣りに來るのが、獨逸らしくてうれしい。

ミュンヘンの滯在では、別に云ふほどのこともない、停車場側のホテル、ドゥ、リューロープから街に出ると、すぐ鼻の先きに火事があつて面白かつたぐらゐなものだが、石造で燃えでがないから見た眼は寥しい。イザトルの中の島にある獨墺山岳會に行つて見た。

私が今まで入り込んだ、山岳會の陳列場ではこゝが一番整頓して、建物もフランス山岳會みたいに、人のうちの三階を借りてるのとはちがつてゐるし、規模も英國山岳會のやうな、狹つくるしいもので

はない、然し陳列品の中には、ベルンのスウィス山岳會の方に、貴重なものが多いやうに思はれる。建物に附屬して、一寸した高山植物園があつたが、植物はエディンバラの植物園に於ける如き、立派なものは見られない、まづ小石川か日光と考へれば大きいにしても大した違ひはないやうだ。

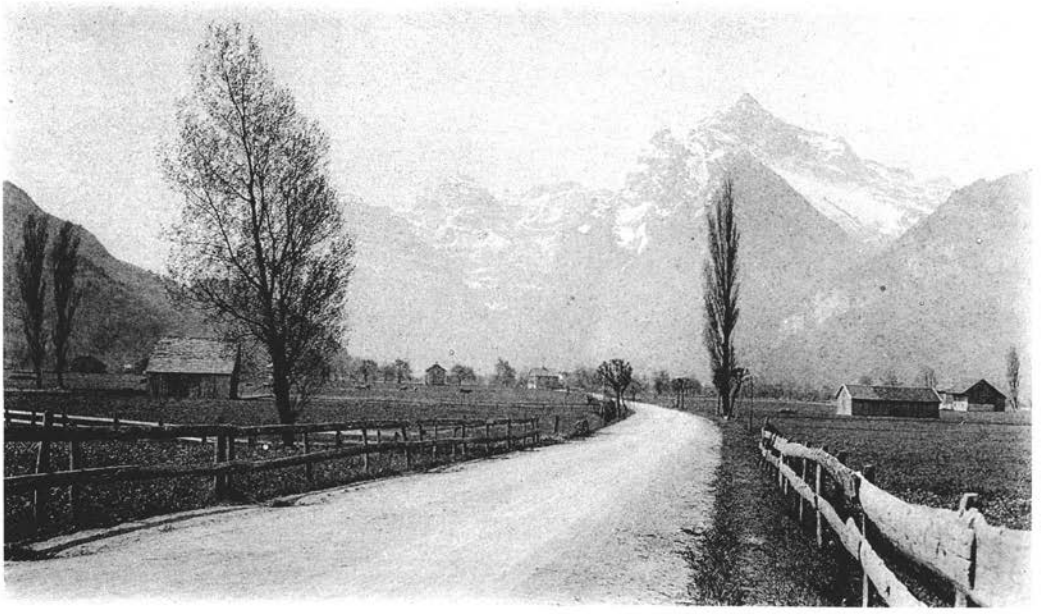
ユングフラウのレリーフは四疊半ぐらゐな奴がある。ティローレル、アルペンのはそれほどではない、マッターホルンはベルンのと同樣イムフェルトの模型で、高さは二尺ばかりもあつたらう。一番注意を惹くのは透明畫で、例のアフリカ第一の高峯、ルーウェンゾリ（Ruwenzori.）の探檢家、ドゥーカ、アブルッィ（Duca abruzzi.）の寄贈にかゝる、ヒマラヤ、及びルーウェンゾリの寫眞數十枚で、五千數百米突の露營地から、K_2の頂上を霧の上に仰いだ素的なのや、熱帶の密林の間に氷河を望んだ奇拔な寫眞が非常に多い。

塩所がらだけに、ローデンのマントを一着に及んだ、もの〳〵しいのがやつて來る、ティロールのことを聞きたいと思つて、事務所で聞いて見たが、そこには畫はがきを並べてる女の番人がゐるばかりで、折角持參に及んだ紹介狀も効能がなかつた。

私は三日の後、ミュンヘンを去つてまた山に近づいた。

サルツブルヒ（Salzburg）

ミュンヘンに別れる日、朝のうちニムフェンブルクの宮殿に行つた。庭の池には白鳥や鴨が游いで、みづ際の白樺の風になびくのが、もう、どうに都會から離れてしまつたやうに思はれる。名物のビーヤもシュタインの絶大な奴で飽きるほど浴びたし、これで名殘は更らになしと、汽車は一時半發だから、ゆつくり庭の森の間をうろついてると、やがて小雨になつた、ひた〳〵と水を渡つて、林の奥に忍んで來る雨の音が、國にゐた頃よく遊びに行つた、赤城や神河内の森の樣子を思ひださせる、



ウエーゼンよりグレルニシユを望む

辻村伊助氏撮影

たゞ白樺は梢が枝垂れて、風にゆれるのが柳でも見るやうな氣がした、雨あしは次第に急になつて、池のふちを正門に出るころには、衣物も大分ぬれてしまつた、電車で宿に歸る時分は、とう〳〵本降りになつたらしい。

サルツブルヒへは、ローゼンハイム經由の急行で、初雷の渡る南獨逸の高原から、狹い山間ひを溪にそうて走るうち、霧も交じつて雨はます〳〵はげしくなる。サルツブルヒに着いたのは午後四時、空はまつくらで、エリザベート、シュトラーセの七葉樹（ウイルト、カスタニーン）の並木の間を、雨を切つてバルクホテルに着いた時は、何だかいやに陰氣な町だと思つた。

喫煙室でカフェーを飲んでるうち、雨は次第におさまつて、雲も大分薄くなつて來たやうに思はれる、外套をひつかけて外に出ると、メヨンヒスベルクの空には、ところ〴〵雲切れがして、淡い夕日が、玄關のびつしより濡れた敷石にさし込んでゐた。

ザルツァッハ（Salzach）の流れをはさんで、カプツィネルベルクと、ホーエンサルツブルヒから、メヨンヒスベルクへかけて、中世紀の城跡の多い急な岩山に、圍まれたサルツブルヒの町は、その森に覆はれた山の景色ばかりでなく、南へかけて開いた、サルツァッハの流れにつゞく高原も、その碧く沈んた水の色も、また青葉若葉に包まれた街そのものも、いかにも感じのいゝ山間の都會である。アルプほ南に近く、グロース、グロックナー（Gross-Glockner, 3798 m.）や、グロース、ヴェネディガー（Gross-Venedign, 3675 m.）につゞく、ホーエタウエルンから東に曳く、ニーデレ、タウエルンの山脈への發足點である。

公園からサルツァッハの流れのふちに出る、七葉樹の綠が露をしつとりと浴びて、折りから人通りはまるでない、なみ〳〵と岸一杯に流れ落ちる川むかうには、メヨンヒスベルクの崖が、切つたてになつて、何だか箱根の湯本あたりへ行つたやうな氣がした。一時間ばかり散歩してゐるうち、また大

降りになつた、ホテルは私一人で少々寥し過ぎるくらゐだ、晩餐のあとで主人にいろ〳〵聞いて見たが、彼の云ふところによると、御客がよく行くのは先づ此の邊では、町の東に當つて湖水の澤山集まつたモント、ゼーからカムメルゼーをぬけて、トラウンゼーに行くんださうな。寫眞で見ると中々よささうだが、御客が多いだけに、氷河のある山からはよほど離れてゐる、南にあたるケーニッヒスゼーは、ホッホサィラー（Hochseiler）の山も近し、景色も大分おもしろさうだが、地圖で見ると、袋みちの行き止まりで、同じ途を歸るのは馬鹿〳〵しい。散々考へたあげく、ホーエタウエルンの麓、オーベルピンツガウなるツェルラーゼー（Zeller See）のほとり、ツェル、アム、ゼー（Zell am See）に行くことにした。

サルツブルヒの展望臺ガイスベルク（Gaisberg, 1286 m.）も、登山鐵道は五月一日までは開けないし、歩るいて暇をつぶすくらゐなら、遠望なんて年寄りじみた眞似をするよりは、づつと近く山へ行つた方が氣が利いてると思つたから、さつぱりとこれは旅程から取りのぞいた。扨てさうきまると早いがいゝ、明日はサルツブルヒに御別れとして、夜は雨の音を聞きながら、地圖と旅程に十二時過ぎまでつぶしてしまつた。

サルツァッハ（Salzach）

朝になつても雨は止まない、時々薄あかるくなつて、小降りになるかと思ふと、またまつくらに曇つてしまふ。雨の中を街をまた一と廻りして、歸るともう十一時、降りしきる雨をついて、停車場へ急ぐ、汽車はトリエスト行きの急行で、街をはなれると、南に開らいたサルツァッハの右岸にそうて、カプツィネルベルクの城の下をぐるつと廻ると、ガイスベルクが左手に表はれた。谷の間にもう雪はないが、線の右ひだりに、流れをはさむ綠の牧場や、そのうしろからなそひにつゞく、唐檜（フィヒテ）や落葉松

に、山毛欅や白樺の入り亂れた丘の間から、雨雲の裾にちら〳〵雪の山が見える。谷はだん〳〵狹くなつて、水の量もいちじるしく減つたやうに思はれる。蒼白い流れはもう暴らい瀨になつて、頂には、春もすでになかばを過ぎた今でも、雪に包まれてあらうハーゲンゲビルゲ（Hagen-Gebirge）と、東に横たはるテンネン、ゲビルゲ（Tennen-Gebirge）の谷間ひを、ビショッフスホーフェンからシュワルツァッハの停車場に着いた。トリエストへは南へガスタィンの谷へ入る、私は小さな汽車へ乘りかへてなほ、サルツァッハの急流にそうて、午後四時ウンテル、ビンツガウの小村、ツェル、アム、ゼーに着いた。雨は小降りながらまだ止まない。湖水に沿うた停車場前のビンツガウエル、ホーフに泊り込む、客は勿論私きりで、室には火の氣もないから、外套なしではゐられなかつた。宿はいなかびた木造で、下には、あやしげなビュフェーを兼ねた食堂がある。丘の上で、森と牧場と、村の田舍家と入り違ひになつた西の山が、シュミッテンホーヘ（Schmittenhöhe, 1968 m.）につゞいてゐる。

ツェル、アム、ゼー

ツェルラーゼーの湖水そのものは、ケローニッヒスゼーやオーベルゼーに比して、たしかに、優つてをるとは思はれない。ビンツガウタールの落ち口の、南にうちひらいた谷あひに、長さ一里にわたつてたゝへられた、その水の色も、アルプスの山ふところに藏くされた湖としては、餘り凄ごみに乏しく、また、それを取りまく山々も、雪は近いが、水ぎはに氷河の垂れ下るやうな、きび〳〵した景色とはまるで違ふ、その湖畔に建てられた、ツェル、アム、ゼーの村も、夏の間避暑に來る町の人達をあてにするだけに、田舍のくせに、いやに開けた風を見せつけた、要するに感じの惡るい村である。まあこの近所の取りどこは、シュミッテンホーヘの展望臺ぐらゐなものだが、それもやつと二千米突に足らないし、第一、見える山と云ふのが、一番高いんでさへ、三千七百米突のグロースグロック

ナー、その外はやつと三千米突そこゝだから、登るんなら兎に角、遠くから眺めたばかりぢや物足りない。天氣は惡るし、痔癪のやり場に困まつて、雨の中をびしよ〳〵水ぎはをうろついて見たが、鐵道工事で掘りつかへした往來は歩るけず、よほどこのまゝウヰーンまで行つてしまはうかとも考へたが、何にしても一先づ宿へ歸つた上のことゝ、また停車場上に戻つて來た。

そのうちに夕飯になる。食ひものは隨分まづい、酒も墺太利流に、水でも割らなければ飲めないやうな酸つぱい奴で、ラインやモーゼルよりも更らにまづい。汽車さへあれば、今夜のうちに發つゝもりで室に歸ると、ヒーターに蒸氣が通してあつて、ぽかつとした室の中に一足ふみ込んだら、もう出かけるのが面倒くさくなつて、そのまゝこゝに泊り込んでしまつた。

オーベル、ピンツガウ　(Ober-Pinzgau)

空は明るいが、湖水には靄がたなびいて、對岸の山は雨の昨日よりなほうす暗らい。ウヰーンへ行くつもりで、早やく眼をさましたが、どうやら天氣になりさうなので、寫眞機一つぶら下げると、停車場へかけつけて、朝飯もたべずにクリンムル (Krimml) 行きの輕便鐵道に乘り込んだ。六時半と云へば晴れた日でさへ溪の中はまだ薄ぐらい。ホーエ、タウエルンの山脈は雲の中で、その鼠色の空と後ろにつゞくシュミッテンホーエの間だけが、蒼空は見えないがほんのりと山の朝らしい色をしてゐる。

汽車は湖水のすぐふちをまはつて、ツェルラー、モース (Zeller Moos) の濕原に出ると、サルツァッハの流れをさかのぼつて、やゝ開らいたオーベル、ピンツガウの谷底を、西にむかつて動いてゆく。地圖をひろげると、すぐ前にひらくカプルネルタール (Kaprunerthal) の源は、カルリンゲル、グレッチャー (Karlinger Gletscher)、尾根つゞきにグロース、グロックナーになつてゐるが、カプルンの

村のうしろは森から雲で、氷河らしいものはてんで見えない。

この谷に並んで、やはり南から直角に、ピンツガウの谷に落ちるのがシュトゥーバッハタール(Stubachthal.)で、「ウッテンドルフ(Uttendorf)七百七十六米突、南に開けるシュトゥーバッハタールの背後にヨハンニスベルク(Johannisberg, 3467 m.)とアイスケーゲレ(Eiskögele, 3439 m.)の山稜を望む」と案内記に書いてあつたが、それもやつぱり雲の中で、シュトゥーバッハの狹い流れを瞰下ろしたばかりである。

五十三キロに及ぶオーベル、ピンツガウは、ロカールバーンでざつと三時間かゝる。いくら行つても同じやうな、底の平らな谷間ひで、サルツァッハの水量も、それをはさむ兩側の山も、同じやうな樣子をしてゐる。昔はウッテンドルフからさきは、湖水になつてたさうだが、今でもその跡でゝもあるらしい水溜りが、低地のあちこちに見うけられる。

クリンムルの一つ手前の、ローゼンタール、グロース、ウェネディガー(Rosenthal-Gross-Venediger)で下りて、ぶら〳〵歩るき初める。ローゼンタールは小さな村で、停車場の上の岡に、フーベルス。ガストホーフとした、宿屋らしいのがあるから、取りあへず入り込んで朝飯を命じた。室の窓は南むきで、すぐ下には、牧場の柵にしきられて、今上つて來ただら〳〵路が、停車場へつゞいてゆく。谷の眞んなかはサルツァッハの流れで、丁度正面に開らいた二つの谷がスルツバッハ(Unt. u. ober Sulzbachthal)この間に屹えたミッテルコッフ(Mitterkopf.)から、急な尾根がグロース、ヴェネディガーの頂上までつゞいてゐる。

朝飯のうちに、窓にも朝日がさしはじめて、左りにあるウンテル、スルツバッハの谷奥には、まるで曇り硝子に日がさしたやうに、淡い霧の中に、氷河か雲か、ギザ〳〵にひゞ割れた、山頂の一角が陰見する。宿の婆さんは、私が日本から來たと話すと大喜びで、宿帳を持ち出して、名前を書いてく

れと云つた。停車場の名にまでついてるくらゐだから、グロース、ヴェネディガーのすぐ麓だと思つてゐたが、だん〳〵晴れたのを見ると、こゝから頂上は隨分遠さうだ。

宿を出ると、線路を横切つてサルツァッハに渡した丸木橋をわたつて、オーベル、スルツバッハの谷に入る。百姓家が一軒あつて、路はそこで終つてしまつた、遠慮なしに裏口へ廻ると、牧場の柵になつてる、見當がつかないから、それを飛びこして南へ〳〵と登つて行つた。原から、上は樅と落葉松の交じつた密林になつて、頭の上の方に見える雪のそばまで、景色に變りはなささうだ。草の上に寢ころんで、煙草をふかしながら見まわした。

原には一面に、勿忘草が空色に咲いて、野生の三色菫に、黄色の櫻草(プリムラ)がある。それから小さなリンドウ(Gentiana verna)の、さえた瑠璃色が、何とも云へず美しい。私は誰の畫だつたか忘れてしまつたが、ティロールの六月と題した、マーガレットが原一面に咲きそろつた、ブルーの濃い綺麗なのを、テイトで見たことがあつたが、山の蔭になつた斜面などは、不自然とも思はれるやうな、強い色を出してあると記憶する。春先きの今でも、どんよりと曇つた日は別として、ティロールの山麓は、裾を取りまく牧場も、それをつっきつて流れ落ちる水の色も、山の絶壁の、氷も、岩も、非常に濃いブルーを含んでゐると感ぜられた。

牧場を通りぬけて、もとの路を街道へ出ると、ぶら〳〵、クリンムルの方へ歩きはじめた。晴れ曇りした朝の空も、サルツァッハの谷の上だけは蒼く澄んで、ワルトの鐘が、靜かな村にひゞき渡る。村の人達が、行きちがひに、グリュッセと云ひながら坂路を上つてゆくのが、成るほど、今日は日曜なんだ。私は鐘が鳴ると云つては立ち止まり、グロース、ガイガーの氷に、日がさしたと云つてはたち止まつて、ヒーブルクの崩れ落ちた城跡の下を、西にぶらり〳〵あるいてゆく。

ローゼンタールからクリンムルまで、やつと五キロしかないが、時間にしてかれこれ三時間もかゝ

つた。街道は、あるときは丘の斜面に、キンバィや三色菫の咲き亂れた間をぬけたり、またはさら〳〵と流れ落ちる、山川の岸に沿う牧場のふちをぐるつと廻つて、行き止りになるかと、思ふと柵のあひだに小さな木戸があつて、また西の方へつゞいてゆく。往來のところ〴〵に聖像がある、畫や小說で見ると中々詩的だが、いづれも身體を白くぬつて、茨の冠は草色に、胸から手足にかけて血をべたべたぬりつけた奴だから、有り難いのなつかしいのなんて感じはてんで起らない、マリヤの像も路ばたに立つてるが、これも同樣で、かう露骨な像は何にしても氣味が惡るくていけない。サン、セバスチャノの矢疵だらけなのも、異敎徒の迫害の畫も、伊太利派の有名な宗敎畫の大部分は、私には、不快な感じのほかに何ものをも與へない、同じ宗敎畫にしても、日本の地獄極樂の畫などは餘ほど茶氣があるだけに、滑稽な感じが先きにたつて、見てゐても氣持ちを惡るくするほどではないが、こんな聖像よりは、必要だと思ふなら、簡單な十字架かサイン、ポストでも建てた方がよさゝうだ。

少し行くと、路の曲りかどにまた立つてる。獄門の下でも通るやうに、顏をそむけてうつむいてゆくから、知らない奴が見たら、はゝあ有りがたがつて御辭儀をするなんて、よく有り勝ちな、見當ちがひな解釋をするだらう。どうかすると婆さんなどが、柱の下に丸くなつて、しきりに拜んでるが、多分、私達は別に惡るいことを致しませんから、こんなさらし者になりませんやうになんて、祈つてるのかも知れないと思つた。

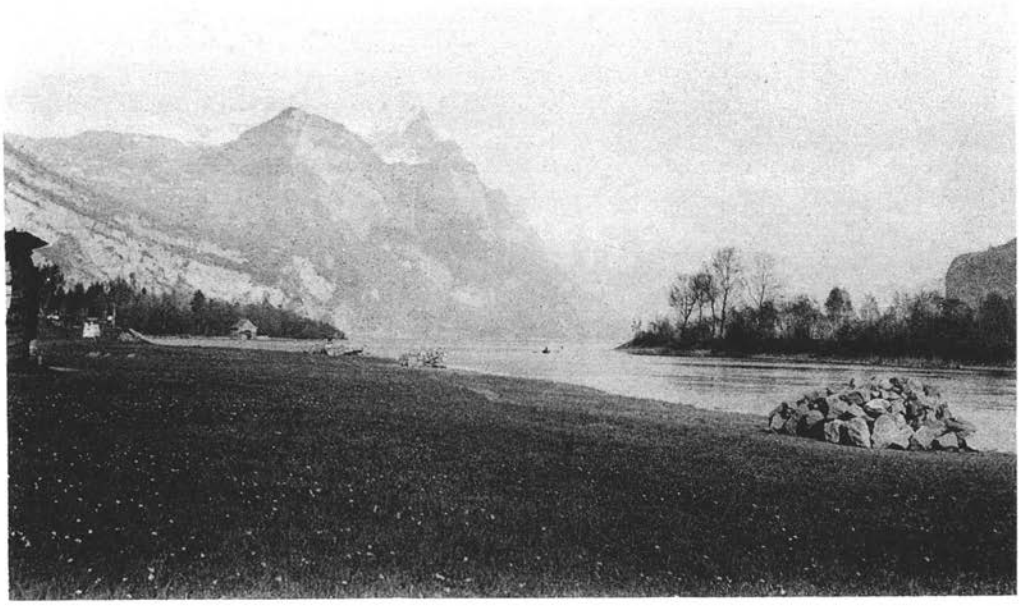
暫らく歩くとまた出會す、今度のは絕大な奴で、身體の大きさも先づ小供ぐらゐはある、例によつておん頸がかしいで、血がたら〳〵流れてゐる、宗敎も、平氣でこんなのが見てゐられるやうになりや、申し分はないと感心しながら立つてると、向ふの方で御早うつて云つた奴がある。往來には人つ子一人ゐない、はて變だと思つて見まわすと、居た〳〵、背廣の胸がはちきれさうになつて、申し譯けほどの低くいカラーを猪頸につけた、四斗樽どころの騷ぎぢやない、五斗か六斗樽つて大男が、

牧場の柵の上に乘つかつて、日なたぼくりをしながら啣え煙管で瞰下ろして、いやにげら〳〵笑つてる、こつちは御早うが咽喉につかへて、吹き出しながらそばに行く。

對手もおかしかつたと見えて、まだげら〳〵笑ひながら、やつとな、柵の上から地響きたてゝ、づしんとばかり下りて來た。はゝあクリンムルへ、もうすぐですよ、寫眞ですかな、今は丁度花ざかりでねつてんで、づしり〳〵私のあとについて來る。路はまもなく牧場をはなれると、兩側の山が狹つて、川は南の山の裾に壓しつけられたやうに、低く小いさくなつてしまふ。谷のつき當りに右側の山がとび出して、街道がその直下でぷっつり切れてると思つたが。急に左に曲つて、その麓をぐるり廻つて、なほ西へつゞくらしい。二三軒の小屋と停車場がある、鐵道の終點でウンテル、クリンムル、扨て例のビール樽はそこの驛長さんであつた。

クリンムルでどこか見るところはありませんかなと、見たまゝの村だけれど、參考の爲めに聞いて見ると、むゝそれやクリンムルの瀑でさあてんで、高さ何米突を並べはじめる、瀑なんかあまり珍らしかない、何か山のよく見えるところはないかつて聞きかへすと、なーる、私も貴兄の御國に四年ゐましたがな、やどうも瀑ぢや、世界一のがありますからな、そんならファルケンシュタインですなあつて云ふ。ファルケンシュタインは停車場上の小山のこどだ。

一緒に登らうつてんで、獨りで呑み込んで、先に立つてのーつし〳〵と歩きはじめる、春のことで、日が永いからいゝやうなものだが、此の道づれには閉口した、體量何十貫か知らないが、何にしても釣鐘を引つぱり上げるやうなんだから、氣の短かいものは我慢がなるまい、せい〳〵息を切つて、立ち留つては汗をふく、そしちや貴兄の國の話をする、どうも話の樣子がとんちんかんで、さつぱり私の國らしくないから問ひたゞして見たら、カナダのことなんだ、人をアメリカ人と思つたのか、アメリカインデイァンと間違へたのか、どつちにしても大した違ひはないから、確めては見なかつたが、



ウアーレンゼーの落ち口

辻村伊助氏撮影

念の爲め「僕は日本人です」と名のりをあげたら驚ろいてた、クリンムルの驛長殿も、日本の名前だけはすでに知つてる。

山と云ふのは三方切つたてゞ、右は頂上の草原から、だら〳〵に狹い尾根が上つたり下りたりして、北側の山につゞいてゆく。山の急斜には、樅と落葉松が蔽ひかぶさつてゐる、ところ〴〵に露出した、石灰岩の滑らかな表面を杖でつゝついて、氷河時代（アイスエイジ）の遺跡でせうなんて、知つた風をして立ち留つたが、どこの地質の先生から敎つたか知らないが、氷河の遺跡だか雨水の遺跡だか分るものか。日本に氷河がありますかつて聞いた、えゝかう云ふ氷河なら方々にありますつて答へたら、分つたんだかわからないんだか、變な顏をしてだまつてしまつた。

頂上は小さな草原で、ゲンツィヤナと櫻草が一つぱいに咲いてる、Himmelschlüssel に Himmelstern だつて敎へてくれたが、どつちがどうなのか忘れてしまつた。登つて來たうしろの方は、木立にかくれて見えない、崖の上に出ると、西はクリンムルの盆地で、カナールの水の二すぢ三筋貫ぬいた綠の原に、ごしょりと一かたまり、人口四百の山村が、捨てられた體にかたまつて、行き止りの谷底が南へ曲つて、クリンムレル、アーヘンタール (Krimmler-Achenthal) になつゐる。例の瀑はその落ち口にあるらしいが、こゝからは裾が白ろく見えるばかり、トリッセルコッフ (Trissel-Kspf, 3078 m.) が眼の前に屹えて、村から日がへりに登れさうに思はれる。

アーヘンタールを溯れば、ドライ、ヘルン、シュピッツ (Dreiherrn Spitz, 3505 m.) で、ビルンリュッケ (Birnlucko.) からアールンバッハ (Ahrn-Bach) の谷になる、聞いて見ると、驛長殿身振をまぜて、ウンデルシェーン！で譽めたゝへた。驛長さんがほめるやうぢやあ、大した景色であるまいと、急に行く氣がなくなつた。

春の花には虻がうなつて、ゲンツィヤナの空色を見つめてると、氣が遠くなるやうだ、空には長が〳〵

と一杯の雲が、クリンムルの谷を西南に横ぎつて、そこにはライヘン、シュピッツ（Reichen Spitz, 3305 m.）か、まつしろな山の頂が、トリッセルコッフの左に高く聳えてゐる。私は身仕度をして立ちあがる、驛長殿ものそ〳〵あとから山を下りる、發車は午後二時四十分、それまで閑さうな驛長室に、煙草をふかしながら座りこむ。驛長殿は日給六クローネ、細君に娘が一人で、官舍で電燈が只だから、暮しむきに樂ですつて云つた。

千九百十四年四月十四日——二十七日

雜錄

自然觀察の二方面を論じて山岳觀に及ぶ

私は、自然界に對する科學的知識が、殆んど零であるにも拘らず、自然がたまらなく懷しい。

なぜ自然が、そんなになつかしいのであらうか懷しいから懷かしいのであつて、別段煩瑣な說明を要しない。

而し、美學など、いふ特種の學科が、獨立の存在を保ち得る程、現代は何事にも徹底した說明を得なければ、承知が出來ない世の中であるから、私もこの風潮に乘せられて、下手な說明を試みやうと思ふ。

自然に對する興味が、人々の天禀に依て、濃淡厚薄のあることは、勿論であり、その興味は、だん〳〵深く味はふに、隨つて銳階的に進步し、發展して行つて、遂には絕對不離心のものとなり了ることも、爭はれない事實である。

而して、自然に對する吾人の態度は、明らかに異つた二方面がある。一は理知の眼を以て觀ることであり、他は感情の直覺を以て觀ずることである。

科學者哲學者の宇宙觀世界觀は、主として前者に屬し、藝術宗敎家の自然觀宇宙觀は主として後者に屬してゐる。

勿論哲學者の中にも、多少の感情を含ませてゐる者も少なくないであらうし、藝術家宗敎家の中にも、多少の知的觀察を加へてゐるものもあらうから、截然たる區別を立てることは到底出來るものではない。

科學者は、複雜なこの現象界の森羅萬象を細かに解剖して、限りなき知識慾を滿たさうとしてゐ

る。そこでいろ〳〵な專門的研究家が次第に出來てくる。專門中更に專門を分つて、殆んど際限なく知識を分解して行つて、殆んど停止する所を知らない。莊子に謂はせたら、「吾が生や限り有り而して知ることは涯りなし、涯り有るを以て涯りなきに隨ふ如きのみ」と一笑に附し去るかも知れない。勿論知識は限りがないから、如何に心血を絞つて苦心慘膽を重ねても、知性の滿足を得るといふことは絶對に不可能であらう。けれども研究を重ぬれば、重ぬる程知識は進歩し、發展する。其進歩し發展する道程が、即ち研究家に取つて無上の樂しみであるから、何も最後の結果が知識の完成を得ないからとて、研究が無價値であるとは云へない。否大に自然に對する興味を助成せしむることは、爭はれない事實である。たとひ其知識が斷片的であるにもせよ、此の自然觀察が宇宙自然に對する美妙、不可思議、驚嘆といふが如き觀念を助長せしめて、情的觀察を强烈にするものである。

又哲學者は、是等現象界に共通した原則を綜合し、之に自家の直觀的想像を加へて宇宙の原理を發見し、知性の絶對完成を期せむとしてゐる。而して或は成功し、或は失敗してゐる、その成功したと稱する者も、概ね主觀的の成功であつて「時」と稱する波濤のためには全然破碎されてゐる。萬物の本原は水に在りと云つたターレスの說も、空氣を以て萬物の原素としたアナクシメネースの說も、火を以て萬物生滅の原動力と見たるヘラクレイトスの說も、又地水火風を以て萬物の原素としたエムペトクレースの說も乃至プラトン、アリストテレスの博大深遠なる宇宙觀も時間の波に打ち碎かれては、又昔日の面影なく崩れかゝつた殘壘に苔が蔽ふてゐるばかりではないか。

けれども、壯麗な殿堂を築くのは、これを築きあげた刹那が無上の快樂である。築きつゝある間も愉快である。築かむと計畫しつゝある間も愉快である。千萬年後の頽廢を憂ふるやうでは殿堂の建築は出來るものではない。

哲學者が、宇宙觀と名づくる華美壯麗の殿堂を築かむと計畫し、建築に努力する間が其勞力の酬ゆる快樂を伴ふのであるから、何も第三者が其無

用の努力を嘲つたとて、毫も意に介する必要はない。けれども私は是等博學宏才の科學者、哲學者先生達よ卿等はむやみに實驗の鎧を着、知識の鎗を振りかざして、無知矇昧の無學者が、自然界の現象を眺めて驚異し、歎美し、崇拜する態度を輕蔑し威嚇してはいけない。何となれば殆んど、科學的、若しくは、哲學的知識の零に近い吾々無學者と雖も、情的直感を以て、それ等學者諸先生達にも、劣らぬくらゐ自然の盃から、芳醇な美酒を恣に汲み得るからである。

天地間の萬物一としてわが明晰な、知識の光に照し出さぬものはないと云つた風に、理性の價値のみを認めて、感情の尊重すべきことを認めないやうな倨傲尊大の學者諸先生達よりも、無學文盲の田夫野人の方が時としては自然に對して深いなつかし味を持つてゐる場合がある。

無論知識も尊重しなければならぬが、人の心の半面たる情の價値をも尊重しなければならぬ。時としては、幾多の天文學者が長年月の間、腦漿を絞つて研究した知識の總和よりも、單純なる天地に對する驚嘆の心が、信仰生活に入らしめるの動機となることがある。

月世界に對する複雜な天文學の知識よりも、一個の詩人が突嵯の間に詠み出でた一片の歌の方が却て月に對する興味を深からしめることがある。

私は往々詩人が自然物に對して、鋭い直感を以て巧みに描寫した文章を讀んで、どうしてあの樣に深く自然の情緒にわけ入ることが出來たであらうかと驚くことがある。

感情の異常に發達した古今東西の詩人が、或は悲哀の情緒を以て自然界を眺めたり、或は歡喜を以て眺めたりして、巧みに之を詩化し、一唱三嘆せしめるやうな名吟を數限りなく殘して置いて、自然に對する吾人の眼を開かせてくれる。吾々が一莖の野草を眺めても、一片の落花を眺めても霞んだ月を眺めても、灰色の淋しさうな雲を眺めても、少なからぬ興味を感じ、普通の人のあまり耳を傾けないやうな百舌や烏の啼く聲をきいても、松風の響をきいても、秋の夜に落葉をたしく雨の音をきいても、蟲の音を聞いても無限の詩趣を以

て耳を傾けることの出來るのは、多少詩歌の感化を受けてゐることが大に手傳つてゐる。

是等の詩歌文章の中には、自然に抱擁せられて、恍惚として魂が天地の間へ溶け込んでしまひさうに感ぜられる程、深く自然の精神を攫んでゐるものも少くない。或は超然として人事の糾紛を忘れしめたり、或は限りなき幽愁悲哀の情を惹き起させたり、或は押へきれない微笑(ほゝゑ)みを、もらさせたり、或は、過去追憶の情を誘ひ出したり、さまゞ〳〵な感じを起させる。而し中には自然物を借りて、單に美しい文字や語句を並べたゞけで、內容の極めて空疎なものもある。又は自然現象を何でもかでも、無理やりに道德的の意味に附會したがるやうな、一種のいや味を起させるやうなものもある。支那人の詩や文章には特にこの弊が多いやうである。而し要するに、吾々が詩人の筆に依て、自然物に對する興味を啓發されてゐることは、決して少くないのである。

人間本位の近代文藝は、生活や失戀を主なる題材として、人事の葛藤ばかりを描き、憎い程自然に對して冷淡な態度は、自然に對する愛着の深い私等には、聊か物足らぬ心持がする、今日の日本に小島氏や吉江氏のやうな熱烈な自然崇拜の文藝家のあることは、私にとつてはどれ程うれしいか知れぬ。

それから、吾々はまた、自然美を模倣した繪畫を通して審美眼を啓發され、再び實物の自然界に對する時、更に一層の感興を喚び起すものである。繪畫を見て全く實物のやうだと感じた眼を以て、振り返つて自然を眺めた時、今後は全く繪のやうだと感心する。かくの如く繪畫と、實物と、相反映して双方に對する興味が、益々深くなることを經驗してゐる。

又科學的知識が、自然に對する注意と、興味とを惹き起す力の偉大であることも認めなければならぬ。植物學の大家の中には森林や、喬木を絶愛される人々が少なくない。

又人生に於ける敗北者が、立て籠るべき堅固な城砦として、自然を求めることもある。我邦の中古に流行した、隱遁生活は著しい例である。彼等

が有爲轉變の世を果敢んで花鳥風月に親しみつゝ安らかに餘生を樂しんだのは、無上の解脱法であつたかも知れない。支那に於ても似た例は澤山ある。陶淵明、白樂天、李白、蘇東坡等第一流の詩人は大抵それであつた。

而し以上列擧した類は、何れも其興味が斷片的であつたり、或は一方に偏してゐたりして、熱さと深さと統一性とを缺いてゐる。宗教的意識は、是等の感覺を統一して熱さと深さを與へるものである。

博物學上の知識に依て、自然界の精妙なる組織に驚嘆し、物理化學上の知識に依て自然界の法則の嚴密に驚嘆し、天文學上の知識に依て、宇宙の廣大に驚嘆し、而して情の一面に於ては、自然界の完全美を嘆賞し、自然界に漂ふ情緒を直感し、以て全宇宙を想化し統一して次第に宇宙の內部生命に分け入らうとする。此に至つて知と情とは、巧みに融和せられて健全なる宗教的意識が自ら起つてくる。

此の境地に至つては、自然界の個々の知識を限りなく積み上げて、知識そのものを樂んだり、誇つたり、或は知識の頒布を、物質的生活の資力を得べき一方便としつゝあつた科學者も自然そのもの、宇宙そのものに對して限りなき歡喜と憧憬の眼を以て眺むるに至り、又情の一面から、現象界のありのまゝの姿を眺めて、好個の畫題とし、若しくは一歩を進めて、完全な活畫として嘆美して居つた者や、又は自然界の美しさ、面白さ、奇しさ、懷かしさなど、さま〳〵の色糸を以て美麗な詩歌文章を織つてゐた人達も、動もすれば自然を方便視するの眼を一轉して、熱烈な嘆美、崇拜、歡喜の情を以て、自然の懷ろに抱擁せられむことを望むに至るであらう。

始めなく、終りなき永遠不斷の宇宙の生命及び、生命の顯現たる現象界の美妙なる變化を、神靈視せずには居られなくなる。即ち神又は佛といふ觀念は切實に起つてくる。「一切萬物悉く佛性あり」てふ佛陀の叫びに絕對の權威を認むるに至るであらう。

而して自身も亦宇宙の一斷片であるから、取り

も直さず神の一分身であり、現象界の一波瀾であるとの自覺が生じ、小我の觀念を脱して大我の自覺を得るであらう。

「天地風雲、山川國土、水火人物、草木瓦礫より色聲香味、觸法の微に至るまで皆遮那法性の胸中より、流出現顯せざることなし悟れば俯仰悉く自體、迷へば塊然たる惟一身」(原人論序)といふが如き境地に達して吾々は永遠に活き得るのである。躍動しつゝ歡喜に滿ちた生活を送り得るのである、又小さい自我の外に大我あることを自覺する時、始めて萬物に對する自然的の愛は油然として湧き出づるのである。

かくて宇宙に遍滿せる靈を認め、現象界の森羅萬象に對して絶對の美を感得し、觀照的に眼をそそぐ時はすべてのものは活き活きとしてゐる。すべてのものに光がある。すべてのものに喜びが溢れてゐる。すべてのものに深い懷しみがある。すべてのものに神秘がある。「ソロモンの榮華も百合一片の花に及ばない」ことが根本から瞭解される。

自然に對する憧憬、歎美、渴仰、崇拜、歡喜の心が益々熱烈となり深酷となつて吾々は全く信仰の生活に入り得るのである。

かくの如き信仰生活は前にも云つたやうに智的觀察及情的直感の二方面を統一して入ることができるが、人々の性格に依て、或は智を主として情を客とし或は情を主として智を客として入ることも出來やう、つまりは同じ高嶺に眞如の月の靈光を眺め得さへすればよいのである。

自然觀察の二方面を說いて思はず識らず柄にもない大風呂敷を擴げてしまつたが是から飜つて山岳觀にペンを運ばせることゝしやう。

登山家或は山岳家と呼ばれる人々の中にも明らかに主智的傾向の人と主情的傾向の人とがあるらしい。即ち植物學者、地質學者、氣象學者、地理學者及是等の學に趣味を有する人々は學術研究を主なる目的として高山深谷を跋涉せられるであらうし、美術家文學者、宗敎家、思想家は別個の天地に强烈な官能の刺戟、若しくは淸新な氣分とか印象とかを求めむがために森林山岳に逍遙遊を試みられるであらう。

勿論是とても決して截然たる區別があるわけのものではない。科學者の中にも山岳を中心とした自然界の光景に對して、審美的眼光の異常に發達してゐる人もあらうし、又文藝家美術家の中にも山岳の氣象や、植物や、地質に就て驚くべき知識を有せらるゝ人もあらう。

變化の激しい高山の氣象を觀測したり、錯雜な火山の地質を解剖したり、平地には見ることの出來ない珍奇な草木を採取したり又是等の植物の分布を研究したりなどして知識の限りない發展に滿足と誇りとを感ずる科學者の登山も勿論趣味の深いものであらうが、門外漢の私には其間の微妙な消息はとても計り得ないから、私は自分の貧弱な經驗を基礎として些か情的山岳觀の興味を述べて見たいと思ふのである。

幼年時代の淡い記憶を辿つて考へて見ると、私は六七歳の頃から山が好きであつた。私の村は低い小山（寧ろ小丘）に圍まれた淋しい村落であるが、私は其頃から春になつたら近所の友達と二人で向ふの小山へ赤いつつじを折りに行つたり、蕨を採りに行つたりした。秋になるといろ〳〵な木の實や初蕈や松蕈を採りに行つた。そして山といふものは何でも自分の好きなものが澤山あつて何を採つても誰も叱る者がない、ほんとにあんなよい所はないといふやうな心になつてゐた。

私は子供の時分によく年上な子供にいぢめられたりしたものだが、仲のよい友達と二人で山へ行つて居りさへすれば、誰もいぢめる者もなく二人で好きなものを取つて仲よく遊ぶことが出來るので益々山がなつかしくなつた。

世に容れられない高さが煩はしい憂き世の塵を避けて山林に隱遁するのも子供が性の惡い友達にいぢめられるのを五月蠅がつて山へ遊びに行くのも其心は變らない。

今から考へて見ても其頃の山遊びは樂しかつた美しい谷川の流れで水を堰き止めて池のやうなものを作つて見たり、瀑を懸けて見たりして、半日位遊んでくることもあつた。又小山の頂に登つて城を建てると云つては小石を澤山集めて來ていろいろな形に積み上げ其ぐるりをきれいに掃いて自

然の小松をそのまゝ庭木に見立て庭師を眞似て下葉をむしつて、綺麗に枝を揃へたりして、樂しみいつしか日の暮れるのに驚いて歸つて見ると母や祖母が大きに心配して近所の友達の家を探し歩いてゐた事もあつた。

小山の頂から四方を瞰下すと池や小川や、森や、林や、田畑や、村落が見慣れぬ景色を見せて單純な頭は限りない好奇心に滿たされたものだ。

かやうにして私は幼い時から山とは離れられぬ親しみを結ぶやうになつた。

私の宅から、西國二十六番の札所法花山一乘寺へは坂越しに僅か十町ばかりである。法花山といふのは海拔七百尺ばかりの小山が環狀に峙つて峯が八つに別れ、中央盆地及び各谷々には樹木が黑黑と繁つて頗る幽邃な地である。私は小學校時代から其處に遊んだものである。此山には栗や椎の木が澤山あるのでいつも秋になつたらそれ等の木の實を拾ひに行つたりした。法花山のあの奥深い森はいろ〳〵な想像を描かしめた。小波さんのお伽噺によく出てくる森の中の魔物とか森の中の仙人とかいふやうな話を思ひ出すと、いつでも法花山の森が頭の中に浮んでくる。

こんな風に私は森林に對しては強い好奇心と深い親しみとを幼稚な頭に深く印したのであつた。今から考へて見ても此時代の印象は今日の山岳や森林に對する趣味と密接な關係がある。

十七八歳の頃から山岳に對する趣味が次第に深くなつたが其動機はやはり高山の神秘に對する好奇心であつた。

元より如何なる高山幽谷にしろ科學者の眼から見たならば神秘などといふものはないであらうが私は今日でもやはり高山の夜などは何だか說明のし難い一種の不可思議なる神秘的な空氣が漂ふてゐるかのやうに感ぜられて、それが無闇になつかしいのである。私はかう云ふやうな感じを理知の光に照らして打消してしまひたくはない。

高山とか深山とかに就ての知識も經驗も乏しかつた時代にはこのやうな神秘感は一層强かつた。私はいつもこの神秘觀に誘はれて山岳を懷しんでゐた。

十七歳の四月まだ吉野の櫻は少しく盛りを過ぎたといふだけで日曜日には花見客が雜沓してゐる頃で、白衣の行者の姿は滅多に見當らないのに私は冒險的好奇心に驅られて山上ヶ嶽に單身登山を試みた。絶頂近くはまだ所々堅氷に鎖されてゐて多少危險の箇所もあつたがそれでも幸に何の異常もなしに絶頂を究めてその日の夕暮吉野の宿に歸つて來た。これは私にとつては殆んど處女的の登山であつた。初めての登山に依て經驗した山岳に對する趣味は甚大なものであつた。

眺望の雄大に驚いたり、平野には見慣れぬ異樣な風物に好奇心を滿たしたり、一種清新の氣にうたれて心中の不淨分子を掃蕩し盡したやうな爽快な心持がしたり、意思と體質との試驗に首尾よく合格して何となく心强い感じが湧いたりして何だが勝ち誇つたやうな氣分になつた。

此時幼稚な私の頭にも後の行者が此山を宗教的に利用したのは成程よい考へであると感心した。

其後多少登山の經驗を重ねるに隨つて種々の方面から山岳に對する興味が强くなつた。私は山に登つて失望した事はまだ一回もなかつた。雲に眺望を遮られたり、登山中雨に遭つたり、山中で日を暮したりした事は度々あつたが何時でも艱難に酬ゆるだけの愉快さが充分に伴つたから、今でも當時の事を考へて見ると樂しい記憶が明らかに殘つてゐて追憶の快感を充分に味ひ得るのである。

くだらないが少しく過去の印象を回憶させて貰ひたい。

阿波の劍山に登つた時には溪流の心ゆくばかり清らかであつた事と、綠深い針葉樹が苔を帶びた落葉樹と巧みに調和配合して幽美の觀を盡して居つた事と、大雪の翌日峯づたひに祖谷の谷に下つた時四方の高山を仰望した時の鮮やかな印象とがはつきりと殘つてゐる。

伯耆の大山に登つた時には裾野の美しい秋の景色と、雄大な絶頂の眺望と、平地から仰望した姿の壯麗であつた事とが打ち消し難い印象を殘してゐる。三瓶山では裾野に秋の八千草が美しう咲き亂れて、蟲の音の賑はしかつた事が忘れられない記憶になつてゐる。

豐前の彥山に登つた時には途上の森林の美しさと幽寂さが深い印象を止めてゐる。

豐後の由布嶽に於ては山姿の奇觀と絕頂に於ける雲の變化の面白さとが鮮やかに印象を止めてゐる。

阿蘇の谷に於ては滿山白雪に蔽はれ絕頂から碧空に向つて盛んに灰色の煙を吐いてゐる光景が恰も銀の香爐のやうで美と奇とを盡してゐた事が深く印象を止めてゐる。それから阿蘇舊火口を瞰下ろし、平和な村落を澤山抱いてゐる有樣が何ともいへぬ興味を起させた。

霧島登山の際には、櫻島を浮べた鹿兒島灣附近一帶の眺望及日向方面のゆかしみのある地勢とが深く印象に殘つてゐる。

岩木山に於ては弘前城外から仰望した山色の秀麗さと、黃と紅とにもみぢした楓が綠りの偃松と配合した美觀と、去來する雲の絕え間絕え間にあらはれる下界の眺望とが深く印象を止めてゐる。

白山登山の際には谷峠から仰いだ氣高い姿、支脈の黑々と繁茂した處女的森林、絢爛を極めたお花畑の美しさ、絕頂の曙色、地獄谷の靈溪、大白川の雄々しく麗しい奔湍及神秘的な大森林、高山の東美女峠に於ける日本アルプス連嶺の曙色とが何れも深い印象を止めてゐる。

立山登山の際には常願寺川の大釣橋から眺めた時の雲に蔽はれた神秘的な立山連峯の大觀、五葉坂の美林、殘雪の美觀、底知れぬ綠ヶ池の奧深い水の色、地獄谷の奇觀などが著しい印象を止めてゐる。

白馬登山の際には越後糸魚川附近から仰望した時の壯觀、蓮華溫泉に至る三里餘の靜寂な處女的森林、殘雪の美觀、絕頂附近に於ける高山植物の愛らしさ、朝日嶽の殘雪、御來迎の奇觀、滿月に照されに立山の遠望、絕頂の曙色、南方日本アルプスの壯觀、大雪溪から仰望した山色の美麗、奔放なる溪流、四ッ屋より仰望したる白馬、鑓、五龍其他北日本アルプス連嶺の雲間に隱見する奇しく高く尊い姿が深い印象を止めてゐる。

以上は從來の登山に於て特に印象の深かつたものを並べ立てたのであるが、之を要するに吾人が

登山に於て享受する快感中最も鮮やかに意識されてゐるものは山岳の審美的價値であつて、特に自然現象中、壯美の感は殆んど山岳に依て代表せられてゐると云つてもよい。

けれども吾人が山岳から享受する所の快感はかくの如き審美觀の外に、直接內部の生命と交渉する深刻な喜悅の伴ふことを忘れてはならぬ。

吾々は溪谷に入つて清新な空氣を呼吸し、清淨純美な流れに逢ふては何となく心身を洗ひ清められたやうな心持になる。それでなくても人生の競爭場裡から餘程遠ざかつてゐて心は自ら意慾の繫縛を脫してゐるのだから全く清淨潔白な心持になり得るわけである。即ち吾々は登山の第一歩に於て心的生活の第一歩に入つたのである。

物質的文明の壓迫を烈しく受けてゐる近代人の生活は靜かにものを考へるといふやうな餘裕は滅多にないけれども、一旦生存競爭の圈內から脫して靜寂な森林に入つた時、はじめて心を安靜に導き、何物かに憧憬するやうな氣分になる。

自ら人の心を落ち着かせるやうな綠の色の漂ふ森の中で、苦むした石の上に踞して草鞋の紐を引き締めつゝある一刹那に、平常思ひ至らぬ考へが胸に浮んで來て思索の糸口となることは決して珍らしくはない。梢を搖る風聲にも、心なき鳥の囀りにも異樣の感を以て耳を傾け、深く自然の胸奧にわけ入つて見たいといふやうな感想が起つたりするものである。

「林間の松韻、石上の泉聲、靜裡聽き來つて天地自然の鳴佩を知る。」

と古人の云つたのも決して文字上の技工とは云へない。

吾々が都門に在つていくら哲學や宗敎上の著書を讀んでも一通の理論を知るばかりで自得することはなか〳〵むづかしいがそれ等の不鮮明な思想が森林中を逍遙する時、又は山頂に立つて日出又は日沒の光景に對する時偶然の機緣に觸發されて始めて生きたる眞理を悟了し、無限の歡喜に溢れるやうな事もあらう。

古代印度人が森林生活に依つて幽玄深邃なる哲學を組織したのを見ても林間に於ける沈思默想が

決して無意義なものではない事が分るであらう。

全世界中最大の宗教は森林に育くまれたと云つても敢て不可はないのである。

止觀に、

深山遠谷は途路艱險にして永く人蹤を絕つ、誰か相惱亂せん意を恣にして禪觀するは是處最勝なり。

と說いてある。即ち山林は佛徒が觀心修行の道場であつた。

吾々は登山の道程に於て、精神の淸淨と寂靜とを得ることを知つたが、次には積極的に自然の活動といふことに思ひ到るのである。

地球と名づくる太陽系の一遊星には人間と稱する暴君があつて。

「文明とは人智を以て自然を征服するに在り」

といふやうな亂暴極まる定義を作つて是を暴政の憲法と心得てゐる。

此暴政は地球上の到る處に行はれてゐるが、流石の暴君も自然の勢力の極めて强い南北兩極と、高山深谷とには少しく手をやいてゐる。

平地に在つては自然界の萬象は人間の暴力に傷けられて痛々しい程萎微してゐる。而し暴君自身もあまりに暴威を振ひ過ぎた事を時々後悔してゐる。

人間が暴威を山岳にまで及ぼして平和に生を樂しみつゝある大森林を伐り拂つたりすると、樹木は溪流に其復讐を依賴して置いて無慘な最期を遂げてしまふ。溪流はやがて空行く雲に援軍を求めてやがて豪雨と稱する隊を作つて、忽ち洪水と稱する陣を整へて威風堂々まつしぐらに進軍し、人間を散々惱ませて置いて、自分達の仲間である海に向つて引きあげてしまふ。

兎に角高山深谷は最も自在に天然が活動してゐる。私は時々この平原にまだ人間が住んで居なかつた太古には樹木がどんなに榮えてゐたであらうかといふやうな想像を起すことがあるが、飛驒の大白川溪谷の森林に入つた時には千萬年以前の世界に立ち歸つたやうな懷かしい氣分になつた。

遠くから山岳を眺めると、眠つてゐるやうに、或は死んでゐるやうに見えるけれども山は決して

眠つても死んでもゐない。一刻も休みなしに不斷に活動してゐる。

默々として繁り合つた森林は間斷なく成長し、又その一部は老朽して新陳代謝を繰り返してゐる

小鳥は唄ひながら梢から梢と飛び廻り、獸は巖から巖を驅け廻り、雲は動き、水は走つて一瞬の間も靜止してはゐない。

植物の强い生活意識は高山の頂に於て驚くばかり明瞭に見られるものである。七月半ば白馬山頂の雪が次第に解けて、地皮に溫い日光が觸れると今迄八ヶ月間も眠つてゐた高山植物は思ひ出したやうに芽をふいて素晴らしい勢を以て成長する、そして廿日と立たないうちにもう立派な一人前の植物體を形造つて一齊に艶麗な花をつける。私はその機敏な生の發展を興味深く眺めたのであつた。

人間に對して恐怖を知らない雷鳥が吾々の姿を好奇の眼を以て眺めてゐるのを見ると何ともいへぬ愛らしさを覺ゆるのである。亂暴な人間の居ない別天地に育つた鳥の平和な心が私はたまらなく嬉しいのである。

學術研究といふ鹿爪らしい名の下に標本にするといつては高山植物を濫採し、或は雷鳥を捕へて無慘にも剝製にしてしまふのは科學者である。

生命のない枯草や、剝製の雷鳥が日本國中の學校に普くゆきわたる頃には、高山に美しい草花の種類は著しく減じてしまひ、生きた雷鳥は滅多に見られなくなるであらう。

それ程天然を傷けて斷片的知識を少々普及した所でそれが何の役にたつであらう、生命のない標本で學び得た斷片的知識なんかが、人生に最も必要な中心思想と何の關係があらう。勿論吾々とても高山植物の採取を絶對に禁止して貰ひたいといふやうな、偏狹な量見を持つてはゐないが今少しく公德心を失はぬやうにしてもらひたいと思ふ。

私の山岳觀は稍や不統一に陷つた、山岳は云ふ迄もなく現象界の一部分であるから前に論じた宗教的自然觀は山岳に對しても共通してゐるわけであるが吾人の感情の上から他の自然物に對して少しく異る點は山岳が何となく人格的に見える事で

◎雜　錄　富嶽は臺灣の南湖大山よりも高し

ある。神の顯現として他の自然物よりは特に莊嚴に感ぜられることである。

而もその外觀が一見威容堂々として容易に近づき難く感ぜられるにも拘らず、少しく之に親しむ時は云ふべからざる懷しさを覺ゆるのである。

こはその紫色の匂やかな色彩と山體にまとふ白雲の朝暾夕暉を受けてなつかしい淡紅色に輝く光景などが自ら人を惹きつける力を持つてゐるのであらう。

懷しみの加はるに隨つて何となく抱合したいやうな氣持がする。

己にして山中に分け入る時はすべての物象が限りない快感を與へる。是に至つては益々他人ならぬ親しみを感じて物我同體の觀念は自ら起つて來る。

絕頂に立つて千山萬岳を四望する時又は山頂の深夜に平常よりは遙かに明皎々たる星月を仰望する時自然の尊嚴を一層痛切に感じて自ら敬虔の念を生ずるのである。

私は是迄の經驗に徵するに殆んど堪へ難い幽鬱に沈んで極端な厭世觀に捉へられてゐた時登山に依てかき消す如くに幽鬱を一掃し去つて生活意識を復活し、新らしい希望を以て樂しく暮らせるやうになつた事も一再に止まない。

兎に角山岳は吾人の思想感情と淺からぬ關係を有してゐる。

（古家實三）

富嶽は臺灣の南湖大山よりも高し

前號にて會員の野呂寧氏は、臺灣の山岳に就いて余等の全く知らざる幾多の山岳と、其標高を掲載せられて、余等を益せられたるは感謝に耐へざる處なり、氏は臺灣に永住せられて、同地の山岳を研究せられたる故に、自然臺灣に厚くして內地に薄きの觀あるは、人情の然るべきものならんも、余等內地にある者よりして見れば、聊か不平の感なき能はず、依て愚見を陳べて氏の高敎を仰がんとす、富士山の高さを記したる正確なるものは、陸地測量部の二萬分一圖富士號の富士山幅を推す

ことは、何人も異存なきものなるべし、同圖幅に據れば富士山 3753,4、劍ヶ峰 3778 と記入されたり、前者は金明水の北方の一隆起（白山岳か）に印されたるものにして、其下に富士山の文字あれども、コハ同山の概念を生せしむるの意味にて記されたるなれば、これを以て富士山の最高點を示せるにはあらず、左すれば劍ヶ峰を以て富嶽の絶巓とするは當然の事なりとす、即ち一萬二千四百六十七尺にして、臺灣の南湖大山（一二四三〇）を拔くこと三十七尺なり、猶ほ氏は內地にて一萬尺以上の山岳を一寸七座ある如く述べられたるも、日本本州にては十三座あるが如し、便を以て左に記す。

野口氏概記

富士山	一二三八七
鎗ヶ嶽	一〇二〇四

余が雜記中より

劍ヶ峰	一二四六七
富士山	一二三八六
（以上富士山）	
北嶽	一〇五三五
間ノ嶽	一〇五二五
（以上白峰）	
鎗ヶ嶽	一〇四九二
赤石嶽	一〇二一四
御嶽	一〇一二〇
白根嶽	一〇二一二
（北嶽を指すか）	
東俣山	一〇二一二
乘鞍嶽	一〇〇〇〇
東嶽	一〇三八二
赤石嶽	一〇二九六
奥穗高嶽	一〇二四〇
穗高嶽	一〇一九八
荒川嶽	一〇一七五
劍ヶ峰	一〇一〇九
（御嶽の頂上）	
鹽見嶽	一〇〇五五
北穗高嶽	一〇〇〇八
仙丈ヶ嶽	一〇〇〇八
（以上の山岳名は五萬分一圖の記名のまゝを揭げたり）	

劍ヶ峰と富士山は勿論同山にして、新高山の東西南北の四山の如き關係なるも、北嶽と間ノ嶽は別峰と見るべく、穗高の三山もまた三山とするを妥當とすべし、故に本州にある一萬尺以上の高峰は、十三座を數ふるを得べし、乘鞍嶽は九千九百八十七尺にして、一萬尺を拔く能はざるは頗る遺憾とする處なり、東俣山とは四十萬分一豫察圖にある、信、飛、美三國境にして御嶽の南方なる、

◎雜　錄　富嶽は臺灣の南湖大山よりも高し

東俣嶽を指されたるものか、或は他に此高峰の聳立するものか、氏の明示によりて本州に一萬尺以上の峻嶽一座を加ふるを得ば、幸甚の至りに耐へざるなり。附記す、日本八十五州に二千九百米突を有する山岳は、約十四、二千八百米突を有するものは、約二十四、二千七百米突以上のものは、約十七、二千六百以上のものは約三十三、二千五百以上のものは、約二十一、二千四百以上のものは、約二十二あり、此等の山岳は、日本アルプス地方の外に、下野、上野、武藏、加賀に亘り、余が日本の山岳の第一流、第二流と呼ばんと欲するものなり。(高頭義明)

北越山岳の記事と「山見立大角力」に就いて

吾が北越の地を圍繞し、又は國内に凸出して居る山岳を、普通越後山系、飛驒山脈（北端）、妙高火山群に三大別して居る、越後山系の特長は、日本第一流の高山を有して居ぬけれど、第二流の峻嶺が群居してゐて、且つ日本一の高山地ではないが、日本一の深山地と云ふことが出來ると想ふ、さうして標高の割合に殘雪が非常に多く、富士山に殆んど殘雪を見ない時に、さづと千七百米突も低い中越地方の山岳には、十町以上もある雪溪を幾條も有して居る、また日本の地に比敵の無い頂上の頗る廣濶な、飯豐、苗場、平ヶ岳がある、此山系に屬してゐて、二千米突以上のものを擧ぐると、佐武流山、苗場山、白砂山、平ヶ岳、大日嶽（飯豐の一峰）、大黑山、飯豐山、中ノ嶽、上ノ間山、神樂ヶ峰（苗場の一峰）、駒ヶ嶽、鶴ヶ嶽である、飛驒山脈の越後に關せる處は、所謂蓮華群峰と呼ぶ山塊であつて、一萬尺に近い大蓮華山（白馬嶽）を主として、小蓮華山、雪倉嶽、鉢ヶ嶽、乘鞍嶽、朝日嶽、長梅山、赤男山、黑負山（黑倉山とも）など、何れも六千六百尺以上である、飛驒山脈の全部は、越後山系のものに對して、比較的に登攀が困難でない、妙高火山群の北越方面は、區域が狹い割合に變化に富んで居て、二重式火山の妙高主峰、活火山の燒山、上毛の妙義山に似た

山見立大角力

ウ魚沼郡、カ蒲原郡、イ岩船郡、ク頸城郡、サ三島郡、ハ刈羽郡

為御覽

司　行角田山
國　彌彦山
上　年鳥坂山
山　寄春日山
　　麒麟山
　　取三國峠
　　葡萄峠
　　頭諏訪峠

勸進元　妙高山

大關	カ	飯豐日山	大關
關脇	カ	大面山	關脇
小結	カ	三神樂山	小結
前頭	イ	御川嶽	前頭
同	カ	實巢山	同
同	イ	鷲日ケ嶽	同
同	カ	朝名山	同
同	ク	菅ケ岳	同
同	カ	米山	同
同	イ	粟三方仁王子分山	同
同	カ	三ケ山	同
前頭	カ	大明星山	前頭
同	ク	檜ケ嶽	同
同	イ	腰	同
同	イ	名倉	同
同	カ	升ケ山	同
同	ク	名倉山	同
同	ク	上ケ岳	同
同	ク	御所山	同
同	カ	風倉山	同
同	カ	檜ケ山	同
同	カ	五頭山	同
同	ク	菱形山	同
同	ク	鶴立山	同
同	ク	鍋路山	同
同	カ	升所山	同
同	カ	名倉山	同
同	ク	有毛山	同
同	ク	武明山	同
同	ク	五動山	同
同	ク	菱頭山	同
同	ク	高ケ岳	同
同	イ	猿山	同
同	イ	有戸倉山	同
前頭	ウ	明根山	前頭
同	ク	星毛山	同
同	ク	檜ケ山	同
同	ク	腰明山	同
同	ク	名動山	同
同	ク	倉ケ山	同
同	カ	升頭山	同
同	カ	名ケ山	同
同	ク	上立岳	同
同	ク	御形山	同
同	ク	所立山	同
同	ク	倉路山	同
同	カ	所立山	同
同	カ	倉山	同
同	ク	檜山	同
同	ク	腰山	同
同	ク	明山	同
同	ク	動山	同
同	ク	頭山	同
同	ク	ケ山	同
同	ク	立山	同
同	ク	形山	同
同	ク	立山	同
同	ク	路山	同
同	ク	所山	同
同	ク

る塊狀火山の烏帽子、阿彌陀、鬼ヶ面山、駒ヶ嶽の諸山があつて、糸魚川町の南方に聳立して居る、此火山群では、八千百尺の火打山をはじめ、妙高山、燒山、黑澤嶽、天狗平山、赤倉山（妙高の一峰）、金山、嘉平治嶽がある。

吾が北越の山岳記錄を瞥見すると、西頸城郡の黑姫山には、素盞嗚尊の、六世の御孫の、大國主命の御妃、沼河姫の住居し給ひしと云ふ傳說があつて、『大日本地名辭書』や『日本名所事彙』などにも引用してあるが、既に本居宣長翁は『古事記傳』に「こは地名なれば、この比賣神を祭れるか、他神かは知りがたし」と言はれ、『神代物語』には、姫の住所を能登國鳳至郡と斷じてあつて、黑姫山では無いやうである、『陸奥國風土記』に、

「白川郡飯豐山、此山は豐岡姫命の忌庭なり、また飯豐青尊（顯宗帝の姉君）、物部の臣をして、御幣を奉せしむるなり、故に山名となす、古老の曰く、昔し卷向珠城宮御宇天皇（垂仁帝を云ふよし）二十七年戊午の秋、飢饉にして而して民多く亡ぶ矣、故に宇惠々山と云ふ、後名を改めて豐田と云ひ、また飯豐と云ふ」（原漢文、栗田寬氏の『古風土記逸文考證』に據る）。

と見えたれども是は會津方面の記文で、越後と云ふべきでない、『米山緣起』に、釋泰澄の侍僧が、官米を請ふの條があるが、これは例の佛徒が得意の、牽强附會の邪說であつて、事は越前國越知峰に屬してゐて、『元亨釋書』十五の泰澄傳に詳記してある、然らば何時頃から吾が北越山岳の記文があるかと云ふに、寡聞なる余は『義經記』以後と想像してゐる、此書は當時の著作では無いが、足利時代に出來たものとしてある、七卷の「直江の津にて笈さがされし事」の一節に、

片岡、直江の港に下りてみれば、さとより渡したりける舟に、苫をもふかず主もなく、艪櫂梶などもあり乍ら、浪にひかれ搖られゐたり、片岡是を見て、天晴ものや、此舟を取つて乘らばやと思ひて、觀音堂に參りて辨慶にかくと云ひければ、いざさらば此舟に取つて乘り、けさの嵐に出ださんとて、港に下り、十餘人取乘りて押出す、めうくわんおんたけより下したる嵐

◎雜　錄　北越山岳の記事と「山見立大角力」に就いて　一一六

におひかけて、よな山を過ぎて、かくた山をみつけて、あれ見給へや、風は未だあらし、風弱くならば、艫を添へて押せやとぞ申しける、あをしまの北を見給へば、白雲の山のこしをはなれて云々。

即ち妙高、米、角田の三山が、北越最初の記文のある山岳のやうに私は思ふ、また同時代の寛正六年（今より約四百五十年前、應仁亂の二年前）に、堯惠法師は米山の事を記してゐる。

『善光寺記行』明れば八日になり侍りき、御緣日にまかせて、米山へ志しぬ、遙々とよぢのぼりて、絶頂より瞻望するに、煙水茫々として、山又天涯に連る。

雲のはのきゆれば山もかさなれる
波の千里に秋かぜぞ吹く

漸よろほひ下り侍るに、雲の底に蕭寺の鐘の聲埋れ消て、夕の雨もいと身にしみかへり、打拂ひ行袖もしほたるれば、漸く麓の旅館に蘇息し侍れども云々（群書類從の活字本、續々紀行文集など、米山を朱山と誤植せり、原本の行書なるより誤寫せるものか）。

降つて德川時代となつて、博識で當代稀な旅行家の、貝原益軒先生が、延寶六年（約二百四十年前）に著作された『和漢名數』の中に「日本高山」として十八山を列せられて、「妙高山（越後）」の文字がある、先生晩年の著書の『扶桑記勝』六に、「妙高山、高田の西南に當り、頂上に阿彌陀堂あり、極めて高し、夏日にも雪あり、翻譯名義曰く、妙高はもと須彌と曰ふ、また蘇迷盧と云ふ、是をとりて其名とせしなるべし」と見えてゐる、（同書五卷に、飯豐山の記文あり、こは會津城主保科正之候の『會津風土記』《寛文六年著、約二百五十年前》を引用されたるにて、岩代方面なるを以て省略せり）、また先生歿年（正德）前後に出版された、寺島良安の『和漢三才圖會』六八、越後の部には、妙高と黑姫とを掲げてあるが、この黑姫は、信州のもので、北越の二山ではないのである、橘南谿の「名山論」にも妙高を擧げて居る、右の如く米、妙高の二山は、名所若しくは高山の意味で書いてあつて、實際に於ても其の資格を具備してゐるば

れども、未だ普通人士に知られなかつたものと見えて、益軒先生の姪の好古が著はした『和爾雅』一三下「日本國名所」の越後の部には、山名の記載がなく、また安永九年（約百四十年前）に歿した、山岡浚明の『類聚名物考』は、菊版百餘頁を費して、日本の山岳四百以上を描えたが、一も吾が北越の山岳を記して無い、是れは歌人の吟詠が無いからの事で、つまり陬僻の地だから已むを得ない次第であらう。

吾が北越の古圖は、大日本地誌にも引用してある、『越後國邑志』に見えてゐると云ふ、寛治三年（約五百七十年前）の地圖が一番の古物であらう、此圖に就いては私は少々疑問があるが、まだ考證して見ない、此圖にある山名を西から數へて、上路山、黑姫山、妙光山、春日山、川合山、米山、尾上山、黑倉山、國上山、夜子山、飛山、砂山（二山は、寛治六年大波に崩されて海となりしと云ふ）、八石山、升形山、陳峰、三國山、八海山、金城山、後山、駒ヶ嶽、守門嶽、勝峠、三條山、粟ヶ嶽、菅名山、諏訪峠、二王子山である、德川時代となつて、有名な長久保赤水先生の『新刻日本輿地路程全圖』には、燒山、戸倉、雨飾、妙高山、米山、黑姫山、八石、彌彦山、大明神峠、三國峠、八海山、駒岳、白峯、捻岳（二山、銀山平邊）、飯豐山、高根室山、大利峠、三面山、上旭山、下旭山（余の此圖は、印刷不明なる所ありて、二三を逸せり、他日訂正すべし）などがある、伊能先生の『大日本沿海實測圖』は實測の必要上目標とせられたものであつて、必ずしも名山高をを選擇されたのではあるまいが、目標となる山の多くは、特殊の形狀を有するから、自然に名山の資格がある譯になる、該圖に記された山岳は、信州山（越中方面よりせるが如し、白馬嶽ならん）、燒山、妙高山、米山、三國峠、金城山、牛岳、八海岳、駒ヶ岳、鋸山、高津屋山、荻城、國上山、彌彦山、角田山、馬下山（菅名嶽ならん）、飯豐山、鴻鷺山、鷲巢山、朝日山であつて、略々吾が北越の名山高嶽を表出してある、刊行不明の『越後國全圖』と云ふのがある、多分伊能先生の圖から十數年を過ぎた、天保初年のものだと想はれる、また天保十三年（約

七十年前）刊行の『越後國細見圖』と云ふのがある、此二圖となると、可なり多數の山名が記入されて居る、陸地測量部五萬分一圖は、昨大正三年十一月の出版で、假製版もあるが、兎に角越後全部が完結した、其中から千五百米突以上のものを拾ふと、末尾に陳列した百十座あるのである。

我が邦明治以前には、山岳を記した書籍が極めて尠ないのであるが、三年三號に掲載した「大日本名山高山見立相撲」のやうな、山嶽表を製作した好事家もあつたのである、其の後會津正樹舍主人紀興之著『越後土產』二編（元治元年刊、約五十年前）を見ると「山見立大角力」が出で居て、山數が七十八座を載せてある、勿論前記した『浪花みやげ』の名高山見立相撲を習ふたのであらうが、隨分暢氣な出版物をしたものだと、可笑しくも嬉しくもあつた、併し越後國全圖や細見圖から、いゝ加減に拔き書きして製作したのだと考へて居たが、同圖に無くて、餘り多くの山岳を有さぬ、私の住んで居る郡に屬する山で、私の知らない二子山（今は此山の存在を認めたり）を、明記した點などから想ふと、單に一二地圖から拔いたものでも無いらしい、此番附は本誌に附して置いたから御覽を願ひたい、此番附の山名に就いて、鳥渡思ひ得たことを述べると、幕の內の大明神山は、峠であつて枝折峠とも呼ぶので、尾瀨大納言が越後から、尾瀨ヶ原へ踏さるゝに時に、大明神が出現されて、路の枝折（案內）されたと云ふ傳說がある、三面山は鮭の多獲を以て有名な、三面川の上流の山であつて、私等も小學校時代から聞知して居るが、五萬分一圖の何山を指すのか不明である、巢戶々山、大上戶山、笹原山の一座を云ふらしい、寶川山は鏡山か高陽山の中らしく、三方分山は沼山峠、談合峰、鍋倉山の何れかであらう、三山ともに越後全國には大きく描いてある、三段目の鋸山は魚沼でなくて、古志の誤りで、燒山は頸城とすべきである、三段目の火打、高妻、燒山は、勸進元の妙高山に對峙すべきもので、中、地藏の二山も、大關連と伯仲の間にある、高妻山は、私は五萬分一圖を得るまでは、信州の山とのみ思ふてゐたこれは偶然かも知らないが、頗る面白いと

考へる、段末の塚ノ山、松ノ山、秋山は、村の名であつて山岳の名ではない、出湯山、小山田山も怪しいもので、里邑の下に山字を附したらしい、旅行の際によく敎へられる、信州山、甲州山の類であるまいか、兎に角日本六十餘州の山番附が、各國ごとに有るものならば、一切を聚めて攷究して見たいものである。

序に約五千尺即ち千五百米突以上の山岳を、標高順に列記して置く、守門嶽を山と書いたり、大劍田山を、大源太山としたのは、例の筆法であらうが、見馴れぬためか、餘り善い氣持にはなれぬ。

白馬嶽　西ク。信濃、越中　二、九三三、一
小蓮華山　西ク。信濃　二、七六八、八
鉢ケ岳　同。越中　(二、六二〇)
雪倉嶽　同。同　二、六一〇、九
○火打山　同、中ク　二、四六二、〇
○妙高山　中ク　二、四四五、九
乘鞍嶽　西ク越中　二、四三五、七
朝日嶽　同。同　二、四一八、三
○燒山　同、中ク　二、四〇〇、三
高妻山　中ク。信濃　二、三五二、八
乙妻山　同。同　二、三一五、〇
長樽山　西ク。越中　(二、二六〇)
○黑澤岳　中ク　二、二一二、四
赤男山　西ク。越中　二、二〇七、〇
天狗原山　中ク。信濃　二、一九七、一
佐武流山　南ウ。同　二、一九一、五
苗場山　信濃、中ウ。　二、一四五、三
○赤倉山　中ク　二、一四一、一
白砂山　南ウ。信濃　二、一三九、七
平岳　北ウ。上野　二、一三九、六
○大日嶽　北カ、東カ　二、一二八、〇
金山　中ク。信濃　(二、一二〇)
大黑山　南ウ。同　二、一〇七、八
飯豐山　北カ。羽前　二、一〇五、一
○中ノ嶽　北ウ、南ウ　二、〇八五、二
地藏山　中ク。信濃　二、〇七三、二
○黑負山（倉山）　西ク　二、〇六九、九
○嘉平治嶽（上ノ間山）　南ウ。信濃　二、〇三三、三
○神樂ケ峰　中ク　二、〇三〇、〇
仙ノ倉山　南ウ。中ウ　二、〇二九、六
同。上野　二、〇二六、二
四ケ嶽　北カ。羽前　二、〇一二、五

◎雜錄　北越山岳の記事と「山見立大角力」に就いて

○駒ケ嶽　北ウ、南ウ　二、〇〇二、七
景鶴山（鶴ケ倉）　同。上野　二、〇〇一、〇
劍ケ倉山　同。同　一、九九七、五
○牛首山　東カ　一、九八二、〇
茂倉山　南ウ。上野　一、九七七、九
谷川富士　同。同　一、九七四、二
○荒澤嶽　北ウ　一、九六八、七
谷川岳　南ウ。上野　一、九六三、二
雨飾山　西ク。信濃　一、九六三、二
牛ケ岳　南ウ。上野　一、九六一、六
卷機山　同。同　（一、九六〇）
萬太郎山　同。同　一、九五四、一
白澤山　北ウ。同　一、九五二、八
笠ケ岳　南ウ。同　一、九四五、三
小澤嶽　同。同　一、九四四、〇
大白澤山　北ウ。同　一、九四二、〇
赤倉山　南ウ。信濃　一、九三八、四
○前山　中ク　一、九三四、〇
○割引山　南ウ　一、九三〇、九
下津川山　同。上野　一、九二七、七
○笹ケ峰　中ク　一、九二七、四
○兎岳　北ウ、南ウ　一、九二五、八
○神奈山　中ク　一、九〇九、〇
栃澤山　南ウ。上野　一、九〇〇、三

樂師嶽　中ク。信濃　一、八九一、七
千國揚　西ク。同　一、八九〇、〇
岩菅山　同。同　（一、八八〇）
○小倉山　北ウ　一、八七八、〇
越後澤山　南ウ。上野　一、八六〇、七
○灰ノ又山　北ウ　一、八五二、三
地神山　北カ。羽前　一、八四九、五
○畫闇山　西ク　一、八四〇、九
日蔭（三ノ山）嶽　同。越中　（一、八四〇）
同。信濃　一、八二一、四
神道山　中ク。同　（一、八二〇）
朝日岳　南ウ。上野　一、八一九、六
西朝日岳　岩船。羽前　一、八一三、一
丹後山　南ウ。上野　一、八〇八、六
柳原嶽　中ク。信濃　（一、八〇〇）
米子頭山　南ウ。上野　一、七九六、二
種蒔山　東カ。羽前　一、七九一、〇
○筍山　南ウ　一、七八九、七
○丸倉山　西ク　一、七八三、〇
○八海山　南ウ　一、七七五、〇
以東岳　岩船。羽前　一、七七一、四
大源太山　南ウ。上野　一、七六四、一
○老山　中ク　一、七一七、〇
奥江山　岩船。羽前　一、六九四、九

松尾山　中ク。信濃　一、六七七、八
七ッ小屋山　南ウ。上野　一、六七四、七
○赤湯山　同　一、六五五、〇
疣岩山　東カ。岩代　一、六五三、五
○雁ヶ峰　南ウ。中ウ　一、六五三、〇
○二ッ峰　北カ　一、六四二、四
○机差嶽　岩船　一、六三六、四
三國山　南ウ。上野　一、六三六、四
三國岳　東カ。岩代、羽前　一、六三一、〇
○鋸嶽　西ク　一、六三一、〇
○日白山　南ウ　一、六三〇、〇
○大源太山　同　一、六〇七、〇
稻包山　同。上野　一、五九七、七
犬ヶ嶽　西ク。越中　一、五九三、〇
○相模山　岩船　一、五九〇、七
○高石山　南ウ、中ウ　一、五八七、〇
淺草山　北ウ。岩代　一、五八五、五
○鉢山　西ク　一、五七五、〇
○烏帽子山　北カ、東カ　一、五七二、九
○東谷山　南ウ　一、五五三、八
未丈ヶ嶽　北ウ。岩代　一、五五二、九
○彌八山　中ク　一、五四四、五
○守門山　北ヲ、南カ、古志　一、五三七、六
○大澤山　北ウ　一、五二二、九
○阿彌陀山　西ク　（一、五二〇）
○鬼ヶ面山　同　（一、五二〇）
雛塲山　同。信濃　一、五一八、二
毛猛山　北ウ。岩代　一、五一七、一
○岡寺山　南ウ　一、五〇九、〇
化穴山　岩船。羽前　一、五〇五、〇

山岳名に○を冠したのは、北越專屬のものである、標高に（　）を施したのは、地圖に確記されて居ぬのを示した意である。（高頭義明）

◎雜錄　乾德山

乾德山

東京や横濱に居住さるゝ人で登山の熱望はあるも職務や事務の都合上其暇を得ざる人の爲に僅か一日の暇で而かも輕裝のまゝ往復の出來得る恰好の山があるのを紹介する。

中央線を旅行する人が鹽山驛（甲斐）から西へ向つて數丁出離れた時に北方の空を望むと甲信國界の雄鎭たる金峯山が其五丈石を冠つた頭を一寸擡げて後ろの方から群山を瞰下ろして居るのを見らるるのであらう其金峯より東方に當つて峯巒併立の

中にピラミット狀の岩峰が尖刀鋭く碧空を劈くが如くに他の山々よりも特に異なれる姿をした——丁度立山の劍岳を俱梨迦羅峠あたりから遠望した樣な——山を仰ぐであらう是れが紹介しやうとする山である。

此山は乾德山と云ふので（山岳十ノ一木暮氏の鼷鼠談山の中にも名が出てある）山梨縣東山梨郡三富村字德和に屬し奥仙丈の一支脈である標高は不明だが里近い山としては比較的に高山の氣持を味ふに足る事を保證する。

東京方面より來る人は鹽山驛に下車し松里村に出で笛吹川の東岸に沿ふて溯り甲府方面よりするものは日下部驛に下車し岩手村諏訪村と順次に笛吹川の西岸に沿ふて北すれば三富村の一の橋（笛吹川に架せる一高橋）に於て東岸の道は西岸の道に合して一となる兩停車場より此所まで道程約二里自轉車も通じ得らるゝのである更に五丁計り北し左方の岐路に入れば半里にして德和に達す乾德山は德和部落の背後に聳ゆる一峻峯である。

德和より西に三四丁德和川に沿ふて行けば登山口がある併かし他の山道と紛れ易き惧れあれば德和村で婦女子または學校生徒でも賴みて登山口まで案内させるのが安全だ亦頂上迄案内を賴まば彼等は村の誇りとして喜んで應ずるであらう脚下を洗ふ德和川の清流、對岸の懸瀑、紅葉の濃き淡き、秋の登山は殊に愉快である登山道の左右に山葡萄、木通、山栗等が澤山にあつて此等の野味に飽くも心の儘だ一里計り登ると數十町歩の高原がある薄尾花の中に白樺が飛々にあつて人間離れのした樣な氣持になる龍膽や雁皮やアカヌマフウロなどが紫に紅に此間を彩色する亦原の中に清水が流れて渴を醫すに充分である德和の人が此邊まで草刈りに來るので間がよくば山の名を指して問ふ事も出來る此高原の盡くる所に鬱蒼たる樹林があつて樹林の後口から根元を針葉樹に圍繞された春筍の樣な岩峯が峭立して居る高原と樹林と相接する所に乾德神社の前宮がある雲霧に晒して空しく孤兎の棲家となつて居る四邊の壁には登山者の樂書が互に其奇拔を競つて居る此社殿の後口から草原は緩傾斜の登りとなつて所々に形の奇妙な大石が

獅子の寢た樣なのや馬の驅ける樣なのが點在する數丁登ると草原の稍々盡くる所で山の鞍部に出る登山者が目指す岩峯は此鞍部から左方に仰がるゝ草原も人の丈けを越す位草が茂つて居るので兎もすれば道を見失ふ惧れがあるが道の有無に構はず鞍部から左手の山稜を岩峯目懸けて針葉樹林へ突進する樹林に達すれば道が判明するこれからは道が極めて急峻になつて岩へ手を掛けて器械體操の眞似もやらなければならぬ三階造りの大土藏の樣な花崗岩が中央から眞二ッに切り斷たれて中間僅かに身を横にして通る樣な箇所もある但しこれは路傍にあるので試みに割れ目を五六間横になつて行つて見ると其割れ目の末端は目も眩い計りの大絶壁の上に口を開て居る頂上近くなると石から石岩から岩と猿の樣にして登るのだ時には腰を押し上げて貰ふ處もある。

頂上は至て狹く方數坪に過ぎぬ岩の間に乾德社奥の院の一小祠があつてタカネニンジンやタカネキンバイが澤山に生へて居る頂上より南に向ふ脚下は削るが如き斷崖目も遙かに遠く山麓に近く久しく岩頭に立つ能はざる慨がある米ッヽジが土氣も水分も無い此絶壁を飾つて見事である眺望としては南には八面玲瓏たる富岳を望みそれより西へ蛾が岳、身延、七面、農鳥と白峯山脈へつゞき富士より東に御坂峠、神座山、笹子、天目、大菩薩となり更に雲取山に續ける武甲國境の連嶺となり更に北して雁坂峠の鞍部一帶の草原を望み其山下の廣瀨の人家歷々として指點することが出來る北西には眞黑の針葉樹林の大澤を隔てゝ黑金山に對し（國師岳は此山に遮られて見るを得ず）西は奥仙丈東南の連嶺ゴトメキを隔てゝ金峯山を望み亦更に南方富岳と對すれば甲斐平原の人煙白堊の散點する間を笛吹、日川、金川の諸川銀蛇の如き南流して富士山に注ぐのが見える。

頂上より一歩を北背面に降れば急傾斜の岩腹蘚苔厚く鎖して石楠木、黑檜、アスナラウ、五葉松、栂等が多年風雪と戰ひ其丈け僅かに一尺内外のもの老幹龍の如く自から懸崖造りの盆栽の如く而かも風蘿白髮の如くに被むるものあり近年盆栽の流行と共に採り去らるゝもの多しと云ふ樹下蔭濕の

地には、ハリブキの繁茂するのが見える只此山に偃松の無きを遺憾とするが普通遠足の時と同じ仕度で高山の氣分に充ちた往復一日の登山としては適當のものであると信ずる飯田町停車場を夜の十一時發の汽車に投ずれば翌朝四時五十六分には鹽山驛に下車することが出來るこれから德和まで三時間と見積れば充分であらう登山に二時間半を費すと見ても十二時迄には樂に山頂に達する午後二時下山の途に就くも歸路は非常に早く五時半には鹽山に歸着すべし六時卅三分同驛發の上り汽車に乘れば夜の十一時三十分には東京の地を踏まん。

時間の餘裕があらば沿道の惠林寺鹽山向嶽寺等を訪ふも可ならん汽車を待つ間鹽山礦泉に浴して汗を流すも一興であらう。(大村忠一)

鹽見岳登山記

鹽見岳は、三峯川方面、即ち市の瀨高遠邊にて荒川岳と稱するものであつて、赤石山系の中央部に於ける、高さ三千〇四十六米突の高峯である。表は三峯川の水源となり、裏は中俣の濫觴となつて、信駿兩國の間に屹立して居る。赤石の山麓大河原方面では、赤石山の眞北に在る魚無河內岳を荒川岳と呼んで、前記の山を鹽見岳と呼んで區別して居るが、地方によつて、同一の名が、異つた山に名けられてあるから、往々混同せられる虞がある。參謀本部陸地測量部の五萬分の一の地圖には、大河原方面の稱呼に從つてあるから、今暫く之に依つたのである。

大正二年八月、余が同志數名と共に、赤石の荒川に登つて下山する時、案內者に道を誤られて、大井川の上流小西俣に迷ひ込んで一泊して、翌日、大河原に出やうとして、中俣の溪谷を溯つて、鹽見岳の山麓を巡れる際に於て、新種スンシウヘウタンボク Lonicera Watanabeana Makino. を採集した。當時既に花期を過ぎて居つたから、此花を見やうと云ふ考へと、荒川岳及三服峠の展望に於ける鹽見岳の壯觀とが、遂に余をして、同山に登らしめたのである。

大正三年七月、余は左の如き登山の計畫を立つ

たのである。

大河原の北、鹿鹽温泉に於て準備をして鹿鹽川を溯つて三服峠に出で、一旦中俣に下り、背面より鹽見岳に登つて、北荒川岳を經て、前回三峯川の上流に下り、市の瀨を經て歸宅。

人足は、豫め、鹿鹽小學校長田中惠吉君に依頼した。田中君は、能く同地方の地質礦物等を調査せられて居る。同月二十二日、余は、松本女子師範學校長矢澤米三郎、松本高等女學校教諭岡田邦松、諏訪中學校教諭牛山傳造の三君を待ち合せて、伊那町を出發した。南に下ること三里、赤穗より天龍川を渡つて東し、中澤村を經て市の瀨峠に上り、南鹿鹽街道を下つた、同日鹿鹽温泉まで行くべき豫定であつたが、出發が遲かつた爲に、峠の麓で、日が全く暮れた、大鹿村字北川に於て一泊せんとしたが、養蠶時の事とて、宿るべき旅舍がない、遂に北川分教場に行つて、一泊を乞ふた。

二十三日、雨を冒して、正午鹿鹽温泉に着いた、赤穗より北川まで約四里、北川より鹿鹽温泉まで、約三里である。當日は、鹿鹽小學校に教育會があつたので、同會に出席した諸君が訪問して呉れた。前澤淵月君は、余等と同行すべく待合せて居られた。或は快談湧くが如く、或は惡筆を揮ふて扇面を汚すなどして、雨天の半日を過した。翌朝は、まだ雨が晴れない、遂に午後出發することにした、人足は、中峯の獵師宮下筆五郎を頭に、外四名であつた。宮下氏は、附近の地理に詳しいのみならず、體力も强くて、好き案内者である。鹿鹿川に沿つて登ること約二十町で、澤井の小部落に達する、此間、各種の片麻岩、霰石等があつて、研究の資料に富んで居る。尙は溪に沿つて登ること一里にして、廣河原に達する此所には、經木製造所がある。吾等は、其一つの小屋を占領して一泊することにした、澤井學校長井深伊一君は、此處まで吾等を送つて呉れた、澤井廣河原間には、ウテフラン、ギンバイサウ、サハルリサウ等がある。

廿四日は、尙ほ溪を溯つた、登ること約二里の所に於て、溪は二つに分れて居る。北は、本谷山より出づるもので、南は、三服峠所近より來るものである。南股の小溪を登ると、ハクセンナヅナ、

ヤツガタケシノブ、コイハザクラ、ヒメイハザクラ等の珍品がある。溪盡きて、尙ほ同方面に進むと、豐口より三服峠に通ずる山路に出るのであるが、吾等は少しく路を左に取つた爲に、偃松帶の一小峯に出で、三服峠を發見するに苦んだが、霧の晴間から、小河内岳が前面に横はるを見て、中俣の溪が其間に在るを知つた。そこで、一行は、ひた走りに偃松の間を下つて、中俣に出て溪に從つて、約一里を下つた。左岸に一岩窟を求めて、其下に露營した、溪畔には、ヒメクモマグサ、スンシウヘウタンボク等があつたが、スンシウヘウタンボクは、既に花期を過ぎて居つた。オホバヘウタンボク、オホヘウタンボク等も採集した。一體赤石山系には、ヘウタンボクの種類が多い、前者の外、コゴメヘウタンボク、クロバナヘウタンボク等の珍品、及ヤブヘウタンボク等がある。鹿鹽温泉から、中俣露營地まで、約六里であつて、一日程であるが、雨天の爲に、一日半を費したのである。

廿五日は、露營地から數町を溯つて、右方鹽見の溪谷に沿つて登つた。路は意外に容易で、一里餘で頂上に行くことが出來る。前澤君は、天候の關係上、寫眞撮影の目的を達すべく、不可能なるのを見て、吾々と別れて直に歸ることになつた。頂上に至る間に於て、シロウマチドリ、ジンエウスイバ、クロユリ、タカネシダ、シコタンサウ、チシマアマナ等を採集した。頂上に於ては、岡田邦松君が、唯一株のマンテマ屬の新種を發見したが、遺憾ながら、既に花期を過ぎて居つた。次で余等は、仙丈岳に於て之を採集して、余は其二株を培養して、本年五月上旬に、其花を見ることが出來た。近日、牧野理科大學講師によつて、命名發表せられんとして居るが、多分、タカネマンテマ Silene Okadai Makino. と命名せらるゝであらう。

頂上から山脊に沿つて、東北に降り、北荒川岳の斷崖に達せんとする所から、右方に降つて、南荒川の溪に出た頂上から此處まで、約一里半であらう。此間に、タカネキスミレ、タテヤマキンバイ、スンシウヘウタンボク等を採集した。

溪を下ること十餘町で、右岸の森林中に露營した、本日は時々降雨があつて、多少の困難を嘗めた、特に降路は、隨分難路である。大正二年八月、武田、梅澤兩君は、吾等の降路と、反對の方面を上下された由だが、此方面の方が、或は容易であるであらう。

廿六日は、荒川の渡を經て、中山を越え、小瀨戸に出て丶、市の瀨に一泊し、翌日歸宅したが、同方面の記事は、山岳第四年三號、及九年一號の、山川、梅澤兩君の記行文に詳しいから、畧することにした。要するに、鹽見岳は、植物の珍種に富むことは、稀に見る所であつて、而も山の深きことは、多く見ざる所である。登山家の研究を待ちつ丶あるが如く見ゆるのである。(河野齡藏)

ガイドの事ども

御手紙難有く頂戴いたしました、此暑さに何の御變りもなく益々御奮鬪の事御祝申し上ます。

ガイドの手帖の件は一寸中村孝二郎氏から伺ひましたが、今村さんが急用が起つて見合せになりましたので詳しく御聞き申しはしません、兎に角此度の御思立は非常に面白い事と思ひますし、私も常々その樣な考がありましたので、それが會の方からやつて頂く事になると此上もない嬉しい事に存じます。

それにつきまして此地方の案内者登山者の狀況を御報しやうと思ひます、以下隨分手前味噌やら我田引水獨りよがり見な文句が澤山入ると思ひますが、毎日の澤山の紹介狀に案内者の周旋割當に氣を揉んでゐる私の言譯と見て御聞き下さいませ。

今朝六時から發つた人達は

一高旅行部、第二隊、五人、針木、五色、立山、劔岳

箕作氏、針木、五色、藥師、黑部五郎、鷲羽、烏帽子

小倉三郎氏外一人、平、東澤、黑岳、槍、穗高、上高地

濱谷泰次郎氏——烏帽子、槍、上高地

中村孝二郎氏——針木、藥師、笠ヶ岳、蒲田、上高地の五組五方面です。

一高の人達と箕作氏は昨日出發の筈でしたのが

例年當町の鎭守祭が（十六日、十七日）ありますので、荷擔人夫を見出すに非常な苦心をしました爲遂一日餘計に滯在して仕舞つたのです、此中中村氏の笠ヶ岳は未だ大町人夫に此方面の經驗のあるものが皆無なのですが、之れは玉作といふ頗る猪武者でまけず嫌な奴をつけてやりました、知らない所へ行くのを興味がるので之は保證して成功するだらうと思ひます、それに小倉氏の槍、穗高縱走も無經驗の又吉ですが大丈夫と思ひます。

劔行は昨年時分から急に增へたやうで案外に樂だつたといふ先登攀者の言葉から山に餘り慣れない人までが不用意に劔を志す人が澤山あります。

もう今年などは、針木から立山だけですます人なんかありません、それはもう餘り普通の路條のやうに思はれて來たらしいのです。

一、籠川を溯るもの丶中

1　針木越、立山、一ノ越、ザラ富山
2　劔岳、小黑部
3　五色——藥師、有峯
4　東澤——黑岳——赤牛、扇澤及白澤よりする後立連峯の縱走
5　蓮華、七倉、烏帽子

二、鹿島谷を入るもの

鹿島槍、八峯、五龍、白馬、祖父

三、高瀨溪方面

一湯股、水俣、槍、常念、上高地
一東澤越——中房
一烏帽子より峯傳にて槍、穗高、上高地に至るもの。

まづざつと以上の樣ですからつまり、北は白馬から南は笠、穗高、西は藥師一帶にまで及ぶ殆んど北アルプスの大伽藍を包んでをります。

從つていづれの方面なりとも應諾し得る案內者は今の所三四人位しかありません。

大抵十日位の山旅行計りですから一時にどうと來られた登山客の爲に各方面を知る案內人を取られると其留守の間がどの位まごつくか知れませんまだ〳〵大町で山を案內する者は尠いのですから、今後も出來るだけガイド養成が必要だと心がけてをります。

登山客の人さへ見ると「白馬山ですか」なんて聞く人や、あの山はときかれると、「アルプス山です」なんて暢氣な返事をする大町の人達の中に、此西の山岳の自信ある案内人が幾人見出す事が出來るものでせう。

昨年あたりまで大町から山に入る人はせい〳〵十組位しかなつたのですから。

一體大町は登山ステーションとして、日本のいづれの所よりも比較的廣い案内區域を有つといふ事です。

「大町を出發點として如何なる山岳旅行を計畫し得るや」と問はれた時に私はまづ前の樣に項を分たねばなりません。

一方面に限つて案内可能るものは割合に增しましたが、此は三年位は養成中です。

人夫も特に「山の人夫」としての理想は第一に體が丈夫で元氣がよく正直で山生活の要領を心得て氣のつくもの。

登山客を慰藉して時には諧謔の一つ位吐く奴、そして山をよく知るものであらねばなりませんから仲々面倒です。

それに案内者として他の人夫を指導し取締る丈の技倆も必要ですから。

今の所手帖を渡すに足るものは

一、又吉　山の「感」のよい事は第一位です。體格はもと土地の村相撲の大關で大砲の樣な面つきです。

二、玉作　慓悍といふ方です强情で進んで歸る事を知らぬといふ勇者です。

三、林藏　比較的思慮深く落付きがあります。

以上の三名位です。

其他に將來のあるのが黑岩直吉、久吉、靜馬、榮太郎などです。

兵三郎も使ひ樣ではいゝ人夫ですが今年は春から岩茸取りに專門で案内を辭しました。

まだ野口邊に多少ある樣ですが今迄大出邊まで私が自轉車をとばせたりしてゐたが出來るなら近い町の中に見付けたいので今では殆んど町の者ばかりです。

十四日に出發された、

◎雜　錄　ガイドの事ども

長谷川如是閑、碧梧桐、一戸理學博士の三氏（針木、蓮華、七倉、烏帽子、上高地）第一高等學校旅行部第一隊（劒）が今年の第一先鋒です。

今年は時候が二十日程も遲れてゐるにも係はらず登山者のおしかけ方が割合に早やかつたので大變まごつきました。

豫め御通知があつて、案内人の割當の出來てゐたのはようございましたけれど急に來られる人に困ります。

然し大町から入られる位の方は皆、「山」を理解しておいでる方ばかりですから、其樣な事もどの位張合があるか知れません二十萬分の地圖なんかに赤い鉛筆で條をつけて「此處から立山、劒、をのぼらうと思ふからむすびを明日十ばかり賴む」なんて人は來なくなりました、そんな時私はどうして此山を說明していゝか解らなくなつた事が度々でした。

今後益々出來るだけの事は好きな鄕土の山の爲に盡したいと嬉んでやつてゐます。

たゞ山中の整はぬ勝ちですから種々旅客に對しても御不便の點が多い事と思ひます。

何だか句調が自家廣告になり相ですからやめます。

ガイドの手帖については山人達が私達の心持に共鳴しない點がある爲多少の困難があると思ひますが、私の決心はなるべく、大町地方の案内者を理想に近く養成したいと思つてゐます。

いづれ詳しい御相談をお聞きした上に申上ます

今年の雪の量はすばらしいものだ相です針木越などは大澤からスッカリ峠の上まで一續きださうです。

劒なんか嘸かしと想ひます。

今日は西の山脈が、スッカリ晴れてゐます、今頃峯を渡る人達の上が想はれて早く山に入り度くてなりません。

それに之は御意見を伺ひたいと思ひますが平の針線渡しが昨年の大水の時切れて仕舞つて今では川を越さねばならない相ですが、それについて此架線の費用を有志の人から集められたならば工事

は私共が受けて人夫の數人と共力して勞力を犧牲にいたしたいと思ふのですが如何でせうか、四十圓足らずで出來る樣に人夫はいつてゐます。

今まで品右衛門が修理して一人から十錢づゝとつてゐました。

黑部の籠渡は兎に角名物の一つですし、此處を渡る人も多いのですから是非無くして仕舞ひ度くないのです。

總ての事について私は大きな責任を感じてゐますから、先年ある山で寄附金を貪つた樣な事はしたく思ひません。

何しろ私は微力ですから、心あるかたの御助力を仰がねばなりません。

（大正四、七、一八、百瀨愼太郎）

山岳の効用

山岳と人生と云ふ樣な大きな問題になつて來ると其効用は、きりも限りもない程あるが、私の常に最も深く感じて居るのは、自然科學より見たる山岳の効用である。無理に小理窟をつけて山岳をおだて上げるのではないが、これより少しく其効用を述べて見たいと思ふ。

一、山岳と水源

山岳に源を發する大河の流れは、夏季數十日の旱天に逢ふても斷水を見ることが少ない。それは降雨の際多量の水分を保持包含し、其一部分を漸次に流下せしむるがためであらう。然し單に雨水の供給のみによりて、河川の源を造るものとすれば、山岳が雨水を包含し得る量には限りがあるから、或る程度以上に永く晴天が續くと、終には其元がきれて斷水を免れない。山岳と雖も原料なくして水を製造する事は出來ないから、夏季に於て斷水する川がないでもない。然しそれらは凡て山岳とも言ひ得ない低い丘陵などから源を發する川に多いので、高大なる山岳らしい山岳を水源とする河川には斷水を見ることは甚だ少ない。其理田とする處は、氷雪のためとか或は水源流域廣大にして、これに包含せらる總水量が大なるためであるとか、或は多量の水が長時間に流下するから其

間に降雨を催す事があり、高山は低山性の山脈よりも私雨を生じ易く從つて雨量が豐富であが爲めとか、種々樣々に說明せらるゝけれども、水源山岳の海面高の高い程斷水の少ないに就ては前述の氷雪、雨水の保持量、降雨量の關係以外に尙ほ大なる原因が潛んで居る樣に思はれる。

其一、岩もる水

高山は大氣が寒冷であつて、對比濕度が大であるから、水蒸氣が凝結して雲や霧や雨にならないにしても、其空氣が非常に濕つて居る。低地に於て朝露を結ぶが如く、高山には四六時中始終露を結ぶ事がある。山骨の岩石は熱の良導體であるから冷える時は早速に冷却して露を結ぶにも都合がよい、岩石に結んだ露は滑めらかな膚に沿ふて岩根に浸み込み、以て其附近を潤ふし、漸次に滲透又は流下して、終には地下水となり、泉水となり、溪流となつて河川の水源を養ふものである。故に假令空中の濕氣が雨を降らす程度に達しない時でも、岩もる水が各所より集合して水源が涸渴しない。當分は雨がなくとも始終山から水の出るのを見て山には自然の水の無盡藏でもあるかの樣に一般の人が言ふのも無理ではないと思ふ。

其二、葎の雫、萩の下露

植物は葉面よりの發散作用により、葉末に雫を生ずるにしても、空氣が暖いか又は乾燥して居ると、雫とならずに水蒸氣のまゝで空氣中に蒸散する。然るに反對に山岳の如く氣温が低く濕氣に富んで居つて、蒸發力の弱い場合即ち水蒸氣の飽和點に近い狀態にありては葉面よりの發散水蒸氣が凝結して、葉末の雫になる、葉面其れ自身より發散する水蒸氣ばかりでなく、外圍の濕つた空氣からも多少の水蒸氣を供給せらるゝ樣になるから益々大粒の雫となり、それが落ちて水源を潤ふし、岩もる水と共同して、旱天續きの際にも潺々滾々として續いて出る樣になる。これが即ち雨水の供給がなくとも、山岳には水分の製造所があるかの如く容易に斷水しない一因であらう。

前述二つの作用は海面高の高い山岳と云ふ都合のよいものがあるがため前述の作用が益々敏活に行はれ河川の水源を造つて呉れる。

其三、雨　量

林學者が普通、森林効用の一つとして數ふる、雨量增加の關係なども、海面高大なる山岳を舞臺とする森林に限り言ひ得る事であつて、森林がなくとも山岳のみで充分雨量增加の作用を持つて居る唯だ森林があると此作用を少しく增長せしむるに過ぎない。

多濕温暖なる低空の風が山岳に遮止せられ、同時に山坂に沿ふて吹き上げられ寒冷なる上空に達して雲雨を生ずる事や、山岳の凹凸極りなりなき傾斜地より生ずる濃厚なる水蒸氣が、寒冷な上空に吸ひ込まれ、山岳附近の空氣が露點に達し易しい等の關係によつて、山岳さへあれば森林がなくとも降雨の增加をなし得る事が明かである。

如何なる方面から見ても山岳は河川の水源を造るに都合よく出來て居る。陸地が若し低地のみで山岳なかりせば其結果如何になるであらう。

二、緯度の縮圖

緯度の相違即ち水平的の南北距離に依りて生ずる温度の變化、植物の分布及其群落の狀態を、垂直的短距離に縮めて、之れを短時間に觀察し得るものは、山岳を置いて外にない。甚だ便利な造化の博物館と言はねばならぬ。

三、地文地實の研究

平地のみであれば地殼の斷面は、井戸を掘る場合とか地辷りとか斷層の生じた場合でなければ容易に見られないが、山岳があると自然に種々な地質地層が見られる。

上空に於ける空氣の壓力、温度、濕度、沸騰點、密度、氣流等の研究は、航空機が完全に發達しない限り山岳によつてのみなし得る事である。

山高きを以て貴からず木あるを以て貴しとすと云ふのは餘り感心出來ない。高山の貴さは必ずしも木あるを要しない。前述一乃至三に於けるが如く、高く上空に聳えて居ると云ふ點が既に種々な効用をなして居る。

四、林木の生長

植物根が其背日性により、根を地下に伸長せしむる場合に、餘り深く地底に這入り込んでは、空氣の流通不可能となり、酸素の缺乏を來たし、土

地養分の分解も行はれず、一時養料が出來たにしても、脫酸作用により却つて有毒な物に變化する事もあるから、大木になると比較的上面の方に根を伸ばすものである。而して平地に於ては比較的淺い所に於ても、前記の作用を起し易しいが、山岳の如き傾斜地に於ては、平地に於けるものと垂直的に同一の深さであつても、空氣と絕緣せらるること稀れである。何んとなれば樹根は斜面に直角に浸入せずに、矢張最初は垂直に近い方面を取つて這入るから、餘程深入りした樣でも斜面に直角に其深さを測るときは、左程深いものでない。外圍の空氣との距離は斜面に直角なる深さを以て現はしてもよいから、根が深入りしても、外圍の空氣を遠ざかることが少ない。故に他の總ての條件が同一であるとすれば、酸素の供給不十分なるがために起る障害は傾斜地に少ないと言てよい。

林木が自衛上支柱となるべき直根を造り、其根端が土壤の脫酸作用を起すべき深所に達すると、そろ〳〵上部の方に根を張らうとするが、其際傾斜地は其水平面積よりも斜面積即ち、表面々積が大なるものなれば上部の地層に根を出す場合は平地よりも有利である。森林樹木の如き長大なる根を有する植物を生せしむるには山岳の如き傾斜地が好都合である。海面高を登るに從つて溫度の低下により山岳は植物を發生し得ない樣になる。かかる場合は林木の生長の不可能なる事言ふまでもないが、前述の如き岩もる水、降雨量の增加により、下腹の林木を養ひ、雄大なる山岳の大森林を形つくるのである。

五、結　論

要之山岳は、雨水を度外視するも或る程度までは水源を潤ふす素養があり、加之雨水の豐富なるがため、人類の生活に最も關係深き河川の源泉となり、地文、地質、氣象、動植物等の如き凡ての自然科學の研究を至便ならしめ、林木の生育にも便なるものであれば、山岳と文藝と云ふが如きはれやかなる方面以外、科學的地味なる方面にも亦、山岳は大なる効用を有して居ると云つてよからうと思ふ。以上の如き意味に於て私は山岳を尊重する次第である。(山本德三郎)

机上談山

○高山の頂上では飯米がよく煮えない、と云ふ事がよくいろんな書物に書いてある、中學程度の物理書や、專門學校程度の入學試驗問題等に、その説明を求めて居るのを見受る事がある、恐らくそれは高い處では氣壓が低く、從て水の沸騰點の温度が低いから、飯米がよく煮熟さぬのだとの答を豫期して居るものらしく思はれるが、左樣とすればこれは事實に遠い答だと自分は思ひたい、高山と云ふのは何米位から上を指すのかは分らないから、ヒマラヤの高い峯へでも行つたら如何かは知らないが、日本では富士山の頂上に於てすら飯米は充分ふつくり作る事が出來るのである、思ふに米をかしぐには決して百度近くの温度を要するものではないので、それよりずつと低い温度でも充分煮熟する事が出來るものであらう、然し高い處では低地に比べては沸騰點が低い即ち水が蒸發しやすい、それ故下でたく時より多量の水を入れないと水がたつてしまつて不足する事になる、爲に飯に心が出來るのであらう、平地でも水加減が少いと飯に心が出來る事は誰も知る事である、で充分澤山水を使へば決して半熟の飯が出來る樣な事はないのである、それ故もし高山の頂に於て飯米がよく煮えないのは何故かとの問ひがあつたら、山の上では水が得にくいので水を惜むからだと答へればいゝのだと思ふ、然しこの答はものを知らない試驗官には承知されないであらう。

○山にちと綠のない事だが事ついでに書くが、釜のふたは何故重いのがよいか、と云ふ事もよく問題になつて居る、これは恐らく重いほど中の壓力が高まり得るから、釜中の水の沸騰點が高くなり得るので飯がうまくたけるのだと答へれば滿足されるのだらうと思ふ、然しそれなら蓋と釜の綠とは蒸氣が蓋を上げなければもらぬ樣に充分シックリ合ふ樣になつて居ねばならぬ、そんな事は一寸出來易くはあるまい、蓋と釜との間からどん〳〵蒸氣がもるんでは中の壓力は左して高くなりさうにも思へない、而して米を煮るのには左まで高い温度を要しないものである事は、鍋の樣な蓋のひ

どくゆるいもので、高い山の上でも、水と火の加減さへうまくすれば充分フックリ甘い飯を作り得るのであるから、事實分る事と思ふ、左すれば釜の蓋が重いと云ふ事は、一寸さはつた位では動かない、即ち蓋が一寸した事で落ちてしまう樣な事がないと云ふ點に於て利益がある位なものなのであらうかと思ふ。

○雪崩といふ現象は一體どんな事を云ふのであらうか、春先になつて山の雪が辷り落ちるのを云ふのか、雪のまだ柔かい時分に上の方で雪が動きはじめたのが、段々雪がそれについて大きく崩れおちる事を云ふのであらうか、南谿の葡萄嶺の記行には前者をナダレ後者をアハと云ふ樣に書いてある、アハと云ふ詞は一向自分は耳にしないが、それも字義から云へば雪崩と書く事にしてもよさゝうだ、然しナダレを雪崩と普通に書くからそれに從ふ事にせねばなるまい。

○アハの成因は南谿の記文によく書いてある「……アハといふは、雪最中降時分に、山上の木の梢より雪泡一つ落るとき、其アハ段々ころび落るに從ひ、雪こかしをする如く次第に大に成り、麓に至る頃は、大山の如くに成りて落下る……」とまことに左樣であらう、左すれば文字は泡とあてて然るべきもの、樣だが、それでは何だか物足りない、泡崩とでもしたら如何なものであらうか、でこれは何も葡萄山に限つた事でなく方々にある現象であらうと思へる、やゝ傾斜が急な山ならば屹度おこる事があると思ふ、何か他に名稱がありはしまいか、御存じの方の御一報を願ひたいものである。

○雪崩の成因としては、普通雪が重疊するので、下の方の雪は大なる壓力を受ける、水は元來壓力を加へられると融解點が下降するものなので、零度ではとけて水になる、そこで山のはだの斜面を辷る樣になるのだ、と斯樣な風に云て居る樣である、左樣なれば雪崩は雪の一番多く積つた、重い時に起りさうなものである、然るに實際はやゝ寒氣がゆるんで雪解がはじまつて、雪量が少しへりかけた時に起る樣である、これでは如何にも前の説明と一寸合ひ難くい樣である、と云て氣温が高

くなつたからと云つて、山骨があたゝまつて、下から雪をあたゝめて下方の雪を解かすと云ふ樣な事は、山骨の岩石が可なり熱の不導體である事から考へても、あり得ない事である、又氷にしても地表にしても零度以下になり得ない筈はないものの故、上の方に雪が積んで來れば下積の方にある氷は漸々低温になつて、それでとけずに居る事が出來樣と思ふ、自分はこの說明はこんな風にしたら少しはよからうかと思ふ、即ち氣温が高くなると上面の雪がとけて、その水が漸々下へしみ込む、勿論これは寒い時でも太陽熱の輻射によつてあたためられて上面はとけるであらうが、下の方は温度が低いの故、とけて出來た水が少量であると下へ行くと零度以下の處であるからそこで凍つてしまふではあらうが、氣温が上つた爲にとけるとなれば相當に多量の水が出來る、水は零度以下には殆んどならないの故、下へ行けば、下はより低い温度にあるの故、そこを温める樣な事になつて漸漸そこをとかして下の方へしみ込む、斯くしてその滲みこむ水が底に達して、其處を零度に迄あたためれば、壓を受けた氷は零度では勿論解けるからして、水になつて山に沿ふて上の雪がすべる事が出來る樣になつて斯くして雪崩が起るのである、と斯樣だ。

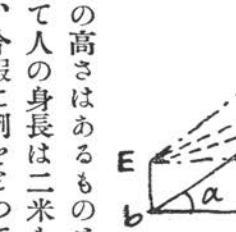
○辻村君の講演をきいた處によると、同君等の遇はれた「アバランシ」は、同君等の少し上から辷りはじめたものらしい、で種々の樣子から考へて、日本のナダレに相當するものだと思ふ、でその「アバランシ」は「アルプス」では午前は稀で午後に起ると云ふ事から考へても、上の重さで底の雪がとける爲のみだとは思ひにくい（午後になると重力が強くなると云ふ事はありやう筈もないの故）、上の雪の重さで下の方が壓力を受けて居る處へ、氣温が上つた爲に雪がとけて出來た、水が行つて、そこの温度を上げるが爲にそこの雪がとけて辷りはじめるのだと思ふ方が自分には尤もらしい。

○雪崩は必ず全部の雪をおとしはしない、これは高い處の雪が前云た成因で動きはじめると、その重みがかゝつて低い方のは、無理に押しおとされるのであらうから、必ずしも雪が底まではとれな

いのでもあらうが、高い成因になる處でも、相當の深さの處の雪がとけると、それから上の部分だけが、それより下の雪の上を辷ると云ふ事になる事が出來得るのだらうと思ふ、要するにそこより上の部分の重さと、其處の傾斜と、其處の雪と雪との間に水が入つた場合の靜止摩擦率との關係で、種々の場合が起り得るのであらう。

○氷河の流れる理由としても、多くの人は上の重さで底部の氷が壓力を加へられ、その融解點が下降して爲に一部とけて水を生じ、山骨と氷との間の靜止摩擦が小さくなるからであると說いて居る樣である、然し氷と云ふものはいくら低い溫度にでもなり得るものなの故、底部の壓力は大きくとも、そこの部分の溫度がそれに應じて低いのであつたなら、必ずしも解けるとはきまつて居まい、壓力を加へられしかも低い溫度になつた氷は、通溫で通常氣壓の下にあるものとは氷は氷でも多少その種々な性質を異にする事があり得やう、そんな事等の爲に山骨と氷との間の摩擦率が變つて來ると云ふ樣な事がありはしまいか、どうも底部の氷が上壓の爲にとけると云ふ說明は自分には充分なものと思ひ得ないのである。

○前號の山本德三郎氏の「山岳の聯想」中に傾斜面の傾斜の感じられ方に就ての說明が見える、それはbに立つ人の身長がEbだけあるとすると角aだけの傾斜を有する山でもBは角DEBにAは角DEAに見えるから高い山ほど角が割增されて見えるとの事である樣だがそれは一因にはなつても主因ではあるまいとしか考へられない、低い崖か何かなら知らぬこと山と云へば低いのでも數百米の高さはあるものとしか思はれない、それに對して人の身長は二米もある人はめつたにはあるまい、今假に例をとつてAが千米、Bが百米の高さをもつて居てaが三十度であつたとする、左樣するとDEBは廿九度卅分、DEAは廿九度五十七分程になる樣だ、卅分やそこらの差が目測で分つ



て來る程熟練した目を持て居る人は殆んど無い樣であるから、この說明は殆んどその主なる處に觸れて居ないとしか思へない、尙同氏はEから山頂を見た線と水平面とのなす角は山が高くなるに從て漸漸增大し山が無限に高くなればその角は九十度になると推論されたがそれは全く誤である、前圖に於てDEを水平bcにEFをその傾斜面bAに平行だとすると、山高が無限大になつた時の視線はEFに相當する事となり、即ち求むる角はaに等しくなるまでの事である、而して山の高さが無限大でない限りはDEAの角は常にaより小さいの故この說明によればその傾斜は實際よりは緩に見える事になると思ふ、これを以て北齋の繪を說明する資料とはなし難いと思ふ、山の傾斜は急に見えるものなのであるから急に畫いたのだと云ふ事で、繪の方の說明は充分なのではあるまいか。

○同記文中の山岳に雲霧の生じ易き理由に就ても自分は能く同意する譯には行かない、山の樣に地面の條件が樣々である處で蒸發の大小が表面積の大小に比例すると云ふ事は云つては惡いと思ふ、同氏は他の條件が同一なればとの假定を前置されたが、他の條件が同一だと云ふ事があり得る場合は殆んど無いの故、その條件を入れると云ふ事は實際にあてはまらないと云ふ事を暗示して居るのだと思ふ、而して水蒸氣の蒸發量の多少は、水のある處と岩ばかりの處とでは比較になる程度の筈では決して無いのであるから、一枚岩の崖等はその表面が雨か何かで濕つて居る時でゝもなければ殆その表面からは水は出すまいではなからうか。

○山で日に燒けるのを防ぐのに、傘や笠を使ふ事が、左して効果があがらない樣に思へる、これは山では皮膚をいためる紫外光線の量が平地よりも比較的多いからでもあらうが、山の肌の輻射が平地よりひどいので日光が地表に當つたそこの輻射が體をやくのがひどい爲である事も考へに入れる必要があると思ふ、それに對しては傘や笠は、少しも役に立たないのみならず、時としては下から輻射して來た光を受てそれから又輻射して顏に集めると云ふ樣な役をして却て害をなす事があるかも知れない、充分に防ぐにはどうでも皮膚を包ん

で、外に出さぬ樣にしなければなるまい、左もなければ日にやけぬ藥を使ふか、一番いゝのは獵師の樣に皮膚を充分ならしてやけても何うもならない樣にする事だと思ふ。

○登山は非常な健康法だと云ふ樣に說く人がある、抵抗療法的の考へからであるならば或は左樣であらうが、普通の生活よりも運動もひどいし、食物も撰びにくいし、食時もむらで、睡眠も、休養も不充分な事が多いし、土地も濕りすぎたり乾き過ぎたりするのであるから、必ずしも常にいゝ効果を齎すべしとは自分は思はない、而して山へ行た爲に病氣になつた人の例は決して少くないのである、自分は登山家としては山が好きな故に登る人がほしいので、健康になりたい爲に山に登る人はほしくないと思ふ、そんな人は登山家としては眞面目を缺いて居るとしか思へない、そんな考への人には山に登つて貰ひたくないと思ふ、勝手で登るのは差支へない（自分は山が人爲で神聖を汚される等とは少しも思はないから）事だがそんな人に登山を勸める事は遠慮すべき事であると思ひたいのである。

○科學の表面だけを見て、內容を知らないものは、人を毒する點に於て何も知らない人より惡い樣だ、生半可な連中は登山すると、地質や動植物について自分の貧弱な猿智慧で判斷していゝ加減な斷定を下す、而してそれを發表する、左樣すると他人を疑ふと云ふ事――この事が眞正の科學的研究には非常に大切なものなので、何でも彼でも疑ふのは惡いが、信用するには信用するに充分な材料が無くてはならないものなのだ――を罪惡の樣に心得て居る附加雷同の連中がそれを取次で段々ひろめてしまふ、その爲に眞正なる研究家がその研究を發表しても先入主となる爲に仲々信用されないで困る事が多い、素人は專門家にきく事なくして科學的の見解は發表しない樣にしてほしい、自己の知識の貧弱なるが爲に、うその新種や新現象が世の中に發表される事が往々にしてある、それもこの類である、新らしいものは必ず專門家によつて發表されるべきものである、素人はちと身の程を考へる必要あると思ふ、自分が見聞しないも

のは必ずしも新らしいんぢやないのだ。

○動植物の名や地質、岩石の名等を書てある記行は何だか信用がおけるもゝ樣に考へる事は一つの迷信である場合が多い、その記文の作者が素人である時には實際その處を通つた專門家にきくとそれらが誤まつて居る事が多いのである、專門家でさへ誤がある事が無い限りではないのである、記文の作者がなまじ科學の上面をのぞいた事があるだけにこんな事が出來るので、何も書かない人の方がこんな時には餘程惡くない、この上滑りがするのは少し學問のある、本位ゐ讀める人に多い、外國人の多くがこの病を持つて居る、この事は記文をよむ人の大に注意せねばならぬ事だと思ふ。

○山から妙な處へ問題が飛んでしまつた、この邊で筆をとめて今度又出直す事としやう。(ツルモドキ生)

登山地圖に就いて

本誌に附せる登山地圖は、新しき考案に由り編纂せるものにして、順次各主要なる山岳に及ぼすべき心組にして、其第一着手として越中劍岳を選出したり、本圖編輯に就ては、成可く多數の資料を蒐集して正確なるを勉めたりと雖も、多少の誤謬なきを保せず、此等に就ては觀者の忠告を希望す

本圖は地形を詳しく知るの目的に非ざるを以て等高線は百米突毎に記せり、露營地に就ては記號以外尙ほ多少の適地あるべきを信ず、殘雪に就ては年と共に其量異るべきを以て圖には大體の所を記せり、瀑は、殘雪多き時は隱れ、少き時は現るるものあり、此等も知れる限りは記入せり。

從來稱呼なかりし地名を一々命名せり、此等は其必要を認めたればなり、又地名に就ては各其土地に由りて稱呼を異にするを以て、他を以て一を非となす可らず、必要なるものは何れも併せ記せり。

本圖編纂に就ては、陸地測量部は五萬分一圖を原圖として使用するを許可されたり、其他冠松次郎、吉澤庄作、大木操、茨木猪之吉諸氏より資料の蒐集に就て多大の助力を得たり記して感謝の意

を表す。

本圖の意匠體裁に就ては本會は相當權利を保有せり。

本圖は獨り會員諸君に頒布するのみならず、一般登山家に便せん爲め、木綿の裏打ちをなし、携帶上至便なる形となして發賣する事とせり。

一部の價金卅錢（郵稅貳錢）にして事務所に於て發賣せり尙ほ左記の所に供托し置きたれば就て求められたし。

東京市芝區露月町三番地　健全社書店（電芝一七七五番）

各地の山岳會彙報（二）

山岳會の設立さるゝもの多し、本會は此欄を特設して、同志の機關たらしめんとす。

京都組合銀行徒弟講習所山岳幻燈講演記事

同所では生徒、卒業生並に組合銀行員有志が毎月一回必ず遠足會を催し、近郊の山てふ山は皆踏破に踏破を重ねつゝある、處へ昨秋當地の日本山岳會關西大會開催と、此程の大坂の同大會とで、山岳熱が益々高くなつて、堪へ切れない。其處へ日頃同所の生徒や卒業生が、登山家として遠足家として運動家として敬慕してゐる同所理事今村幸男氏の盡力で、大坂の大會へ態々來て吳れた幹事高野鷹藏氏及大坂の大會の主催者加賀正太郎氏を煩はして同所で一夕の幻燈講演をやつて貰ふ事となつた。

それは六月二十三日の夕であつた、定刻七時と云ふに五時頃から來聽者が來るわ來るわ、見る〳〵うちに、講堂が立錐の餘地も無くなつた、その中には、京都大學の山岳趣味家として聞えた田邊、小川、中島、雉本、青柳の諸博士、關西美術界の泰斗、春舉、華香兩衞伯等初め、日本山岳會員京都在住者、組合銀行の支配人副支配人連等の來聽もあつた。

今夕は幻燈講演が主であるが、來聽者の來方が早く、日の暮れ方が遲いため、今村氏は豫め自身で今日の午後作成せられ置いた日本アルプス略圖を携へて登壇、開會の辭、高野、加賀兩氏紹介を兼ねて日本アルプスの位置や、景色や、登山の事等につき滔々と講述せられ、盡きる處が知れなかつたが、日が暮れ初めて、幻燈講演の時刻來るにより、聽衆に惜しがられて中止、代りに、期待して居つた高野氏、急霰の如き拍手の下に登壇、日本アルプスの幻燈數十枚につき懇篤なる說明を、丁度アルプス溪流の如く淸く且滔々として述べられた、今夕は、アルプスと云ふものに接するのが初めてと云ふ人が多い丈けに、幻燈が一枚一枚代る毎に、驚きと喜びと珍しさに「アッ」と云ふ感投詞が滿堂に響き亘る、殊

に鎗の鋒尖や。山間の温泉や、五色ヶ原の植物や、その他雪に富む山々の影が表はるゝ毎にその感投詞と拍手とが永劫に止まないのか知らと怪まれるばかりであつた、尤も時々新米の幻燈技師小島榮君と僕とが、幻燈器の停電をやるものだから多少愉快の度を減じたかも知れないが却つて御愛嬌で善かつたかも知れない（と洪口上を申して置く）次ぎに加賀氏が碧壇、辻村氏が昨年撮つて歸つた歐洲アルプス數十枚につき説明をして呉れた、蒸し暑い晩であつたが、氏の涼しい音聲と、歐洲アルプスの雪とで、誰れも彼も、一齊に涼味を感じ、時が許せば夜の更くるを知らず、尚一層詳細に反覆して賞ひたかつたが、九時半と云ふに名殘惜しくも今々の會を閉ぢたのであつた。終に僕は同講習所の關係者の一人として、會員、卒業生、生徒一同を代表して高野、加賀、今村、小島榮の諸君の勞を多謝す。（大正四年六月、東生報）

山梨山岳會講演會

七月二十五日山梨山岳會第二回講演會は甲府市代官町相生小學校の講堂に開會された。

山梨山岳會は七月十六日の夜甲府商業會議所の樓上で市内に居住して居る會員丈けが集合して夏期大會に就いて協議會を開いた、會した者は、糸賀、佐々木、杉原、小澤、渋谷の諸氏と私の六人であつた、嘗つて會員で研學の爲め目下米國に居らるゝ田中氏と在京の會員青柳、安藤君の二人が、日本山岳會の幹事高野鷹藏理學士梅澤親光二氏が、夏期大會へ來て頂く事に就いて交渉輪旋につとめられたと云ふ事を糸賀氏から此夜聞いた私は會員の一人として二君の勞を多とする。

杉原君を煩はした、山梨山岳會夏期大會の辻張りは山國の甲府の町の其處此處に張り出された然して市から發行される新聞にも大會の開催が報ぜられた、自負するではないが少なくも昨年會員の活動に據つて山岳なるものは如何なるものであると云ふ事が幾分縣民の頭腦へ這入たらしい。

二十四日の午後五時四十分着の汽車で來られた高野、梅澤二氏を會員數名は停車場に迎へた、二氏旅館の手代の案内で人力車で錦町談話館へ行かれた、二氏の室は前栽を控へた、新築の座敷であつた、初對面の挨拶をすむと二氏と會員の間に山岳や溪谷の話が淒々と盡きなかつたが、長時間の汽車殊に炎暑の折柄隧道に次ぐ隧道で殆んど地下鐵道とも云ふべき中央線で來られた二氏の疲勞を思つて間もなく暇を告げて辭した。

二十五日は晴天で空靑く綿を飛ばしたやうな白き雲が浮動して居る山岳觀望の好日和であつた、西方の日本南アルプスの諸山が見え駒ヶ嶽や鳳凰山塊が見えた昨年登山した鳳凰山地藏嶽や御室の鞍部辻山などが何となく懷しくも思はれた。

自分を先頭として會員が參集した陳列品に忙殺された。陳列品は望月林學博士の赤石山脈見取圖や糸賀氏の出品の木版の甲斐國志や小島烏水氏著の日本アルプス四卷歐洲アルプスと日本アルプス繪葉書等であつた、高山植物は杉原氏の出品が裏白金梅、高根撫子、日光石楠花、コケ桃、大花ビランヂ、等で糸賀氏のが信濃撫子、トンボ草などあつた陳列品を展覽する入場者が午前中に多かつた

◎雜　錄　各地の山岳會彙報（二）

◎雜　錄　各地の山岳會彙報(二)

午前九時頃會場へ來たられた、高野、梅澤二氏は幻燈の器械や幕を取付けられた、糸賀幹事の開會の辭によつて會は開かれた同氏は開會の辭に併せて趣味ある山岳に關する講話をせられた然して暫の後午前の會は閉ぢられたのである。

午後二時半再び會は開かれた佐々木幹事の山岳四周の我が甲斐は山岳が生命である、時に山岳に登攀し大自然に鎔合し精神修養に資し體力養成に資せとの意を講述せられた一時會を再び閉ぢて午後五時頃再び會は開かれた、日本山岳幹事の梅澤氏は聽衆の拍手に迎へられて壇上の人となり日本山岳會の設立より現在に至る迄の會員の增加や會の閲歷を語られ又山岳に傳說の忽がせにすべからざる事又山岳と狼に就いて落葉松が狼になると云ふ其地方の山村の云ひ傳へや遂年狼が減少する事などに就いて約二時間半趣味饒かなる講演をせられた。

午後七時三十分から高野氏の說明で幻燈の映寫は開始せられた、歐洲アルプスの山岳と日本アルプスの相違せるを映畫にて示し日本アルプスの往古の氷河作用のサーカスや南日本アルプスの東方面にカールの多き事や、歐洲アルプスの氷河日本アルプス殘雪及雪田の雙鏡や高原の草花高山の花畑V字形U字形の溪谷溪流などに就いて懇切なる講述は一部の聽衆に非常なるサムシングを與へたと私は信ずる山岳宗徒の自分等にもいかに有趣味で且つ有益のもので事を告ぐると共に兩氏の長時間の勞を感謝するものである、午後十時幻燈の映寫は終つて會は閉會をした、幻燈の器械の取外しを濟まして相生小學校を辭去したのは十時三十五分頃であつて自分は歸宅して出直すのが億劫であつたから舞鶴公園を逍遙した此夜は月淸く空晴れて白峰山脈や駒ヶ嶽鳳凰山塊が明かに見られた、同夜十一時五十九分甲府發の夜行列車で歸へらるゝ高野、梅澤二氏を數名の會員と共に見送りした、慰勞の宴會をして二氏を招待する會員間に內相談があつたが時間の都合でそれをなし得なかつたのは少なからず遺憾に思はれた。(小佐野迢々)

慶應義塾山岳會の登山隊

拜啓殘暑の砌益々御健在の御事と賀し奉り候。

陳ば今回の當塾生の常念山脈縱走は兩回共に非常の愉快を以て終了仕り候前發隊は人員九名にて內田君之に加はり七月十五日より廿二日に終へ後發隊は人員十一名にて小生此中に加はり申候七月廿二日上野を發し廿三日眞夜中明科に下車其日は中房溫泉に泊り候翌日は天氣も宜ろしく一行衞天の勢ひにて燕岳に登り此の日尙餘力綽々たりしも同小屋場に泊り申し候翌廿五日は右手に三ツ岳、五郎岳、槍嶽等の連峯の壯觀を縱にしつゝ天井より常念を經て二俣池邊に野營仕り候倍も前の山端に月から寂寥の光胸震ひ申し候翌廿六日は槍嶽を極め槍澤のどうにて幕營杜鵑の刺すが如き鳴き聲に度々夢破られ申候翌廿七日梓川に沿ふて上高地に着きしは正午に候ひきそれより燒岳に登り翌廿八日一行分散仕り候出發に際し候ては初めての試として其成否少しく危まれ候ひしも非常の愉快を以て終へ候一行分散の後內田君と二人にて針木より五色原立山を經て劍岳の絕巓を極め候右登山御報告かたがた御無沙汰御詫まで。四日(槙　有恒拜)

京都一中山岳會團體旅行概報

關西の中學特に洛陽の青年を率ゐて日本アルプス旅行殊に第一回の登山は餘りに大なるものよりも寧ろ平易なるを選んだのである天候の順調なるのと思の外健脚の勇士であつたのとで大成功を以て終りを告げた次第である。

七月廿三日京都を出發木曾福島に一泊翌日御岳に登り頂上小屋に一泊夏の夜の月光に對して飽くなき火山美と四山の風光に浴し翌廿五日は鞍馬の景を探り王滝口より下山す。

廿六日松本より徒歩上高地に向ふ島々谷の種々のロマンスの話などきかされつゝ德本峠を越えたのは梓の川風身にしむたそがれ時であつた。

廿七日八時人夫三人によりて左に雄渾なる穗高の英姿を望みつつ幾度か梓川を渡りて三時に赤澤小屋へ着しこゝで半露營の夢を結んだ。白樺、樅などの密林より淡く流れ出づる原始の空氣、槍や穗高の深き〳〵谿間を溯れる千古雪消の流れに身も心もすつかり新らしく、夜は人夫大井庄吉の羚羊狩熊狩の話で焚火を圍んで眠に就く

廿八日午前八時黑百合、白山いちげなどの高山植物を採集しつつ槍ヶ岳鞍頂に達し十時二十餘丁の雪渓を走りつゝ五時に上高地溫泉に脚を延ばし廿九日は燒岳から大正池田代池まで見て松本に歸着三十日歸京一行十三名金井、駒澤先生の指導と會員岸本同行す。

八高山岳會の創立

昨年本校に入學仕候てより小生に取りて最も遺憾なりしは山岳會のなき事に候ひき、されば小生在學中本校にも山岳會を組織仕り度存じひそかに同志の友を求め居り候處數名を得たるのみならず山岳會を設立してはとのすゝめさへ有之候間愈々設立の事に決し會員矢田城太郎君其他五名の友人と相謀り趣意書と共に規定を發表したるは去月十七日に候ひき、本會の設立に關し教授間に大なる贊助を得たるは小生等の最も愉快とする所に御座候申すまでもなき事乍ら小生等の最も努力致し候事は本會の基礎をして健實ならしめんとする事に御座候。

目下會員十七名に候。

去月廿四日第一回旅行として江州伊吹山に登山仕候當日會するもの七名少雨を冒して山頂を究め北方雲間に白山雄姿を望み西方脚下雨に霧める琵琶の湖を眺めて快哉を叫び申候當日山頂の氣溫華氏五十一度（午後一時半）本年中更に第二回旅行を行ひ度今後益々活躍致すべく候間折にふれ通信仕るべく候。

八高山岳會規定

一　本會を八高山岳會と名づく

二　本會は登山及一般旅行を奬勵して高尚なる趣味性を涵養し併せて學術上の研究及德育に資するを以て目的とす

三　本會々員は隨時會合して談話會を開く

四　本會は休暇休日を利用して有志者の登山旅行をなす

五　會員

◎雜　錄

1　普通會員　本校生徒にして入會申込ありたる者
2　特別會員　本校卒業生にして在學中本會々員たりし者
顧　問　本會の趣意に贊成せられ熱心なる援助を賜はる諸先生
六　本會は必要の時に應じ會員より會費を徵收する事あるべし
七　本會は會員互選の幹事四名を置く但し任期一ヶ年とす
以上

附中山岳會（東京市高等師範學校附屬中學校山岳會）

本會の事に就きましては前號誌上に伴野君に依つて發表されたのが多分始めだと存じます。

今年も例年の如く第四回の山岳會を開きまして會員三十二の校教諭伊藤田中兩先生指導者となり左の日程にて旅行を致しました

七月廿七日　飯田町——辰野——伊那町
廿八日　伊那町——木曾駒ヶ岳（中岳——本岳——木曾の小屋）
廿九日　木曾の小屋——寢覺床——上松——福島
三十日　福島——御岳七合目（飯壽の小屋）
卅一日　小屋——頂上——中ノ小屋——西野村
八月一日　西野——野麥
二日　野麥——乘鞍岳（劍ヶ峯）——白骨
三日　同地滯在
四日　白骨——上高地
五日　休養
六日　燒岳新爆裂火口
七日　穗高山
八日　上高地——德本——島々——松本
九日　東京へ

第一日、朝飯田町驛發、中央線に搖られて辰野驛に着それから伊那電車で伊那町は箕輪屋に宿泊致しました。此の日は曇天の爲め何一つ山を見ることが出來なかつたのは遺憾でございました

第二日、昨夜から河野齋藏氏の御指導を仰ぎまして準備全く成り正六時に宿を出ました。

雨が止んでしめつぽい空氣が伊那の町を罩めて居ります。

内の萱に七時四十分着。土地の人の歡迎を受けました。

時々日があたつて山の霧も次第にはれて行きます喬木帶に這入つて「ミヅメ」の杖を造つたりして將棊頭の横に出ましたツガザクラ、ハクサンチドリなどが盛りで霧にぼかされた景色は何度見ても飽きません。

天水岩で雨をついて握り飯の殘りを食べ伊那小學校の遭難碑を見て折から注ぐ細雨に哀れを催し濃ヶ池に下り着きました。

凄い位靜かな碧水の上には眞白い殘雪が影を投げてをります。

駒飼池には水はありませんでしたが。霧の間に淋しく光る雪と銀色のエーデルワイズとは强い印象でございます。小學生の遭難の伊那の小屋は成る程見る影もなく破壞されて居りました。

天狗岩を白霧の中に見て中岳の頂上に立ちエーデルワイズの多いなかをこして本岳を極め木曾の小屋につきました。

第三日、白い息をはきながら小屋を出て見ると、昨日の雨は名殘もなく、一面の雲の海には御岳、乘鞍、北アルプスの一帶燒の煙までが浮んで居ります。河野氏に御別れして七時頃下山、雨後の透徹した空氣を通しては何物も美しからぬはありません。寶劍岳の鋭峯を前に見て高山深谷の薄化粧せる駒ヶ岳を想ひ出しました。寢覺に行つてそばを味ひ上松から汽車で福島着。

第四日、今日は御岳登山御岳講に立ち交つて しめつた土をふんで行きます。

今戸峠を越して御岳一合目。人家も中々發達してゐます。

よし御岳は浴化するも無限の秋風に浴して古驛の雨に泣かんかなの一句を味はない譯には行きません。

千木松で雨に會ひ御木帶を辿り〳〵つて五時頃七合目の釣床の小屋に着きました。

第五日、荷物を置いて絶頂へと登りましたのは五時過ぐる頃、頂上まで二里餘り、晴れ渡つた空から强烈な日光が照りつけ赤い岩又は强い反射をして吾人の目を射ます。

七合目へ行きますと大分寒くなりまして氷を呑んでた喉は、くず湯や氷飴を求める樣になりました。

眞赤な劍ヶ峯の絶頂には白い雲が時々掠めて行きます。

その中にいつしかの自分も其の霧の中にはいつてしまつて頂上の小屋に着きますと其の寒さ風の强さ鳥渡驚きました。

郵便局でスタンプを捺すやら端書を飛ばすやらしてゐるうちに霧がはれまして南アルプスが展開いたしました。

北から數へて白峯三山魚無河内西河内赤石から聖まで、さながら屏風の如く連り、富岳は一段高く、東端の霸王たりと聳えて居ります。

頂上に立ち萬歳三唱、十時頃下山いたしました。中之小屋から道を北に取りまして恩田の原に出で西野村に宿りました。

（以下後便）

雜報

○雪白き高山の一角

○白峰三山に雪降る

甲斐の西境に峙つ白峰三山、十月十五日午前八時頃より雲に掩はれ終日晴れざりしが、其日降雪あり甲府平原より十六日望したるに三山は峰より中腹に至るカール鐵襞に白雪見えたり、雪の白き朝の日光輝き壯嚴なる美しさを覺えた、昨年の白峰に、農島山の初雪九月三十日に遲るゝ事十五日なり。（迫々報大正四年）

○諏訪高原の降雪

櫻や桃の花盛に

諏訪地方は十九日朝以來著しく冷氣を感じ正午頃より平坦部は降雨ありしも八ヶ岳一帶の山脈は大降雪にて滿山の翠色は遽に變じ白皚々たる銀世界と化するに至りたるが遠望する所によれば山嶺は少くとも一尺以上の積雪ありしなるべく廿日朝十時半頃富士見附近へも積る程には非ざりしも降雪ありたり間もなく晴れ渡りたるが富士見村は海拔三千百數十尺の高原とて氣候後れなるより目下櫻や桃の花盛りなり（上諏訪電話五月二十一日信濃毎日新聞）

○御嶽山上の初雪

木曾御嶽は數日來頓に寒氣を催し去月廿九日には華氏三十五度に下降し結氷を見たるが以來毎朝結氷を見つゝありたる處三十一日は少量の降雪あり蓋し本年の初雪なり而して本年は例年に比し登山者數多く今猶多數の登山者あり去る廿八日は千五百名廿九日千二百名三十日千二百あり本年は空氣澄みて四山眺望殊に佳なりと。（九月三日信濃毎日新聞）

○鳥海登山

□道路竣工

由利郡鳥海山は縣内唯一の高山にして其の眺望は遙かに日本海を見晴し景色の絶佳なること言語に絶するも道路險惡なる爲め登山者の少きは遺憾なりし然るに同郡矢嶋町外十一ヶ町村發企となり今秋の御即位紀念として道路を改修することに決し本年八月中旬より起工し本月二十日頃竣工の見込なり此に要せる工費は貳千數百圓、内八百圓は郡より補助し他は十二ヶ町村の賦役となせり起工點は失嶋町より約二里にして鳥海神社の一の鳥居あり之より

少しく前より にして三里の間の山中を拂川に至る其の幅一間實、に立津なる道路あり此の間に駒の王子及十六善神の奇勝ありて登山者の眼を慰むるに足る此の道路完成に近づきたるを以て深谷郡長土田矢嶋町長新田助役篠原本莊區裁判所判事部記裁判所書記等數名申合せ去る八日午前九時矢嶋出發午後三時拂川に着、翌九日午前七時折惡しく暴風雨なると南部の行者を待遲せる矢嶋の者も砂利坂より引返せし程なるも郡長の一行は若き先達を頼み勇を鼓して登山の途に就きたり當日一抱ある檜の木は暴風雨の爲め打仆れし程なるも一行は紐を以て互の身體を順次に繋ぎ聲を揃け合せ辛ふじて頂上なる七高山に上れり此の時暴風益々劇甚なる爲め深谷郡長以下の一行は島海神社の神官に頼んで暴風雨の鎭定を祈り更に山形縣に面せる一層の高き新山に登らんと欲せしが山靈も之を憫みしにや少しく風雨の納りしを以て愈々新山に登れり。

此の時暫時日光を漏したるに近くは山形縣の清水潟より飛嶋本縣の象潟より沿岸通り南秋八郡潟及び渺茫たる日本海等を展望せし時の壯觀は言はん方なかりしと。

かくて同日午後十時一同無事下山せるが其の先達の話に依れば去月十八日山上に霰を降らし氷は三寸も張れり之を割つて炊事用の水に供したりと又た澤の中は今尙ほ氷の厚さ三尺なるもの多しと云ふ。

尙ほ鳥海山の半腹には一尺以上の山椒魚多く又た高山植物多く嘗つて地理學者の泰斗志賀重昂氏此の山に上つてかゝる價値ある名山を世界に紹介せざるは遺憾なりと語られたり。

此の山に登山する者は多く南部津輕青森の人々にして年々一萬人内外なるも昨今米價低落の爲めにや本年は六月以後僅々五百名位よりなきも殊に丑寅の年は非常に多くの參詣者ありと云ふ。

秋田顯勝會に於てもかゝる名山を速かに一般に紹介されたきものなりと或人は語れり。（九月十五日秋田魁）

◎雜　報　燒岳の噴火

○燒岳の噴火

○燒岳の噴火に就きて

理學博士　大森房吉

▲噴火の來歷　燒岳古來の噴火に關しては舊記の徵すべきもの皆無なり、彼の天正十三年即ち今より三百三十年前に燒岳西麓に大崩壞あり飛驒中尾方面に泥土を押し出したるは事實ならんも其は噴火の爲めに非ずして同年十一月二十九日夜十一時頃に發し飛驒越中兩國の西部を北流する庄川流域の地に甚だしき震害を與へ山崩れの爲に川水を堰き止めたりし大地震の結果なるは明かなりとす。而して近年噴火の爲め燒岳の樹木は殆んど全部枯死破碎し靈さるゝに至りしが、今回實見せる内には同岳東南側面に於て直徑二尺八寸に達し年齡二百年内外なるべき唐檜の大木あり、又山頂最高處三角測量點附近に於て偃松の枯木許多ありし中に直徑三寸三分にして輪數百〇五個を示せるものあり尙直徑の一層大なるものもありたり數回の爆發をなせしが明治四十四年七月十二日の破裂に於て最大勢力を發揮したり。元來上層の氣流は常に強く西方より東方に吹くものなるを以て燒岳噴火の結果として其砂灰を主

として同山より東方の地域、即ち松本諏訪方面に降下せしめ養蠶家に至大の苦痛を與へたり、當時長野縣廳よりの照會に基き余は明治四十五年六月登山して調査する所あり、燒岳活動に既に最盛時期を過ぎたるもの是等の事實に徵するに燒岳は最近の活動時期より前、百年著しくは二百年間は少くも著大なる破裂をなせるとと無かりしを知るべし。然るに近年淺間山、大嶋及び他の豆南諸嶋霧嶋山、櫻嶋等が一大活動時期に入らんとせるに當り、燒岳は第一着に明治四十年十二月八日を以て噴火を發したり、夫れより引續きて四十餘にして同年夏秋の頃は降灰の害を松本地方に及ぼすことなかるべき旨を述べ置きたるが幸にして同年は無事に經過し、其後も格別の變動なく且淺間山並に大嶋も同時に鎭靜に向ひ、爰に燒岳の噴火は其第一期を終り、噴火活動は九州に移りて霧嶋、櫻嶋、硫黃嶋(鬼界嶋)諏訪之瀨嶋相次ぎて破裂するに至れり、然るに昨年春九州火山活動が一旦鎭靜に歸するに當り、噴火現象は再び富士山帶に戻り、直に南方南硫黃嶋附近の海底噴火となり、伊豆大嶋は再び破裂して盛んに赤熱の熔岩を噴出し近時更に『ペヨネーズ』礁の附近よりも噴火し火山性强震をも數次發起せるが、燒岳も其一般的關係を免るゝ能はず六月六日終に破裂をなしたり此變動は種々の點に於て從來の同山噴火とは趣を異にしたり。

▲噴火の性質　燒岳は海拔千五百米なる上高地平地より聳立し其の頂上の高さは海拔二千四百五十五米にて し淺間山(海拔二千四百八十米)と殆んど同高なるも穗高岳、霞澤岳等の高峰に圍繞せらるゝを以て信州松本地方よりは之れを望見することの能はず、其の一種の盆地方に立てる爲めに、燒岳噴火の降灰が附近地方に落下するは氣流の關係上割合に長き時間を費し、砂灰が直徑僅に八里半を隔つる松本に達するに一時間內外の時を要するを常とす。山頂に舊噴火孔あり東西に稍や長くして徑千二百尺(三百六十米)を有し淺間山頂の圓き噴孔(徑四百米)に比すれば稍や小なるものなり、而して近時燒岳の破裂は皆な單純なる爆發的のものにして赤熱の岩漿を拋出せること無く、且淺間山の如く常に中央火孔よりは噴出せず却て新に數多の爆發口を構成せり、蓋し富士、淺間等の如き所謂富士山形の火山が鎔山、砂石の流出、降下により成層的に規則曲線狀を呈するものとは異なり、流動性少き鎔岩を乳房狀に壓出堆積して山体を構成せるものなれば、其の弱線、裂罅面が一種の特徵を有する結果、去る明治四十年より四十四年に亘る破裂の噴孔は山嶺のみに限らず、其の西壁外にも發生したることあり、明治四十四年七月十二日の噴火は深き百餘米の大孔を山頂北側の岩壁中に爆成したりしが、今回の噴火は新に燒岳東側の山腹より發生せり。

▲今回の噴火　從來の燒嶽破裂は其の爆發的勢力が頗る强かりしに關せず、却て格別地震を伴ふことなりしかは、山の頂部內外より噴火し比較的淺き個所に活動中心を有せる爲なるべし、然るに本年六月六日の噴火に先たちては三十分間に亘り斷へず地震を發し、就中午前七時三十分の地震は頗る强く上高地白骨等にて甚だしく家屋を振動し附近全般に感覺を與へたるが東京微動計記象によるに去る明治四十二年十二月七日の淺間山第一回の强き爆發より一分五十四秒前に淺間山より發したる强震よりも燒岳の地震は更に一層激しかりき、地震後少時を經て破裂となれるものにして、

其の時刻は午前七時三十五分頃なるべし。變動の中心が深かりし爲に此の強震を發して山底に裂罅を生じ以て破裂の準備的經路を出現せるに外ならざるべく、斯くて之に沿ひ遂に噴火となしも噴火自己は割合に勢ひ激烈ならず岩塊を拋射せる最遠距離は約二十町に止まれり。新噴火孔は實は一個の一裂罅にして燒鐵の東側なる下堀、中堀兩澤の中間臺地海面上の高さ千九百米、即ち上高地よりの高距四百米の邊より山頂東側壁に達す、此の大裂罅の深さは（七月九日に實見せる際）中央部に於て約二十米（幅十間）は百二十米（六十間餘）に達する所あり、大裂罅は山側岩磐中に生じたるも噴出せる泥土に覆はれ其の底に大小數十個の火口ありて一体に噴烟せるが其の長さの中央部、即ち海拔二千米の邊に於て最も盛に活動せり、而して大裂罅が山頂壁に接するに個所に於ては新に夥多の硫氣孔を生じ、此等よりも、又從來の硫氣孔よりも盛に噴烟し、火山活動力が全般に影響を與へたるを示せり。破裂と同時に一種の噴火風起り首として下堀澤下部に沿ふて吹き下り其の兩側のみならず、出口即ち梓川の對岸にも衝突して樹木を根拔きにし頭部を外方に向けて倒れたること甚だ多かりき。

▲泥流　今回の噴火が山腹より起れる結果土石を押し出して一種の泥流を生じたるが此の泥流は別に高熱のものには非ざりしなり中堀及び下堀の兩澤に沿ふて約十五町を奔下し爰に梓川に入りて水面上約十五尺の堰堤を築き一時流水を堰き止め忽ち決潰して灰土を濃厚に混ぜる赤黑き洪水となり下流沿岸に汎濫せり其の當初は多量の死損せる樹木、川の全面を覆ふて流下し來りしが燒岳より水路十里を隔つる嶋々へは僅に二時間以内にして既に流木の到

着を見たれば、洪水奔下の速度は二時間に付十二三哩となり、東京松本間の汽車の速度（一時間に付き十四哩）と大差なきを見る、蓋し梓川上流は極めて急激にして平均殆ど九十分一なる勾配を有するを以て、其の平常の流下速度が既に六哩内外の大きさなるのみならず、噴火に際して高さ十餘尺なる多量の水が一時に此急斜面（川水の面）を轉下する速度は頗る大なるべく、兩者の和は即ち噴火洪水奔下の速度にして前記の如き價値を與ふる所以なるべし泥流の結果今尚堀澤出口より上高地別去邊に亘りて一面の潴水となり噴火前に比すれば約四尺の增水を示す六月十二日に至りて水量を增こと八尺なりしが此は降雨の爲にして既に噴火後の狀況に復したり潴水の最大の深さは田中子爵の實測によれば四米半なりと

▲濁水　噴火洪水に際して土砂を押し流せること頗る甚だしく附近にても處によりては其の堆積の厚さ四尺に及びたり、但流下せる土砂の一部分は新噴火口より出でたるも洪水が下堀附近及び其の他の塲所に於て川岸を崩壞したる爲に水中に落下せる土砂も亦決して少からずとす、現に燒岳山麓の新潴水は少くも七月初めよりは全く清水となりて更に濁りを示さゞるに下流數里以下は尚多少の燭りを帶び居れるは途中漸次川岸、川底に堆積沈澱せる砂灰を次第に混入するが爲めなるべし。故に目下或は今後多少川水が著しく濁ることあるも噴火とは殆ど直接の關係なきものと謂ふべく、從て害毒の憂ひ無きものとす、又今秋大暴風雨に際しては如何と云ふに既に大正元年九月二十八日暴風雨あり燒岳下堀澤に大崩壞を來たせるが、當時下流沿岸の村々にても格別非常に苦痛を感じたりとの說も聞かざりき、今後大雨に際しても大正元年の塲

◎雜　報　燒岳の噴火

合に於ける以上の變動は無きものと見て然るべきなり。

▲噴火口の配列　明治四十年十二月初發噴火以來に生ぜる燒嶽上部の諸火口及山頂孔壁西方外側の爆裂口、硫氣孔は大體に於て西微北より東微南に亘る一線上にあり、此線を東方に延長せる箇所に當りて今回破裂の大裂罅を生ずるは噴火が好く順序を追ひたるものと謂ふべく、是等諸火口を連結する線は一個の弱線を構成するものなるが、燒嶽を北々東剝谷死火山と南々西白谷死火山と連結する線即ち火山脈とは直角を爲すを以て見れば前記弱線自己に火山脈に非ずして、單に燒嶽のみに限れる變動線なるを推し得べきなり、但燒嶽西側山腹へも延長すと假定すべきものならんか。

▲將來は如何　去る六月六日の破裂以後七月六日に一回の小噴火あり、爾後次第に噴煙を減じ十日以後は特に靜穩となり、新噴火口たる大裂罅の底に下りて調査したるが、一時鎭靜に歸せる後は稍強き噴火を發するの例に遵はず十六日午前十時十八分頃に至り更に噴火あり盛に黑白煙を出だせるも幸ひにして遠地には降灰せざりき、今後も多少の活動は有らんも、既に燒嶽の弱線に沿ひ東方側面の殆んど山麓に近き邊に迄下りて破裂を了したりと、且は明治四十年來の噴火第一期よりも目今第二期に於ける活動が甚だ緩漫なるの狀に鑑むるに同岳の信州側面は今回を以て顯著なる噴火は先づ終れりと見做し得べしと信ぜらる。今後養蠶時期に際して松本諏訪等の地方に多少の降灰することあらんには警戒すべき事なるも、兎に角去る明治四十三四年頃の如き大勢力の變動は無き所なるべければ、桑葉の損害も從つて少かるべきなり。

（大正四年七月廿一日認）

○一足先に歸つた柳澤松本測候所長の燒嶽談

燒ヶ嶽調査の爲め登山したる大森博士は十四日午後四時迄に松本に來る筈なりしが白骨溫泉に廻りたる途中に於て手間取りし爲めにや夕刻まで見えざりしが博士の一行に別れて先に歸りたる松本側候所長柳澤氏は語りて曰く、

▲上高地溫泉　は之れまでよりも溫度が幾分低くなりたる樣なり大正二年七月中に於ける當溫泉の平均溫度は攝氏五十二度七分なりしが今度計りたるに攝氏五十一度五分なりし其の原因は燒ヶ嶽活動の影響に依るものか或は水が那邊かに於て混るものか不明の點あるを以て俄に斷言し難きも兎に角溫度が低くなりたり又其溫泉の取入口の湯槽の中は深さは大正二年には二尺二寸なりしが今度計りたるに一尺三寸乃至四寸なりし其は何れかゞ潰れ込みしものか尙研究の餘地あり次に今回の

▲噴火口に　就ての學說は大森博士の發表に待つの外なきも新らしく爆發したる所は大正二年八月既に同博士が發見し置きたる龜裂の塔所にて其龜裂が今回大きくなりたるものなり即ち其大龜裂は舊噴火口より下堀澤に涉るものにて巾約三十間長さ約二十五六町に達し恰も魚の腹を立剝たる狀を呈し其龜裂の底に一ヶ所の硫氣坑あり盛んに氣味惡き音響を立て〻熱度の高き硫氣を立て居る有樣は糊鍋の沸騰したるにも似たり又新に生じたる湖水は上の方は平湯と飛騨の蒲田に通ずる路との分岐點なり下の方は中堀澤に達し稍圓形の兩端を稍や細くしたる形を爲し水は盛りの時より

も一尺程減じたる跡明かなり。尙ほ湖沼學の大家子爵田中阿哥麿氏は此新湖水及上高地附近の明神ヶ池等の調査の爲め十二日上高地溫泉に行きたるが尙ほ數日間滯在の由なり云々。（松本電話）

（七月十五日信濃毎日新聞社）

○名物の嘉門治を訪ふ

日本アルプスの仙人釜

信州松本から西へ十里、直立七千尺の德本峠の絕頂から眺めると頓ては信越百里の野を奔馳して新潟に注ぎ入るべき信濃川の源流たる梓川の激流を隔てゝ中央アルプスの檣壁と呼ばるゝ雪の穗高の絕壁と白樺の森とに包まれた懷中鏡のやうな美しい池が見える。『アノ池だア、この山の名物釜の嘉門治釜さんが夜も晝も岩魚を釣てるなア、エー宮川の池とも、明神の池とも云ひます、穗高の明神さまが祠つてあるだでノ、ハイ、穗高の雪の水が集まつてノ神樣の鏡になるのだツて云ひますがノ、小さいけど深エもく底なしだツて申しますだ』と兩眼鏡に映る小池を指さして案内者の佐内といふ男が親切に語り出したとき私は古い耳馴染の嘉門治といふ名を思ひ出した。

▲アルプスと嘉門治　アルプスと嘉門治とは日本アルプスの名附親たる英人ウエストン氏が初めて此の山へ靴を入れた最初から離れ難い名になつて居た、日本の山岳家は固より外人の間にも大先達として早くから知られて居た、大阪の山岳家からも私は屢々その名を聞かされて古い探檢記の中にある山案内者の樣な想像畫を其の名に結びつけることも度々であつたが、近頃では山入りよりも太公望になつて人も通はぬ山奥の池の邊に仙人同樣の日を送つて居るらしいと聞いて居た、其の釜の池といふのを現在眼の前に眺めた私は何うしても一纖の緣を感ぜずには居られなかつた。『けど、おめエさま、彼んな所エ行くにやア梓川越えるだでノ、そんな脚じやア流されるだア』と眼を圓くする佐内を無理やりに納得させて棒のやうになつた足を引ずりく一里あまりの山阪を下りて佐内の腹を沒する急流を其の肩車で渡して貰つて川の向へ出ると美しい繪のやうな白樺の森が細い糸のやうな蹊を奥へくと吸ひ込んで居る『釜さんと犬の他にやア通りツこのネー道だア』と佐内は笑ひく先に立つた。

▲眞に仙寰の靈池　雪の穗高は銀屏の如く前に突つ立つて我が越して來た德本峠と手を聯れた六百嶽、八右衛門嶽、嶽霞、燒嶽なんど近く我が肩に逼つて居る、その高いく山に包まれた白樺の森を左へ取ると葦に哩つた板屋の尖が見えた『ヤー留守番の赤犬が吠えとらア、釜さん居れエナ、やつぱり池だア』と佐内は道を森の奥へ取つた、朽た丸木の橋が見えて小さな祠にパツと日の透通つて居る所へ出るとそこからはスツカリ碧瑠璃の池になつて大嶋小嶋が鏡の上に點在しつゝ姫松や岩杜鵑花や雛柱なんど五色の枝が千嶋の岩を飾つて居る、幅は一町に足らぬ小池ながら穗高の裾を透つて千樣萬態の奇を盡す鏡池の美に對して私は唯だウツトリとするばかりであつた、『ヤー、筏も有らア釜さんヤツパ留守だア』と佐内が失望の聲を揚げたときも私はジーツと水の面を見詰めて居た。

『サア』と佐内は頭を振りながら『向ふの池かも知ンれェ』と記者を俟たせて置いて岬になつて嶋の上や寢牛のやうな岩の上を猿のやうに飛んで行つた、と何處やらで『やあい爺さんヤー、お客さまが逢ひたいと仰しやるだでノ、早歸ッとくれヨー』と呼ばゝる聲が餅を返して來た、間もなく佐内の頭と爺さんの姿が見ゑてきた。

▲狐皮を着た仙人　見ると爺さんは紺木綿の野袴に汚れた筒袖を着て其の上にモコ〳〵した狐の皮のジン〳〵を着て右の肩からドカマル籠の紐を左の肩からは函館の小鉈の紐を掛けて黑犬を先に釣竿を手にして居る恰好は何うしても仙人だと思つた、『ヤー、大分釣つたナ』と佐内の覗き込む籠を其所に置いて例の筏へ飛び乘つた爺さんは釣竿で水を掻きながらスーイ〳〵と向ふの岩まで忘物を取りに行つた人も水も山も林も心憎いまでに落着き拂つて微塵も俗氣の動くを見ない、そして爺さまは私たちを仙人の住居に導いた、二本の木を無造作に倒したばかりの小橋の傍には蔓の赤犬が爺さまに蹤いて戻つた黑犬とコロコロ巫山戯て居る、家は一間に一間半ばかり白樺の林に倚つて薄い板を葺き並べたといふも名ばかり、内は眞黑に煤けてチョッと首を差し込んで見たが何にも見ゑなかつた、頓て爺さまは蓆を敷いて私たちは草の上に胡坐を組んで悅に入る爺さまの話に聞き惚れた、堪らぬやうな笑ひの波が爺さまの血を若がへらせるやうにもあつた。

▲六十年の山住ひ　爺さんは話し出した『俺も六十九になりますだが此の下の嶋々（中央フルプスの玄關）で生れて十三四の時から山で暮して居るだデ、六十年は山に居た勘定になると笑つて居

た奴もありますだ、ハヽヽヽ山に這入るたッても狩獵と魚釣とで今のやうな山案内は昔にやア有りましなかつただヨ、ハヽヽヽヽヽ、子供の時分から親爺に蹤いて俺の來た小屋は爰に有つただが此の家にしたのは三十年ほど以前だ、俺が初めて猪打ちに出たのは十四の歳で鑓岳の下で一匹打つた時ア嬉しかつたどよハヽヽヽヽヽ昔ア今と違つて夏でも冬でも勝手次第に鐵砲を打たせたもんだでノ、時々剛ェ獲物が有りましたイノ、俺が一番の大手柄はそう〳〵三十二三の歳の時だッつれ藥師の嶽で三ッ、鎗ヶ嶽で二ッ、二の股嶽で一ッ、

▲一日に猪を六匹　も打つたんだがモー彼んなこた有りましれェ、大きなのはヤッパ大きな値がしるしノ、現今のやうちやア甘ェ酒も呑み切れましたれェ、ハヽヽヽヽヽヽ』と手を拍つて哄笑する『爺さまは其んなに酒を好くのかイ』と尋ねるのを聞きもあへず『強うも好きだていふちや有りましたがれェが一升ぐらゐは何時まで呑みたいだ、ハヽヽヽヽ、呑ませて吳ンりやア二升でも三升でも呑みますだがハヽヽヽヽウンにや、醉ふたつて寢るばかりだ、醉ふてから山でも歩きやア面白からうッて、馬鹿々々しい、山は醉はない時のこんだに、ハヽヽヽ』と爺さまは思はず吹き出した。

嘉門治の女房はお茂といつて今年六十三、一人息子の嘉與吉と一緒に嶋々で蠶を飼つて爺さんが山から人に託けて寄越す岩魚の料とで不自由もなく暮らして居るが爺さまと同居の時間は若い時から非常に少なかつた。『そんなに女房を捨つところから女緣が遠くなるんだヨ』と櫟りかけると爺さんハッハと笑ひながら『さア、

俺が身體を汚さぬお蔭で山でも怪我が無いのだッて神さまに御禮をいふてるぐらゐだア、ハヽヽヽヽヽ』と却々外らさぬことをいふ。『しかし、長ェ間にア

▲隨分と恐い目にも　逢つたことがある。そうヨ、黑部谷で熊打ちの時にかゝつた雪崩の恐なかつたことッたらガーッと山が鳴り出してアラッと思ふ頭の上へ大ェ奴が滑つて來て、何も彼も考へずに前の瀧壺へ躍り込んだらツイ三間ほどの先へ其奴がメリ込んでどうやらかうやら助かつたゞア、ハヽヽヽヽ二の股でも一遍かゝつたノ、此の時ア死んで貰はれて歸ッたもんだア、ハヽヽヽヽ嘉門治ア雪ぐれいで死にましれエナーハヽヽヽヽ』斯ういつて話は又山岳家の山入り始めへ戻つて來た。『小嶋（島水）さんや、辻村（農學士）さんや、ウエストンさんやがノ、日本アルプ、日本アルプといひなさるのが可笑しかつたがお蔭で剛ェ山になりましてノ、ハヽヽヽでも其の山の五ノ尾根、八ノ尾根、何所のサヲ（水のある谿地）から何のアラシ（水のない谿地）へ股が續いてそこには何んな高山植物があつて何んな神さまが御座らつしやるといふことまで知てるナア、ハヽヽヽ

▲此の嘉門治一人　だと褒められたこともあるだア、ハヽヽヽ頓でもネー名物になつちまつてネハヽヽヽヽ』自慢と無慾とをチャンポンにした仙人爺さんの物語りはトー〳〵息子の上まで飛んだ『嘉與吉ア四十四になりすだア、身體ア六尺に近ェ奴でネ毎日山へも荷持ちに來るだが日露戰爭の鐵砲彈が腹に殘つてるだで折り〳〵ア痛むつて困つてますだ、ハヽヽヽ旅順攻めの時だか砲兵で召び出されて雪のなかで澤山の兵隊さんと死にかけた時だア、山案内をしてるお蔭で生木を焚く術を知つてるだで直ち樹を焚いて皆の衆も助かつた、その

▲生木の火で勳章　を貰ふたなア有難ェこんだが彼アいつも〳〵弱くッてはノ、困つちまう……』と仙人爺さん何だか急にホロリとなる、其の爺さんやら四周の景色やらを素人寫眞のヒントに入れて、記者はトッカハ仙人の住所を辭したが『アレで毎日、岩魚ばかりでも三兩がもなア捕りますだ』と佐内は途々私に話して居た。

（神高地溫泉にてせみ耶）（大正四、七、一四―一六大阪毎日）

會報

高山深谷第七輯發行

本春發行せる第六輯は、歐洲戰亂の影響を蒙りて、總ての點に於て、甚しき打擊を蒙りたりと雖も、本會の犧牲的提供によりて、毎輯と同價格に於て頒布するを得たり、然して幸にして識者の迎ふる所となりしは本會の最も喜ぶ所たり、明春を期して、發行せんとする第七輯は價格其他に就ては、材料の沸底價格の騰貴は愈々甚しく、製作完了に非れば、其實價を知る可らず、非營利事業とは云へ、無限の負擔に耐る所に非ざるを以て、本輯も亦前輯と同一條件に由りて發行する事となせり、詳細本誌廣告欄に就て見られたし。

會員に圖書分與

在飛驒高山町會員住廣造氏は、本會々員の爲め左記二書を無代價を以て分與せらるべき由につき希望者は下記送料を添へ同氏へ申込まれたし。

一、飛驒案内（送料二錢）一、飛驒遺乘合符（送料十二錢）

名古屋に於ける有志晩餐會

八月二十八日の夜七時から名古屋市納屋橋畔得月樓に於て名古屋に於ける山岳愛好家の懇親會を開いた、實は餘りに喞嗟の思ひ立ちであつた處から在名の同志中通知の行き屆かなかつた向きや遠處ない用事の爲めに出席する事の出來ない人々もあつて出席者は僅かに左記の十五名に過ぎなかつたが此の會合の爲めに態々來名された高野氏を中心として互に既往の得意話しや失敗談を闘はせつつ晩餐を共にし、食後高野氏の携へられた歐洲アルプスの幻燈寫眞を見てまだ見ぬユングフラウ、やグロッス、シユレック、ホーンの壯觀に咽喉を

鳴らせながら散會したのは午後十一時であつた、勿論是れと云ふ問題や目的があつての集まりでは無いが吾々の會合は唯趣味を同うする者が五人でも十人でも寄つて心置き無く好きな山の話をすると云ふだけの事が既に無意義では無いと思ふ、尙此の小さな集まりの爲めに當夜態々來名された高野氏の厚意は深く一同の感謝する處である

（中尾生）

出席者氏名

中山益太郎　春日井丈太郎　祖父江重兵衛
佐々木綱雄　天野富之助　八木道三
久山寅一郎　吉澤愛三　村瀨圭
柴山壽太郎　高橋正彥　梅澤岩吉
鈴置保長　中尾濟

第十三回有志晩餐會

九月十九日午後四時から、東京市日本橋區下槇町鳥料理店末廣で有志晩餐會が開かれた。

初秋のことゝは云ひながら未だ扇子を使ふ始末で、始めの內は殊勝らしく鍋下の火を前に控えて汗を拭き鳥を突つついてゐたが、やがて酒の廻るにつれて大分諸方で氣焰の吐き競べが始まつた。編輯會の用事で遙々越の國より御入來の高頭さんが駒ヶ岳や比良ヶ岳の寫眞を出されて皆を羨やましがらせる、木暮さんが劍の話で夢中になる、三枝さんが團衛澤の話で苦いお顏をなさる。會半ばにして美滿津から兼て山岳會注文のアイスアックス、リュックサック、カンジキの三種の登山用具が持ち運ばれて、話の中心點は暫く此等の上に落ちた。

黃昏からの盃は山の話に幾度傾けたことか、九時頃には杯盤狼籍、山に醉つた眸を擧げれば床の間には淡彩の富士の一幅が掛かつてゐた。

當日の出席者は左の如し。（但順序不同）

高頭仁兵衛　高野鷹藏　近藤茂吉
三枝守博　木暮理太郎　梅澤親光
冠松次郎　星野光之助　鳥山悌成
服部與兵衛　南日重治　茨木猪之吉
郷郁三郎　內田節二　槇有恒
箕作新六　高橋政次郎　三輪邦太郎

佐双定雄、大木操（以上當番幹事）尙次會の當番幹事には冠松次郎、服部與兵衛、郷郁三郎の三氏が指名せられた。

會員通信

△暑中の御障もなく賀し上げ候小生も例の如く頑健まかりあり候

本月九日弊校生徒百餘名を率ひて西駒ヶ岳に登り候が廿七日高等師範附屬中學登山會員の一行入信伊那町に一泊廿八日小生案内にて西駒ヶ岳に登り候一行は尙ほ御岳乘鞍白骨燒岳上高地穗高岳を經て歸京致すべき豫定に候小生は本日矢澤米三郎春原平八郎兩氏と共に白峯三山に登り仙丈岳を經て歸宅すべく只今青柳驛に着し候が明日西山溫泉にまゐるべき豫定に候。

昨年の驥見岳登山畧記昨夜認め候に付差上げ候簡單にして而も乾燥無味に候も多少登山者の參考もならばと思ひて御目にかけ候

駒ヶ岳遭難紀念碑につきては別に申上ぐる程の事も無之尙又新聞にもさしたる記事も無之候除幕式は昨年八月八日教育會及其他の關係者登山の上執行いたし候碑の繪端書は先に差上げ候樣に記憶候が御入用に候ば差上げ申べく候。（河野齡藏）

△然者野牛僕本年八月廿七日信州大河原より赤石岳に登り同山上大小寺平及荒川岳頂上偃松の間に露營同卅一日無事大河原に歸着致候此登攀中天候近時稀なる好晴にて赤石岳縮頂より望見し得べき遠山近岳の殆ど總べてを望觀致し候へ共此方面の知識不足の爲め遺憾に存候節少からず候超へて九月五日中津川驛より惠那山に登り此日亦た快晴曾識の赤石岳を願望し一夜の快を味ひ山頂籠堂に一泊翌六日發足地に歸着當日汽車にて歸宅の際大曾根驛附近より熱田驛に至る車窓より赤石岳と惠那山を夕空に（但し双眼鏡を以て）願望致し申候。

右登山の際別紙の如く會員章を荒川岳頂上附近に遺失飛んだ失策を演じ汗顏に不堪次第に御座候。（吉岡八二郎）

△高上地は滿員です大阪の團體六十人、附屬中學三十人、計百人以上雨で槍はやめ、穗高と燒に上りました。（八月六日上高地にて松宮三郎）

△拜呈　本月十二日當地方一帶氣溫低下して寒冷を覺へ候が昨日の快晴により始めて富士山五合目以上及白根三山の頂に降雪ありを見申候本年の初雪美しく日光に輝き居り申候。早々（十月十四日甲府にて杉原甲三郎）

△拜啓小生今年の山地旅行左に御通知申上候。

八月二十四日中新川郡伊折方向より劔澤を經て立山に出づる旅行を企て上市町まで輕鐵を利用しそれより徒步三里伊折村に出で候此地には小黑部輝水鉛鑛山の事務所有之山本工學士に會ひ種々便宜を得更に二里半ブナクラの小屋にて投宿、此間鑛石運搬の爲め道路開鑿甚だ結構に有之候、二十五日、上流を溯り劔の大窓に出で候此間道路の開通極めて良好に候殊に鑛山より鐵索にて運鑛の爲め此頃は工事中に有之且つ伊折よりブナクラ及鑛山まで電話の開通あり何かにつけ非常の便利あり殆んど平原の如き感ありこれぞ劔岳の表路とは思はれぬ位にて有之候大窓の頂よりは至傾斜の

大雪溪にて此間には僅かばかりの足場路を設けあり、頂より凡そ一時間にて仙人山の東西なる鑛山事務所に到着致候、二十六日池ノ平に出で劔澤に下り別山裏の大雪溪を辿り別山と眞砂岳との間に登り直ちに立山室堂に下り（午後三時）更に立山溫泉に强行軍を試みて午後七時頃到着致候。劔澤の踏渉は八月二十日過は稍危險に有之候右不取敢如斯に御座也。（九月六日吉澤庄作）

△最後の休暇を戴いて四國の北部と南九州の一部をとびあるき申候猫額大の小天地からとび出せば石槌と霧島登山も甚だ痛快な感有之誠に命の洗濯をいたし候霧島は八月の下旬、天の逆鉾は再三失踪と傳へられしも無事なるを見申候歸來早々山岳記念號御送與被下正に拜受仕候時下秋冷人馬も肥ゆる時御自愛專一に祈上候先は不取敢御通知申述候。（九日廣島縣江田島兵學校蒲瀨和是）

△小生事三高山岳會第一班に加はり七月十八日京都發、十九日松本より中房溫泉に至り、二の俣赤澤二日の露宿にて燕、大天井、常念及槍の登攀を了り二十二日上高地に出で二十三日燒ヶ岳に來り、本日白樺の陰にて、靜養罷在候（七月二十四日、上高地溫泉にて東義一）

△今日で三泊した、志村烏嶺氏に過つた、今朝よく晴れた劔立山槍なぞ明らかだ淺間の煙りはなつかしかつた、寒いのと鑛詰には閉口、まだ四五日居る。（白馬山葱平より七月廿五日、茨木猪之吉）

△昨日一日山が雲に包まれてゐたと思ふたら今朝はもうスツカリ白な姿になつてゐました。

前山は餓鬼岳の南まで、主脈は一齊に初雪のパプテスマを享けました。

去年より十五日も遲れてゐます。

急に寒しくなつた樣な氣がします今年は珍らしく今までネルの上に羽織ですごしました。（十月十四日大町にて百瀨慎太郎）

△謹呈待兼居候山岳雜誌正に受領仕候。

目下散粒登岳（約千四百米突）の觀測中に御座候が本月二十一日登山以來毎日天候不眞にして昨二十五日午後三時より降雪（初雪）朝夕溫度は〇度日中は五度にして最早夜間は睡眠し得ざる程の寒氣に御座候千島擇捉島散粒登岳（チリップダケ）（約千四百米突）の初雪（本島高山の初雪）

九月二十五日午後三時十二分

溫度午前七時零度　正午十二時四度
午後五時二度　午前三時零下三度　（溫度は天幕內にして多少の火氣あり）

十月下旬本島む觀測完成十一月中旬歸京の豫定。今後の山岳は東京の宅へ御送付被下度願上候。（九月二十六日擇捉島散粒登岳幕營地に於て之れを認む柴崎芳太郎）

△十和田の秋色を見度さに斯樣な所へ來ました。昨日も今日も雨晴れさうもありません一日碇ヶ關でれる積りです。

岩木山を見ましたから此の端書を認めました。獨り旅であるから雨がふると困り切ります。（十月八日弘前にて岩村內）

△常々御無沙汰のみ致し居り候小生今度會員矢田城太郎君數名の友人と相謀り我校にも八高山岳會設立仕りその第一回旅行として昨日江州伊吹山に登山致候一行七名朝熱田驛より其上車近江長岡に九時三十三分下車。かくて山麓なる上野村を出發仕候ひしは十

一時に候ひき頂上に達したるは一時四十分、氣溫五十一度、當日天候よろしからず途中にて少雨に遭ひ申候ひしも展望割合に宜しく遙かに白山を望み脚下に琵琶湖をのぞみて快哉を叫び申候半ば破碎せる三角標にて紀念の撮影を致しなどして頂上に正一時間を費し申候山頂にある日本武尊の石像は正しく山の風致を害し且つは尊の尊嚴を穢し奉るものと存候四時上野村歸着、五時四十九分の列車にて歸校仕候先づは御通知まで　早々。(十月廿五日長谷川敏郎)

△本年の赤石岳登山者

七月十三日山岳會員八木道三君祖父江重兵衛君等一行五名小澁に向ひ翌十四日赤石登山ついで前岳(西河内)中の岳(魚無河内)荒川岳(黑澤岳)を踏破し赤石に歸り其れより赤石澤を下りて大井川に上流に出でられ候記事は同行記者可知君の筆にて新愛知に連載せられ候。

七月二十四日小倉伸吉君赤石に向ひ前岳中岳、荒川岳、小河内岳、鹽見岳、蝙蝠岳等を縱走し三伏峠より再び大河原に出で歸途木曾駒ヶ岳を登攀して歸京せられ候。

八月十一日小生唯登山のみにて下山

八月二十二日神戸市在住の H. E. Damm 氏一行二名通譯長野武之亟君と共に赤石に向ひしも天候不良の爲め六日を費して僅に赤石よりの展望も自由ならずして下山蓋し外人の登山は名譽會員ウエストン君以來今回のみにて候。

八月二十七日會員吉岡八二郎君既に雨の爲め斷念せられんとせしも回復の兆見えたれば此日午後三時頃大河原發小澁に向ひそれより赤石前岳中の岳荒川岳を經て三伏峠より大河原に戻り辰野に向つて出發せられ候今回の登山に於て最も天候幸多かりしは小倉君次は吉岡君にて候。(九月四日前澤政雄)

△前畧七月廿九日神戸第一中學校生徒泉佳三郎外四名(四年生、三年生)一行中房溫泉より常念山脈を縱走槍岳により登り八月一日上高地に下山せり神戸市の生徒としての日本アルプス登山は始めて由に付右御報申上候小生此の一行と始終を共にし多少の山岳説明をなせり。(八月二日上高地養老館支店にて石川源司)

△拜啓小生事日本アルプス横斷の目的にて去る七月二十四日比叡愛宕に別を告げ翌二十四日午前四時半明科驛着之より五里を突破して九時大町對小館に入り申し候此の日登山準備をなし會員冠氏の連れて來られし佐伯平藏を連れることに定め申候二十六日七時半對小館を發し籠川に沿ふて登り午後四時半岩小屋に達し此處にて夜宿致し候。

二十七日六時出發して九時針の木峠の頂に達し申候而して午後三時黑部の平の小屋に至りて泊り申候二十八日七時過平の小屋を出でゝ中の澤峠佐良峠をへて十時半過五色原に至り申候針の木越の時と同じく富士は見えず、十二時佐良峠を發して三時立山溫泉に至り客多くして尙三里を突破し中の小屋と云へる茶屋にて泊り申候翌二十九日芦峠をへて上瀧に達し車にて富士に入り申し候。

この夜福井に着き伯母の許に長らく留まりて宅に歸りしは八月九日と覺え申し候此の度は小生に取りて處女登山にて針の木の雲溪の歩行丼に石の落つる事黑部の籠渡が切れたる爲渡渉せしことは少しく苦しく御座候ひしも蓮華岳及び雪溪を白く照す望月針の木

の雪渓の櫻花針の木峠に於ける槍が岳の遠望五色原の景色と眺望は實に新鮮な純粹な氣分を小生に與へ申し候尙登山旅行中は晴のつゞきし事は實に嬉しく人夫平藏(甚三のこと)よりも會員の方に宜しくと申居候小生の母校府立一中にても御岳槍岳方面に登山致し申候右小生の登山狀況御通知まで如斯に御座候。(神谷阡一郎)

△前略私は友達二人と一緒に七月十六日の朝人夫五人を連れて大町を出發し針木峠から例の路をザラ峠に出で立山の山々を通つて別山裏の急な雪渓を辷り下りて長次郎谷から劍に登り池の平から小黑部に出まして祖母谷、大黑鑛山を過つて二十四日の夜大町に歸りました。雨には糸魚川街道で最後の日にあつたきりで實に幸運でした。今年は雪が非常に多くて針木岳に登る時にも、立山を歩く時にも例年とはちがつた變な所を通りました。丁度大町にいつた翌日冠さんが平藏をつれて越中から來られて色々とお話を伺ひました。友達はすぐ歸京しましたが私は二十六日から百瀨愼太郎さんと一緒に林造をつれて矢澤から釜に登り鹿島槍から長ザラを下りて二十八日大町に歸つて丁度來てをられた志村さんに又色色なお話を伺ひました。一寸お知らせいたします。最後に大町で今年出來たアイス、アックスは美濃津製のより大層丈夫でいゝと思ひました事をお知らせ申します。早々(八月四日石川欣一)

△前略其後は御無沙汰仕候小生去二日出發糸魚川より山の坊大所木地屋を經て蓮華溫泉に二泊致し裏山より白馬の絕頂に登り只今四ッ家に歸着申候御無沙汰御伺旁々御通知まで。早々(信州四ッ家にて八月三日森平藏)

△御蹠を以て廿六日夜行にて出發せしより晴天つゞき針木峠五色原一の越等を通過いたし候。

今年の山はどなたも成功の事と存じ候。

淨土山附近にて南日氏木暮氏の勇姿を拜し候寫眞現象樂しみなれど未だ當分歸宅せざるにより暫くは成功と様喜びを致し居り候明けて名しからずば幸にて候。(八月四日北澤基逵)

△其の後は御疎遠申候目下大阪灣に集合せる百貳隻の艦艦を俯瞰すべく竹下君と學校の式ををへて登山仕候山上は最早の秋最中にて錦繡將に始めらんと致居候御健在を祈り候。(大正四年天長節祝日六甲山上朝輝記太留)

△昨日、燒ヶ岳へ本日は穗高へ四十餘名團體登山いたし成功仕候明日松本に出で白馬に向ひ候。(八月十日上高地竹下、朝輝)

△前略昨夜島々へ宿泊今朝雨中を衝て當地へ參り申候四周諸岳登攀致し度候。草々。(八月五日森平藏)

△拜啓二十四日夜行にて上野發二十五日魚津より片貝川を遡り河原に野營に二十六日片貝の南又を上り困難危險を冒して二十七日午前九時毛勝の山嶺を究め之より南走して大窓に至る其間林莽叢生困難名狀し難く二十九日大窓より槍をからみて小窓に出でんとして絕壁を小窓の西側の雪渓に下りしも時遲くして劔に至る能はず引返して小黑部より三窓に出で三十日漸く劔に上り三十一日別山乘越に出で之よりザラ峠を下つて東澤に行く途中に候。(木暮、南日)

△拜啓三十一日夜は淨土山の西側に野營翌八月一日能玉を踰えて雄山澤を下り平に出で黑部川を遡り東澤の落合に一泊二日赤牛に登り黑岳と赤岳間に露營して暴風雨に襲はれ申候初は笠まで縱走

中尾より上高地に入り穂高鎗間を縱走の積に候ひしも意外に日數を要し候故單に鎗を越えて上高地に入る事にせしも今又雨の爲に大町に下山するに決し三日濶小屋附近に野營本日大町に下り申候。

（木暮、南日）

△大變いゝ頃になつて參りました。

女學世界に內藤千代子が上高地を書いて居りますが御覽ですか女史は私が行つて居ました頃に若い美男子と一緒に來て居りました、さうして燒から歸つた人には燒の話をきゝ穂高から歸つた人には穂高の話をきゝ、槍から歸つた人には槍の話をきいて居ました、そこで私は女史が三山中どの山に登つた記行を書くかと云ふ事が實に興味ある問題でした、俄然十月一日の女學世界には槍の登山とお出でなすつた其稚氣や大に愛すべきものがあるのを見て笑を禁ずるを得ないのです、然しそれがまた嘘だらけの登山談だから愉快でもあります、要するに此れは山岳の茶目振りだらうと右御茶のみ話に候。（S・）

△此夏私は横山君と一緒にあの加賀丸で南洋（カロリン、マーシヤル、マリアナ）の島廻りをやつて來ました、見學團の中には矢張我黨の士も無いではなかつた樣でしたけれ共名乘りあはずに終りました、サイパンのタラポーチヨ山にパラウにはロイス、アルモノゲイ山など八百米位の山にも得登らず唯陸に上りてブレッドフルートを食ひ椰子の汁を吸ふ船に歸つては蠶棚の中に徹底的に惰眠を貪る漫然たる旅でした。

秋季皇靈祭の日には三人連で雄松崎から武奈ヶ岳へ登りました、横山、中原氏達の一行が五日に登つてから刺激を受けて土地の青年會が道しるべを建て草を切開いて武奈まで地圖無しでも案內無しに行ける樣になりました、加茂川上流の八ヶ瀧も同樣瀧には一名前の杭が立てあります、大阪の兩新聞の花々しい Propaganda が中々こんな所まで影響を及ぼしたと見えます、此比良より武奈へ比良川を溯る途すがら在來の道から乾谷へ右に入つて行つて神蠶ヶ瀧を見九九七高地の手前で再び本道に合する新しい道が開けました、本道を行くより三十分餘り多くの時を費しますが瀧のあたり又迂回して見るだけ興味があるさうです、現に此日も案內者久太郎が路傍に取殘しておいた携帶品を取りに行つて若干の猿に包圍されたといふ樣な餘興がありました、六時四十分雄松發比良川を溯り神蠶ヶ瀧を經て武奈に十二、一五着一、一五下山の途に就き八ヶ瀧、小白ヶ谷、寒風峠を經て大時雄松着五、五〇發（大津行急航船）に乘おくれました、若し案內者手帳を交付せらるゝならば南小松の久太郎も亦一冊を與ふべきかと思ひます、話題に富んだ面白い會ですから。（山本宣治）

△今日山岳を受取つたので君に手紙を出さなかつた事を思出して一寸書きます、僕は七月十七日の夜東京を立つて翌日の夕島々に着德本峠から上高知に參り二日間あの附近と採集して白骨に出島々を通つて二十五日の夜歸りました、君に敎はつた通りの途です獲物は澤上山で僕としては大に滿足しました、と云ふのは僕の目的であつたものが可なり澤山とれたからです、同行の人は蛾を集めて、此も充分獲物はありましたらう、上高地は珍しいものが多ふ御座いましたしかし多分燒岳の灰が虫を多く殺したものと僕は思ひます、田代の池などは可なり面白い所でした、ユヒオドシが

多かつたり、例のアポリアを宮川池の附近で取つたりしました、ウラキンシツミとも二疋とつて來ました、自分の目的のものは今此處で申上げる事は出來ませんが充分な資料を僕に供しました、山には一度も登りませんでした、之は採集品を多く得る目的からむだに時間を送り度くなかつたからです、來年もまたあの附近の山に入つて採集したいと思つて居ます。

宿の事で御通信する義務がありますが、此は僕から申し上げにくいのです、なぜなれば上高地温泉は國有林の中にあります從つて小林區署とは關係がありますので僕が公然出かければ（勿論此度は私の旅行ですけれど保護區の主事が案内されたので）一般の人とは異つた取扱かひをするにきまつて居ます、其をもつて他を推す事は出來ませんから私の滿足は他の人には得られなかつたらうと思ひます、私としては、別に苦痛はなかつたと申すより外ありません、行く前に食物の事で多くの人から注意を受けましたが其も秋田の山奥で野草を持ち走になつたとは比較になりません兎に角僕は山其ものから得た、（實を申すと山らしい山を見たのは初めてです、）喜び以外に愉快な日を送りました、僕は日曜に立つて信越の山をながめに參ります、之で失禮（九月十七日記矢野生）

△本月廿四日上高地より島々への歸途德本峠に於て偶然にも光苔を發見致し尤も小生が最初の發見者には無之二十八日より三日前「農商務省の技師名前を逸す」遥過の際島々の人夫に敎へたるものゝ由にて小生は其人夫より敎へられたる第二番目の者に候其發生區域は非常に擴大にて峠の表十町位みり峠の裏（上高に面したる方）四五丁位迄の山肌に發生し重に道路に沿ひたる崖に他の緑苔共に發生す或は連續的に成斷續的に甚だ美觀を極め居り候少しく注意すれば直ちに發見し得らるべきに今日に到る迄で他に一人も是を見たる事を語らざるは全く世間に知られざるものと存候第一の發見者たる（農商務官？）及第二の發見者たる小生も餘りに吹聽して不公徒漢の盥糸を恐るゝものに候御參考迄候御報道

（七月三十日柳　直次郎）

△拜啓種々御盡力之段御禮申上候偖て本年度此迄の登山者五百十八人にして内外國人五十二人右にて候間御了知被下度私も上京致し御立寄り致す可其節御話申上候先は御通知迄早々

（上高地にて加藤惣吉）

◎會　報　本誌發行の遲れたる云ひわけ

本誌發行の遲れたる云ひわけ

昨九年度三號が甚しく遲刊したる爲め、延て十年一號の發行遲れ、次で本號の發行も甚しく遲れたり、一年三冊の雜誌は一冊四ヶ月に當るべきにて決して、時間に於て短しと云ふべからず、然れども元來吾々の仕事として、「山岳」を發行する事が、强ひられて働くと云ふ、心持になるを得ずして、總てが感興的に働く外なし、されば一冊の雜誌を出して、直ちに矢繼ぎ早やに次號の爲めに働くと云ふ感興は全く起らず、又强て働きたりと雖

も決して、愉快に最善をつくして働くを得ざるなり、此れ決して強て怠けて發行を遲らする次第に非ざる辯解の辭なり。

本誌は決して體裁に於て其他總てに於て他に優れりとなさず、然れども總ての點に於て自由に何等の掣肘も受くる事なしに編輯されつゝあるは、吾人の誇りとする所にして、會員諸君も亦諒せらるゝ所なるべし。

吾人は本年內に十年二號三號の二册を出して其責任を全ふすべき覺悟なりしも、前述せる如く、感興的に働く外なき吾人は、記念號を出して、漸く其疲勞（心的に）の癒ゆるを待つて、本號の爲め働きつゝあるに、三號を年內に出さん事には、二號の爲めに働きつゝある今、此れと並行線的に働かざる可らず、此れ吾人の耐へざる所にして、又不可能に近き事なり。

會員諸君に對しては申譯なき次第なれど、三號は明年に廻して順次發行せんとつゝあり、吾人の努力に同情を持たるゝ會員諸君、吾人の意を諒せられん事を乞ふ、一言雜誌の遲刊に關して申譯けを述ぶる事然り。（編輯係）

新入會者

東京府千駄ヶ谷原宿三〇七

附錄

黑部川奥の山旅（前編）

木暮理太郎

大正四年七月廿五日より八月四日まで。

一、片貝谷まで——二、南又を遡る——三、釜谷の奥——四、小黑部谷の入り（上）……毛勝山及び猫又山——五、小黑部谷の入り（中）……赤谷山及び白兀赤兀——六、小黑部谷の入り（下）……大窓及び池の平——七、劔岳——八、立山を越ゆ——九、黑部川の峽谷——十、赤牛岳と黑岳——十一、野口五郎岳の連嶂——十二、高瀨川に下る。

一　片貝谷まで

大正四年七月廿四日午後七時三十分、汽車にて上野發。翌朝九時二十分、魚津着。少許の準備と晝食の後、十一時三十分、出立。暑さ甚し。途中屢々休憩して、午後二時三十分、前平澤。此處にて人夫一人を雇ひ、且つ米を購はんとして空しく二時間半を費し、五時、漸く出發。奥平澤を過ぎて　六時片貝川の沿岸砂地に野營。

日本晴れのした朝の日本海は、山へ急ぐ私達の身にも快よかつた。

昨夜は汽車の中で、同行の南日君と赤羽から一緒に乘り込んだ越後女の一隊が、終夜聲自慢の謠を歌ふやら笑ふやら巫山戲るやら、一方ならぬ騷々しさで、夜風の涼しいにも拘らず、少しも眠ることが出來なかつた。

宵に上野を立つた時は、十三夜の月が薄靄の罩めた野面を隈なく照して、樣ざまの聲をした蟲の音

が、明け放した窓からはやてのやうに耳を掠めて過ぎ去るのを現ともなく聞きながら、ゆつたりした氣持で窓に倚り掛つてゐたのであるが、高崎あたりまで來ると、いつの間にかすつかり曇つて、見覺えのある丘の頂さへ何處と指せぬ程に、低い雲が立ち迷ふてゐる。明日の天氣がすぐ氣に懸るといふ程でもないが、多少の不安が無いでもない。輕井澤では、冷い霧が幽靈の如くすうと窓から這入込んで、ひやりと顏を撫でた。しかし雨は降らなかつたらしい。牟禮柏原の間で夜が明け初める。上州方面の山々は、淡い樺色に染つた高い卷雲層の下に、動くともなく屯してゐる幾重の亂雲に包まれて、唯だ四阿山であつたらう、長い頂上を顚覆した大船のやうに雲の波の上にちらと見せたが、すぐ復た沈んでしまつた。左手は間近い飯繩の原の瑞々しい綠が、引汐時の干潟のやうに刻々に展開して、花野の露にあこがれる大きな蝶のやうな白い雲の塊が、輕い南東の風に吹かれて、草の葉末とすれ〳〵にふわりと原の上を飛んで行く。この白い雪の塊は飯繩山から戸隱山の方面へかけて、押し重つてぴつたりと山の膚へ吸ひ付いたまゝ少しも先へ動かない。まるで何か知らん目には見えないが、其處に恐ろしい或者が立ちわだかつてゐて、雲は其前に懾伏して、進むことも退くことも出來ないものゝやうである。飯繩山のすぐ北に駢んでゐる黑姫山の蒼翠は、この畏れ入つた雲の群集を他所にして、空の色と共に目もさむるばかり鮮かであつた。

表日本の空を支配する太平洋の勢力は、此處らあたりを境として、最早日本海の勢力範圍に侵入することは、絕對に不可能なるのであらう。少くとも今日はさうでなければならない。斯うして關東平原から私達を追跡して來た雲の脚は、此處で挫けた。私は例へば引かれぬ意地で人を斬つて家中を立ち退いた士が、危く他領へ逃げ込んでホット一息しつゝ、恐ろしい追手の姿を見送るにも似た心もちで、東の空を眺めてゐた目を晴れた北の空に向けた。

冬の間日本海は、殊に多量の雪を日本北アブルスに與へて、自ら象嵌し、蝕鏤し、彫刻する材料た

らしめる。私達は夏が來るまで親しく其裝飾された山谷の模樣を睹る可き自由を缺いてゐるが、山は其間にこの豐富な材料の幾割かを費消して、象欽す可きは象欽し、はたそれぞれ蝕鏤し彫刻して、期待された使命を果すばかりに止らないで、更にまた幽壑には飛橋を渡し、絶崖には長梯を架して、驚異し嘆美し、そして自己を滿足させやうとする山岳宗徒に、惜しいことではあるが日本南アルプスでは容易に見ることの出來ない雪の實殿を公開するのである。

抵抗し難い北侵の力――私はそれを呪ひながらも、一面に於てその御蔭を蒙つてゐることを否む譯にはいかない――から絶えず壓迫を受けながらも、猶ほ能ふ限りの保護と愛惜とを加へて居るこの雪の實殿が、今や其夏が來て巡禮の途に上りつゝある私達の目の前で、南方の侵入者に勝手に引搔き廻はされることは、よしやそれが柔かな白い雲の手であるにしろ、わが日本海の堪へ能はざる所であるに相違あるまい。私は北の空を眺めて、高田平野の果てを限る松並木越しに、漂渺たる日本海が晴れた穩かな曉の色を浮べてゐるのを見て、斯う思つた。

振り反へると、妙高續き火灯燒山に至る連嶺には、早や旭の光が薔薇色に燃えて、赭色の山膚に鏤められた雪に實玉の匂が加はつた。かなかな蟬の凉しい聲が遠くで聞える。

「ねえ君、大分白いね。あんなに雪の殘つてゐることはさうあるまい」。

岡田式靜坐法の姿勢を崩さないで、哲學者然と構へ込んでゐた南日君も、堪らなくなつたと見えて、鹿爪らしい顏を窓の外へ出しながら、斯う言つて仔細らしく首を捻つた。

汽車が高田の町に近付いて、後ろに遠ざかり行く此等の山の姿が、梭の如く飛び交ふ端山の裾に織り込まれてしまふ迄、私達は幾度か窓の外を眺めて、幾度か同じやうな言葉を繰り返した。

夏とはいひながら、朝凪ぎの日本海は誠に穩かである。波打際に波も立たない程であるから、白い波頭などは何處にも見られない。私達の山に囚はれた心も暫く解放されて、廣々した海面をあてもな

く見渡しながら、黑人らしい人の指さす魚の群だといふ波のさゞめきを眺めて、其講釋を聞きなどした。それでも好い頃合には、頭の上にのし懸つてゐる左手の崖が、不意に鰐の口のやうにカット開いて、白い雪の山が吐き出される。何處であつたか忘れたが、白馬も見えた。ずつと南の唐松五龍あたりであらう、尖つた峰も二つ許り見えた。泊に來ると、左手の屏風が急に疊まれて、僧ヶ岳や駒ヶ岳の重なり合つて大きく蟠まつてゐる後ろから、劔ヶ岳の一部が大鋸の齒で空を引割つてゐる。明日は中村君が此處から鐘釣温泉へ向ふ筈である。南日君は南日君で、暢氣な男だから長次郎が旨く來て呉ればいゝがと、自分の暢氣は荷物と一緒に棚に上げて、頻りにそれを心配してゐる。私達は今度の旅行の困難を慮つて、なまじ案内者などは雇はず、前以て大山村の宇治長次郎に、氣の合つた者を一人連れて、二十五日の朝九時迄に間違なく魚津の停車場に來てゐて呉れと、折り返して賴んで置いた。承知したといふ返事も二度來て居るが、南日君の心配するのも尤もな譯がある。しかし汽車が魚津に着いて、荷物を下ろしながら外を見た時、眞先に眼に入つたものは、今迄噂してゐた長次郎のニコニコした顏であつた。同行の南日實君も既に來てゐた。停車場を出ると、脊の高い男がのそりと來て挨拶する、それが長次郎の義兄だといふ宮本金作であつた。長次郎は今度の山登りが樂しみで樂しみで、二十五日の來るのを待つてゐたと、如何にも嬉しさうである。これで南日君の心配も尤もでなくなつてしまつた。

今日は片貝谷を上つて、東又南又の合流點附近で野宿する豫定であるから、少し早いが此處で晝食を濟し、僅ばかりの買物をして町を離れた。

ごろた石の敷かれた眞すぐな道が、何處までも私達を引張つて行く。木蔭が少ない上に風が無いので堪らなく暑い。道坂まで行くと素的に冷い水が湧いてゐるといふので、南日君は長い脛を飛ばして、サッサと先へ行つてしまふ。町を出た時は右に見えてゐた毛勝山が、いつか道の正面に立ち直つて、

Y字形をした大雪溪が、絶頂から僧ヶ岳の右に曳いた尾根の上まで續く。その左の雪溪の半頃へ直ぐ上の尾根から押し出した凄まじい赭岩の大崩落が、山の心臓から搾り出された黒血のやうに雪溪の中央を流れてゐる。阿部木谷の源であらう。白い雲の塊が後ろから肩をすべつて此方の谷を覗きに來るが、嘘のやうに何處へか吸ひ込まれてしまふ。尾根續きの大明神だといふ尖つた山から、なだらかな線が右の方へ長く延びて、儼しい劔岳が其上にドッカと腰を据えてゐる。大日岳の連嶺にはいつもながら雪が多い。劔と大日との間から別山が、不思議の世界でも覗くやうに脊伸びして、魚津の海を瞰下ろしてゐる。早乙女岳から右は、午下の太陽に照された幾重の雲の峯が一様に平かな底を見せて、果てもなく續く。目立つて蒼黑い鍬崎山は、雲の水平線より下に沈んで、大きな暗礁のやうだ。遠い雲間に白山の雪が、江戸の將軍に献上したといふ百萬石の殿様の豪奢を想はせた。

道坂に着くと橋の袂で實君が休んでゐる。南日君はと見れば、炎天の大道端に莫蓙を敷いて濟し込んでゐた。湧いてゐる筧の清水が無いといふのでガッカリしたが、當て事の旨く外れたのも、本場の越中だけに仕方がないと諦めて、河の水を呑んで間に合せた。下村で麥湯をしたゝか馳走になりながら、後れた長次郎と金作の來るのを待つて、米を買ひ入れる相談をすると、長次郎が「まだ先にいくらもあるつちや」といふので、買はずに出懸る。谷が急に迫つて日影が多くなつた、行手からは涼しい風が時折吹いて來るので、大きに凌ぎよい。右手に水力發電所がある。奥平澤から片貝川の水を引き入れて、此處で落差百尺の水力を利用するのださうな。前平澤の人家が朴の木や橡の木の間にまばらに見える。田なども少しはあるが、如何にも寒村である。此處で是非とも米や味噌を買はなければならぬし、人夫も一人雇はなければならないので、性の失せた木札に物品販賣所の文字も怪しい路傍の家に寄り込んで相談を始めた。味噌は丁度この家にあつた。人夫も折よく居合せた澤崎源次郎といふ若い者が行くことになつた。これで味噌と源次郎は極つた譯だが、一斗五升の米が無いのに閉口した。

長次郎と金作が直ぐ裏の路を上つて、慥に有るといふ家を尋ね合せたが、間もなく悄氣て歸つて來た。今度は仕度して來た源次郎が一緒になつて、對岸の東藏や山女までも探したが、矢張り駄目だ。南日君の渡した五圓札は、手に握つたまゝ同じ路を幾度往つたり來たりしても、天勝の手品と違つて米にならない。

私は局外者の位置に立つて其處らをうろつき廻つてゐた。この仕末がどう付くかと不安のやうでもあり、多少の興味もあつた。一軒の家に一斗五升なくても、三軒で五升宛買へばいゝといふ南日君の聲が聞える。遠くで一しきり鳴き渡つてゐた日ぐらしが近い木で鳴き初めた。後の山から引いてある筧の水が小さい瀑になつて落ちてゐる下で、素裸の子供が二人で水遊びをしてゐる。蟹の子が石の間からちよろ〳〵出て來てまた引込む。青紫蘇の繁つた庭の隅に、ポンポンダリヤの赤い花が、一きは珍らしく私の目に映つた。日は容赦なくどん〳〵落ちて行く。河狩りの人達が長い柄の付いた銛や網などを擔いで向ふからやつて來た。鰌が獲れるのださうだ。今日汽車で渡つた片貝川の本流は、白い石の河原のみで一滴の水も無かつたのに、不思議なことだと聞いて見れば、五月雪しろ水の出た時に海から上り込むのだといふ。鋭い鮎の鳴聲が晴れた空に快く響く。

南日君まで出懸けて行つて相談に加はつた。長いこと橋向ふで立話しをして、四人一緒に歸つて來た。私達の手許には幸に實君が持つて來た五升の米がある、今夜の野宿に差支はない、それで今から一斗五升の米を舂かして、明日早朝に源次郎が夫を背負つて追ひ付く手筈に事は決つたのだ。二時間餘りを費した大詰の幕としては、餘り見榮えもしないが、これまでに漕ぎ付けた役者の骨折は、傍で見てゐる程暢氣なものでは無かつたに相違ない。

五六戸の家が淋しげにかたまつてゐる奥平澤の村を通り抜けて、十町足らず行くと、田が盡きて畑ともつかない砂地の所どころに、小豆や粟などが蒔き散してある草原に出た。元は河原であつたもの

が、河が東に移つた爲に島のやうな形になつて、島尻に十坪程細かい砂を平に敷き均した所がある。其處に天幕を張つて泊ることにした。金作が河原から流れ木を集めてうんと背負つて來る、火が燃え始めると、體に着いた一切の邪魔物をかなぐり捨てゝ、いきなり河に飛び込む、水は思つたより冷くない。首まで浸つて凝としてゐると、體の表面からぎらぎらした油汗の固りが、蝶の鱗粉のやうに浮いて流れて行く。谷の日は靜に暮れて、水烟の薄く罩めた河上の遠い連嶺の上に、奥大日の絶頂だけが入日に照されて、一きは鮮やかに雪の姿を見せてゐた。人聲がしたと思つたら、やがて夕暗の中からどや〳〵と五六人の影が現れた、鱒狩りの連中で、獲物も二三尾あつたらしい。煙草の火を點けながら、飯を炊いてゐた長次郎と話をして別れて行つた。七八町の河上にいゝ小屋があると教へられたけれども、今更どうなるものでもなかつた。里近いだけに蚋の多いのには困つたが、あたりの草を薙ぎ倒して風上から火を放つたので、少し落ち着いて食事が濟せた。しかし何とかいふ小さな奴は、手といはず足といはず、髪の毛の中までもぐり込んで、ちく〳〵刺すので一晩中弱らされた。

十四日の圓い月影が天幕にさす頃は、片貝谷は一面に光の薄絹に包まれて、現と夢とを維ぐ美しい世界と化してしまつた。

二　南又を遡る

七月二十六日。午前六時二十分、片貝谷の野營地出發。七時十分、チノマ（東又南又合流點）。南又に入る。八時二十分、岩屋の大小屋。初めて殘雪を見る。九時十分、坂樣谷。之より四五町にして路盡き、河床を辿る。十一時、左岸に少許の平地を見る。晝食。午後十二時十分出發。十二時四十五分、右岸に頗る多量の殘雪あり。一時、猫又谷釜谷追分。釜谷に入る。二時五分、雪溪に達す。二時三十分、雪溪盡きて三段の瀑布となる。左岸の崖頭を横に搦みて一時間の後之を通過し、三時三十分、再び雪溪。四時五十分、雪盡きて溪二分す。左を登りしも水なきを以て、更に右溪を探りて水を得。偃松現はる。五時三十分、山の中腹急峻なる草原の斜面に露營。

曉近く河瀨の音に目が覺めた。仄白い朝の光が天幕の中に吊してある小田原提灯をぼんやり映し出す。昨夜は暑かつたので、掛けてゐた毛布もいつの間にか足もとに丸められてあつた。外へ出て其處らを見廻しながら立つてゐると、まだ夜の氣の彷徨ふてゐる谷の向ふ河岸や此方の林の中で、青蜩が透き徹るやうな聲で鳴き初めた。夕暮にこの蟬が鳴くと、妙に寂しい落ち着かない氣分に誘ひ込まれたが、明方であると輕快な調子が驟か雨の瀉ぐやうに賑かだ。しつとりした朝の空氣までが共鳴せずにはゐられないやうに一齊にざわめく氣配がする。爽かな風が河上から撫でるやうに吹いて來て、懶い眼から草木を醒して行く。頰白が鳴き出した。消え殘りの火に薪を添えて、顏を洗つてゐると、金作が米を入れた鍋を持つて河原に下りながら、茜色に染つた東の空を仰いで、「旦那、今日もいゝお天氣だぞ」と聲を懸ける。さつぱりした氣持になつて立ち上ると、鋭い銀色の光りがぎらりと目を射た、言ふ迄もなくそれは此谷唯一の白いもの――奥大日の額を飾る尊い雪の光であつた。

朝飯の最中に源次郎が米を背負つてやつて來た。こんな時には極つて散ざん人を焦らした揚句、どうも遲くなつて……位のことで胡魔化すのが普通である、今朝も誰か迎ひを遣るやうなことになるのではないかと懸念してゐた。それが案外だつたので、暫くは不思議なことのやうに思はれた。また蚋が寄つて來て困つた。手早く荷を纏めて此處を出懸る。阿部木谷を登らうか、それとも南又に入らうかとは、東京を立つ時から問題になつてゐた。阿部木谷は先年南日君の登つた路である。平澤で聞くと南又も可なり奥まで炭燒が這入つてゐることだけは分つたが、それから先の樣子が知れないので今朝になつても、どの路を取るか未だはつきりと決つた譯ではなかつた。それでゐて誰もそんなことは氣にも懸けないといつた風にサツサと歩き出す。唯だ山へ山へ。それが今の私達を支配する强い力であつた。

島の中の砂路は三四町續いた。河が右に岐れる所から二三十歩西へ退つて、茅葺の低い小さな家が

四五軒マッチ箱を並べたやうに立つてゐる。緑の葉を擴げた中から目立つて強い黄色の花を抽き上げた南瓜棚の端に赤い布なども干してあつた。島を離れると一段高い木地屋だ。細い路が植林した杉の若木の間を蛇の如くうねつて行く。原はさう廣くはないが長さは五六町ある。元は此處に人家があつて、塗物の木地を造つてゐたのださうだ。自然を虐待して自然から虐待された山人の生活の頼りなさが想はれる。杉は未だ枝を交す程に伸びてゐない。下草の薄や萱が思ふ存分に繁り合つて、無遠慮に蔽ひ被さつて來る。大きな岩の鼻を廻ると其蔭に、五六人の若い娘達が草を刈つてゐた。私達の近付く跫音を村の衆位に思つてゐたのであらう、何氣なくこつちを見ておどろいたやうに鎌の手を休める。路はだら〳〵と下りて河原に出た。藤蔓でからげた丸木橋が岩から岩へ渡してある。鴨緑を溶かした水が其下を泡立つて流れて行く。兩岸が露はな爲に、上流に見るやうな凄味に乏しいのは物足らないが瀬の音は高かつた。河原を上つて今度はドスマといふ所にかゝる。同じ様な山裾の平地で、檜の苗が植ゑてある。上の方の高みに荒れ果てた燒畑の跡らしい四角な段も幾つか見えた。對岸は此處よりも廣い杉の植林地で、もう立派な林になつてゐる。時鳥が僧ケ岳續きの尾根から谷の空を横切つて頻りに鳴く。

東又南又の合流點は、河床が一段低いので知らずに通り過ぎ、丸木橋で東又を渡つてヲノマに出た。此處は毛勝續きの大明神から西北に延びた山の鼻が叩き潰されたやうにガックリ平たくなつて、大きな花崗片麻岩がこゝ其處に突立つてゐる細長い原だ。檜の苗が蕨や薇の繁つた中に無造作に植ゑてある。橋の上から水上の方を覗いて見たが、狹い谷は左から出た山の裾に大きく遮ぎられて奥は目に入らない。朝日の光が堰き止められてゐた水のやうに尾根の低い處を越してサッと流れて來た。夫を避けるやうにして岩の上に腰を下ろす。翠の濃い溪の空氣が山の影を宿して、其處に面白い明暗の對照があつた。

今迄辿つて來た足もとの細い路は、五六歩の先で二つに岐れてゐる、其處に紫の花を持つた松虫草が道しるべのやうに立つてゐた。左は東又から阿部木谷に通ずるもので、原を横さまに直ぐ夏草の茂みへする〳〵と隱れてしまふ。昔鐘釣温泉へ通つたといふ路は此の東又を上り切つて、小黑部の北の谷に下り込んだものか或は尾根を搦んで直接に温泉附近へ出たものか、判然しない。しかし古い地圖を見ると直接に温泉へ出るやうに道が記してある。此谷と黑部方面とを連絡することは大した困難でもなさ相だ。右は左よりも人通りの多い所爲か、よく蹈まれた路が齒をむき出した花崗片麻岩の間を縫つて、糸目のやうに南へ走つてゐる。右手の中新川を限る山脈からは、小さな支脈が幾つか章魚の足のやうに伸びて、突きあたりの綠の地に黑い針葉樹の裾模樣を着た山を抱えるうやに其脊へ廻つてゐる。其あたりから谷間の翠は一段と濃さを增して、南又の奥は深い湖の底を覗くやうに思はれた。

私達の心は知らぬ間にそつちの方へ引き込まれてゐた。

鱗雲が滲み出したやうに青い空に浮ぶ、之が手始めで今日は色々の鱗雲が現れた。最初は淺瀨を上る若鮎の群が揃つて腹をかへしたやうに、輪廓のはつきりした色の白い、夫も絹光澤を帶びたものが多かつた、夫れが晝頃には蠶が作り並べた綿ぼうしのやうに綠のぼやけたものと變つて、終には大きな鰐の背皮を見るやうな灰色やドス黑い色をしたのが次第に增して來る積雲の間から望まれるやうになつた、其頃からして空模樣が大分怪しくなり初めたのである。

話が雲へ移つて思はず飛び過ぎてしまつた、私達も調子に乘つてドン〳〵南又に入つて行つた。原が盡きると又丸本橋で川を渡つて、右から押し出した水の無い石の河原を横切る。突き當りの危く切り立つた山の鼻の下で路が消えてゐる、立て掛けた丸太を足懸りにして木の根に攀りながら攀ぢ上ると、崖の上に出た。脚の下の深い谷底では、眞青な靜が幾筋かの太い水脈を綯り合せ綯り戻して、渦を卷きながら押し默つて流れてゐる。岩頭から横にのり出した木の枝には魚狗が一羽、凝と斜に構へ

て動きさうにもなかつたが、突然弦を離れた翡翠の矢のやうに、水を掠めて一文字に飛んで行つた。

暫く雜木の繁つた岨路が續いて、零れ懸る露にしとど霑れながら又川を渡ると、左手から小澤が落ち合つて少し許の平地に、茅を束ねた一方口の小きな小屋が古代の穴居人の跡のやうに十五六塊つてゐる。炭の中繼場であらう。源次郎に聞くとシャンゴロだと敎へた、何の事やら薩張分らない、南日君が三五郎だと說明して呉れる。草間を押し分けて河原に下ると、大虎杖の叢が一齊に潤い葉を擴げて、强烈な日光を浴びながら懶さうに首垂れてゐる。葉の裏からは鮮かな綠が黃金色に溶けて、私達の體にも眞白な砂地にも音もなく泌み込む。この大虎杖の叢は北アルプス北部の溪間に特有の景象で、南アルプスの溪を埋むる深い森林とは、また異つた快感を私達に與へるものである。

また平に出た、南又の流が置き殘した段階の一である。大きな作畑小舍が河に臨んで立つてゐる、岩屋の大小屋といふのださうだ。前へ廻ると二三挺の鍬が入口の柱に立掛けてあつて、戸は開いてゐるが中を覗いても人氣はない。左にだら〳〵坂を上ると段々畑が現れて、鍬の柄に凭れながらこつちを見てゐる人達の姿が目に入る、これは其處へ通ふ路であつた。源次郎に呼び戻されて小舍の前を右に下ると、二間とはない河床に亂れ立つ花崗片麻岩の間を筋張つた水が奔下してゐる、橋は落ちて跡もない。私達三人が臆病な鷲のやうに片足水に入れては引込めてうろ〳〵してゐる間に、長次郎は足場をはかつてサッサと涉つてしまつた、皆其後に續く。私の目は不圖右手の崖下に堆く盛り上つた異樣の塊に惹き付けられた、白茶化た枯枝などか一面に掩ふては居るが、疑ふ可くもないそれは此谷初めての雪——寶殿の甍をすべり落ちた貴い珠玉の一片であつた。

直ぐ羊齒などの生へた下から水を噴いて滯り易い山腹にかゝる、それも少し、また河原へ下りて虎杖の中に隱れる。斯ういふ所には屹度、恐ろしい大きな岩が掩ひ被さるやうに平な砂地を抱へて、四五人は樂に泊れる好い野陣場があるものだ。二町許で河原が盡きて、私達は明るい崖の上に導かれた。

暑い日がカン〳〵照りつけるので、止度なく汗が流れる、私は先に立つてグン〳〵急いだ。川が大きく左に曲つて、行手に立ち塞る小山が左右に遠退くと、正面に巾の廣い大雪渓が驚くほど近く顯はれる、上の方は蒸し返へす積雪に掩はれて、何處まで續いてゐるか分らないが、正しく猫又谷に相違ない。私は背負つてゐた荷物を其處へ抛り出して、路の上に立ちわだかりながら思ふ存分に手足を伸して、雪渓から脈を打つて流れて來る谷間の空氣を貪り吸つた。時鳥の聲が聞える、後れた人達はまだ追付かない。

崖の上の路は間もなく下りになつて狹い澤に引き込まれる、仄かな水が何か呟きながら岩間を潜り抜けて行く、土倉谷だつた。此邊までは鱒が上るさうである。少し爪先が仰いで山の鼻づらを川なりに辿ると、坂樣谷の落ち口に來た、草や灌木の生えてゐる稍や平な砂地で、伊折へ踰えられるといふ路の跡が草間に取り殘されて却て淋しい。澤は中新川堺の雜木山から乏しい水を搾り集めて細い流を貢いでゐる。落ち口の大きな岩の上に腰を下して、後れた人達を待ち合した、一むらの虎杖が背後から手ん手に翠蓋を翳して、凉しい蔭を作つて呉れる。

茲から四五町の間は川沿ひの細かい砂地を行くので、伸び放題に蔓を伸して絡み合ひ縺れ合ひながら太い綱を張り渡した木通や海老蔓や野葡萄などが、鋭い鎌の刄先に懸られて、氣持よく左右に薙ぎ倒されてゐる、中にも往生際の惡い奴は、玉紫陽花などに卷き添ひを喰したのもあつた、花が萎れてゐないのは、刈られてまだ間もないのであらう。虎杖やアカソも算を亂して倒れてゐた。籔がひどくなると河原に下りて向ふ側に渡る、急斜面の小高い所を均した猫の額程の平に、生々しい木の枝を組み合せた粗末な小屋が二つ、執念深い人間の生存慾を具體化したもの丶やうに立つてゐる、シャンゴロで懲りたから何といふ所か聞きもしなかつた。切り明けがあるので夫を頼りに崖の上を横に搦みながら二町程行くと、太い根曲り竹の籔の中に放り込まれて、後へも先へも出られなくなる、まるで八幡

知らずへは入つたやうだ。人の分けた跡らしいのがズッと上の方に見えるので、幾度か筋斗うつて落ち込みながら、構はず登つて行く、實君も同じ樣にして後に續いたが、これは路でないと知つて引き返した時には、南日君が下から呼んでゐた。向ふ河岸に人の通つた跡のあるのが長次郎に分つたのである。又前のやうな砂地を行く、夫も長くはない、獸でなければ通れないやうな籔が直ぐ兩側から水際まで押し寄せて來た、私達は自づと河に下りて水の來る方をちよい〳〵仰ぎながら、目の前の岩から岩、淺瀨から淺瀨を覓めて涉らなければならなくなつた。

谷は流石に荒蕩たる有樣を呈して、岩を見ても水を見ても大分上流に來たなと首肯かせる。岩の色は一樣ではないが皆花崗片麻岩だ。見る限り褐色や澁色をなすりつけた黑白斑の大岩塊が、縱に欹ち横に伏して、頭上二三尺の高さに不恰好な階段を築き上げてゐる、私達は取りつき端もない階段の下に立つて、未練らしく手足を掛けて見たりなどした、夫でも水の鉋に削られた岩の屑が堆く積つて、易々と乘り、越せる所もあつた。谷水は谷水で、靑い淵からむく〳〵と起ち上ると、いきなり岩に衝きあたつて力任せに抉り拔け躍り踰え、果ては脚もとの小石までもさらつて、ドッと驅け下りさま空を切つて復た淵の中に潛まる。力の籠つた吐息が無數の氣泡となつて、大地の底から沸き上つて來る。重く淀んだ谷の空氣は、岩を叩き岩に叩かれる水の音に震動して、話聲などはもうとうに聞えなくなつた。この恣な自然の中に小さく點綴された私達の姿は、慘めなものであつたに相違ない。

岩が大きくなると水は其下を深く抉つて、うつかり足を入れると掬はれる恐がある。こんな時に重い荷を背負つて岩から岩に飛び移る長次郎の早業は驚嘆に値する。遲れ勝な私達は自然獸の足跡を慕ふ獵夫のやうに、水を噴いた草鞋の痕に跟いて、脇目もふらず辿つて行く、早月川の谷を下りた時のことが不圖思ひ出された。

水を渡つたり崖に喰ひ付いたり、同じ樣なことを幾度となく繰り返して、踝の痛くなつた頃、右か

ら落ち合つた可なり水量のある澤を越すと、右手に少しの平地が現れた、平地といふても唯山裾の傾斜が緩くなつたといふだけで、大小の岩塊が錯列して灌莽が叢生してゐる、雪崩の押した跡らしい、上の方に赭い崩れが見える。其處の水際の木蔭の荷を卸して晝飯にした。金作が大虎杖を切つて釣竿を作ると、源次郎が蚯蚓を掘つて餌にする。私は可笑しくなつた、そんなことで鯇や岩魚が釣れるなら世話はないと思つた。岳の方から薄ら冷い風が吹いて、汗にふやけた五體に鳥肌が立つ。妖しげなヒトデの形をした雲が高い鱗雪の下をのろ〳〵匐ひまはるのが不氣味だ、急いで出懸る。其時まで執念深く竿を握つてゐた金作を、皆して大聲に呼んで見たが元より聞える筈はない。南日君が迎へに行く、啣へ煙管で歸つて來た金作は「此處の魚は喰ひ付くことを知らんぞ」と言つて皆を笑せた。

三　釜谷の奥

午後になつてから益々雲が多くなつた、岳に近づいた所爲もあらうがどうも空模樣が面白くない。唯だ割合に雲が高いので心丈夫だ。溪はそろ〳〵淺くなつて、至る處に雪の働いた跡が見られる、其處には山を出て未だ土氣の失せない矹々した岩が、押し重つて危く谷を覗いてゐる、水に洗はれ磨かれて肌理がこまかくなつた蒼い仲間を羨むやうに。雪に近づいたなと瞬間に意識する。山は創だらけになつて露出した岩骨が痛々しい。谷が大きくくの字に曲ると、突き當りの山の肌が赤剝げにずり落ちて其下に屋根形の大殘雪が懸つてゐた、檐下を拔足で通り拔ける、緣からも天井からも雪解の雫が破れ屋を洩る雨のやうに滋く落ちて、縮めた首筋から脊中へかけてびつしより濡れる。ゴト〳〵軋む破片岩の長い階段を踰えて河原に立つと、正面に眉を壓して横又谷の大雪溪が、奔騰する雲の中から私達を誘き寄せるやうに姿を顯した。狹い河原までが其方に開けて、幾筋かに分れた細い水が赤錆びた小砂利の間を蜘蛛手に流れる、こんもり繁つた濶葉樹が五六本、河原を斜に翠蓋を擴げて、其間から

雪渓の續きが白くチラ〳〵光る、體までがそつちの方へすうと持つて行かれさうだ。私は先に立つて淺い水をぢやぶ〳〵渉りながら、さりげなく左の釜谷に移つたが、何だか暗い氣分になつた。

猫又谷に較べると釜谷の荒らかさ、谷は引括られたやうに急に狹くなつて、逆落しに水が落ちて來る。右は階段狀を呈した緩い傾斜地であるが、厚く堆積した岩屑から成つてゐることが深く抉られた壁面に現はれてゐる幾多の層から判斷される。左は恐ろしい迄に急峻な大明神山が、花崗片麻岩の大屏風を水際から押し立てゝ、裾廻しにしてゐる。どつちも歩けないので瀨と淵と瀧と連續した川の中を登つて行く、太い蛇の死骸が飛石を据えたやうな岩の間に流れ寄つてゐた、青大將に似てゐたが誰も判然した名を知らない。蛇嫌な南日君は股まで浸つて上手の瀨を渉つた。一と所左手の屏風がへし折れて山裾からぼろ〳〵になつた石の綿がはみ出してゐた。足が自づと其方に向ひて亂石の階段にかゝる、登り詰ると上滑りのする黑土の斜面に出た、つい昨日あたりまで此斜面には雪が殘つてゐたらしい、汚い泡のやうなものがこびり付いてゐる古株から、草の芽立ちがほの紅く角ぐんでゐる。獸の路を逐ふて前の木立に潛り込む、人ひとりの重さ位にはビクともしない頑强な枝が意地惡るく邪魔をする、押し倒さうにも刎ね除けやうにも手に合つたものではない。始めから川を離れなかつた荷持の連中は下から見上げて笑つてゐる。また河に下りた、そして朽葉の積つた陰濕な崖腹に白根葵の大きな花を見出した時には、爪先に引懸つた小枝と共に滿腔の不平をさらりと水に流して仕舞つた。

白根葵の咲いた崖腹を一町許行くとまた屏風が始まる、一曲して鋭く右に折れた河の中では、花崗片麻岩の大塊が脊較べをして、水は其上を勢込んで驅け上り驅け下りてゐる。南日君と賓君は長次郎と源次郎の跡に蹤いで、直ぐ岩の蔭に見えなくなる。私は右側の階段狀の斜面に路らしいものを見付けたので、ぼろ〳〵した岩屑の壁面を手足でガリ〳〵引搔きながら、攀ぢ登つて階段の上に立つた、金作も續いて登つて來た。見上ぐる大明神山の頂には、古綿の如き積雲が屯してゐる、所どころ小さ

なガレに消え殘つた雪が、舞ひ落ちた銀杏の枯葉に霜が凍つたやうだ。下で見た時には左程にも思はなかつた草丈が人の脊よりも高い。俯向きながら無暗に搔き分けて行くと、磴と岩に撞き當つて頭がヅシンと響く。見ると幾塊かの大岩が黑ずんだ膚に靑苔を蒸して眼前に立ちふさがつてゐた。木立までが深くなつて、幽鬱な木の下暗に物の朽ちた臭がそこら一面に漂ふてゐる。金作を先へ立たして其後につくことにした。「こりや何でも前に人が通つたに相違ない」と言つて指さすのを見ると、錆び朽ちて正體もない刄物の缺らであつた。岩崩れがして凄しくのり出した崖の下をソッと通り拔けて明るみに出る、這ひつくばつた蟾蜍のやうな岩が二つ三つ重り合つて、狹い谷の口を遮つてゐる。其根方に荷を卸して長次郎が休んでゐた、如何だつたと聞くと、ひどい〳〵と云ふ。時計を見ると二時を五分過ぎてゐた。釜谷の入口から此處迄五六町の間を一時間費した譯だ。私は行手の樣子が氣に懸るので、岩の上に登つてひよいと首を出すと、茫つとした白いものが眼に入つた、雪溪！脚の下から——何處まで續いてゐるか分らない。表面からは濛々と立ち昇る烟のやうな霧が、吹き下ろす風に捲かれて、雪溪の眞中を渦を卷きながら押し寄せて來る、凝つと見てゐると霧に足が生へてゐるやうだ、あの中を魔が通つてゐるのではないかと想つた。體が總毛立つて冷りとする。明るみに出た時、急に寒くなつたと思つたのはこの所爲であつたのだ。少し後れて南日君までが汗を流して河の中を登つて來た、そして代る〳〵岩の上から首を出して雪溪を眺めた、誰の顏にももう占たものだといふ文句があり〳〵と讀めた、三十分の後に恐ろしい舞臺が私達の登場を待ち構へてゐたとも知らずに。

風が寒いので冬仕度をして雪溪を上り始める。曇つた空が所どころ虫に喰はれた木の葉のやうに孔があいて、霧の中からぼうつと薄日が映じて來た。生温るい水蒸氣が脚もとから舞ひ騰るので、大きな風呂場に這入つたやうな感じがする。左手は前と同じ屏風の續きであるが、岩が見えないのは雪の深い爲であらう。右は雜木の繁つた緩い斜面で、雪解の跡には草の綠が若々しい。雪溪の勾配はさし

て急ではなかつた。兩側の山で駒鳥が盛に鳴く、沈靜な谷の空氣が諧調の音波を無限に擴げる。それには耳も借さない風情で雪に慣れた南日君は、得意の鼻をいや高くして長い脛を飛ばす。後から見てゐると青草を干したやうな洋服の地色が妙に霧に溶け合つて、黑い脚袢が二本。雪の上をすう〳〵と歩いてゐるやうで、何だか通り魔に憑れたやうな氣がした。雪溪は初めてだといふ實君は頻りに鳶口の苛責を雪に加へてゐる。五六町登ると谷が左に折れて、突然豪岩極りなき舞臺が行く手に開けた。人より先に登つて來た南日君と私とは、杖に凭れて雪の上に立ち停つた。息を繼ぐ間もあらせず「君、壯だな」と南日君がいふ、「壯だな」と鸚鵡返しに答へる。南日君はそれでもまだ物足りないか、登つて來る實君にまで聲を懸けて「壯だな」をいはせたがる、全く壯であるに相違なかつた。脚もとの雪溪は六七十間の先で右から突き出した長方形の大磐石に衝き當つて、左の半分は其下の深い谷底に落ち込み、右の半分はヨロ〳〵と山の斜面に嚙り付いてゐる。大磐石といふても決して孤立した大きな岩といふ意味ではない、右側の山の胴骨が雪と水と更に恐らくは流石とに皮肉を削り取られて、全部を露出した其一部なのだ。岩の頂上は緩く谷の方に傾いて、五層許りの段を爲してゐる、それから下は谷底まで七八丈の絶壁である。壁面の上部には纔かの罅隙を寛めて根を托した禾本科らしい植物の葉が、女の髪の毛を梳いたやうに房さりと垂れて、葉末からは雫でも落ちてゐるらしく、手で扱いたやうに細くなつてゐる。左は大明神山の急斜面が水際から例の屏風を押し立てゝゐるのであるが、此處では二百米突もあらうと思ふ程の高さに切り立つて、それこそ峻嶮の大屏風だ。表面は縱横に襞を疊んで、絶えず崩落してゐるのであらう、今にも拔けて落ちさうな大小の岩塊が危く均衡を保つてゐる、木も無ければ草も無い、まるで新に爆裂した後の火口壁を見るやうである。此峭壁と右側の大磐石とが出遇つた處に三丈許りの瀑が左斜に懸つてゐる、私達の立つてゐる位置よりは少し低い。其上に第二瀑が右斜に懸つて、四丈許りの絶壁を奔下する。其奥の方正面に懸つてゐるのが第一瀑だ、此

處からは大磐石の蔭になつて、全長の三分の二以下は見るよしもないが、瀑壺に近づくことは到底不可能である、それでも高さは十餘丈はあるらしく思へる。滿谿を傾け盡して狹い落ち口から一度に切つて放たれた水が、ドッと迸り出でさま虛空を跳つて末廣がりに滾々と落ちて來る。夫から上は右側の山の胴骨がづつと近く寄つて、狹く急な河床が四五十間續くと、俄然谷が右に曲つて一段高い岩の蔭から、眞白な霧の一團がパッ〳〵と息を切つて横さまに噴き出してゐる。雪溪が續くか、左もなければ大きな瀑があるに相違ないと思つた。岩燕が群をなして谷風に舞ひ颺る木の葉のやうに飛んでゐる。全く壯だなといふより外に言葉がない。私達はマジ〳〵と瞻上げたまゝ暫く物も言はずにゐた。旨く越えられるだらうかといふ心配が起る。右側の大磐石は此處から眺めた所では、雪溪が匐ひ上つてゐる斜面から横に段を傳つて登れさうに想へる、それから先は——登つて見ての樣子だ。私は頭の中で目の前の岩を相手にして、荐りに手懸りや足懸りを探しながら岩登りの稽古をしてゐた。いつか中村君や南日君と初めて劒岳へ登つた時、前の日に別山の頂上から雙眼鏡で眺めて、「あの偃松の側を登つてから如何するんだらう、彼處までは登れるがなあ」など丶話し合つてゐたことを思ひ出す、南日君も同じやうなことを考へてゐたと見えて、「ねえ君、中村がゐると面白いんだがなあ」と言ひ出した。話が枝から枝へと花が咲いて、肥つた梅澤君、丸い高野君、ヒョロ長い辻村君、眞面目な辻本君、亞米利加三界へ放り出された小島君——などの噂が始まる。そこへ荷持の連中が登つて來た、「オーイ瀑があるぞ」と怒鳴る、雪の上に立ち直つて三人とも荷をゆり上げながら一齊にこつちを見上げて、笑ひ出した。それで私達も安心した。身勝手なやうではあるが此場合彼等にムッカシイ顏は見せて貰ひたくなかつたのだ。

愈々恐ろしい舞臺の方へ足を向ける。雪はもう薄くなつて二三尺の厚しかない、知らずに中央を歩いてゐた私は片足を股まで蹈み拔いて、危く落ち込みさうになつた體を杖を横に倒して支へた。雪が

盡ると白根葵の咲いてゐる黑土の斜面を少し登つて大岩の根方に取り付く。目で練習した岩登りは足でやる段になると、壘の上の水練よりも役に立たない、目測では二三尺にしか見えなかつた階段の高さも五六尺はあるやうだ。覺束ないとは思つたが私は先に立つて草の根を賴りに横を搦んで見た、二間許り進むと三尺程跨いで向ふの岩角に足を懸けたまゝ果して動けなくなる。はづみを付けて右の足を引けば左の手だけは上の階段に懸けられさうに想へる、併し外れたら事だ。仕方がないから大の字になつて岩に獅嚙み付いたなり「駄目だ」と怒鳴る。横の斜面を登つて大磐石が山の胴骨と續いてゐる所を數に潜り込んで乘り越すより外に路はない。

引き返して斜面を登る、白根葵が薄紫の大きな花を挿して、シヽウドや猩々袴の繁つた中に笑み傾けてゐる。登り詰めると頭の上にのし懸つた崖の下を横に搦んで、馬の脊に似た岩の腹に突き當る。深山榛や根曲り竹が一面に叢生して、どう蹈み込んだものか勝手が知れない。長次郎が先に立つて乘り越すと向ふ側に姿を隱す。これ迄の例に依ると長次郎は一旦見込をつけて足を向けた以上は、決して引き返したことのない男だ。直ぐ後から續かうとは思つたが、樣子が分らないので暫く躊躇してゐた。音沙汰がないので「如何だ、行けるか」と大聲に聞いて見る、「行ける〳〵、好い所だ」と幽かな返事が來た。木の根を掴んだり岩角に縋り付いたりして、馬の脊を逆落しに降りた所は根曲り竹の密生した岩壁の窪に過ぎなかつた、急直に下ろして來た岩壁はこの窪を作る爲に圓味を帶びて抉れ込んでゐる。見ると二三間上の方に長次郎の荷がヒヨロ〳〵した深山榛の幹に凭せ掛けて置いてある、今にも頭の上へ落ち重つて來さうなので心配だ。根曲り竹に足を托して其處まで攀ぢ登らうとしたが、滑り落ちる許りで登れさうにもない。金作が見兼ねて「俺しが先へ登らう」といきなり守宮の如く壁面に吸ひ付いて、體をうねらせながら登つた。人間にもあんな眞似が出來るものかと呆れてゐる眼先へ細引が下げられたので、夫に縋りながら皆引き上げて貰ふ。立つてゐるのも危ないやうな急斜面だ、

これでも好い所かと可笑しくなつた。何處かでヒタキが「ヒ、カタ〳〵」と暢氣らしく鳴いてゐる。

岩壁は果てもなく續いてゐるらしい、根曲り竹が夫へ綠の緣をつけたやうに生えてゐる、そこが私達の唯一の通路なのだ。匍ふやうにして行くと岩壁の突端に出た、そして恐ろしさに身をすくめずにはゐられなかつた。私達の登つた大磐石の後の絕壁と第一瀑の懸つてゐる絕壁とが平行してこの突端まで來ると、双方から圓く抉れて半圓を畫きながら、絕大な漏斗を眞二つに截ち割つたやうな奇怪な形をして、幾丈とも知れぬ脚下に不可測の深淵を抱いてゐる、それが花崗片麻岩の全石であるから驚く、天魔の加へた大丸鑿の一擊に山の胴骨がけし飛んだ痕であらう。此處から瞰下すと左斜に十五六間離れて第一瀑が全身を露はしてゐる。十餘丈と測られた大瀑布も、空恐ろしき迄に荒らかな周圍の物象に威嚇されて極度に緊張した視神經を刺激するには、餘りに纖細であつた。動搖する瀑の水よりも、其下に湛えた藍色の水に恐る可き秘密の力が籠つてゐる。私達は底光りのする青黑い淵を覗いて今更のやうに怖れ戰いた。

漏斗の緣は六尺許りの懸崖に取り卷かれてゐるが、磨き立てたやうに滑らかな壁面には、根を下すことが不可能なのであらう、小さな虫の宿となるべき一本の草とても無い、私達がおづ〳〵緣を廻り始めた頃には、長次郎も源次郎も既に向ふ側へ廻つて、崖に取り付く足場を擇んでゐた。金作は私達の後から氣を付けて呉れる。どうかすると上から小砂利が漏斗の內壁にザラ〳〵と落ちて來て、其上を蹈むとずるりと滑る、ハッと胸騷ぎがする、蟻地獄の緣を匐ひ廻る小虫の慘めさを思ひ出す。全身の力を十指に籠めて輕く足を內壁にあてがひながら辛く廻り終ると、崖が急にのり出して私達を突き飛さうとする。また細引が横に張られた、夫に縋つて深山榛の繁つた崖の上に出だ時には、皆吻と息した。これから先も同じ崖續きであるが、木が多いので骨の折れる代りに少しも危くない。下から遙に見上げた大岩の下を向ふに廻ると、谷が右に折れて目八分の高さに雪溪の端が顯れた、其處には全

石を底とした六尺許りの瀧があつて、雪溪の下から走り出た冷い水が、練絹を垂れかけたやうにすると岩壁を驅け下りてゐる。右側は上れないので、瀧の下を徒渉して、左側の大きな岩の上に皆疲れた體を休めた。

十日の後大町の對山館に泊つて、久振りに酒の香を味ひながら、今度の旅行で一番苦しかつたのは何處だつたらうといふ話の出た時、それは釜谷の上りだつたといふことに誰も異議は無かつた。直徑にすれば三町にも足らぬ場所に一時間餘を費したのであるから、餘り樂な登りではなかつたに間違ない。

疲勞に伴ふ四肢の倦怠と懶い氣分とが、容易に體を起さうともしないのを、無理に引立てるやうにして此處を出懸けた。長い雪溪が始まる、勾配は可なり急ではあるがカンジキを穿く程でもない。兩側を限る山裾は刈り込んだやうに矮い灌木が叢生してゐる許りで、あれ程人を苦しめた絶壁はもう影も形も見せなくなつた。私達は折立ち停つては二言三言いひ交はしながら、雪の表面に印した波紋のやうな凹凸を一歩一歩に蹈んで、知らぬ間にグン〳〵登つて行く、もう餘程登つたらう、行手左よりに近く山の鞍部らしいものが見え出した、主脈にしては少し低過ぎるやうに感じたので、毛勝から大明神へ續く根尾の一部ではないかと思つたが、翌日になつて矢張釜谷山と毛勝とを連續する主脈の鞍部であることが分つた。

振り返へると、大明神山に屯してゐた積雲の集團はいつか溶け去つて、海鼠のやうな怪しげな雲が山の肌をのろ〳〵匐つてゐる。谷間の空氣はドンヨリと薄く濁つて、末は低く垂れた幽欝な空の方に擴がつて行く。其下に富山平原の一部が一樣に灰色の幕に裹まれて、死滅した世界のやうに靜に横はつてゐる。

雪が盡きて急な岩の梯子を二十間許り登ると、溪が左右に分れて、片麻岩の大塊が鋸の齒のやうな

鋭い奎角をいら立たせて押重つてゐる下に、小砂利を敷き詰めた平があつて、泡の浮いた薄汚い水が溜つてゐる。最う泊り場所を探さなければならない時刻になつた。此處は水に不自由はないが位置が如何にも惡い。私達は荷持ちの連中を殘して其處らを探し歩いた。南日君は左の谷を探りながら登つて行つた。私は左右の溪に挾まれた急な尾根を攀ぢ登つて、其處に草原を取り卷いて垣根のやうに生えてゐる偃松の姿を見た時には、何だか一年振りで自分の故郷へでも歸つて來たやうな氣がした。泊り場所は直ぐ此處と決つた。草原といふてもこの急峻な尾根の中腹である、天幕などは勿論張れさうにもない、右の谷へ少し下りて水を得られたのが仕合せな位だ。夕飯はその谷間で濟した。濃い紅の花を持つた大櫻草やベニバナイチゴの群落が、晴れの饗宴を飾る卓上の花のやうに私達の石の食卓を飾つて呉れる。偃松の枝を堆く積み重ねた上に眞蓙を敷いて、鹿の寢床のやうなものが出來上つた頃、海神の弄ぶ紅玉のやうな落日の影が日本海の水平線上に顯れたが、間もなく沈んでしまふと暗の翼が擴がり始めた。南日君や長次郎達は鼠色に暮れ行く富山平原の中を頻りに物色して、何と何が見えるとか見えないとか、久しいこと話してゐた。

農商務省四十萬分一豫察地質圖に據ると、片貝川の上流地方はすべて片麻岩として記載してある。今までの所見では、岩の片狀の構造が不明瞭なので、恰も花崗岩のやうに見えた、それで花崗片麻岩なる文字を用ゐることにした。最も露營地附近のものは素人目にも明に劈開性が認められる。併し外見だけでは專門家でさへ誤り易い岩石の鑑定が、素養のない吾々に間違なく出來る筈はないのであるから、唯に感じたまゝを無責任に記して置く許りである。

四　小黑部谷の入り　上　（毛勝山及び猫又山）

七月二十七日。午前六時四十五分、釜谷山腹の露營地出發。七時四十分、釜谷山頂上。八時、出發。山梁を北に傳ひ一峯を踰

えて、九時、毛勝山頂上着。五十分休憩。十時五十分、再び釜谷山頂上。十一時出發、南に向つて下る途中水を得て晝食。午後一時出發。一時五十分、猫又山頂上。二時二十五分、出發。三時三十分、猫又の池。五時、梅倉峠着。左に雪渓を下ること四十分にして、小黑部谷の支流中の谷の河原に野營。

毛勝山と猫又山との中間に位する尖峰は、標高不明なるも毛勝山(二四一四米突)よりは少し高いやうである。目測では二四二〇米突を超えてゐるやうに思はれる。私達はこの尖峰を釜谷山と命名した。

夜明け迄に幾度か眼が覺めた。毛布を被つて芋を轉がしたやうに寢てゐる體と體とが犇と押し合つて、假松の床からずり落ちさうになる、其度毎にねちごち動くので誰もよくは睡れなかつたらしい。三時半頃思ひ切つて寢床を出た。草原は水を打つたやうに霑れてゐる、夜半に雨が降つたのかも知れない、考へると何だかそのやうな氣もする。それでも近間の山には雲の影もなく、空は水淺葱に澄んで、天狼星が水の落ちて來る左側の崖の上の雪田を掠めて幽かに光つてゐる。宵に脚の方で焚いた火が燃えさしになつて消え殘つてゐる上へ假松の枯枝をくべて、火にあたつてゐると、麓の方から時鳥の聲が聞えて來る、近くの木蔭で深山鶯がもの錆びた聲を鳴き交はす、東が白んで天が明け始めた。長次郎を起して朝の支度にかゝる。もく〳〵上る焚火の煙が谷へ靡いて、眼界も其方へ開ける。雙眼鏡で一わたり見渡したが、日本海へ突堤の如く突き出した能登半嶋の山々の外には、目を惹く程の興味あるものは映らなかつた。「好いお天氣だぞ」といふ聲に皆起きて來て、昨夜の寢苦しかつたことを話し合つて笑つた。金作一人は煙草を吹かしながら「昨夜はよく寢られたぞ」ととぼける。よく戯談をいふ男だ。何でも寢しなに南日君が「危ない所へ寢るなあ」といふのも關はず、草原へコロリと横になつて「コリャいゝ寢床だ」と其儘寢てしまつたやうであつたが、今朝見ると、一度寢返りを打つても下の谷まで轉げ落ちさうな所だつた。

尾根は假松の海が深いので、右の溪へ下りて水の無い急な岩の上を登り始める。大雨でも降ると大

小幾つかの瀑の中に石の瀑も交つて、さぞ躍り狂ふことであらう。登るに連れて溪は淺くなり廣く開いて、銀杏の葉形に山の額へ喰ひ込んでゐる。圓く盛り上つた雪田の光りが偃松の前髪をすべり落ちた銀の櫛のやうだ。そこからぼろ〳〵岩屑は止めどもなく崩れ出して、ザザーッと薄氣味の惡い聲を揚げながら頭の上へ落ちて來る。左側の斜面へ移つた。水氣づいた小砂利や腐つた枯葉の上を歩くのでよく滑るが、こつちの方が危なくない。むら消えの雪間に咲きこぼれた南京小櫻の花が、若草の野に立つて歌を謠つてゐる少女の頰のやうに美しい。私は躊躇ひながら其一片を摘んでそつと口にあてた。

俯目になつて登つて行くと、不意に行手から獸が跳び出した。「あゝ羚羊、羚羊」と叫ぶ中に姿は偃松の繁みに隱れる。あたりを見廻したが誰も居なかつた。蹄の痕に跟いて崩れ易い側崖の緣を、偃松や岳樺の枝から枝へと手を伸して、引き上げるやうに足を運ぶ。やつと雪田の上の崩れへ出た。二三間先に雷鳥が一羽、人懷しげにこゝちを見て立つてゐる、遠い祖先から傳つた殘忍性の血汐を燃え立たす程の餘裕も持たない。崩れを横切つて偃松の少ない右の尾根を一息に登る、登つて山稜の一角に立つた、そして力任せに杖を揮つて大聲に叫び出さずにはゐられなかつた。次の瞬間には山といふ山が四方から放つ鋭い銀箭の光に射竦められてしまつた。其時私は一年の間心の隈々に暗い影を投げてゐた大なる缺點が今既に半ば滿たされたやうな氣がした。

澄み切つた朝の大空は、何か期待を絕した暗示でも受けたものゝやうに激しく動搖して、顯敏な神經纖維——輕い一觸にもビリッと顫へる——そんなものが大氣の分子といふ分子に滿ち滿ちてゐるのではあるまいか、とやうに想はれる。夫もさうであらう、日本北アルプス北半の山といふ山の膚から放射される特有の色の波が、電光の如く閃々と虛空に入り亂れて、無數の縱谷に鏤められた大雪溪は、極寒の水で洗ひ上げた銀の延べ板のやうに輝いてゐる。大氣の動搖はやがて私の心の動搖だつた。

緊張した神經纖維の末端はこの窮窟な肉體を衝き破つて、仄に光る一波の閃きにもビリ〳〵顫へてゐる恣な大氣の分子――神經纖維と抱き合はふとする、恐ろしい衝動の力。其處に痛い程の快感がある。凝とそしてゐると體までがこの儘何處へかけし飛んでしまひさうだ。私は再び杖を揮つて大聲に叫んだ。

正面南に劍岳が大肌脱ぎになつて、恐ろしく肩幅の廣い全容を曝露してゐる。頂上は一段高く拔け上つて、のし懸るやうに聳えてゐるのが大鷲の嘴のやうに鋭い。左右の肩から胸のあたりへかけて、嶄岩の列が凄ましい岩の大波を捲き起してゐる。唯だ頂上直下から早月川の谷へ引き下ろした一線が割合になだらかだ。赭黑い骨だらけな山の肌には、波頭の碎けたやうな白いものがチラ〳〵目に入るが、南から望んだやうな大雪溪は見られない。別山、雄山、龍王、淨土と立山連峯が劍の右に湛然と控えて、あたりの山を寄せ付けまいと威嚇してゐる。立山と奥大日との間から黑岳が銀の筋金打つた鐵兜の鉢を朝日に輝かして、黑部川の奥に霸を唱へてゐる。蓮華岳の悠たりした線が終ると、藥師の大岳が根張りの強い大日岳を礎のやうに蹈まへて、穩かな金字塔を押し立てる。遠い空に白山が獨り雲の褥を幾枚か重ねて端然と坐つてゐる。富山平原から日本海の方面へかけては、早や層雲の幕が秋の大水のやうに擴がつてしまつた。

劍の左の肩から東へ引き落した線はガツクリ北に折れて、一段低く小窓の頭、大窓の頭と續いてゐる。流石にこれは劍の後衛だけに鋭い奎角が大鋸の齒に刻んでゐる。大窓の北は白兀、赤兀の奇醜な圓頂から、白萩、赤谷と緩く波を打つた山稜が小黑部谷の西を限つて、直ぐ前の猫又山の蔭に隱れる。黑部川對岸の崇嶺大岳は私の立つてゐる山稜の峯頭に遮ぎられて、纔に額を覗かせてゐるに止まるが、儼乎たる特有の山貌は紛る可くもない。二羽の大鷲が劍岳の蒼空に悠々と輪を畫いて舞つてゐる。

いつの間にか長次郎が登つて來て、私の立つてゐる方へと足を向けたので、眞直ぐに登る方が近い

と敎えても「マア景色を眺めにあ」と言ひながら、重い荷を背負つて偃松を分け始めた。私はこの忠實な山人の心も知らないものゝやうに思はれて氣恥しくなつた。併し嬉しかつた。山に憧れてゐたのな私達ばかりでは無かつたのだ。續く人達も皆この山稜の一角に立つて、始めて接した山々の姿に心のゆくまで眺め入つた。黄楊羽が忙しさうに其處らを飛び廻つて往つたり來たりしてゐる。

人の蹈んだものらしい足跡を辿つて十五六間登ると、岩が現はれ偃松が矮くなつて直ぐ絶頂に出た。三本の糸を指先で抓み上げたやうに尖つた山だ。偃松が無ければ荷物を置くことさへ覺束ない。一本の糸は今登つて來た山稜で、他の二本は南の猫又山と北の毛勝山に續く山稜に當つてゐる。何と云ふ山か案内者を連れない私達には分らないが、釜谷山と呼ぶことにした。敢て此山許りではない、行く先々の名稱不明の地點に對しても、便宜の爲に緣のありさうな名前を勝手に付けたものが少くない。歸京後私の手の届く限り此邊の山に關する古い地圖や地誌の類を漁つたのであるが、記錄を有する山は一として見當らなかつた。されば現に其地の獵師や山稼ぎの人などが用ゐる稱呼に從はなければならぬ譯でゐるが、夫が出來なかつたのは遺憾であると難し立てられゝば、大に遺憾であるやうな氣もする。

夫よりも遺憾であつたのは針木以南の連嶺が雲の爲に見えなかつた事だ。遠い南方の空は眞夏らしい輝きを帶びた純白な積雲の塊が崩れては湧き崩れては湧いてゐる間から、針木岳の尖頂だけが目まぐるしく出沒する。扇澤から吹き颶げられた千切れ雲が氣紛れに手を伸して、時々祖父岳の額を撫でに來るが、雙尖を聳やがした鹿島槍ヶ岳の威容に懼えて、慌てたやうに黑部の大谷に逃げ込む。五龍岳、唐松岳の空線が天半を截つて、大地震の震波のやうな線を描く。其處から一段高く破風を拔き上げて、大伽藍の岩の屋根を見せてゐるのが奥不歸岳の連嶂だ。雪の漆喰がボロ〳〵に剝げ落ちて、赭茶化た石の瓦に偃松の古苔が蒼鬱蒸してゐる。鑓ヶ岳、杓子岳から力の籠つた線が緊張の度を倍加して、朝

日岳の肩越しに大蓮華山の尖鋭なる峯頂を一刀に刻み上げてゐる。山稜の大波は更に北に走つて、鉢ケ岳、雪倉岳の波頭が白く突立つ。遙に離れて尨大な朝日岳から蒼い穏かな線のうねりが遠く天際に搖曳して、無邊際に擴がり行く巨鐘の音波のやうな餘韻を偲ばせてゐる。

それのみではない。日本の屋根ともいふ可き北アルプスの二大脊梁――東西に平行して南北に縱走せる立山山脈と後立山山脈――の大棟を辿り落ちる無量の雪を集めた絶大な雨樋は、黒部川の峽谷となつて脚下に展開してゐる。山の彫刻に曠世の技倆を揮つた大自然の手は、此處にも企及す可らざる布置按配の巧妙を示した一幅の大畫を擴げて、溪間に漲充された軟熟な翠色の空氣は、畫面に一段の幽邃と落付きとを加へてゐる。私達の眼は華やかにも沈痛を極めた色の中に漂ふてゐる許りである。私は南アルプスの大井川に匹敵する峽谷を北アルプスに覓めて、この黒部川を得た、そして滿足した。此二者が好個の對照をなしてゐることは他に類を求められない。赤石山系の水が大井川に集つて南の方大平洋に朝するが如く、立山後立山兩山脈の水は黒部川に運ばれて北の方日本海に注いでゐる。大井川は古生層より成れる山脈の間を穿鑿して流れ、從つて河身の屈曲が甚しいが、黒部川は深造岩(主として)より成れる山脈の間を穿鑿し、從つて水際に斷崖絶壁多く、本流さへ瀑を爲してゐる所がある。彼に水成岩の美があれば、此に花崗岩片麻岩美がある。常綠の針葉樹林が大井川峽谷の誇りであるならば、四時不斷の雪溪は黒部川峽谷の誇りではあるまいか。此に温泉が有つて彼に無いのは敢て意とするに足らぬ。私は大井川が好きだ、黒部川も好きだ。日本に此二大峽谷あることを少くとも私丈は幸福だと信じてゐる。本誌八年二號に載せてある中村君の「大井川奥山の旅」を讀まれた人は、この思想と文字とに富んだ才人の豐麗な文章に賴つて、大井川峽谷の美しさに魅せられたであらう。同君の黒部川の峽谷を主題とせる大文字が本誌上を飾るのも遠いことではない。私は唯だ其等の餘り切要ならざる小部分の實査と、山の上からの所見とに例の想像を加へて、身贔負の太鼓を叩くだけで

ある。氣のない人は耳（目の誤りか）を塞いで通り拔けられたい。

毛勝の頂上を窮めることは最初からの目的であるから、此處に荷物を殘して北に續く山稜に足を向けた。少し下ると大雪田が始まる、南京小櫻、珍車、小岩鏡、岩銀杏などが目に入る。山稜の西側は偃の波を蒼く湛えてゐるが、小黑部谷に面した東側は、草原の斜面が雪の堤防を築いて、其雪は遙かの谷底まで續いてゐる。雪田が盡きると毛勝の西峰に連なる鞍部に出た。昨日南日君の這入つた谷を眞直ぐに登れば、直接に此鞍部へ出られる。此處で私達が偃松に喰ひ止められてゐる間に、身輕になつた長次郎達はもう毛勝の斜面に隱れてしまつた。西峯と毛勝との間には二十米突に足らぬ小隆起がある、片麻岩の大塊が縱横に錯列して、其上に矮い偃松のカサ〳〵した枝が針坊主に針を刺したやうに先の方へチョッピりと葉を着けてのた打廻つてゐる。南日君の大嫌ひな場所だ。黑部五郎岳を東から登る途中に此處を一層大きくしたやうな所があつたと覺えてゐる。南へ廻つて偃松の途切れた草原を北に登り詰めると毛勝の頂上だ、見すぼらしい三角櫓が北の端に立つてゐる。頂上は鍋を伏せたやうに丸く盛り上つて、中央の四坪許りの地が少許の岩片と白い砂利を敷き均してある外は、短く刈り込んだ芝生のやうな草原で、東は直ぐ一面の雪田に取り卷かれてゐる。此雪田は小黑部の北の谷に續くもので、雪量の多いことは大窓の雪溪にも劣らないやうに思へる。北から西へかけては破片岩の急斜面に偃松が脊伸びしてゐる。東北に派出した山稜は、東又を中に脚の下から弧を描いて、三名引山、瀧倉岳（陸測五萬、駒ヶ岳）、僧ヶ岳と、低いながらも强弩の餘勢は流石に筋張つた處がある。殊に三名引山のあたりは峯頭が幾多の岩骨を剝き出して、尾根が柘榴の如く壞裂してゐる。猿飛附近であらう、一と所黑部川が窄い底から白い眼で此方を睨み上げてゐた。祖父谷、祖母谷の上流は五指を開いたやうに小谷が岐れて、凄愴な光を放つ赭色のガレが、酷たらしく山の肌に喰ひ込んでゐる。硫黃澤の大拔けは其一つだ、磨きをかけた銅の藥研を竪てたやうな此澤は、痛い程に神經を刺激せずには置

かない。私は不圖本誌九年三號に吉澤君の書かれた「鑓ヶ岳大黑縱走記」の記事を想ひ出して、雙眼鏡で仔細に眺めたが、此處から見て縱に全容を露はした大拔けの峽谷は、突き當りの崖の上端を假松らしい蒼黑い綠と、草原か矮い灌木らしい冴えた綠とに限られて、中の谷とは例の山の脊で劃されてゐるやうに思はれた。この後も劔岳に至る途上機會のある毎に望んで見たが、どうしても中の谷とは續いてゐないらしかつた。詳しいことは本年硫黃澤を下られた中村君が書かれる筈であるが、併し測量部でも中の谷の合流點に關しては大に誤つてゐるさうである。

此山に瀧倉岳なる名稱を與へたのは全く地質調査所の誤りであると信ずる。つまり奥仙丈岳を甲信兩國界の朝日岳に、有峯の西に峙つ東笠西笠の別稱である鯉鮒山を越中澤岳に擬したのと同一轍に陷つたもので、陸測五萬黑部圖幅の駒ヶ岳即ち瀧倉谷の上に聳えてゐる二千二米突の峯が瀧倉岳であることは、越中の古圖や古地誌乃至郡村誌（內閣文庫及大學圖書館所藏）の類を見れば、容易に推知されると共に、片貝谷村では現にさう唱へてゐる。要するに瀧倉岳なる名は毛勝山の別名とす可き性質のものではない、他に獨立して存在してゐる山の名稱である。これも亦古くから知られてゐた山名が見當違ひの山に與へられた例とも見る可きものであらう。

毛勝は饑渴の宛字であるとすれば、饑渴をケカツと發音することは、獨り越中地方にのみ限られた訛音ではなく、古くから行はれた我國の發音の癖で、今もケカツと唱へてゐる地方が少なくないから、是に對して別に異議はないが、ケカツ谷を饑渴谷と斷定し、終歲雪の消えない此深谷に這入つた者は、饑渴となつて死ぬる爲に名付られたのだといふ說明は、それが離し難い熟字であるとはいふものゝ少し可笑しく思はれる、食物は盡きたが雪を嚙つて生きてゐたといふやうな傳說を耳にすることが多いから。生還した者が無いといふやうな場合には、原因は實際饑渴の爲であつても、俗には不歸谷とか惡谷（ワル）とか又は親不知子不知といつた風の名で呼ぶのが、日本人には普通のやうである。赤鬼、

餓鬼、夜叉などは總て佛敎から來た名前である上は、佛敎信者が恐ろしげな山に此等の名を附けるのは敢て怪しむに足らない。饑渴なる漢語をこれと同一に律するのは餘り面白くないやうに思はれる。中村君の話に依ると、音澤村の獵師佐々木助七は、小黑部の北の谷の南即ち釜谷山の東直下に在る谷をケカッ谷だと敎へたさうである。ケカッの由來に就ては南日君や吉澤君の說が曾て本誌上に發表された。私はそれらを熟讀して唯だ自分の腑に落ちない所を玆に書き連ねた丈である。自說を立てる程の材料は持つてゐなさい。

暢んびりした氣持になつて三角櫓の周りに寢轉びながら、皆して取止めもない浮世話に耽る。南日君は柱の一本に「八月二十日南日三人」と刻まれた文字を指して、先年の登山の確實なることを證明した。今日あたり若しや中村君が鐘釣溫泉から登つて來るかも知れないと思つて、頻りに怒鳴つたり雪溪の上を探して見たりしたが、人の來るらしい氣配もないので、五月笛吹川の東澤で釜に苦しめられたことや昨日の苦しかつたことを取り交せて、「今年は釜の當り年だ」といふやうなことを書いた紙片を標石の上に載せて置いた。そして明日にも中村君が之を見たなら、「ナーンだ、馬鹿だなあ」と言ひながら、ヨロ〳〵の三角櫓を吹き飛ばさんず勢で、例の呵々大笑するに相違ないと想つて、南日君と二人で腹の皮を撚つた。其後同君は天候の都合で登らなかつたと聞いたから、櫓も未だに無事で殘つてゐるであらう。

日はぽか〳〵と晌い、まるで春の野原にでも寢そべつてゐるやうだ。話をするのも懶くなつて睡氣がさして來る、長次郎などはどうに鼾をかいて寢て了つた。小一時間遊んでゐる中に黑部の谷から雲が湧き上つて、日が影ると薄ら寒くなる。歸りがけに兎の子を二疋追ひ出して一疋を捕へた、皆して猫の子を撫でるやうに面白がつて撫で廻す。可愛い大きな目をしてオド〳〵してゐる。元の穴へ入れやうとしたが手を放れると直ぐ偃松の中へ潛り込んでしまつた。南を見ると雲の中から高い尖峯が眼

の前に顯れる、不思議と能く視れば何の事釜谷山であつた。今度は雪田の上で金作が雷鳥の子を二羽つかまへた、足を縛つて囮にして親鳥を捕るのだと旨い事を考へ出したが、此雷鳥は親馬鹿でない唯一の例であつたものか、遠くの方から見てゐるだけなので、折角の妙案も役に立たなかつた。

釜谷山から南をさして偃松の中の切明けを少し下ると、窪地に殘つた雪の下から冷い水が流れ出してゐる。其水を趁つて更に樺や偃松の枝につかまりながら下りた處は、廣い雪田に埋もれた草の斜面である。南京小櫻、栂櫻、アヲノツガザクラなどが雪解の跡につゝましやかに咲いてゐる。此處で足りないだけの飯を炊いて晝食を濟した。小黑部方面の谷といふ谷は、視線の及ぶ限り一として上の雪田から下の谷底まで、雪を鏤めてゐないものは無い、毛勝の東南面に懸つてゐるものは殊に壯大である。力の籠つた谷風が一陣また一陣、雪を蹈鞴にかけて狹い峽間を吹きつけて來る、其度毎に烟のやうな雲がムーッと舞ひ颺る後から、日光がキラリと映じた時には、最うそれは雪ではなかつた、强烈な白熱の光を放つ金屬のどろ〳〵した溶液であつた。

雪田はのろ〳〵と何處までも私達を引張つて行くやうだ。南京小櫻の紅い花があつちにもこつちにも雪に額を擦り付けて、何か囁き交はしてゐる。薄ぼやけた雲が白い裾を曳いて狂女のやうに猫又谷に駈け下りて行く。雪田までが誘れ氣味にヨロ〳〵と起ち上つて、屋根ほどの大きな巖に凭れかゝりさま向ふを覗いてゐる。惡ろしく脊の高い偃松の中を旨く切明けを見付けて通り拔ける、横に楔形をして雪田の端が右手の山腹に天守臺の石垣のやうな斷崖を削り出す、厚い所は三四丈もあらうと思はれる。其下の緣に沿ふて南京小櫻の咲いてゐる細い畝を少し登ると好い平に出た。この廣いそして僅に南東に傾いた原のやうな平が猫又山の頂上だつた。三角點は北寄りの小高い處に在つて、櫓も未だ殘つてゐる。偃松に圍まれた小さな窪地が二ッ三ッ、狹い入口を原の方に向けて開いてゐる。此處に泊りたいやうな氣がしたが、時計を見ると情ない哉まだやつと二時を過ぎた許りである。

此山は吉澤君に據ると、小黑部山の名を有してゐる、勿論黑部方面の稱呼であらうと思ふ。今は地圖に從つて猫又山と呼んで置く。

鼠色の雲は時々むらを生じて、消えかゝつた提灯のやうに明るくなつたり暗くなつたりするが、この美しい山上の高原は彼等の住家でゝもあるものか、執念く原を取り卷いて唯だ私達を焦らす許りだ。同じやうな斜面の何處を下りたらいゝものか判斷がつかない。こうなると地圖も磁石もさして役に立たなくなる。果しがないからいゝ加減に見當を付けて降り始めたが、忽ち急な雪溪が私達の足を封じてしまつた。どうも東へ寄り過ぎたやうだ。雪溪を横切つて暫く其緣を下る、斜面が峻しくなつて歩けなくなると、木立の中を右に衝き拔けて、前面を小さい尾根で堤防のやうに遮ぎられた緩い傾斜地に出る。ひどい笹だ。此時雲がうすれて西の方へ南を指して下るらしい尾根の一部が朧げに現れた、針葉樹の立木が濡紙にばたり〳〵と墨をにじましたやうな影をつくる。目指す山稜だなと直覺したものゝ行先が見透せない。兎も角も前の堤防へ登つて一思案する氣で、笹の中へ潜り込む。併し案じるがものは無かつた。二十歩とは行かぬうちに私達は狹いが深い谷に陷つてしまつたのだ。少し跪いて見たが出られさうも無いから、構はず下ることにする。花崗岩ではないかと思はれる岩の大塊が、右からも左からものり出して、脚元のみに氣を取られてゐる私達の頭へ「そら危ないぞ、間拔め」と痛い注意を與へて呉れる。雪が多くなると少しは歩きよくなる。夫も束の間だつた。不意に右側の崖がずた〳〵に壞裂して、底固い地肌の表面を小砂利が萬斛篠にかけられたやうにザラ〳〵崩れ落ちてゐる大薙の中途へ出た。雪溪の端が下にギサ〳〵の口を開いて、獲物の落ちて來るのを待つてゐる。匐ふやうにして辿り着いた處は、山稜の一角であつたが、決して頼りになる味方では無かつた。太い根曲り竹の籔が深山榛や樺の類を犇と抱きすくめて、絡み合つた小枝が網目よりも細かい。矢でも鐵砲でも來いとはこのこつた。そこへ人間がぶつかつたのだから堪らない。それでも金作や源次郎は何處

をどう通り抜けたか、私達三人が運を足に任せて盲歩きに足掻き廻つた揚句、やつと矮い草原へ放り出されて向ふを見た時には、一町も先の小高い峯角に荷を卸して休んでゐた。長次郎は下を廻つて雪渓を搦んで來たと話したが、見た所では私達には眞似られさうにもない。此峯の北側は些の平で二坪程の池がある。野營でもしたものか燼の木が散らばつてゐる。黑部圖幅の猫又山から南東へ派出された尾根が千九百六十米突の地點で、圈が延びてゐるのは此平を表はしたものであらう。猫又の池と命名したが夫程凄い場所では無い。

此處で尾根が左右に岐れる。現在の位置が不確なので、地圖通りに直ぐ左とも決められない。金作と二人で横にのり出した樺の木に攀ぢ上つて下を覗いて見た。雲の海は汐の引くやうに下の瀨戸を音もなく西へ流れてゐる許りだ。振り仰ぐと南方の天に、動く雲間から凝つて動かない藍靛の色が滲み出した。次の瞬間には朧ろの線が見る〳〵力の滿ちた大きな岳の一部を現はした。劒が見えるぞと怒鳴る。急いで荷を背負つて左の尾根を下つた。唐檜の木立に這入ると切明けの跡が判然したので吻と安心する。又池があつた、前のよりは少し大きい。是に至つて私達は雲の領を脱したのであらう、眼の前がパッと開けて、脚の下に栂倉峠の頂上が草原らしい綠を展げる、雪田も間近に光つてゐる。あの下から豐かな水がだぶ〳〵と音を立てゝ流れ出してゐるのではあるまいか。「好い泊り場所だ」誰かそんことを言つた者がある。峠向ふの尾根には切明けの跡が上へ〳〵と雲の中まで續く。「明日は樂だな、あれを登りや造作もない」皆暢氣な顏を見合して笑つた。

山稜は益々急になつて、又しても根曲り竹の密叢へ誘き込まれる。切明けの跡はあつてもそこは日當りのいゝ所爲か、新らしい笹が勢よく伸びて、古い切株から生えた樺や楓の蘖が腕程の太さに育つてゐる。何でもいゝ、もう蕘らに下る許りだ。竹藪から木立へ、木立から竹藪へ、野獸の如く潜り込んで、一時間近くも歩くといふよりはずり落ちた。小枝や笹の葉が汗ばんだ額や首筋を容赦なく引掻

き廻すので、蚯蚓腫れのした痕がひり〳〵痛む。拗けくねつた梅が出て來ると尾根も幾つかに岐れて、どれもこれも岩骨を剝ぎ出してゐる。米躑躅の類であらう、岩の襞に白い花を綴つてゐるが、下を覗いただけで身顫ひして引返した。東寄りの岩壁の間の急峻な空谷を、草に攫りながら背向きにドッと辷り下りる。其處から右に切れて岩の多い草地に腰を落ち付けた。振り返つて見上げると、どの尾根にも赤裸になつた坊主頭の岩が凄い顏をして脅かしてゐる。其方へくるりと尻を向けてサッサと下つて行く、始めは足塲がよかつたが直ぐ又笹がのさばり出す。大きな鎌か何かで無茶苦茶に薙ぎ倒して遣り度なつた。舌打をしながら押し分けて進むと、いつか爪先が仰ぐやうになる。此笹原が峠の頂上だつたのだ。東の斜面を少し下つた處に果して雪田が現はれた。物々しい道具立こそないが、一目に夫と知られる程の荒れた寂しい所である。干からびて素氣もない土は、雪解の水を何處へ吸ひ込んでしまふのであらう、木の芽もまだほぐれ兼ねてゐる。温かい感じのする色などは一として目に入らないのだ。先つき上から眺めたあの草原もあのだぶ〳〵の水も、畢竟沙漠を旅するキャラバンの幻視に過ぎなかつたのであらうか。私は腹立たしくなつた。天幕を張れないのは我慢するとしても、此の低い谷間へ下りながら、雪を溶したあの薄汚い水をさも貴いもの丶やうにして、馬鹿骨を折つて炊いた糠臭い飯などは、この大事な空き腹にあてがひ度はない。水、水。私は人には構はず先に立つて中の谷をドン〳〵下つた。三四町も行くと廣いが急な雪溪に下り立つ。長次郎が續いて來たので、連れ立つて遙か下に見える河原をさして急いだ。途中左側に天幕を張れる程の平を見かけたが、高い崖の近くだけに飛石が危ないと長次郎がいふ。皆後から下りて來た。南日君は妙な足取りで雪溪ばかり下りて來るので、見て居る人には危くつて仕方がない。左側の斜面へ移るやうに下から怒鳴るが、聞えたのか聞えないのか、矢張り雪の上を辿つて來る。後で聞くと足袋が小さいので爪先が痛いから、わざと雪を下りたのだと腫れ上つた指を見せる。可なり水量のある大きな澤が左から雪溪に落ち合つてゐ

る上手の河原へ荷を卸して、手の切れるやうな冷い水で顔を洗つたり體を拭いたりしてゐる中に、河原が均され天幕が張られて、めら〳〵と勢よく燃え上る火の上で大鍋が沸々音を立てる時分には、冷え切つた體にも温い血が循り始めた。

一しきり華やかであつた夕榮の色がふつつり消えると、あたりが急に暗くなる。黒部の大谷では鉛色の雲が稍や暫くの間、生れ故郷を探しあぐねた放浪の子のやうにのろ〳〵動き廻つてゐたが、やがて下へ下へと沈んで、山の精靈が浮み上つたやうに透明な肌を持つた岳の額から、旣望の月が冴えた光を送つて來た。

吉澤君や中村君に據ると、稲倉峠から小黒部に下る谷は、中の谷と呼ばれてゐるとのことである。尙ほ中村君は、折尾(オリヲ)谷は小黒部谷の支流ではなく、黒部川に直注する澤の名であることを話された。

（未完）

大正四年十二月廿三日印刷
大正四年十二月廿七日發行

定價 金六拾五錢

著作權所有

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

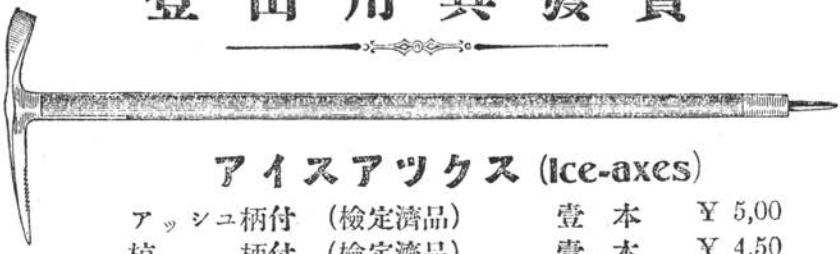
印刷所　横濱市山下町百〇四番地　福音印刷合資會社

發行所　横濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　日本山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九番　電話特長百七十一番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

日本山岳會檢定品

登山用具發賣

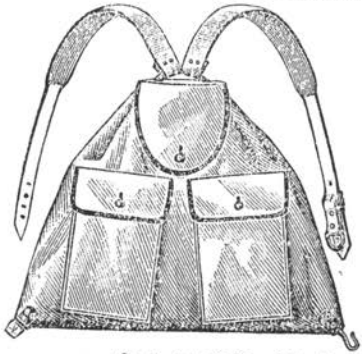


アイスアックス (Ice-axes)

アッシュ柄付	(檢定濟品)	壹本	¥ 5,00
椋　柄付	(檢定濟品)	壹本	¥ 4,50

柄は總て精選せる木材を用ゐ、何れも亞麻仁油にて煮沸し、强甚ならしめたり、長さは御好み次第數種あり。

同用 頭部覆革	壹組	¥ ,50
同用 提ゲ紐	壹本	¥ ,25



リュックサック (Rucksack)

特　製　(檢定濟品) 大、中、小
¥ 5,00—7,00

並　製　大、中、小、號外
¥ 2,50—5,00

何れも防水布製にして特に日本人に適する樣製作せり。

金カンジキ (日本山岳會考案)

雪溪の昇降には最も必要なるものにして日本山岳會の新しき考案に係り、詳細なる事項は「山岳」十年壹號にあり。　一足　¥ 2,25

今般日本山岳會の指揮監督の下に各種登山用具を製作致し候 第一着手として上記の品發賣仕候尙ほ特に日本山岳會々員諸君に限り定價より一割引にて提供致すべく候 (會員證明書御添付を得たく、事務所にて御渡し相成る可く候)

登山用具、スキー用具、運動用具製造元

美滿津商店

東京市本郷區本郷五丁目 (大學赤門前)

電話 下谷 八四五　振替口座東京七六〇